

人柱達

小豆 涼

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ワシは強い。誰よりも強い。

なれば、人を守るのは役目。

柱であろうとワシを頼れ。

さすれば答えん。そして護ろう。必要とあらば斬ろう。

だからその様な顔をするな。

## 目次

### 本編

ワシは斬らずに護りたいがの。	1
ワシは斬ることしか出来なかった。	9
ワシはこれからも斬り続けるのかのう？	21
ワシは斬らずに今日を過ごす。	32
ワシは斬ることをやめてはならぬのだ。	43
ワシが斬り方を教えよう。	53
ワシが斬る、そこに立っておれい。	66
ワシが斬ったのだから、安心せい。	81
ワシは斬るから斬られる覚悟もあるでの。	92
ワシは斬ったものの想いも持ってゆくでの。	106
ワシを斬れ。	114
ワシは斬ること以外は間違うてばかりだの。	123
ワシはワシを斬らねばなるまい。	133
ワシは斬り合なれば決して負けぬが…。	147
ワシはそう毎日斬るわけではない。	159
ワシは、今を斬るのだ。	166
ワシが斬るのは未来を繋ぐためでの。	178
ワシの為になぞ斬らなくてよいのだ。	191
ワシが斬っているものはなんなのか。	206
ワシが斬る以外で護れるもの。	219
ワシは斬ることで護るのだ。	234
ワシは、悪い虫であれば斬る。	246
ワシは何のために斬れるのだ。	258

ワシが斬って護ってきたもの。

272

ワシは、もう斬らぬ。

285

ねえ、参座くん。

297

嗚呼、玄弥様

307

## 本編

ワシは斬らずに護りたいがの。

「よう見える、ヌシの身体が」

鬼と呼ばれる異形の化け物に相對するは、明治に帯刀する侍…ではなく、鬼殺隊と呼ばれる組織の人間。

黒の隊服に、滅の一字。

その上に羽織るは、灰色のぐらでいしょんが目を引く白い羽織。

「どうやら、なかなかの数の人を食ろうておるな」

その男、背丈は六尺に届かぬといったところ。

髪の色は白。

目つきはすこぶる悪い。

左眼の下には一本の痣。

袖の裾からは和彫りがチラつく。

「しかし安心せい。ヌシは極楽浄土へ招かれるだろう。その業は鬼舞辻無惨にワシが精算させよう。さあ、眠れ」

腰に引っさげた刀を抜き去るが早いか、気がつくと男は鬼の背後でこう唱える。

「南無阿弥陀仏」

次の瞬間、鬼の身体は灰となった。

さて、今宵語るは一人の鬼狩り。

戦国の世最強の鬼狩りと呼ばれた、日の呼吸の使い手…その名も継国縁壺。

その継国縁壺の再臨、生まれ変わりなどと持て囃されるほどの強さを持つ男の話である。

――

「やあ、参座。呼び立てて済まないね」

所は、産屋敷が住まう屋敷。

詰まるところ、鬼殺隊本拠地。

参座と呼ばれた男は、先程鬼を狩った白髪の男である。

「お館様のお呼びたてとあれば、例え上弦と対峙しておろうとも即座に切り捨て馳せ参じます故、何もお気になさらずどうぞ」

十二鬼月。

鬼の中でも特に強い鬼達。

そんな中でも上弦の鬼達はこの数百年、討伐の記録はたったの1度。

「参座がそう言うなら、心強いよ。さて、本題なのだけれど…近々、新しく柱に迎える子供達がいるんだ。名を天元という。先輩の柱として、色々教えてあげてくれないかな？」

「お館様の頼みとあればこの天羽あまば参座さんざ、全力でお答え致しまする」

「ありがとう、参座。参座が柱になってからというもの、子供達の犠牲がうんと減って私はとても嬉しいよ。ただ、参座に無理をさせていなかかが心配だね…」

「この程度、皆の心労に比べれば些細なもの。お館様に置かれましては、とにかくご自愛くださいませ、それで我々の士気は上がると言うものでございます。小生にできることがあればなんなりとお申し付けください」

産屋敷はこの天羽 参座の強さに絶対の信頼を置いている。

わずか十三歳で当時の下弦の弑を単独で屠り、鬼の討伐数は現在優に八十を超える。

何故こうも強いのか。

同じく同期の柱、悲鳴嶼 行冥は「知ることの出来ない強さ」と言った。

参座本人は「どこをどう切れば良いのか、どう動けば良いのかなど頭で浮かんでそのまま身体がうごくのだ」と、さも雑作もないかのようには話す。

そして鬼殺隊の誰もが、参座は鬼舞辻無惨を斬るために生まれてきたのだと理解していた。

「あんたが人柱、天羽、参座か？」

とにかく派手な見た目の男、宇髓天元。

先程、柱の就任式が終わり、参座の元へと駆け寄ってきた。

「いかにも。ワシが天羽、参座である」

「お館様からはあんたに色々と派手に教わられて言われたんだが。まあ俺は自分の警邏地区を、派手に見て回ってりやいいんだろ？」

天元は参座の見た目を見るや否や、本当にこの男が鬼殺隊最強なのか疑った。

時代遅れな珍妙話し言葉に、派手な白髪。

そして何より自分よりも一つか二つほど若い。

「うむ、概ね間違っってはおらん。しかしだ宇髓天元殿、柱とは鬼殺をするだけの人ではおれぬ。この鬼殺隊の…ひいては、鬼舞辻無惨との戦いにおいて、いつ終わるともわからぬこの戦いのなかで、新たな時代を作り、守り、そして繋いでゆく存在なのだ」

参座は遠くを見ながら腕を組み、微笑みを浮かべて語る。

「ワシらの世代で戦いが終わるにこしたことは無いが、それが叶わぬとき、人の想いを護るといふ覚悟が必要なのだ。そして、それはワシも同様。宇髓天元殿、何か困ったことがあればワシを頼れ。柱が頼れるのは恐らくはワシと行冥殿くらいであろう」

歳下とは思えぬ優しい顔でそう言われた天元は、なんとも言えぬ気持ちになる。

柱に頼れと言わしめるほどの実力が、この男にはあるような、無いような。

そんな狐に化かされたような気分が、地味に気に食わなかった。

「して、宇髓天元殿。その左肩…よもやそのまま鬼殺に赴く事はなかろうな？」

天元は目が点になった。

先の鬼殺において、堅気の人間を守るために負傷したのだが、隠し

にもましてや三人いる嫁にすらその話はしていない。

少し痛むが、なんのことは無いと放置していたが、この男は何故それを知る？

「ワシには見えるのだ。人の身体が。そう、透き通ってな」

柱最強と言わしめる理由が、ほんの少し露見した瞬間である。

「どういうことだ？」

「生まれた頃より、人の体が透けて見えたのだ。どこに力が入っているのか、血が流れているのか。そんなことまで見えるのだよ。なれば、次にどこが動くのかもわかるもの。ワシは生まれながらにして日輪刀を持つ運命なのだ」

天元はにわかには信じられなかった。

忍びとしては、弱点を見せないという訓練は当然受けている。

例えば柱だろうと、この程度の不調であれば隠し通すという確信しかない。

にも関わらず、この男は初見で見抜いた。

なんと恐ろしいことか。

身体が透けて見える。

そのような戯言、本来なればまず信用せぬ話だが、こうも確証を振りかざされれば信じるのも道理というもの。

「アンタ…派手にとんでもねえやつだな」

「なあに、ワシは間違いなく神によって。そう」造られたのだ。この左眼の痣が語りかける。哀しみを断ち切れ…とな」

泥臭く生き足掻いて、やっと今の地位と実力に辿り着いた天元としては、参座の生まれ持った天賦の才に嫉妬せずにはいられなかったが、参座の人々が安心して暮らせるようにと切に願うその想いを感じたのか、どことなく参座を痛ましく思った。

「ヌシは優しいの。こんなワシを憂いてくれるのか。なあに、そう思い詰めることは無い。幸福なことにワシは人よりできることが多い。なれば、皆の出来ぬことをワシがやれば良いのだ。それがワシの存在価値であり、この波乱の人生において、最も心の休まる瞬間でもあるのだよ」



天元は、敵わないと思った。

「ワシらの真価は生き抜き、次に繋げること。なれば常に万全の状態  
で戦いに望まねばならぬ。養生せい。二刀流は片刃に違和感がある  
とそこを突かれやすい。四く五日くらいなれば、ワシがヌシの地区を  
追加で担当した所でなんの問題もない。その後は自らの裁量で切り  
盛りすれば良い」

天元としては、それでは柱になった意味が無いと思ったが、この男  
にとつては今の状態で戦いに出すのが何処か気がかりで落ち着かな  
いのだろうということは汲み取れた。

「そうだな、今回は派手に先輩の方を借りるとする。ここ最近じゃ嫁  
にも構ってられなかったしな。肩が治ったらもうアンタの力は借り  
ねえ。テメエのけつはテメエで拭くってことにする」

「ヌシには何よりも守りたいものがあるのだろう。それを守ること  
もまた、次への繋がりを護るということに繋がる。胸を張れい」  
そう言うと、天元が瞬きした途端に参座の姿は消える。

――

それから、少し経つと胡蝶カナエなる少女が花柱となった。

その姿は可憐で、まさか刀を携え鬼の首を斬るとは思えなかった。  
産屋敷に呼び出された参座は、カナエに助力してやることを頼ま  
れ、これを快諾。

新たに鬼殺隊の療養所、蝶屋敷の設立に尽力した。

「こ、こんにちは天羽様」

「ん？どちら様かな？失礼だが、名を聴いても？」

少しずつ蝶屋敷の形ができた頃、参座は蝶屋敷へ赴いていた。

「は、はい！カナエの妹、胡蝶しのぶと申します」

しのぶはまさか自分が鬼殺隊最強である人柱、天羽 参座に会うこ  
とができるとは思ってもいなかった。

「おお！ヌシがカナエ殿の。して、しのぶよ。ワシに何か用か？」

「あ、あの…私は身体が小さく、鬼の首を斬れないのです…。大変無礼

だとは思うのですが、鬼殺隊最強といわれる天羽様より、何かお言葉を頂けないかと…」

体の小さいしのぶは鬼の首を斬れない。

稽古をつけてくれた岩柱、悲鳴嶼行冥もしのぶには鬼殺隊に入ることとを反対された。

だが、しのぶは引き下がりがりたくなかった。

親の仇である憎き鬼が、この世を跋扈している事が許せなかった。「しのぶよ…ワシは強い。どんな鬼でも斬れる。例え鬼舞辻無惨だとしても。目の前に現れさえすれば、例え眠つていようと刀を抜く。だが、ワシは斬ることしか出来ぬ。斬って護ることしか出来ぬ」

参座はしのぶを真つ直ぐに瞳に入れ、一語一句に力を入れ語る。

「しかしカナエ殿曰く、又シは医療に対する知識と技術が優れていると聞く。なればそこには又シの戦いが、護るための武器があるので無いか？」

自分の治療が、武器。

そしてここもまた戦い。

鬼殺隊において最強の男が。

刀を持たせれば誰よりも上にいる人間が、いま自分を心底羨ましそうに見ている。

「嫌味に聞こえるやもしれぬが。ワシは刀なぞ使わずに誰かを護りたかった。…尺八を吹いたことがあっての。そうだな、一年は修練を詰んだのだが、始めたての者にひと月で追い抜かれてしまうのだ。ワシは本当に、斬ることしか出来ぬ、能無しよ。しかししのぶ、又シの両の手はどうだ？ 掬えるのではないか？ 救えるのだろうか？」

「天羽様、おやめ下さい…そんな、そんな悲痛なお顔をなさらないでください…。天羽様に救われた人達は沢山います。だからどうか、そんな悲しいお顔をしないでください…」

表情は緩やかで、穏やかな気持ちに見えるが、しのぶには分かった。泣いているのだ。

天羽参座という男は、鬼を斬る度にその心には雨が降りしきっている。

鬼になる前の人の姿に、許しを乞うのだ。

「しのぶよ。刀を置くことは出来ぬか？ヌシの憎しみは、ワシが貰おう」

「良いのですか？？私は、仇を憎まず、そして姉に守られ続けるままで良いのでしょうか？最後の肉親を、いつ死ぬかも分からないその時を、自分は暖かい部屋で待ち続けろというのですか？？」

「宝なのだ」

「…宝…ですか？」

「ヌシはカナエ殿にとって、行冥殿にとって、お館様にとって、ワシにとっても。妹であり、宝なのだ。肉を抉られようとも、ヌシが治してくれば良い。ヌシが待っていてくれれば良い。それだけで刀を握る理由であり、護るために刀を振る理由足り得るのだ」

カナエも言っていた。

しのぶが待っていてくれればさえすれば、どんな事であろうとも帰ってこられると。

自分は守られるだけでなく、守りたいと思いつつここまで鍛えてきた。

しかし、ここでカナエ待ち、傷ついた人達の命を繋ぎ止めることもまた、カナエを護ることに繋がると言うのだ。

混乱する。

「鬼を斬り、背中を預けるだけを守るということではない。賢いヌシなら分かっているのでは無いか？カナエ殿はいつもいつもしのぶの話をするのだ。ワシはそれが楽しくて仕方ない。心休まるときであるし、あれを平和…又は幸せと呼ぶのだろうか」

「許されるのでしょうか…私は…」

「何を言う。誰が胡蝶姉妹に怒りを覚えるというのだ。誰がヌシに罪を数えるというのだ。しのぶ、ヌシは戦うのだ。人の命を救うという戦いに出るのだ。誇ることにしかなかろう。カナエ殿は言うぞ、私の妹は誇らしいのだと。お館様は言うぞ、胡蝶しのぶは誇らしいのだと。行冥殿も両手を合わせて誇らしいという。そしてワシは傷ついた隊士に言えるのだ、しのぶがおるから安心せいと」

しのぶの瞳からは大粒の涙が零れる。

長きに渡り、憎しみを抱えたその心から、重荷が外されたような感覚。

鬼の首を斬れない私の身体は、最愛の姉の誇りであり、最強の男の誇りであるのだと言われた。

しのぶはかつてないほどに幸福な気持ちになった。

私も戦えるのだと。

「し、しのぶ!? どうしたの!? 参座くん!! 一体しのぶに何したの!?!」

そこへ任務の終わったカナエが鉢合わせるやいなや、顔を真っ青にしてしのぶと参座の元へと駆け寄り、その胸に抱きしめた。

「お姉ちゃん…私…刀を置くことにする…」

「えっ…」

あれほど強情だった妹の突然の告白に、カナエは戦慄した。

そうあればいいのに…と。

どれだけ願って、どれだけ言い聞かせても聞かなかつたしのぶが、刀を置き、鬼殺に赴かないと言いつ出した。

「私は…私の戦いをする…」

「そっか…そっかあ…うん…うん…」

ついで我慢できず、カナエまで泣き出したところで、参座はその場をあとにした。

参座にとつても、斬るといふ以外で初めて人を護った瞬間だった。

ワシは斬ることしか出来んかった。

明治が終わり、大正を迎えてすこし。

時は移ろいゆく。

哀しさも、喜びも、時代の流れには無抵抗である。

どちらも、やってくるのだ。

どちらが多いか、などと論ずるのは野暮である。

しかし、哀しみは引きずる。

長く、長く。

心を締め付けるのだ。

―風の呼吸 壺の型 塵旋風・削ぎ―

「死ねやア！」

物騒な言葉共に、竜巻が駆け抜けるような音。

場所は屋敷。

鬼の根城。

人が消えゆく謎の屋敷。

それだけにとどまらず、偵察に来た鬼殺の剣士たちも帰ってこなく

なつて十日。

指令を受けた一般隊士である不死川実弥は、鬼と対峙していた。

「かわいそうな子…あなた親にひどい扱いを受けていたんでしやう

？」

その瞳に刻まれるは、下壺。

鬼舞辻無惨直属の配下である、十二鬼月が一体。

下弦の序列壺。

下弦の壺は実弥の太刀筋にひやりとしたが、この男では自分を殺せない  
と高をくくっていた。

「ハッ！俺は自分がかわいそうだななんて思ったこたアねエし、テメエ  
を殺すのは造作もないことだぜエ！」

―風の呼吸 肆の型 昇上砂塵嵐―

さらに風の呼吸の太刀が増えた。

「無事か実弥!!」

現れた顔の優しい男は、実弥を見るや血相を変えて語り掛ける。

「問題ねエよ才匡近。合わせろオ、此奴は下弦だ」

「任せろ…。俺たちで仕留めるぞ！」

風の呼吸の剣士が二人。

下弦の壺を前に、緊張の糸が張り詰める。

「みんな、私のお胎に還ってもいいのよ？」

―風の呼吸 陸の型 黒風烟嵐―

―風の呼吸 捌ノ型 初烈風斬り―

実弥が下段からの斬り上げ。

それを囲む様に、匡近の面の回転。

その二人、曲がりなりにも共に死線を越えてきた。

背中を預け、絶対の信頼があった。

しかし気が付くと、実弥の肩には切創があった。

「問題ねエ。匡近、テメエは前だけ見てろ」

肩の傷からは鮮血が溢れる。

ニヤリと笑う下弦の壺。

依然として空気は張り詰める。

次に仕掛けたのは下弦の壺。

その爪は手負いの実弥へと届いたというのは、錯覚。

ハツと意識を取り戻すと、狙った位置より一寸手前を振りぬいていた。

「ハツハア!!どうやら効いてきたみてエだなア！」

不死川実弥。

稀血。

鬼を酩酊させる血。

「実弥！畳みかけるぞ！」

「わアってらア！」

―風の呼吸 参ノ型 晴嵐風樹―

―風の呼吸 伍ノ型 木枯らし嵐―

実弥が正面より刀を振り下ろす。

それに呼応するように匡近が下弦の壺の後ろから伍ノ型を振るう。先に届いたのは実弥の切っ先。

首にはわずかに届かず、胸を深く切り裂く。

「チィーさっさどくたばりやがれエー！ 匡近ア！ さっさと方付けるぞ…

匡…近…！」

正面の構えに戻った実弥がその目に入れたのは、右の肩から左の腰まで深く抉られた匡近。

「行け実弥！ 俺が合わせる！」

匡近を助ける最善の方法。

それは目の前の下弦の壺を屠り、止血し、隠に応急手当をさせること。

なれば、今は此奴の首を落とす。

それのみを考え、前に足を踏み出すのみ。

—風の呼吸 漆ノ型 勁風・天狗風—

—風の呼吸 式ノ型 爪々・科戸風—

そこからは乱戦。

一 太刀浴びせれば、腕が降り返される。

実弥がまくしたて、決死の猛攻。

そのたびに二人の傷は増え、その姿は痛々しくなる。

どこか突破口を探さねば、持久戦ではこちらの分が悪い。

しかし、匡近が口から血を吐き、片膝をつく。

一瞬、実弥は動揺する。

瞬きにも満たない刻。

下弦の壺は勝ったと慢心した。

その一瞬で実弥は持ち直し、日輪等を握るその手に渾身の力を入れる。

しかし、下弦の壺もまた意識を戻す。

肉薄。

刹那、風切り音。

下弦の壺の首が落ちる。

かに思えたが、あと一寸足りなかった。

首は切れたが、落ちなかった。

実弥は体に数か所刺突され、血がだくだくと流れ出る。

隣には匡近がいた。

「実弥、俺が仕掛ける。次は必ず首を落とせ。俺の体力的にも次が最後だ」

「俺が一人でやる。匡近は動くんじゃないやねエよ」

自らの太刀が届くことを確信した実弥。

先ほどより出血量も多いことから、下弦の壺の酩酊具合も進んでいくはずだ。

次は首を落とし、此奴を屠れる。

そう確信した。

が、次に匡近が仕掛ければ、おそらく失血死する。

そして単身で切り込んでも、下弦の壺も最大級に警戒しているため、隙を作れるか定かではない。

匡近の命か、鬼の首か。

「実弥。俺のことは気にするな。お前は生きて、弟と暮らせ。俺の願いはそれだけだ」

「ふざけんじゃないやねエ。テメエも帰るんだよ匡近。こんなちんけな鬼なんざ次の一太刀で斬り捨ててやらア」

匡近は覚悟を決め、実弥はその覚悟を受け止める。

奥歯がつぶれるほどに歯を噛みしめる実弥と、友の命を案ずる優しい顔の匡近。

このまま帰れたとして、回復の見込みはない。

匡近は、これが最後の鬼殺だと悟った。

肺に傷がつき、呼吸が苦しいのだ。

なれば肉の壁となり、友の命を守るのがこの場において自分の役目。

両の足を強く踏みしめる。

この友だけは、弟のような大切な友だけは、鬼の餌食になることを容認できない。

踏みしめ、力を入れ、血が、吹き出す。



構わぬ。

修羅となりて、この鬼の首を取る。

その時、二人の眼前に、白髪の少年が立ちふさがる。

「もうよい。もうよいのだ。刀を下げい」

実弥は理解が追い付かなかった。

匡近はこの時、生涯において最も集中していたにも関わらず、その存在を察知できなかった。

「どけエー！どかねエならテメエごと叩き斬るぞコラア!!」

実弥は激怒した。

「もう斬った。又しらでもこの鬼は斬れたが、そこの頬に傷のある男…次飛び出せば死んでいた故、横やりを入れてしもうた。許せ」

「は?」

この男、何と言った。

「なっ…」

下弦の壺が崩れ去る。

「実に見事だった。その剣技、そして覚悟、精神。誠あつぱれとしか言葉が出ん。療養せよ」

次の瞬間、匡近は意識を失い、それを参座が受け止める。

「こんな体でよう頑張ったの。安心せい、この先は胡蝶が戦ってくれ。安心せい…安心せい…」

「匡近!!」

実弥が叫ぶ。

「ええい。又シも安静にせい。傷は深いのだぞ」

「天羽様!!応急処置を行います故、周囲の警戒をお任せしてもよろしいでしょうか!」

隠がどたどたと数名流れきた。

一人の隠が、天羽と呼ばれた男に嘆願すれば、にこやかにうなずき、その場に胡坐をかいて座り込む。

実弥は助かって安堵するも、匡近の顔を見るや否や、自分も重症であることなどすっぽり頭から抜けていた。

そしてこの天羽と呼ばれた男。

全く知覚できないほどの技量の持ち主。

「ア、アンタは？」

「ワシは人柱、天羽 参座という者だ。先の戦い、あまりに鬼気迫る背中：…つい見入ってしまった。非礼を詫びる。この通りだ」

「テメエ、柱か！このクソ野郎！テメエがもつと早く来れば、匡近があんなにならずに済んだんだぞ！わかつてんのか!？」

「すまぬ。申し開きも何もない。あまりに立派な男たちの背を見て、一瞬息を呑んでしまった。すまんかった」

匡近の様子を見るに、おそらくは一命をとりとめたのは実弥も理解している。

だがこれから、五体満足で過ごしていけるかの保証はない。

それほどの力を持つのならば。

それほどの高みにいるのならば。

なぜもつと早く助けられなかったのか。

「し、不死川様！違うのです！子供が…子供が二人おりました！その子を保護してくれたのが天羽様なのです!!到着が遅れたのは子供を街へ送り、その後我々隠の身を案じ、その歩みを我々と合わせさせてしまった我々の責任なのです!…ついた時にはお二人が血まみれで鬼気迫る勢いで最後の一撃を繰り出そうとしているとこだったのです!!天羽様が止まったのは、ほんの一瞬なのです!…どうか!…どうか人柱様を、天羽様を糾弾されませんでください!…その罪と責任、我々がこの身をもって罰を受けますので、どうか天羽様を責めるのはご容赦ください!…何卒…何卒!!」

突然横から隠の者が額を床にこすりつけながら叫ぶ。

あの日。

母をこの手で殺した日より。

誰かが助けてくれてもよかつただろう、そう思った日もあった。なぜ誰も助けてくれないのか。

そう、神を呪った日もあった。

なれば。

自らの最後の肉親。

玄弥がこの先の人生で、そのように神を呪うことなく済むよう。そうやって自分は鬼殺隊に身を投じたのではなかったか。

誰かが匡近を救った。

誰かが俺を友を失う哀しみから救ってくれた。

その誰かが、今日の前にいる男。

天羽 参座なのだと気が付いた。

「すまねエ。天羽 参座。動転していた」

「何を謝る。ヌシは事実を語るのみ。ワシは遅かったのだ。ワシが早ければ、匡近という男の肺が抉られることはなかった」

「それでも、アンタは匡近と俺を救ってくれた。なんて礼をしたらいいのかわからねエ」

「なに、礼など要らぬのだ。まずは療養せい。よく頑張った。あとのことはワシらに任せて眠れ」

「というか天羽様…紛らわしいことを言っただけじゃないよ…完全に会話がすれ違ってましたよ」

「おっ…それは誠か？」

参座の遅かったとは、戦いの繰り広げられる部屋の戸を開けてから一瞬。

実弥のいう早くとは、匡近が致命傷を受ける前より。

最強の男の言動に、隠達は実弥とこの場で斬りあうのではないかとひやひやしたという。

そして蝶屋敷へと運ばれていく実弥と匡近に、参座は同行した。

――

蝶屋敷。

しのぶはすっかり医者としての頭角を伸ばし、数々の隊士の命を立てるに繋ぎとめていた。

そしてある日の明け方。

「しのぶよ。邪魔するぞ」

現れたのは、鬼殺隊最強の男、天羽 参座。

重症を負った隊士を背負う隠を後ろに携えていた。

「天羽様!?!わざわざご一緒にいらしたんですか?…アオイ!隠しの方々をご案内してあげて」

「はい、しのぶ様。皆様、こちらです。向こうの部屋にベッドが開いてありますので、運んでください」

少し見ないうちに、新しい少女が蝶屋敷で働いていた。

しのぶは、さっそく治療にかかるため歩きながら口を開いた。

「それで、天羽様」

「ええい、しのぶよ、参座でよい」

「それでは参座様」

「様もいらぬ。ヌシはワシが尊敬する女性(ヒト)なのだ。こそばゆくて敵わん」

しのぶは鳩が豆鉄砲を食らったような顔をして、足を止めた。

そしてくすりと笑い、観念したように口を開いた。

「それで、参座さん。わざわざ隠の方達とどうされたんですか?」

「あの不死川という男、柱足りえる技量と心の持ち主。お館様にはワシから実弥に風柱を任せてもらえないか嘆願するつもりでの。しのぶには、実弥のことを頼みたい。そして、もう一人の匡近という男。肺をやられて、これから戦いには行けぬであろうが、実弥の心の拠り所となる友故、ぜひ救ってほしい」

「お任せください。これが私の戦いですから…!」

そういったしのぶは、ベッドに横たわる二人の診察を始めた。

参座はしのぶの邪魔はできまいと、少し歩いて縁側に腰掛ける。すると童女が庭でたたずんでいた。

その瞳はまるでガラス玉のようにきらきらしていた。

「ヌシ、この住人かの?」

反応はない。

「哀しいのう。このような幼子が」

参座の眼には童女の古傷が透けて映る。

殴られたのだろう、蹴られたのであろう。

参座は涙を流した。

「これではまるで人が、鬼か。鬼畜の諸行とはまさにこのこと。なんと痛ましきか…」

ゆつくりと縁側から立ち上がった参座は、庭にたたずむ少女、栗花落カナヲを抱きしめる。

「つらかったろう、くるしかつたろう。なきだしたかったろう、なげすてたかったろう。ワシは斬ることではしか救えぬ。胡蝶姉妹は本当にすごいおう。斬らずとも救う手立てがある。少女よ…その口を開いて、名を、教えてはくれぬか？」

とても悲しそうに頼みごとをしてくる青年に、カナヲはどうしたらいいのかよくわからなかった。

なぜこの人は泣いているのか。

そんなこと、当のカナヲは理解しかねたし、どうでもよかった。

…の、だが。

抱きしめられ、涙を流すこの男の腕の中は、とても暖かかった。

だからだろうか、つい瞳から水滴が垂れる。

が、一滴垂れたところでカナヲは身体が動かなくなったのだ。

「又シは恐怖しているのか。涙を流すことに。何も怖がることはない。ワシしか見ておらぬ。そしてワシは怒らぬ。怒鳴らぬ。殴らぬ。今だけでもいい、心に、委ねてみるのが良いて…」

しく、しくと。

しん、しんと。

まるで小雨のように、腕の中にある少女は涙を流す。

参座はまるで太陽からも守るように、カナヲを抱きしめ、護る。

「参座くん…ってなに?! 今度はカナヲが泣いてる!?!」

毎度のことながら、カナエの帰宅する都合のよさとは恐ろしいもので。

「い、いったいどうしたの?」

「なに、名前を聞いているとこでの。どうやら怖がらせてしまった。ワシが悪いのだ」

カナエは決して参座がそのようなことを間違えるとは毛頭思っていない。

何かまた、誰かのためにその心を使ったのだろうかと思っていた。しかし、あれほど表情を出さないカナヲが、今しがた知り合った参座に涙を見せているのは、姉であるカナエとしてはうらやましくあった。

参座から解放されたカナヲは、少し恥ずかしそうな顔をしている。「ねえカナヲ？この人は天羽 参座くんよ。あなたも自己紹介してあげて？」

カナエは努めて優しい口調で言う。

「栗花落…カナヲ…」

「カナヲというのか。誠良き名だ。ヌシは綺麗な優しい瞳をしているの。願わくば、ヌシが幸せになればよいな」

そういつて参座は優しくカナヲの頭をなでる。

――

それから、数日して。

産屋敷に風柱の嘆願をした参座。

これを産屋敷は快諾。

風柱の就任式の段取りを組むこととなった。

そしてついに実弥が目を覚ました。

「おお、実弥よ。目を覚ましたか。此度の戦いは本当にご苦労だった。傷の具合はどうだ？」

実弥が眼を開けると、寝台の傍らには参座としのぶがいた。

「天羽か」

「なに、参座でよい。ワシはまだ十七だ」

同じくらしいの年齢だと思っていた参座は驚くことに年下だった。

「さて、実弥よ。ヌシはワシに礼がしたいと申しておったな」

確かに、自分だけでなく、匡近まで救ってもらった身だ。

どんな無理難題であろうと、俺には義理を果たすだけの借りがあ  
る。

「アア。何をすればいい？」

「ふむ。というのもな実弥よ。ヌシには、風柱として柱の責務についてもらいたい。下弦の壱との戦いからかんがみても、ヌシは柱になるにふさわしい力量の持ち主である。故に、不死川 実弥よ。これから鬼殺隊を支える柱になれ。ワシに恩義を少しでも感じるのであれば、その両の腕を、人々を救うために使ってはくれぬか？ 主の腕は広いのだ」

匡近を守れなかった自分が果たして柱を名乗っていいのか？

この両の腕ではたして誰かを救うことはできるのか？

葛藤。

自己嫌悪。

「匡近は、しのぶが命を繋ぎとめた。そしてヌシの心意気と生き様は、匡近が繋ぎとめた。なれば次は、ヌシが柱となり、世の人々の安寧を繋ぎとめる番なのではないか？ ヌシには先がある。途方もない未来がある。それは世に生きる人々も同じなのだ」

この先。

この繋ぎとめてもらった命、技を。

未来のために使う。

「謹んで、お受けいたします」

天羽 参座という男が、糸野 匡近という男が、自分の未来を繋ぎとめてくれた。

なら、俺も誰かの未来を繋がないてはならない。

柱となり、その責務を全うすることもまた、未来を守り、匡近や参座への恩返しである。

そう理解した実弥は、風柱の推薦を受けることとした。

「それと、しのぶにも礼をしておけよ？ しのぶもまた戦い、そして勝ち星を挙げた。それゆえにヌシらはこうして息をしていることを忘れてはならぬぞ」

身体を起こした実弥は、首を垂れる。

深く、深く。

瞼はぎゆうと力が入り、拳は強く握られている。

「お気になさらなくてもいいですよ。私は私の戦いをしたまで。不

死川さんの両手は、私よりも多くの人々をこれから救っていくんです。私はあなたを救えたことが誇らしいです」

こんな自分のこれからこうも期待してくれる人がいる。

実弥はついに緊張の緒が切れ、涙を流した。

しのぶと参座は、気を使い病室を後にした。

下に降りたところで、カナヲと出くわす参座。

カナヲはまっすぐと参座の両の眼を見つめる。

「あらカナヲ？ どうした…の」

しのぶが言うが早いのか、カナヲはすつと参座に近寄り、そして顔を参座の腹にうずめる。

「…あらあら」

「ヌシは本当に愛いやつよのう」

そういつて参座はカナヲの頭に手のひらを置く。

「哀しそう…だから…」

参座は驚いた。

当然しのぶも驚いた。

カナヲが普段感情を表に出さないこともあるが、何より参座の姿と表情を見るや、哀しそうと。

そういつて見せたのだ。

「優しいのお、カナヲよ。 そうだな。 あのように優しい男に、柱になり修羅の道を進めというのも酷な話よ。 粗暴な口ぶりだが、奴は護るために強くなったまごうことなき優しい男よ。 虫のいい話だが、ワシも心が痛い」

「参座さん…」

しのぶは勘違いしていた。

その身体、技術は他の追随を許さぬ孤高の天才。

しかして、その心はまだ十七の少年なのだ。

「ありがとうな、カナヲよ。 ヌシの暖かさは心地よいの」



ワシはこれからも斬り続けるのかのう？

「ヌシはここで斬り捨てる。なに、心配するなカナエ殿。すぐに終わる」

上弦の式、童磨。

「おやおや、君は？柱かい？男の子はあまり食べたくはないのだけれど…」

ここで、胡蝶カナエは瞬いた。

一度だけ。

秒に満たぬ刹那。

吐血し、朦朧とする頭。

肺が凍結。

命に別状はないが、呼吸をするたびに、激痛で意識を持っていかれそうになる。

だが、瞬いた後。

痛みを忘れた。

目の前で起きたことがその意識をすべて持って行った。

上弦の式は、その四肢を失っていた。

「ヌシ、名は？」

童磨は、何一つ理解できなかった。

身体を斬られていることも。

名前を尋ねられていることも。

「あれ？僕はなんで這いつくばっているんだろう？」

「…？ワシが斬ったからだか？して、ヌシよ。名は？」

次の瞬間には、童磨の身体は再生していた。

そして、血鬼術を使おうとすると次は下顎から鼻下までが消し飛んだ。

「のう？ワシは名を聞いておるのだ。上弦の鬼とは、会話することができぬのか？なれば、もう首を斬るのだが」

「驚いたね…。黒死牟殿よりも早い…。というより、反応ができないな

…君、一体何者？」

童磨は顎を治すや否や、逆に参座に問いかける。

「うむ、貴様の名などどうでもよくなった。その黒死牟とやらは上弦か?」

「それは言えないなあ。僕が鬼の情報を吐くと思ってい」

剣戟。

童磨の鉄扇と、参座の日輪刀が鏝ぜりあう。

「ううむ。話す気がないなら、生かす時間が無駄である」

「すごい目をしているね、君」

「のう、上弦の式よ。ワシはヌシを斬るなど造作もないし、カナエ殿が手負いであるからして、早急に妹のところへ帰してやらねばならぬのだ」

「へえ！彼女、妹がいるのか！きつと可愛らしいんだろなあ！妹さんも食べてあげ」

鏝ぜりあっている。

にもかかわらず、童磨の下顎がまた落ちた。

「のう、聞かれたことに、答える。そのあとに世間話に付きおうてやる」

カナエは寒気がした。

童磨の血鬼術によって、周辺の温度は確かに下がっているが、そのような理由ではない。

「君、もしかして腕が四本あるのかい？そうとしか思えない攻撃だね」「ワシはいま…腸が煮えくり返っておるのだ。ついうっかりヌシの首を落としてしまいそうなのだ」

童磨は、やれると思つた。

話せば話すほどに、自分の血鬼術が、参座の肺をむしばんでいくと思つた。

「参座君！その鬼の血鬼術は、肺を凍らせるの！呼吸を吸ってはダメよー！」

カナエは参座を思って、痛む肺に鞭を打って声を荒げる。

「なに、問題ない。呼吸など当に止めておる。さて、上弦の式よ。黒死牟とは何やつだ?」

「うーん、残念だなあ、僕があの方の不利益になることを話すと思われているのか：残念だけど、話さないよ？」

参座の周りの空気がゆがんだ。

カナエにはそう見えた。

そして、童磨には。

無惨の記憶が蘇る。

耳飾りの剣士。

圧倒的強者。

「なればよい。輪廻転生するがよい」

そこらの野良の鬼を斬ったような感覚。

それがカナエが抱いた感想だった。

罅迫り合いが突然引いたものだから、童磨は前によろけた。

それと同時に、慣性に従って、童磨の首は落ちた。

落ちた。

カナエがそう認識した時には、参座は隣にいた。

参座の瞳には、少しばかりの愁哀の色が見えた。

カナエの痛ましい姿を見て、左の眼から大粒の涙が伝う。

「遅れてすまぬ、カナエ殿：いつもいつも、ワシは間に合わないんだ

…。実弥にも怒られたことがある、本当にすまぬ」

「私は大丈夫だよ：助けてくれてありがとう：参座くん：」

「その肺はもう、全集中の呼吸はできまいて：乙女の柔肌にも、多くの傷がついてしまうた：なんと詫びをしたらいいか：」

「参座くん、背負いおすぎよ…。私は命があるだけで、幸せ：だわ」

そういつてカナエは参座の頬を撫でる。

「人柱様あ！花柱様は無事にございますか!？」

隠の者たちが、わらわらと追いかけてくる。

「胡蝶様！応急処置をいたします！意識はどうですか？」

「ええ：問題ないわ：」

隠達はてきぱきと周りの後処理と、カナエの手当てを行う。

「人柱様：鬼は？」

「斬った。上弦の式だった。何ともいけ好かぬやつであった」

隠は数秒、固まった。

柱の中では群を抜いて優しく、まともな男というのが隠達の参座への印象だった。

まず、心を荒げることがない。

隠さえも護ろうと、その足で皆を視界に入れながら援護に向かうというのだ。

評判はすこぶるよかった。  
が。

今の人柱はどうだ？

抜き身の刃のように、まとう空気は周りを傷つけんとしている。  
激怒…という言葉では、到底間に合わない。

優しいはずの眼は、鷹のよう  
にこやかな口元は、手負いの狼のようだ。

「あ、天羽…様…」

からっからに渴ききった喉で、隠が声をひねり出す。

「ぬ…すまぬ。柄にもなく…な。やはり近いものが傷つくというのは、耐えられるものではない。ワシはまだまだ未熟じゃのう」

最強の男。

しかし、十七の少年である。

隠はいたたまれない気持ちが入みあがってくる。

――

「姉さん!!カナエ姉さん!」

「大丈夫よ…しのぶ…。命には…関わらない…から」  
蝶屋敷にて。

上弦の弐を斬ったあと、参座はその足でしのぶの元へ向かった。  
「すまぬしのぶ…カナエ殿を護ることができなんだ…」

カナエとしのぶは目を丸くした。  
この男は、何を言っているのやら。

全く理解が及ばなかった。

上弦の鬼と相對して、生きて帰ってきた。

それも、四肢がかけることなく。

確かにカナエの肺が壊れたが、この先生生きていくのに困ることはさほどない。

それなのにこの男、護れなかったと宣う。

「いえ、頭を上げてください。上弦の式と對峙したのにこうして姉の顔を見れたのは、あなたのおかげなんです。護ったんです、参座さんは。本当に、ありがとうございます」

次に目を丸くしたのは、参座だった。

「ワシは、護れたのか？この様で…」

「ええ、あなたが護ったんです。姉さんを…そして私も」

「そうか…そうなのか。ワシは護れたのか。皆の宝を、護れたのか…」  
そう言い、参座は立ち尽くした。

すると蝶屋敷で働く少女たちも駆け寄ってきて、カナエの身体を支えて涙する。

皆は口々に参座に感謝を述べ、カナエを連れて行く。

参座は縁側に座っていた。

自らの刀が、大切な者たちの大切な人を護ることが出来た。

未来や、想いなど、形の無いものをひたすらに護り続けてきた参座にとって、身近な人間を護り、その感謝を受けることはなかなか無かった。

心あるものは、いたずらに他を傷つけてはいけないし、傷つけられなくても、いけない。

そして、それを護るのが、神より特別に造られた自分なのだ。

どこか霞を掴むような感覚で、刀を振っていた参座が、目の前の人のことを想って振るった刃が、感謝という形となった。

嬉しかったのだ。

参座は、とにかく嬉しかった。

庭を駆け回ったかった。

それほどに浮き足立っていた。

気がつくくと、隣にカナヲが座っていた。

「カナヲか。カナエのところには居なくていいのかわ？」

「…眠った…から。邪魔に…ならないように…」

「そうか。のう、カナヲ。ワシはとても嬉しい。護れたらしい。大切なものを。斬るしか能のないワシだが、斬ることで、形あるものを護れたらしい。嬉しいのだ、ワシは」

カナヲが、笑った。

初めて目にする顔だった。

「又シは、笑うと愛いのう」

「…ありがとう、参座…さん…」

「なに、又シの笑顔が見れるのなら、安いものよう」

参座も笑った。

――

「百年続いた均衡が、揺らいだ。参座、やはり君は特別な存在だね。今回の上弦の式、討伐。本当に感謝するよ、ありがとう、参座」

ところ変わって、産屋敷邸。

先の上弦の式との戦いを、参座は産屋敷に報告している。

「勿体なきお言葉。小生、これにこそ存在価値を見いだせるというもの。して、お館様。上弦の式の口から、黒死牟なる名を聞きました。恐らくは上弦の鬼ではないかと」

「黒死牟…か。うん、ありがとう参座。ところで、とても嬉しそうだね、参座。なにかいいことでもあったかい？差し支えなければ、聞かせて欲しい」

蝶屋敷にて、しのぶに護ることが出来たと感謝されたこと。

カナエにとにかく感謝されたこと。

アオイや、蝶屋敷で働く少女たちに感謝されたこと。

そして、カナヲが言葉で感謝を伝えてくれたこと。

産屋敷は、珍しく早口でまくし立てる参座に、表情が綻んだ。

「よかったね、参座。君は自分が思ってる以上に、多くのものを護っているよ。それは私が保証する」

「ありがたき幸せにございます」

「その力、これかも私の子供たちを護るために振るってもらってもいいかい？」

「当然にございます。そのために小生は生まれた故」

「…そうではないと思うんだ。参座は、確かに特別に力をもって生まれた。でも、参座は…人はだれしもこの世界で人生を全うして、笑って暮らすために生まれてきたんだよ。参座、君は本当に、心の底から優しい子だ。その心が傷つくのは、私自身とても心が痛む。いつかその心が、張り裂けそうになった時は、私でもいい。ほかの人にその心を支えてもらってもいいんだよ？」

参座は言葉が出なかった。

皆が、命の炎を燃やして鬼殺に赴いている。

血を吐き、涙で頬を濡らしながら刀を握っている。

なれど、参座自身は飯を食うように鬼殺ができる。

不公平だ。

であれば、この命。

刀を握ることのできぬ者たちのために使うのが当然。

そう、思っていた。

「なれば、必ず。必ずや鬼舞辻無惨の首を取り、刀を置きます。それまでは不肖、天羽参座。お館様の刃となりてこの身を振りましょう」

この鬼殺が本当の意味で終わったとき。

自分はいつたい何になるのか。

参座はこの瞬間、少し怖くなった。

――

カナエが運ばれてから数日。

蝶屋敷へと足を運んだ参座は、玄関口で水柱 富岡義勇と出くわした。

「おお、義勇。息災かの？」

「どうも…」

「ええい、無口な男じゃな…はて、義勇よ。何か悩み事か？」

珍しく義勇と会った参座は、世間話でもしようと思つた義勇の顔を見た。何やら思い詰めている様子。

「何でもない」

「そう硬いこと言うなて。ほれ、行くぞ」

参座に無理やり腕を引かれ、義勇は縁側へ連行されるのだった。

「して、義勇よ。何があつた？話したくないか？」

この男は昔からそうだ。

人の内側にすらすらと入ってくる。

水柱に就任した時も、頼れ頼れと。

生まれ持つて力のある人間はいい。

大切な人を失わずに済むのだから。

もし、自分に力があれば。

蔦子姉さんや、錆兎を失うことはなかつた。

「たたき上げてきたんだのう。痛ましや。義勇よ、ヌシは強い」

はて、この男は何を言っているのか。

「鬼殺隊の皆…特に柱は、痛ましい過去がありながらも、よくもまあ折れずにここまで自分をたたき上げたものよ。そこには己のみではなく、誰かの尊ぶべき想いがあつたのだからな」

「ちがう。俺はそんなんじゃない。許されることなんてない、これまでも…これからも」

義勇が自分を叱咤すると、参座は優しい瞳で言った。

「誰も怒ってはおらぬ。怒っておるのは己のみなのだ。最近、ワシもそれを痛感した。義勇よ、ヌシは罪を数えられる人間ではない。今一度、亡き者たちの言葉を思い起こしてみよ」

みんな。

皆、怒ってはおらぬのだろう。

しかし、義勇はそれでも弱かつた自分を許せなかつた。

「無理に許す必要はない。己を裁けるのは、己のみなのだ。いつか必



ず、自らを許せるときがくる。その時までには、死ぬな。生きろ。…さて、今宵はカナエ殿の見舞いに赴いておつてな、ワシは行くとする。そう思い詰めるな…何かあればワシを頼れ。そのためにワシは強く生まれたのだ。そして誰かに頼られたとき、ワシはワシを少しだけ許せるのだ」

自分を許す。

まずは、あの兄妹を護る。

それが、己を裁き許すことへとつながると。

義勇はそう思った。

義勇に別れを告げた参座は、カナエの居る病室へと足を運んだ。

「カナエ殿。どうだの？体の調子は」

参座は努めて明るく、おどけてカナエの顔を覗く。

「参座くん！もうある程度は回復したわ〜！」

思ったよりも元気そうなカナエの姿を見て、参座は安心できた。

「それは誠よきかな。傷跡は痛々しいが、それでもべっぴんだの。引く手は数多じやろうて」

「もう、参座くんたら…冗談はよしてよ」

「冗談というわけでもないのだが…。ヌシはもう呼吸をつかえぬであろうから、余生は旦那でももううて、平和に暮らすのが良いと思うが。ヌシの刃は、ワシがもらい受けるからの」

参座に救われて、自らの鬼殺のために育てた刃を、この男はもらい受けてくれるといった。

カナエとしては本当に頭が上がらない。

鬼に両親を食われ。

少しでも自らのような境遇を作るまいと、身体に鞭を打ってここまできた。

そして今回、上弦の弑を屠ることに成功した。

これで、少しは世のため…不遇の人たちのためになったのではないかと。

少しばかり満足感があった。

「ワシはの、カナエ殿。無惨の首を斬るために生まれてきたんだと

思つとつた。しかしお館様がのう…そうではないと仰つてくださった」

参座の顔に、少し影が差す。

「そうよ、参座くん。あなたみたいな優しい子が、鬼を斬るためだけに生まれたなんて嘘よ」

「…カナエ殿も、そう言つてくれるのか。ワシは、斬ることしか能がなかった。この先、無惨を斬つて…鬼が出なくなつて…。するとどうだろう。ワシは生まれてきた意味をなくすのではと。怖くてたまらなんだ」

カナエは涙があふれた。

これほどまでに、人のために刃を振るい。

これほどまでに人を安心させて。

誰よりも強く、だれよりも固い意志で。

誰よりも多く、だれよりも速く鬼を滅したこの男が。

まるで、幼子のように…。

先が、怖いと。

「ねえ参座くん…こつち来て？」

参座は言われた通りにカナエに寄る。

すつと。

抱きしめられた。

カナエは何も言わない。

「誰かに抱き留められたのは、いつぶりだろうかの…。温いもう。人というのは、本当に温いもう」

参座は声を殺して泣いていた。

自分がわからない。

可哀そうだと鬼を斬り。

助けたいと鬼を斬り。

救いたいと鬼を斬った。

斬つて、斬つて、斬り続けた。

もとは人なのだ。

飯を食うように。

人が肉を食うように。

鬼も人を食っているだけなのだ。

しかし斬らねばならない。

鬼になる前の人も、人を食いたくはなかつただろうて。

斬ってやらねば浮かばれぬ。

斬ってやらねば救われぬ。

「しかし、忘れられぬのだ。肉を断つ、己が太刀筋。もとは人なのだ。ワシが護りたい、人だったのだ…。ワシは人を斬って、感謝され…。そして人を斬るために生まれたと気が付いた。ならば、これからも人を斬ることのみが、ワシをワシたらしめる行為なのか？もしそうなのだとしたら、怖いのだ。まだ斬らなくてはならぬのかと…。怖いのだ…」

「参座くん…人を救うって、とても難しいことなのよ？大丈夫。難しいことを、やってきたんだもの。ほかのことなんて簡単よ。私も手伝うし、しのぶも…お館様も手を差し伸べてくれるわよ。だから、大丈夫。すべてが終わったら、全部やってみましょう？参座くんが、これをやるために生まれてきた…と思えるものが絶対にあるわ」

「優しいのう…カナエ殿は…一目見たときからわかつておったが、強い…やさしいの…」

この少年は。

一人にしてはいけない。

カナエは固く、硬く。

そう誓ったのだった。

ワシは斬らずに今日を過ごす。

「御免!! 杏寿郎! 杏寿郎はおるか?」  
煉獄邸。

参座は、槇寿郎引退後の炎柱任命のため、訪れていた。

「はい! 兄上は道場で鍛錬中です。お呼びいたしますので、しばしお待ちください」

出迎えたのは、弟の千寿郎だった。

「おお、千寿郎。息災か? なに、ワシが出向く。案内を頼んでもよいか?」

「天羽様も、お元気そうで何よりでございます。それではご案内いたします」

ぱたぱたと歩く千寿郎についていく参座。

流石、炎柱の屋敷とだけあって広い。

「千寿郎、又シは稽古をつけてもらわぬのか?」

「:私は、才能がなくててんでダメなのです。炎の呼吸もまともに使えません」

「ああ、ワシが言っておるのは、剣術の方だの。なに、又シに継子の才能がないのは見えておる。それを悲観する必要はない。又シは又シの生き方を模索すればよい」

「:そう:なのでしようか」

「よいか、千寿郎。人を斬る才能など、ないほうがいいのだ。そしてないのであれば、ワシに任せればよい。ワシが又シの想いの分も斬ろう。又シは優しいのう。兄のために刀を握ろうとするのか」

千寿郎には、呼吸の才能がなかった。

そのことに槇寿郎は落胆した。

しかし、杏寿郎はそれでも変わらずに接してくれる。

偉大な兄。

その期待に応えたい。

だが、叶わぬ。

そんな歯がゆさを、千寿郎は抱えていた。

「なに、だれも又シに人斬りの期待なぞしておらん。期待しておるのは、又シが笑って生き、そして誰かを笑顔にしていくことなのだ」

千寿郎は、天羽参座という男を、優しい男なのだとおもった。

榎寿郎が柱を引退するとき、一度だけ引き留めようと煉獄邸に訪れたことがある。

その時は頭ごなしに榎寿郎に否定されていたが、参座は怒ることも声を荒げることもなく。

ただただ榎寿郎に頭を下げていた。

帰り際、頭に手のひらを乗せられ、父を支えてやってくれと優しい顔で言われたことだけは忘れずに覚えていた。

「こちらです。それでは、私はこれで」

道場前の襖につき、千寿郎はその場を後にしようとする。

「のう、千寿郎。榎寿郎殿は息災か？」

哀しそうな顔で、問いかけられた。

「…少しお酒を飲みすぎではございますが、変わりなく…です」

「そうか…もし伝えることができれば、ご自愛くださいと」

「お気遣い…痛み入ります」

そうして、千寿郎は廊下を歩いて行った。

参座は風切り音のする道場へ入っていった。

そこには、鬼気迫る表情の杏寿郎が炎の呼吸を通しており、誠見事な太刀筋だった。

— 炎の呼吸 玖ノ型 煉獄 —

炎の呼吸奥義。

それをみた参座は、ほお…と声を漏らした。

「おお…これは！天羽殿ではないか！今日はどうされた？なにかご用か？」

はきはきとした話し方。

まぶしい髪色。

「杏寿郎、息災かの？」

「もちろんです！上弦の弐の討伐、誠に見事です！私も天羽殿に並べるよう、精進いたします！」

「ヌシはまっすぐに話していて気持ちがいいのう。なに、すぐだろうて。玖ノ型：奥義というにふさわしい太刀筋だの。よくここまで鍛え上げた」

「ありがたきお言葉！」

「して、杏寿郎よ。鬼の討伐が五十を超えたとな。なればヌシには柱となる権利がある。さらには今の玖ノ型：まこと申し分ない実力だとワシは感じておる。受けてくれるな？」

「はっ！私が炎柱となり、人々を鬼から護る覚悟はどうにできています！」

参座は自然と笑顔になった。

このように強い男が柱に加わってくれれば、鬼殺隊としても心強い。

「杏寿郎よ。ヌシの心は、いかように折れる？」

「折れません！たとえ四肢がちぎれようとも！この命ある限り、人々を護るといふ誓いは、決して折れません！」

目頭が熱くなる。

まっすぐに、熱くて、強い。

このように気持ちのいい男、果たして会ったことがあるだろうか。

「よし、杏寿郎。稽古をつけよう。ヌシの目指す場所をはつきりと示しておく。真剣を抜け」

「誠ですか!?それは何ともありがたい!ではこちらは殺す気で挑んでもよろしいでしょうか!?!」

「よい。ヌシのすべてをワシに見せよ」

二人は向かい合った。

杏寿郎は自らの日輪刀を抜いた。

対して参座は木刀。

しかし、参座の実力を知る杏寿郎は、決して冒瀆だとは思わない。

—炎の呼吸 壺ノ型 不知火—

炎の呼吸最速の型。

一太刀目。

この一太刀ですら、雑魚鬼では知覚できまい。

しかし参座はひらりとかわし、的確に顎に一撃入れる。  
杏寿郎の意識はまだはつきりしている。

「見事!!見事だ杏寿郎!!もつと打つてくるがよい!」  
とにかく型を打つ。

自らの目標である、参座という柱。

その男に、己の刃を届かせたい。

―炎の呼吸 肆ノ型 盛炎のうねり―

太刀筋がうねる。

炎の渦を、そこに見た。

「よくそこまで鍛え上げた。柱として申し分ない。なれば、ワシを  
斬ってみろ。討つべき敵と思い、護つて見せよ!」

そこからは一方的だった。

参座が現れ、そちらへ意識を向けるや否や、死角からの一撃。

たったの一撃で、意識を持っていかれそうになる。

しかし。

もしも、鬼が。

もしも鬼がこれほどの強さであれば。

何一つ護ることなどできない。

母との誓い。

弟の未来。

そして、父の哀しみ。

それらすべてを背負い、それでも前へと足を動かす。

まさに、修羅。

たとえどんなにこの男と差があろうと。

目の前が暗く、闇に遮られようと。

命が燃え続ける限り。

「俺は、負けられん!!」

「よくぞ言った!杏寿郎!」

―炎の呼吸 玖ノ型 煉獄―

その一撃は、音を超えた。

参座はその奥義を、木刀で受けた。

半ばから斬れる木刀。

そしてその切っ先が参座に届くと思われたその時。

杏寿郎の集中力が極限を超え、世界が時を刻むの緩めたとき。信じられないものを見た。

半ばで折れた木刀で、杏寿郎の日輪刀を真横から叩いた。

正面に構えていた日輪刀は、杏寿郎の身体から外れる。

そして、木刀は首に届く。

「これが、又シの目指すところよ」

二人は止まった。

杏寿郎の喉笛に、木刀がひたり…と付く。

「うむ！参った!!これが境地か！少し垣間見たような気がする！感謝します！」

「杏寿郎、又シはこれからまだまだ強くなる。そして、必ず多くの者に希望を与える。ワシはそう感じておる」

参座は満面の笑みを浮かべた。

「ワシは行く。柱の就任式については追って連絡が行くだろう」

「天羽殿、本日は貴重な経験、誠に感謝いたします！」

「参座でよい。又シはもう立派な柱だからの」

「では参座殿！また手合わせ願ってもよろしいでしょうか？」

ニヤリと笑う。

「当たり前よ。又シの成長は誠たのしいからの」

そういつて参座は消えた。

――

「おお、匡近。息災かの？」

訪れたのは、不死川邸。

ここでは、鬼殺へ行けなくなった匡近が屋敷の手入れなどをしていく。

「これはこれは、天羽様。本日はどうされました？」

「お館様の命でな、杏寿郎のところに行ったのだが。新たな柱を見る



とのう、はて実弥は息災かと気になったの」

「それはそれは、ご足労おかけいたしました。実弥でしたら三日ほど前に屋敷を発ちまして、昨日任務がおわった旨が鴉で送られてきたところなので、もうしばしすれば帰宅するかと思います」

「そうか…では待たせてもらおう。又シとも話したかったしの。それと参座でよい。又シは立派な男だからの」

匡近はきよとんとした。

最強の男に、まさか立派な男だと思われていたとは、予想もつかなかった。

匡近は茶を入れ、縁側に腰掛ける参座のもとへと座った。

「どうぞ、粗茶ですが」

「うむ、いただきこう。して、匡近よ。実弥の様子はどうか？」

匡近は、ここ最近の実弥の成長が著しいだとか、弟の心配をいまだにしているだとか、もう少ししたらこの屋敷を出ていくことにしている匡近に態度にはださぬがさみしがっているだとか。そんな他愛もないことを話した。

「少し曲がってはいるが、平和…だのう」

「ええ。確かにあの時、俺は死ぬ気でした。そして俺が死ねば、実弥はどんな手を使っても鬼を殺し、自分の命を早めたでしょう。そうならなくてよかった…参座殿には頭が上がりません」

「なに、ワシは鬼を斬っただけ。…だがまあ、素直にその感謝は受け取っておこうかの」

「ありがとうございます。それで、これから実弥の屋敷を出たらアイツの弟を探そうと思っっています。名前は、不死川 玄弥。参座殿も、もし見つけたら実弥の前に俺に連絡をいただいてもよろしいですか？」

「又シは優しいの。さて、漢の頼みとあればこの参座。違えぬよう肝に銘じよう。玄弥…玄弥だな。確と覚えた」

できた人だと思った。

命を救い、さらには頼み事まで快諾してくれた。

さらにこの様子では、自らの足でも玄弥を探してくれるような勢いだ。

「参座殿には助けられてばかりですね…」

「ワシは…ワシは、誰かの想いに応える時が、この人生で最も心休まる  
ときであり、幸せなときなのだ。故に、もろ手を振って頼ってくれる  
かの？」

匡近は笑った。

「おーい匡近ア。誰か来てんのかア…ご無沙汰です」

そこへ実弥が帰ってきた。

「おお、実弥。息災じゃったかの？顔を拝みに来たぞ」

「参座さん、人が悪いぜ。文の一つでもくれりゃあ、馳走を用意したつ  
てのに」

「はっはっは。よいよい。ヌシらの元気な顔を見ただけで、腹いっ  
ぱいだの。さて実弥よ、柱の責務はどうだ？」

「はい、滞りなく。ここら一带の鬼も少しづつ減ってはきています」

「うむ、よきかな。ところで、煉獄家の跡継ぎである煉獄杏寿郎が、此  
度炎柱を就任することとなった。まごうことなき立派な漢よ。機会  
があれば稽古をつけてみよ」

「煉獄…ですか」

「…というかヌシ、しゃんとした言葉遣いもできるんだの」

実弥の粗暴な言葉遣いしか頭のない参座はつい口に出してしまっ  
た。

匡近は我慢できないとばかりに笑いだし、参座もそれにつられて笑  
う。

「おいおい…参座さんといえど笑いすぎだぜエ…」

困り果てた実弥をみた参座は、暖かい気持ちで屋敷を後にした。

――

それから、杏寿郎に継子ができた。

名は、甘露寺 蜜璃という。

炎の呼吸を派生させ、恋の呼吸を確立した。

炎の呼吸の継子…というわけにはいかなかったが、その活躍はめざ

ましい。

さらには、伊黒 小芭内という男が、蛇柱となった。

この男、太刀筋に関しては右に出る者はいない。

あまりに見事な太刀筋に、参座も感嘆の息を漏らしたほどだ。

「ある兄妹を見てきてほしい」

産屋敷の命を受け、やってきたのは狭霧山。

元水柱、鱗滝 左近次の住まう山。

ここに、鬼になった妹を携えた少年が修行をしているという。

「御免。鱗滝殿はおられるか？」

山の麓にある小屋の戸をたたけば、天狗の面をした壮年の男が現れる。

「わしが、鱗滝左近次だ」

「うむ。ワシはお館様より命を受け、兄妹の様子を見に伺った人柱。名を天羽 参座という。二人は息災かの？」

「これはわざわざご足労いただき…どうぞ中へ」

「邪魔する。して鱗滝殿、鬼になった妹とやらは…ここで寝ている幼子か。…このように年端もいかぬ子たちが鬼となり、肉親を襲ってしまうとはなんと痛ましいか」

「天羽殿の言う通りですな…」

「して、鱗滝殿。妹の様子は？」

それから鱗滝は、炭治郎のこと、禰豆子のことを話した。

禰豆子は少し前から眠ったまま起きないだとか、岩を斬れたら最終選別へ行かせるだとか。

しかし、岩なぞ斬れぬから、選別へは行かせないともいう。

参座は鱗滝もまた優しく強い人間なのと思った。

「お館様は禰豆子とやらの特異性に目をかけておられる。もし、炭治郎が鬼狩りになったときは、この参座も後ろ盾すると伝えておきたかった」

参座の噂は、鱗滝のところまで届いていた。

曰く、鬼殺隊の歴史でも最強の剣士だとか。

そんな男が、鬼をかばう隊士の後ろ盾とは何事かと。

鱗滝は戦慄した。

「なに、人を食わぬのだろう？なれば、その幼子は人じやろうて。人を護るのもまた、鬼殺隊の使命であろう」

鱗滝は恐れ入った。

禰豆子を人だといったこの男。

なんと人ができているのか。

「さて、その炭治郎とやらにも挨拶してこようかの」

参座は小屋から出て、人の気配のするほうへ走った。

茂みの深い森の中。

その中で、不自然に開けたところで、しめ縄の付いた岩に刀を振る少年が一人。

「ヌシが、炭治郎か？」

鱗滝と同じ羽織に袖を通した、額に痣のある少年が眼に入った。

「…はい、そうですけど。どちら様でしょう？」

突然現れた白髪の男に、炭治郎は驚いた。

その男、突然動いたと思ったら、炭治郎の目と鼻の先に立っていた。そして、頭に手のひらを置く。

「ワシは、天羽 参座。炭治郎よ、ヌシはすごい。そんなになるまで刀を振るか。妹想いのいい兄であるな。斬って見せるのだ、岩を。そして、ヌシが多くて鬼を斬り人々の助けになることを、願っておる」

急に現れて、急に頭を撫でられ、炭治郎は混乱する。

しかし、目の前の男からは、とても優しいにおいがする

そして、それに混ざって哀しいにおいがする。

「泣いて…いるのですか？」

炭治郎は思わず声に出してしまった。

「…ヌシも、優しいのう。ワシはな、強い。誰よりも強い。だから炭治郎…最終選別を生き抜き、鬼殺隊に入ることがあれば、ワシを頼れ。さすれば必ず応えん」

そういうや否や、目の前に参座の姿はなく。

そのあとすぐに錆兎がきて、炭治郎は稽古をつけてもらうのだった。

――

胡蝶カナエは全快した。

呼吸は使えなくなつたが、生活には何の支障もなくなつた。

参座が炭治郎のもとへ行き、帰つてくると玄関前にはカナエが座つていた。

「…カナエ殿？なにをしておられるか…？」

参座に気が付いたカナエは、表情をぱつと明るくした。

「参座くん！アオイがお昼ご飯作りすぎたから、参座くんにおすそ分けしようと思つて！」

「はあ…わざわざ待つておつたのか？」

「すぐに帰つてくるかなあつて虫の知らせがね…。迷惑だつたかな？」

「そのようなことはないが…ワシは家におることがほとんどないのでな…茶の一つも出ぬがよいのか？」

「そんなの気にしないわよ。せつかくだから、温めて振舞つていこうかなつて」

参座は家の戸を開ける。

それに続いたカナエは戦慄した。

何もなかったのだ。

ただの部屋。

畳が敷かれた、何もない部屋だつた。

囲炉裏をおくためのぽつかりと空いた穴。

鍋もなければ、薪もない。

「参座くん…あなたは…」

「家にあまり帰らんでな…寝ることくらいしかせんのだ。幸い、金はたらふくもらつておるし、街の宿屋や食事処に投げたほうが、皆笑うというものだしおう」

カナエは胸が苦しくなつた。

とうとう我慢の限界が来た。

「参座くん！今日という今日は！もう許しません!!」

「うおっどうしたカナ工殿、そんなに声を荒げるでない」

「いつもいつもそう！参座くんは自分を蔑ろにしすぎなのよ！これからは、私がこの家を機能させますからね!!」

蝶屋敷には、愛する妹たちがいる。

毎日食卓を囲み、団らんする。

それは、当たり前で、普通だった。

だがこの男はどうだ。

誰もいない、何もない部屋で眠り。

日が沈んだ頃に、鬼殺に赴く。

疲れ果てることがあるのかどうかわからないが、家に帰るとまた眠るだけ。

「そんなのって…そんなのってないじゃない…」

先ほどまで怒髪天怒っていたカナ工も、この家で過ごす参座の姿を想像して、泣き出してしまった。

「か、カナ工殿!?!ど、どうされた?!」

おそらく参座の人生で一番うるたえた瞬間だった。

「とにかく、これから私は参座くんが、家に帰りたいと思える家を作るまで、蝶屋敷の面々と話し合っ通います」

「!?!」

もう声にならなかった。

なぜそこまでするのか。

参座には理解ができなかった。

「そうと決まれば、街へ買い出しに行きます！ほら、参座くん行くよ！」

しかし、この家に人がいるというのは変な感覚で。

でもこの満面の笑みを浮かべる女性なら、きつとそれは楽しいのかもしれないと。

そう、思い始めていた。

ワシは斬ることをやめてはならぬのだ。

「うん、こんなものかな」

気が付くと参座の家には様々な家具が配置され、暖かさを醸し出していた。

カナエが泣きだしたあと、参座はカナエに腕を引かれ、街へ繰り出していた。

そして、あらかたの家具をその場で買い漁られ、街の男たちにその荷物を運ばせていた。

人々には、ついに家で暮らす気になったかとか。

珍しく頼られてうれしいだとか。

この女性は嫁か？

など。

とにかく賑わしかった。

参座は人が好きだ。

街でたくましく生きる者達も、田舎で細々と生きる者達も。

自分の護っている者たちが、やいのやいのと参座の頼みならばと快諾してくれることは、本当に心からうれしかった。

「すまんのう…カナエ殿」

「何言ってるの？私が言い出したことよ」

家具などはすべて、カナエが金を出した。

参座はほとほと困り果てたが、カナエも柱。

金がないわけでは決していない。

命を救われたお礼だと言っていたが、参座としてはそれは心苦しい。

「迷惑をかけてばかりですまんのう…」

参座は謝った。

これほどまでに、自分のことを気にかけてくれるカナエに、頭が上がりなかつた。

「もう！参座くんは私に謝るの禁止！迷惑だなんてとんでもないし、私はありがとうって言われたほうがうれしいな」

うーむ、この女性にはかなわぬ。

参座は本能的に理解した。

「でも、今日はここでご飯食べるのは無理そうね…。さて、今日は蝶屋敷へ帰りましょう」

「そうか。なれば屋敷まで送ろう」

「…？何言ってるの？あなたも今日は蝶屋敷に帰るのよ？」

「…なぬ？しかし、ワシは柱の業務もある故、ここで寝泊まりせねばならんのだが…」

「お館様に了解は取っております。今日は一般隊士の方たちが、人柱様の代わりに警備をしてもらえないか文を出したら、みんな快諾だったそうよ」

「…カナエ殿にはかなわんのう」

参座は観念してカナエの後ろをついて歩いた。

――

蝶屋敷にたどり着いたのは、夕刻。

日が橙色になってから。

「しのぶく帰ったわよ〜！」

「あら、姉さんお帰り。それに、参座さんもお帰りなさい」

参座は空いた口が塞がらない。

お帰り、なんて。

もう何年言われてないだろうか。

「ただいま。今日は疲れたわ〜」

カナエがしのぶに話しかけていると、その後ろにカナヲが見えた。

「しのぶ、カナヲ。今日は世話になる」

「ええ、自分の家だと思つてくつろいでくださいね」

カナヲもペこりと頭を下げた。

そして、奥からぱたぱたと足音が数人。

「人柱様くようこそいらつしやいました〜」

「お荷物は私たちが〜」



「お召し物もお預かりしますよ〜」

三人の幼子が口々に参座の身の回りの世話を買って出る。

「アオイが夕餉の支度をしていますので、参座さんはどうぞ居間へ」

「…お言葉に甘えようかの」

そういつて参座は腰の日輪刀、白い羽織をなほ達に預けた。

蝶屋敷は、夕餉のいい匂いが充満していた。

作る量は、患者の分もあるため、アオイは大忙し。

しかしてきばきと無駄なくその仕事をこなすから大したものだ。

参座は気になって、厨房に顔を出す。

「んー、いい匂いだの。アオイ殿よ、今日の夕餉はなんなの？」

「天羽様!?ど、どうされたんですか?」

「おお、今晚は蝶屋敷に世話になるでな。アオイ殿の作る夕餉のにおいにつられてきたのだ」

「そうだったんですか…。今日は、肉じゃがと唐揚げです。もうすぐできますから居間の方で…って天羽様!!」

参座は我慢できず、唐揚げを一つつまんだ。

アオイは驚いた。

鬼殺隊において、人知を超越した男が、まるで年端もいかぬ幼子のように夕餉のおかずをつまんだのだ。

お茶目だなと安堵するが、ここは叱ってやらねばとアオイは心を鬼にする。

「もう、天羽様!すぐにできますから、座って待っていてください!カナエ様みたいなことされては困ります!」

「はっはっは!カナエ殿もこのようなことをするのか!それはいいことを聞いたのう。すまんアオイ殿。あんまりうまそうだったので…な。ではおとなしく待つとするかの」

参座はアオイに謝って居間へと向かった。

とても新鮮だった。

誰かに叱られることなど、今の今までなかった。

どこか懐かしような気がした。

「参座くんったら、アオイに怒られたのね」

「はっはっは。叱られるとは、存外に心地いいものだの。確と思いやりを感じる。アオイ殿は優しい子じやの」

「そうよくアオイはうちの自慢のお母さんだもの」

「私はまだお母さんといった歳ではないのですが…」

参座とカナエが談笑していると、出来上がった夕餉をもってアオイが来た。

食卓の前にみんなが集まる。

「では、私は患者さんに配膳してきます」

「うむ、ワシも手伝おう」

「いえ、お客人にそのようなことはお願いできませんので、お座りください」

「なに、このような経験めったにできまいて。やらせてはくれぬかのう、アオイ殿」

「いいじゃないアオイ。参座くんやりたいみたいだし、今日だけでも…ね？」

カナエにそういわれたアオイは、折れた。

二人で患者のもとへ夕餉を運ぶ。

病室には様々な人がいた。

再起不能の者。

四肢がかけているもの。

精神を病んでいるもの。

参座は痛ましく思った。

「ああ、人柱様…。このような敗残兵のもとへわざわざお越しいただけるなんて…」

一人の隊士が、参座へ声をかけた。

その姿は、もう日常生活は送れないほどだった。

眼は片方がつぶれ、右の足が膝から先を失っていた。

左手の指は二本足りない。

頬にはおおきな抉られた跡。

「何をいうか。負けてなどおらぬ。立派に戦っておる。あきらめるでない。ワシが無惨を討つその時まで、生きろ」

「天羽様…そのようにお言葉をかけていただけるなんて…刀を振るつた甲斐があつたというものです」

隊士は安心したように笑った。

「飯は…一人で食えるかの？」

「はい。大丈夫です。お手数ですが、そちらに置いておいていただけますと…ありがとうございます」

「…ヌシの刃は、ワシが確ともらい受けた。安心して余生を過ごせ」  
「ありがとうございます…ありがとうございます…」

参座の刀は、刃は。

傷ついたものを見るたび、刀を握れぬ悲痛の声を聴くたびに。鋭く、そして厚くなつていく。

「アオイ殿、こっちは配り終えたぞ」

「ありがとうございます。今回は、自分で食事ができないかたがいなくてよかったです。さあ、居間へ戻りましょう」

「アオイ殿。ヌシの刃も、ワシがもらい受けよう」

目頭が熱くなる。

参座の前を歩くアオイは、涙がでそうだった。

そして、参座の手のひらがアオイの頭に置かれる。

「心が痛かろう。胸が締め付けられよう。しかし案ずるな。ワシがその想いの分、鬼を斬ろう。ヌシは優しい子だの。いつも自分を責めているのだらう。自分を、いつか許せるときがくる。その時まで、ヌシの哀しみはワシが預かっておこう。人を治すこともまた、戦いなのだ。刀を振るうことだけが鬼殺ではなからうて。しのぶを見るがよい。彼女の背中からは学ぶものが多いのではないか？」

「…ありがとうございます」

「たまにはカナエ殿やしのぶにわがままを言うてみるのもよからうて。ヌシはもう十分に自分を責めた、叩き上げた。心元ないが、ワシが太鼓判を押そう。アオイどの、ヌシは立派な人だの」

もう、いいのだらうか。

もう、逃げた自分を許していいのだらうか。

もう、罪を償えたのだらうか。

「難しく考えすぎなんじゃ、アオイ殿は。委ねい。今のヌシは、決して間違うとすることはしていない。ワシは尊敬しておる」

しのぶがアオイに言う。

人柱様は、すごいお方だと。

カナエは言う。

参座は強いと。

運ばれてきた隊士たちは言う。

人柱様のようになりたいと。

隠達は言う。

人柱様は、尊いお方だと。

アオイは、その理由を垣間見た。

「そのようなお言葉、私にはもつたいないです」

「何を言うか。釣りがかかるわい。よいのだ、ヌシが斬れぬ分、ワシが斬る。なれば、ワシが治せぬぶん、ヌシが治してくれるか？」

「…全力で、お応えいたします…」

「うむ、よい！さあ、飯だ飯！」

アオイは、涙を止めたかった。

このままでは、カナエ達を心配させてしまう。

しかし、涙は止まらなかった。

そうして歩いていると、居間へたどり着いた。

カナエは察した。

参座がまた何か救ったのだと。

しのぶは珍しく涙を流すアオイを見て、一瞬面を食らったが、すぐに察した。

なお達三人娘は、アオイにどうしたと詰め寄るが、アオイは嬉しくて泣いているというや否や、ほほ笑んだ。

「さて、実にうまそうな夕餉だの。アオイ殿はいい嫁になれるの」  
ここでアオイ、虚をつかれた。

嫁という言葉に、顔を真っ赤にする。

「天羽様、冗談はよしてください…」

「カナエ殿といい、冗談ではないのだが…それにアオイ殿、参座でよ

い。一宿一飯の恩を受けるのだからな」

「…では参座様、私のこともアオイとお呼びください」

「様もいらぬ。アオイよ、飯を食ってもよいかの?」

「そうねーさ、いただきますしよーアオイ?」

「はい…では。いただきます」

「いただきます」

皆で手を合わせ。

食卓を囲み。

他愛もない話をして。

ご馳走様と声をそろえる。

腹が膨れたら、茶を淹れ、縁側で未来について語らう。

これがなんと幸せなことか。

「どう?参座くん」

「うむ。いいものだな、カナエ殿。飯を食うというのは、こうも楽しいものなのか」

「…ねえ、参座くんって肉親はいないの?」

天羽 参座。

鬼殺隊最強の人柱。

しかしてその過去は、だれも知らない。

「ふむ、ここまでされて語らぬというのは野暮よのう。なれば語るか。しかしまあ、これといって面白いものでもないのだが」

「聞かせて?…参座くんのこと」

三人娘は床に就き、アオイは厨房にて明日の朝餉の支度。

しのぶは部屋で勉学に励んでいる。

カナエと二人きり。

「そうだのう。物心ついたころには、婆様と暮らしておった。この話ことばも、婆様の影響だの。藤の家紋の家だった」

「だった?」

「婆様は、元鬼殺隊での。ワシに呼吸を覚えてくれたこともあった。ワシの両親も鬼殺隊であった。まあ、ワシを産んですぐに鬼に食われたがの」

親の顔も知らないという。

「九つの時であったかな。婆様が体調を崩しての、藤の香を焚けなんだ。その日は運悪く、鬼が来た。婆様は身体に鞭打って日輪刀を握った…が。瞬殺だった。目の前で婆様の首が飛んだ」

目の前で。

最後の肉親の首が飛んだのだ。

「その時、理解が追いつかなかった。しかし、己が刀を握り、この鬼を斬れるということだけはわかった。そして、首を斬った。仇は取った。しかしだ」

影が差す。

何度目かわからない。

カナエは思った。

この男の、この表情は、いつになっても慣れない…と。

「ワシの幼き頃は、それはそれは無口での。婆様もほとんど困り果てていた。なれば、感謝の言葉も文句も…およそ孫らしいことはしてやれなんだ…。何も言えんかった。いう暇もなく、目の前で首が飛んだ」

「おばあちゃんは、いまも参座くんを見守ってくれてるよ。その言葉は、届いてるよ」

「…そうだな。婆様は優しいひとであった。物言わぬワシに、いつも語り掛けてくれた。愛をくれた」

きつと、参座の心の中では、今もおばあちゃんが生きているのだろう。

で、なければ。

このように優しく生きれるわけがない。

「その時握った日輪刀で鬼を斬り続けた。人は汚いガキがチャンバラでいじめられていたと思っただろうな。盗みもよく働いた。そして、三年がたち百を超える鬼を斬った。気が付くと、婆様の日輪刀は細くなっていた。もう折れるというとき、元鳴柱の桑島殿に出会った。お館様に話を繋いでもらい、新たに日輪刀と隊服をもらい受けた。育手を必要としないワシを見て、当時のお館様はそれは驚いていたのう」

十にも満たない歳で。

鬼を斬り続けたのだという。

明日の食い物もまともに入れてらぬとしても、鬼を斬ることをやめなかったという。

「そうして、一年ほど鬼殺隊を続けると、下弦の鬼と出会った。すぐ斬った。気が付くとワシは柱になった。どこの呼吸にも属さぬワシだ、柱の命名に途惑ったが、人のための柱となろう。そう想い、人柱と名乗った。行冥殿にはその時出会い、幾星霜続くこの鬼殺隊の歴史、そして柱とはいかなる存在か。それらは行冥殿に教わった。そしてお館様がワシを気にかけてくれたのだ。ワシは、未来を護るための刀となると決めた」

なぜ笑う。

なぜ、にこやかにこんなつらい話をできるのか。

カナエは、まともではないと思った。

まともであれば、当に心などおれている。

来る日も来る日も鬼を狩り。

痩せ細っていく身体を感じながら。

それでも鬼を斬ったのだという。

「婆様の仇を取ったとき、ワシは強いのだと確信した。婆様は刀を握る必要はなかった。ワシが斬れた。しかし、婆様はワシに刀を握ってほしくはないんだと気が付いたのは、埋葬が終わった後での。ワシも思うのだ、皆に刀を握ってほしくないと。なれば婆様もそう思っただけに剣術を教えなかったのだ。さすれば、握ったこの手。どこかの誰かに刀を握らせないために使うのが、責務。そう思っておる」

「おいで、参座くん」

いつかのように、カナエは参座を抱き留めた。

「しかし、幸せだのう。皆で飯を食い、唐揚げの味に心躍らせて、茶を飲み、満腹感にみをゆだねる。婆様は、ワシにこれを見せたかったのだらう。なんと…なんと幸せか」

さめざめと泣きだす参座を、カナエは力いっぱい抱きしめた。

「私はね、参座くん。あなたからたくさん幸せをもらったの。ここに

ある幸せも、あなたが護ったものなの。だからね、今度は私があなたを幸せにしてあげたい」

「…皆の刃が、ワシに動けど。鬼を斬れと囁く。ワシはそれに応えたい。もらい受けた以上、使わねば裏切るといふものよ…。ワシは皆に誇れるワシでありたいのだ」

「だからこそ、斬ること以外は、私が…私たちが全力で支えるわ」

「…やはりカナエ殿は強いとう…優しいとう…」

気が付くと、カナヲも隣で参座を小さな両の腕で捕まえていた。

「ヌシも優しいの…ここには優しいものしかおらぬ…ワシは本当に心が休まる」



ワシが斬り方を教えよう。

「おおい、伊黒殿。おられるか？」

参座が訪れたのは、伊黒邸。

「…天羽か。何用だ」

目つきの悪い、黒髪の。

口に包帯を巻くこの男。

名を、伊黒 小芭内。

鬼と共謀し、金品を奪う一族より生まれた、三百七十年ぶりの男。

「元気にしておるか心配でう。顔を見に伺った次第」

「ふん、貴様に心配される筋合いなどない」

「まあ素晴らしいなさるな。信用できないのは重々承知の上、少しでも親睦を深められればとな」

参座は伊黒と富岡がとにかく心配だった。

自分のように、天賦の才などなく。

それでも己をたたき上げ、柱にまで至った逸材。

そんなものたちが、生きているだけでその心を痛めていると思うと、居てもたってもいられないのであった。

「親睦など必要ない。貴様は黙って鬼を斬つてろ。そのために生まれたといっていただろう」

「むう、痛いところをつかれたのう。しかしだ、ワシはそのために生まれたわけではないと言ってくれるものが最近多くてのう。…伊黒殿、ワシは又シらと出会えたことがたまらなくうれしいのだ。世間話にでも付きおうてくれぬかのう？」

鬼殺隊最強の男が、まるで友達のところへ遊びに来たように言う。

伊黒としては、追い払ってもよかったのだが。

ばつの悪そうに尻すぼみになっていく参座の声に、少しだけなら付き合ってもいいかと、折れたのであった。

「…最近、胡蝶と仲がいいらしいな。付き合っているのか？」

一瞬間くらった参座だったが、話に付き合ってくれるという意思表示なのだと言元を綻ばせた。

「うむ、そうだの。まるで姉…母のようでのう。心遣いが本当に痛み入る」

「なんだ、付き合ってるわけではないのか」

「懇意にしてもらっておることは変わりないが、カナエ殿もどこか手のかかる弟を見ているような視線だとおもおうかの」

お互いがどう思っているのかどうかは、お互いにしかわからない。

少なくとも参座は、恋心というものを知らない。

鬼を斬ることだけを考えていた男に、惚れた晴れたなんてまだわからなかった。

「して、お館様より新たな柱の任命があつた。甘露寺 蜜璃という、元は杏寿郎の継子であつたおなごでの。遠目から一度見たことがあつたが、派手な髪の色が目を引く。なれど、その笑顔は太陽のような子であつた。任命式の時には、ぜひ気にかけてやってくれ」

「ふん、信用しない。そんな女が柱だなんて、俺は信用しない」

「そういうでない。ヌシの初めての下の柱だろうて。気にかけてやってくれ。この通りだ」

自らが斬りかかっても、おそらく十秒もたぬ男が頭を下げた。

いつもそうだ。

力があるのに、まったくもって上からものを言わない。

下から、支えるようなその物腰が、伊黒は嫌いになれなかつた。

「貸しだぞ、天羽参座」

「はっはっは。なれば、その貸しを返せるように精進するかの」

「信用しない」

「信用してもらわねば困るのう…」

それから、蝶屋敷の飯がうまいとか、杏寿郎と食べ比べしたとか。実弥の家からついに匡近が旅立ったとか。

そんな他愛もない話をして、参座は伊黒邸を去つた。

――

「みんな、忙しい中集まってくれてありがとう。今日集まってもらっ

たのは、新たな柱を任命するためなんだ。さあ、蜜璃。おいで」  
伊黒と話してから数日。

産屋敷邸では、恋柱の任命式が行われていた。

「きよ、今日から恋柱の名を襲名しました、甘露寺 蜜璃です……いい、至らない点はございますが、精一杯頑張りますので、よろしくお願ひします！」

伊黒の心拍数は上がった。

参座から容姿がいいとは聞いていた。

しかし、その奥ゆかしさたるや。

その可憐であることや否や。

目を奪われた。

釘付けになった。

「のう？言うたろう？」

隣で跪く参座が、伊黒に小声で囁いた。

「…少しは信用してやってもいい」

伊黒は得も言われぬ気持だった。

浮足立っていたのかもしれない。

だが。

恋心とは、存外に気分のいいものだった。

「蜜璃は、小芭内と警邏地区が近いね。小芭内、すまないが蜜璃のことを気にかけてあげてくれないかい？」

「は。お館様の命とあれば」

「よかったのう、伊黒殿」

「黙れ」

つれないのう…そういった参座だが、伊黒の心境の変化を察してどこか嬉しそうだった。

任命式が終わり、柱たちは各々自分の警邏地区へと帰っていく。

「杏寿郎」

参座は帰ろうとする杏寿郎に声をかけた。

「参座殿？いかがされた!？」

「うむ。炎の呼吸ではないとしても、ヌシが育てたものがこうして柱

になるのは、誇らしい。よくぞ繋いだ！」

「いえ！それは甘露寺がひたむきに努力したからこそ！まずは甘露寺に声をかけてやるのがよいかと！」

「なに、甘露寺にも声はかけるとて。まずは又シだ。甘露寺の努力もそうだが、又シが目をかけてこそなのだ。誠、立派である。又シはやはり人に何かを与えるのが得意のようだ。この先も死んでくれるなよ」

「身に余る光栄！参座殿より見せられた境地、一日も早く到達して見せませぬ故、心配めされず！」

「うむ、期待しておる」

杏寿郎は満足げにその場を去る。

そして参座は甘露寺と伊黒に向き合う。

「こうして話すのは初めてだのう。ワシは人柱、天羽 参座。何か困ったことがあれば、ワシを頼れ。さすれば応えん」

「初めまして！お話がかねがね聞いてます！鬼殺隊最強のお方だとか……！」

「うむ。だがワシもやる事が多くての。ここにいる伊黒 小芭内という男、信用に足る男故、まずはこ奴を頼るのも良い」

「甘露寺、こんな胡散臭い白髪頭よりまずは俺を頼ってくれていいぞ」

「胡散臭いとは何事じゃ」

甘露寺は吹き出してしまった。

あんまりにも遠慮なく憎まれ口を叩く伊黒に、最初是最強の人柱に失礼のないようにと構えていた甘露寺の緊張は解けた。

「お二人、仲がいいんですね」

「こんな男と仲がいいわけない」

「ええい、伊黒殿。人が悪いぞ……。しかしな甘露寺殿。皆が恐縮する中、このように軽口を叩いてくれるのは伊黒殿とカナエ殿くらいなものだ。ワシは嬉しい。甘露寺殿も、気軽に言葉をなげてくれの」

「はい！もちろんです！」

「二人とも仲ようやれよ？」

「貴様に心配などされずとも問題ない。いこうか、甘露寺」

「え、は、はい！」

そういつて二人の姿は消える。

殺伐としたこの鬼殺の世界で。

恋の芽生えとそれがまとう空気。

あたたかな風が吹く。

「いいものだな、行冥殿」

「何を言う、参座。お前もだ」

「…というと？」

「胡蝶と仲睦まじいと聞く。婚姻はせぬのか？」

「…人が悪いのがここにもおったか。行冥殿。ワシは無惨を斬るまで止まれぬのだ。この腕でできることは、斬ることのみ。皆からもらい受けるは、鬼滅の刃なりて。大切なものを抱きしめるために使う腕は持ち合わせておらぬ」

「それは参座、お前が抱きしめる場合のみだ。お前のことを抱きしめてくれる腕は振り払ってくれるな」

「…これは一本取られたのう。先人の助言とあらば、肝に銘じておこう」

誰かが、歩いてくる。

後ろを振りむくと、産屋敷 あまねが立っていた。

「失礼千万とは承知ですが、一言よろしいでしょうか？」

「失礼とはとんでもない。お聞かせ願えまするか？」

「いついなくなるともわからぬ人を見ているのは、存外苦しいものです。その隣に寄り添いたいというのは、自然なこと。どうか、天羽様におかれましては、悔いのないよう過ごしていただきたく」

「…あまね様もそう仰ってくださいるか。なれば、それ相応の心の準備はしておきます故。ありがたのお言葉、痛み入りまする」

ぽんと、頭に手のひらが置かれる。

行冥の手だった。

「参座よ。お前が人の幸せと安寧を願うのと同じように、我々もお前の幸せと安寧を願っておるのだ。無下にしてくれなよ？」

「…あいわかった」

このように言葉をかけられては、参座も参った。自分が他者に想うように、自分も想われているのだと。これほどうれしいことはなかった。

参座は涙が出る前に、産屋敷邸を後にした。

――

家に帰ると、カナエがいた。

「あら、参座くんおかえりなさい」

先ほどまで婚姻がどうのこうのといわれた参座は、意識せざるを得なかった。

「…今帰った。カナエ殿、そう甲斐甲斐しく訪れる必要はないのだぞ？」

「もう、気にしなくていいって言ってるじゃない。私が好きでやっていることなんだから」

「しかしだ。ワシは、カナエ殿に何もしてやれなんだ。家で一人、待たせてしまうのだ。心苦しくて敵わん…」

死ぬ気はない。

負ける気もない。

だが、万が一。

無垢の民の命が、危険にさらされたとき。

この命、投げ捨ててしまうかもしれない。

そうなったとき、この女性を傷つけてしまうのではないかと。

「ワシは…ワシの腕は…斬れるのだ。抱きしめてやれなんだ…」

「嘘よ。カナヲを抱きしめたじゃない。大丈夫よ。大丈夫」

カナエは黙って参座を抱きしめた。

新たな柱。

新たな部下。

柱合会議で、何かあったのだろう。

口にせずともわかる。

また何かに押しつぶされそうになっているのだ。

支えてやらねばなるまい。

カナエは、本能的に察した。

「カナエ殿とおると、どうも甘えてしまうな…」

「いいじゃない。人はみんなそうよ。私も、しのぶも。よく母様と父様に甘えて、ねだって、困らせたわ。参座くんは今まで頑張ってきたんだもの。甘えたっていい。困らせたっていいのよ」

「…カナエ殿」

「…なに？」

参座の心臓は、強く脈打つ。

口から心臓が飛びでそうだった。

「その…ええと…」

「聞かせて？」

言ってしまうえば、どれほど楽か。

言えてしまえば、どれほど幸せか。

この想いが伝われば、どれだけ救われるか。

「なんでもないのだ…今はまだ…。すまぬ、忘れてくれ…」

しかし言えなかった。

カナエが両腕を広げて待っていてくれるのに。

それでも言えなかった。

自分を許せなかった。

この、数多の鬼滅の刃を譲り受けた己が。

皆から刃を取り上げた自分が。

のうのうと、その刃を錆らせてしまうことが…。

「いつか、聞かせてね。きつと…きつとだよ？」

「必ず…」

さんざん泣いて、珍しく参座は疲れ果て、眠った。

カナエの腕の中で眠ると、幸せな夢を見た。

産屋敷邸にて。

祖母と話している。

実弥が、弟の玄弥とイノシシを狩ってきた。

匡近が茶を用意している。

天元が嫁達と談笑していた。

しのぶが、アオイやカナヲと昼餉を持つてくる。

杏寿郎が、稽古をつけろと迫ってくる。

伊黒が、甘露寺とこちらを見て笑っている。

行冥が、お館様とあまね様と縁側に腰掛けている。

義勇が、しのぶたちの持つてきた鮭大根を見て感動している。

炭治郎が、禰豆子が、鱗滝が、千寿郎が、槇寿郎が。

関わったもの達が皆、笑っていた。

そして、横へと視線を移すと、カナエが笑っている。

このまま、目が覚めないでほしいと思った。

この甘美な夢を、終わらせたくないと思った。

しかし、気が付いた。

この夢を、作るのは己だと。

己でしか、作れぬ夢なのだ。

この身を押しつぶさんとしている、もらい受けた刃たちが。

両の腕に、力をくれる。

握る刀に、熱を入れる。

鬼舞辻 無惨。

奴を、斬るため太刀となる。

そこで、参座の幸せな夢は終わりを告げた。

「よく眠ってたわね、参座くん」

「…すまぬ。カナエ殿が、あんまり優しくしての」

「それはよかったわ。さて、夕餉にしましょう。支度するわね」

カナエは蝶屋敷に文を送った。

「あ、そうそう。今日は泊っていくから」

「…なんと」

「参座くんは夜の警邏があるでしょ？夜道を一人で帰るのは心細いし…」

「構わぬが…。しかし三日三晩鬼を狩って、今日は警邏を休めとお館様からお達しがあつての…」

「あら…じゃあ今日は一つ屋根の下に二人つきりね」



その日、参座は隣にカナエがいることに緊張して眠れなかった。

――

それから少しして。

時透 無一郎という、始まりの呼吸の剣士より血を継ぐ少年の意識が戻る。

産屋敷は始まりの呼吸の剣士と同等、もしくはそれより強い参座に師事を仰いだ。

参座はこれを快諾。

無一郎はほどなく、天羽邸へと預けられるのだった。

「無一郎や。ヌシ、刀を振りたいか？」

産屋敷邸で無一郎を預かり、天羽邸で改めて問いかける。

「よくわかんないけど。斬りたくて仕方ないんだ。鬼がいるから、いけないんでしょう？」

「うむ。なれば、ワシのすべてをヌシに教えよう」

無一郎は笑わなかった。

記憶の欠如もそうだが、剣術以外に関心を持たなかった。

当然、カナエも無一郎に会うことになるのだが、その時も何も言わなかった。

打って、打って、打って。

ひと月も刀を振れば、参座に食らいつけるようになった。

産屋敷も、始まりの剣士の末裔である無一郎の成長の早さは予感していたらしい。

それもあってか、参座はとにかく無一郎の稽古に当たった。

警邏の頻度は半分ほど軽減され、とにかく無一郎を木刀で相手する。

足元にも及ばないが、それでも。

悔しさと、哀しさが。

無一郎を突き動かした。

そしてある日。

「無一郎よ。今日は街へ出るぞ」

「そんなことしている暇はあるの?」

「なに、ヌシの成長はワシの度肝を抜いておる。今日くらいよかろうて」

そこへ準備の終わったカナエがやってくる。

「無一郎くんの羽織を買いに行きましよう? やっぱり年頃の男の子だもの、恰好良いほうがいいでしょ?」

「どうでもいいよ。何を着たって、鬼は変わらないし」

そこでカナエは両手を無一郎の頬に添える。

「鬼は確かに変わらない。でもね、私たちが無一郎くんのことを大切に思ってるって想いが、いつか伝わるかもしれない。だから、私たちの想いを受け取ってほしいの」

感動したとか。

心を打たれたとか。

そんなことはなかったが。

無一郎は言葉が出なかった。

そして少し頭痛がした。

「ほれ、行くぞ」

参座は無一郎を肩車した。

決して軽いわけではない。

だが、ひよいと持ち上げる参座。

普通なら恥ずかしいと声を荒げるが、無一郎はされるがままであった。

その日は、太陽の光がこれでもかとまぶしい晴天だった。

そして、いつもより何尺か高いところからの景色は。

無一郎の心に刻み込まれた。

「なんだか、忘れていることがあるような気がするんだ」

「ふむ。思い出せそうかの?」

「…わかんない。でも、忘れたらだめなことだった気がするんだ」

「無一郎くん、ゆっくりでいいのよ。でも、思い出したら、私たちに教えてね。きつとよ」

参座の肩の上で、ゆらゆらと揺れる無一郎は心地いのか、参座の頭に身体を預けて眠ってしまった。

「絶対。絶対この子を死なせてはダメね」

「次の世になげなくてはならぬ子よの。なんと尊いか」

「なんだか、親子みたいね。髪の色は似つかないけれど」

「まだそのような歳ではないがの…。なれば、カナエ殿は母だろうて」  
「あら？私は構わないわよ？」

したり顔でいうカナエに参座は押し黙った。

ここ最近のカナエは、ことあるごとに参座を茶化してくる。

参座としては、心臓が破裂しそうになるくらい脈打つ。

それから、最近参座が顔を見せないからしのぶがさみしがっているとか、カナヲがたまに、参座は来ないのかと言葉を発したり。

そんな蝶屋敷の話をして街まで歩いた。

人の喧騒。

たくましく生きる人々。

参座は街が好きだ。

皆が、人らしい生活をしている。

店の売り子の大声を聞いたのか、無一郎が目覚めた。

「起きたか。見よ、これがこれからワシとヌシらが護っていくものよ。確とその目に焼き付けよ」

参座は無一郎に街を見せてやりたかった。

自分たちが何のために刀を握っているのか、見せてやりたかった。

例え、今は伝わらぬとも。

「うるさいね」

「そうだろう」

「それに、臭い」

「人がたくさんおるからのう」

「なんでみんな笑ってるんだろう」

「生きておるからだ。皆、今日を…そして明日を生きておるからだ」

「ふーん。そういうものなの？」

「そういうものなのだ。ここに生きとし生ける者たちを、ヌシの両の

腕で守っていくのだ。護り、戦うのだ。そのためにワシはヌシに剣を教えておる」

なにか感じるものがあつたのだろう。

無一郎は黙りこくってしまった。

呉服屋にて、カナエが声を上げた。

「ねえ、参座くん、これなんていいんじゃない？」

カナエが手に取った羽織は、薄い雲が描かれていた。

「奥方！お目が高いねえ！そいつはこの街でもきつての仕立て人が仕立て上げたものよオ！染められてるのは巻雲！最も高い位置にある雲のこつてえ！誰よりも高く高くつて願いが込められた代物よ！」

「ふむ、これはいい代物だの。どれ無一郎、着て見せい」

無一郎は参座の肩より降りて、その羽織に袖を通した。

無一郎と並んだ参座を見たカナエは、本当に親子のようだと声を漏らした。

「先も言うたがまだ十八歳だというのに、このように大きな子がおつてたまるか。いいところ兄弟じゃろうて」

「なんだ、あんたまだ十八なのか！そいつは驚いたぜ。老け顔過ぎやしないかい？」

「そこにおける女性（ヒト）が茶化して心労を増やすでな…ここ最近めつきり老けあがつてしもうたわい」

売り子は軽快に笑う。

それにつられて、参座とカナエも笑った。

それを見ていた無一郎も、笑いたかった。

「笑えないんだ。口が、動いてくれないんだ」

カナエは、何も言わずに無一郎を抱きしめた。

「いいのよ。少しずつで。私も、参座くんも。ずうっと待ってるからね」

見かねた参座は、会計をすまして、カナエから無一郎を受け取り、羽織を着せたまま肩に乗せる。

「カナエ殿は優しかろう？…どれほどヌシが不器用であろうと、決して見捨てたりはせぬ優しい女性<sup>ヒト</sup>じゃ。何も焦ることはない」

「うん」

「さあ、夕餉の買い出しをして帰るとするか。のう、カナエ殿」

「ええ、家に帰りましょう」

参座の肩の上で、無一郎は記憶を失ってから初めて心が安らいだ。

ワシが斬る、そこに立つておれい。

月夜に照らされた街。

そこに現れたるは、一人の鬼殺の剣士。

鴉から指令を聞き、向かった先は貴族の屋敷。

人が大勢消えた。

隠が探ってみれば、どうやら鬼の仕業らしい。

一番近くにいた自分が駆り出されたが、相對した鬼は、目に下参の刻印。

つまりところ、十二鬼月。

下弦の参であった。

「黙って食われい、弱き鬼狩りよ」

運が悪かった。

自分の手には負えない。

せつかく戊にまで上がったのに。

人を護れる鬼殺の剣士になれたのに。

こんなところで、死ぬのか。

「お前では相手にならぬ。そんなこともわからぬのか、鬼狩りよ」

だが、ここで俺が足止めをせねば、少なくともまた人が死ぬ。

「…敵う敵わないの問題じゃないんだ。刀を握れる限り、俺はお前ら鬼に立ち向かわなきゃならないんだ！」

「ならば、そのまま死ぬ。誰も守れぬまま、犬死するがよい」

どうして自分には力がないのか。

血反吐を吐いて鍛えても。

我が刃は届かないのか。

無念。

そして、死んだ。

鬼の爪を受けて、俺は死んだ。

だが、息をしていた。

「ねえ、目を瞑る暇があるんなら、逃げてくれないかな？ 邪魔なんだよね、きみ」

鬼は飛びのいていた。

そして目の前には白い、雲の羽織を来た少年。

「き、君は？」

「鬼殺隊。いいから、どっか行つて。邪魔」

「お、おれも手伝う！ 困でも何でもいい！ 肉の壁にだつてなる！ この命、使つてくれ！ 君を一人で戦わせたりしない！」

「…じゃあ、師匠に連絡してるから、迎えに行つて。西の方角。名前は天羽 参座」

「し、しかし」

「早く！」

雲の羽織の剣士に怒鳴られ、戌の隊士は外へ駆け出す。

「師匠、護るつていうのは、めんどくさいことだね」

無一郎はつぶやいた。

「貴様はあの剣士よりもできる口かろう？」

「うるさいな。早く首を斬られてくれないかな？」

—霞の呼吸 肆ノ型 移流斬り—

下段から斜めに切り上げ。

移流霧がごとく、その刃には霞がまとう。

鬼の肩がバツサリと斬られる。

—血鬼術 鬼灯—

床より肉の種子が咲く。

そしてそれは、はじけ散った。

小さく細かくなつたその種子は、鉄砲玉のように無一郎へ向かう。

「汚い血鬼術だね」

事もなげに無一郎の姿は消える。

鬼の後ろを取った。

斬れる。

そう確信して無一郎は刃を振る。

—血鬼術 百日紅—

鬼の首から、花が咲く。

それに阻まれ、無一郎の日輪刀は届かない。

「厄介な血鬼術だね。本当に邪魔」

「今のは危なかった。貴様、その歳でなかなかやりおる」

―霞の呼吸 伍ノ型 霞雲の海―

目にもとまらぬ、細かい斬撃。

まずは腕と足を胴体から切り離すために放った。

それは立ち込める、雲海の如し。

―血鬼術 千日紅―

またも鬼の周りに花が狂い咲く。

花言葉は、不朽。

幾度となく斬りつけられても、その花は次から次へと咲き乱れる。

―霞の呼吸 参ノ型 霞散の飛沫―

広範囲の回転切り。

眼前のおぞましき花たちをきれいに薙ぎ払う。

「花って、そんなに気色の悪いものじゃないんだけど」

形容しがたい気持ちだった。

カナエは街に出ると、たまに花を買ってきた。

美しいと水を与えていた。

その花の鮮やかさを、無一郎は覚えている。

そしてその隣にしゃがみ込む、カナエの姿もひとくりに記憶に刻

まれている。

優しい気持ちになれたのだ。

花と、優しい人。

その思い出を、汚されたような気がした。

「本当に、鬼（おまえ）達を見ると、イライラするよ」

―霞の呼吸 貳ノ型 八重霞―

繰り出した無一郎の技は、鬼に届いた。

その左足を斬り飛ばした。

が、鬼は依然として余裕の表情。

「貴様は、なぜ我が十二鬼月になれたのか、理解できておらぬようだ

な」

「どうでもいい。斬るから。早く斬られてよ」



―血鬼術 鳥兜―

またも花が咲き乱れる。

―血鬼術 芙蓉―

立て続けに繰り出される血鬼術。

桃色の汚い花は、その花弁を回転させ、無一郎に迫る。

そして紫色の汚い花に、あたりを囲まれる。

―霞の呼吸 陸ノ型 月の霞消―

そして無一郎はその血鬼術を切り刻んだ。

「斬ったな。鳥兜を斬ったな！」

突然鬼が声を荒げる。

するとどうだろう。

無一郎の視界が回る。

「…毒？」

「愚か者め！…この鳥兜の毒を食らって立っていたものはいない！」

頭に激痛が走る。

膝が言うことを聞かない。

死ぬかもしれない。

でも。

「無一郎。たすけはいるかの？」

参座の声が幻聴で聞こえる。

「いらないー！」

自分でやれる。

見てくれ師匠といわんばかりに、両の足を踏みしめる。

―霞の呼吸 漆ノ型…―

もともと、参座の刀には型がない。

ないというより、必要としない。

その時その時で、最善の刀の振り方がわかっているからだ。

だからこそ、斬れないものはない。

そして呼吸。

生まれながらにして、他人よりも多くの酸素を身体に取り込んでい

それは参座のみが使える呼吸。  
故に、名はない。

そんな中、参座が無一郎の身体を見て、最も合うと思ひ身に着けさせたのがこの霞の呼吸だ。

そして霞の呼吸をわずか二月で極め、新たに漆ノ型を編み出した。

—臙—

下弦の参は、無一郎を目でとらえた。

しかし腕が当たらない。

また現れ、捉えた。

しかし、当たらない。

現れては消える。

そのたびに、一太刀を浴びせる。

そして無一郎は、鬼の首を確かに捉えた。

「見事なり」

またも参座の幻聴が聞こえる。

「師匠。見てよ。僕は一人でもやれるんだ」

斬った。

鬼の首を、斬った。

下弦の首を一人で斬った。

そこで無一郎の意識は途絶えた。

倒れ行く無一郎を、参座は受け止めた。

「二端の漢よのう、無一郎。ワシは嬉しいやら、さみしいやら…複雑だの」

—

「しのぶー！しのぶやー。おるのだろー」

参座は、隠を置いて無一郎を背負ってきていた。

鬼を斬ったので、毒は消えた。

しかし、体力を使い果たしたのか目を覚まさない無一郎を見て、休息が必要と蝶屋敷へ運んできた。

「あら、参座さん。今日はお弟子さんも一緒にですか？」

「うむ。手にかかる弟子でのう。すまんが数日休ませてやれぬか？」

そんな苦勞を知ってか知らずか、無一郎は背中で眠りこくっていた。

「そういうことでしたら。どうぞ奥の部屋が開いていますので」

しのぶが四六時中治療に専念している分、患者も早く退院することができていた。

これであれば、無慘を斬った後も一般向けの診療所としてくいつぱぐれることはないだろう。

そしてそこで働くもの達もだ。

さらにしのぶは新たに研究をしているという。

「毒と、その逆。鬼になった人から、鬼舞辻 無慘の血を抜くための研究をしています」

「なんと。ヌシは誠すごい。ワシは本当に尊敬する」

「参座さん、あなたがこの道を私に示してくれたんです」

「ヌシの力になれたようで、ワシは嬉しいぞ」

しのぶの後ろにはカナヲが立っていた。

参座に気が付くや、すつと寄ってきて参座の裾を掴む。

「おお、久しいのカナヲ。息災か？」

「…お久しぶりです」

「最近のカナヲは、自分から言葉を紡いでくれます。これも参座さんの影響ですよ。本当にうれしいこと尽くめです」

「それは誠よきかな」

「参座さんになら、姉さんを任せられます。拳式はいつ行うんですか？」

「そうなのう…って、今なんと申した？」

参座は動揺した。

はて、いつの間になんか話になったやら。

「ですから、拳式です。結婚式。あまり待たせると、姉さんがこの馬の骨ともわからない殿方にさらわれますよ？妹の私が言うのもなんですけど、本当に引く手数多なんですから、カナエ姉さん」

「ええい、最近では皆口を開けば式はいつだの、子は孕んだか？だのと好き勝手言ってくれるわい…」

ほとほと困り果てた参座を見て、しのぶは笑みを浮かべる。  
してやられた。

しかし、今回はやられてばかりの参座ではなかった。

反撃の火ぶたは切って落とされた。

「しかししのぶよ。カナエ殿から聞いたぞ。最近何やら義勇と仲がい  
いらしいの。その藤の簪も、義勇からの贈り物だと聞いたが？毎日欠  
かさずつけていると聞くぞ」

「…無一郎くんの様子を見てきますね」

「あーしのぶー！これ、逃げるでない！全く…カナヲよ、ヌシの姉君はず  
るいのう…」

しのぶに逃げられた参座は、カナヲに愚痴る。

「きつと…参座さん…勝てない」

「…とほほ」

しかし、さすがはあの姉妹の妹。

しっかりと参座に止めを刺した。

――

蝶屋敷を後にして、参座はカナエが待つ自宅へと足を向けていた。  
思えば、いろんなことがあった。

しのぶの刀を下ろさせ、カナエを上弦の式の魔の手から救い。

アオイの心の重荷を下ろさせ。

カナヲの言葉を取り戻した。

蝶屋敷には、数えきれないほどのたくさんの思い出があった。

そして、無一郎が家にやってきた。

カナエにはたくさん迷惑をかけている。

最初のころは、無一郎は言うことを聞かず、よく服を脱ぎ散らかし  
たりしていたものだ。

そのたびに、カナエは優しい口調でいつか来るその日、自分のこと

は自分でできなければならぬと無一郎を叱っていた。

嫌な役回りをさせてしまった。

それでも、カナエは文句の一つも漏らさずについてきてくれた。

二人で布団を並べて寝ることも多々あった。

最初のうちは緊張こそしていたが、今となつては安心感が勝る。

護りたいものが、手を伸ばせばそこにいるというのは、参座にとつてふたつとない幸福なことだった。

そして、無一郎の布団がそこに追加されたとき。

参座は家族を知った。

自分はほかの場所でこうして日々幸せをかみしめている者たちのために刀を握っているのだと再確認できた。

「む？伊黒殿。どうされた？」

参座は自宅に到着した。

すると、珍しく伊黒が玄関口に立っていた。

「遅い。どれだけ待たせるんだ」

「戸を叩けばよかろうに…カナエ殿がおると思うのだが…」

「いないから、こうして待っていたのだろう。適当を言うな」

カナエがいない。

はて、蝶屋敷にもいなかったはず。

なればどこへ？

しかし参座は夕餉の買い出しにでも行っているのだろうと気に留めなかった。

「して、伊黒殿。何用かの？ああ、茶を淹れよう。居間で待っておれ」

「邪魔する。あと茶は要らん」

何やら悩み事でもある様子。

参座としては、あの伊黒が頼ってくれることがうれしかった。

「待たせたの。粗茶だが。して、何を悩んでおるのかの？」

「要らんとした。…このことは、ここだけでとどめろ。それほどに重大だ。本来なら胡蝶の姉にも意見を聞きたかったのだが、まあいい。いいか、絶対に誰にも言うなよ」

深刻な顔。

鬼殺関連か。

空気が冷え込む。

「…甘露寺に、贈り物をしたい。しかし、何を送ればいいかわからん。そこで、蝶屋敷の女どもをたぶらかしている貴様の意見を聞きに来た」

ここで、参座は一度思考の海に潜る。

…恋の悩みか!!

そう悟った参座。

張り詰めた空気は、音を立てて離散した。

「っはっはっはっはっは!!」

つい笑いだしてしまった。

「貴様っ！わらっ笑うなっ！こっちは恥を忍んで貴様を頼ったのだぞ！ええい、貴様などやはり信用できない！」

「いやあ、すまんすまん。あまりにも張り詰めていたから、無惨でもでたのかと思っただわい。あーっ腹がよじれるかとおもったわい」

伊黒は心底不服そうだった。

恥ずかしいが、甘露寺の喜ぶ顔が見たい。

そうして、自らの自尊心をかなぐり捨ててまで頼ったのに、あろうことかこの男口が裂けんばかりに笑った。

「のう、伊黒殿。甘露寺とはどのような女性ヒトじゃ？」

「…可憐だ。屈託のないあの笑顔は、周りを和ませる太陽だ」

「そうじゃのう。なれば、何を送ったとしてその太陽はまぶしかろうて」「当然だ！そんなことは当に分かっている！俺が聞きたいのは、内容だ！送る物についてだ。時間を取らせるな」

「そうだの…あ、そういえば。しのぶ殿がの、義勇よりもらい受けた藤の簪を嬉しそうにつけておった。やはり贈り物とは、欠かさず身に着けるものがよかろうて。そうだのう…下沓などどうかの？カナエ殿も毎日欠かさず履いておる」

下沓とは、つまるところ靴下である。

「下沓…か。そんなものでいいのか？」

「よい。似合うと思つてとかなんとかいって渡すのがよいて」

思い付きだった。

参座自身、意中の人に物を送ったことなどなかった。

しかし、ほかでもない伊黒の頼みだ。

知らぬ存ぜぬで通したくはなかった。

だから、自分がかもし、カナエに送るならばと考えたとき、これが出た。

カナエはハイカラな足を出す服が好きだ。

なればそのおみ足が不埒な男どもにさらされる。

少しばかり、参座には独占欲があつた。

「そうだな…確かに、いきなし高価なものを送るより、生活に必要不可欠なものがいいな。それに、甘露寺は肌を出しすぎだ」

「うむ」

「…癩だが、感謝するぞ参座。お前のことはもう少しだけ信用してやってもいい」

「それは嬉しいのう」

「で、貴様らはいつ式を挙げるんだ？」

「げっ。」

参座はまたこの話かと心底参った。

「挙げぬ。全く、皆この手の話が本当に好きだのう…。伊黒殿のほうが早いのではなからうて？」

「俺は…ダメだ。甘露寺とは添い遂げられない」

「なに故？」

「…五十人。俺が引き起こした事によつて死んだ人の数だ」

参座の顔からは笑みが消えた。

哀しい顔を隠せない。

「話してみい。ワシが、聞いてやる。その心の闇、ワシが少しばかり肩を貸す」

伊黒は、だれにも話したことのない身の上話をするべきかしないべきか。

心底迷った。

「よい。話せ。ワシは又シに言った。頼れと。いま、その心が…ワシ

に助けを求めておる」

そういつて、伊黒の頭には参座の手のひらが置かれる。

「つらいだろう。己の中でしか生きぬ闇を飼うのは。ワシにも分けておくれや。その痛み、哀しみ。分けてはくれぬか？」

「なぜ、そこまで俺を、俺たちを気に掛ける」

伊黒は聞いておきたかった。

柱たちに、頼れ頼れとのたまうこの男の声を。

確かに誰よりも強い。

だが、柱も強い。

手を借りることなど、ほとんどないくらいに。

だから柱になった。

だから柱になれた。

だというのに、この男は頼れという。  
なぜ。

「友だからだ。横に並び立つ、友だからの。友の出来ぬ事はワシがやる。ワシのできぬことは、友がやってくれよう。あいにく、鬼殺に依りてはワシが一番できる。なれど、甘露寺と他愛ない話で笑顔にできるのは又シだ。実弥が心置きなく話せるのは、匡近だ。お館様が心休められるのは、あまね様の前じやろうて。では、ワシは他に何ができる？ 斬るのだ。それができるのが、ワシなのだ。又シらの闇をも斬つて見せよう。ワシは斬れるのだ。だから、話してみるのがよいて」  
不器用だと思った。

それと同時に、信じたいと思った。

伊黒は今、目の前の男を、信じてみたいと思っている。

「俺の一族は…穢れている。そして、俺にもその血が流れている」  
それから伊黒はほっぽつと。

一族の恥を語った。

己が生贄にされようとしていたこと。

口を裂かれ、鬼と瓜二つの顔になったこと。

親族にすら裏切られ、人を信用できなくなったこと。

鐮丸が牢に迷い込んでくれたこと。



そして、いとここに会ったこと。

参座の両の眼からは、大量の涙があふれていた。

「ヌシは、なんて可哀そうな。痛ましや、痛ましや。いまだその一族が、ヌシの身体を掴んで離さぬのだな…」

心を痛めている友が、横にいた。

こんな穢れた自分のために、涙を流してくれる、友がいた。

「立つのだ、伊黒殿」

参座は涙を止めぬまま、立ち上がる。

それにつられて、伊黒は立ち上がった。

「ワシが斬る。その一族の亡霊…このワシが斬って見せようぞ」

日輪刀を抜く。

その気迫たるや否や。

伊黒は動けなかった。

蛇に睨まれた蛙のように、固まった。

眼球のみが動かせる。

その眼に、参座を捉えれば。

鬼気迫る表情で、息を吐きだしていた。

嵐でも来ているかのような轟音。

そして参座が息を吸い込めば、あたりは真空になったかのような錯覚に陥る。

息ができぬ。

怒っているのだ、この男。

大地を、そして大気を震わせ。

わなわなと、腸が煮えくり返る想いで。

今、その亡霊を切り伏せんとしているのだ。

「のけ、亡霊よ。ワシの友にすぎるでない」

ぱあんと、音が一つ。

伊黒は、参座の一挙一動から目を離せなかった。

ものすごく、長い時間だったような。

瞬きにも満たぬ時間だったような。

そして、参座が刀を鞘へと戻す。

かちんと。

その音で、伊黒は身体の内を取り戻した。

「斬った。ヌシの、一族とのつながりは今、ワシが斬った。これよりヌシは、『蛇柱』の、伊黒 小芭内である……のう、小芭内。ワシに斬れぬものはなからうて？」

言葉にしたかった。

小芭内は、声を出したかった。

「参座……」

「なんだの？」

「……感謝する。……斬ってくれて……感謝……する」

「うむ、友よ。お安い御用よのう」

そういつて参座は、がしがしと小芭内の頭を撫でまわす。

小芭内は、うっとおしく思いながらも、口の包帯をといて茶を飲んだ。

参座は、もう少しでカナエが帰ってくるから夕餉でも食っていけど小芭内に言う。

この口を見られる事を良しとしない小芭内は、最初こそ拒否したが、参座がこれでもかと言うほどにねだる。

すると観念したのか、小芭内はこの誘いを承諾。

ほどなくして、カナエが帰ってきた。

帰ってきたカナエは、小芭内を見てほんの少し哀しそうな顔をした。

参座が軽く説明すると、笑顔を取り戻して、いつも通り振舞った。

小芭内は、この顔が嫌いだ。

でも、この二人の前ならば、晒しても気にならなかった。

「なるほど、蜜璃ちゃんへの贈り物ね。参座くんにしては、まともな意見を出したんじゃない？それに、蜜璃ちゃん食べるのが好きなんでしょう？だったら、食事に誘ってお腹を満たしてから渡すのがいいと思うな」

「ああ、参座にしてはな。胡蝶、お前は天才か？」

「おおい、二人とも……もつとワシにも優しくしてくれぬかの？」

カナエが夕餉の支度をしている間、三人の会話は途絶えなかった。その姿はだれが見ても、仲のいい友人たちの姿だった。

夕餉を堪能した小芭内は、参座に礼をいい「またな」といつて去った。

参座はそんな小さな言葉に、胸が暖まった。

「…カナエ殿」

参座は少し不安そうな口調でカナエを呼んだ。

いつもとは違う口調に不安を覚えたカナエは、洗い物の手を止めて、参座の隣に座った。

「どうしたの？参座くん」

「今日、しのぶに会うての。その…なんだ。カナエ殿に…あーうむ」

参座は口ごもった。

しかし、カナエは何も言わない。

「…見合い話が!!…数多に来ておると…聞いたのだが」

カナエは新しいおもちゃを見つけた幼子のようににやけた。

参座はこれから言うことで、カナエが言っほしくないことを口にするのではないかとひやひやしていた。

「で…だ。良い殿方がおれば…その…嫁に行ってしまうとしのぶに言われての…。そ、そうなのだろうか？カナエ殿は、ワシに愛想を尽かせてしまうのだろうかの…？」

「そうねー。カナエって呼んでくれなきや、どこかへいくのもいいかもしれないわね」

茶化すように言った。

いつものように、小馬鹿にした口調で。

人が悪いぞ…カナエ殿…。

そう帰ってくると思っていた。

「か、カナエー！」

参座は、声を張った。

あつけにとられたカナエ。

参座の顔を見ると、瞼をぎゅうつと瞑り、顔を真っ赤にしている。明らかに無理している。

でも、言い出したのはカナエだ。

カナエのために思い切ったのだろう。

その茹で上がった顔を見たカナエは、思わず赤面してしまった。

「カナエ…いつか…いつの日か！ワシが皆の刃を本当の意味で使ったとき！この口から言う！…待っていては…くれぬだろうか…」

珍しく声を張り上げる参座。

カナエはもう、茶化す気になどなれなかった。

本当に、嫌なんだと感じた。

心から、自分が必要とされていることが感じられた。

「…いつまでも。いつまでもお待ちいたします」

ただただ、カナエは参座を抱きしめる。

でもやっぱり少しだけ茶化したくなかった。

なので、参座の耳元に口をもってきて、こう囁いてやった。

「そうやって誰かのために無理しちゃうところ。好きだよ、参座くん」

参座は死んだ。

おっと。

間違えた。

死んでねえや。

参座は夢見心地だった。

その日の警邏では、奇声を発しながら森を駆け回る参座が見れたと  
が見れなかったとか。

ワシが斬ったのだから、安心せい。

「早いうちに式上げないと、アンタ後悔するよ？こうなったら無理にでも上げちゃいなさいよ」

その日、天羽邸でカナエが過ごしているという話を聞きつけ、宇随の嫁であるまきをが足を運んでいた。

「そうなんだけどね。参座くんってほら、いろんな人を大切にしてるから、なんだか独占するのは気が引けちゃって…」

「何言ってるんだい！男なんて、どつかの女に色目使われたらコロっと靡いちまうのさ！あんたほんとに気をつけなよ？あ、天元様は違うけどね」

「大丈夫よ。参座くんにそんな度胸ないもの」

「…まあ、アンタがそう言うならいいんだけどさ」

家主不在のまま、好き勝手談笑する二人。

もうすっかり妻の風格を醸し出すカナエ。

まきをはカナエも存外しっかりしているのだと感心した。

「ついこの前ね、カナエって呼んでくれたの。待っててくれて言われたの。この人のために生きていこうって思えたの。私は今とても幸せだし、これからもっと幸せになれる気がするの」

恥ずかしげもなくそんなことを言うものだから、まきをは聞いているこっちが恥ずかしくなった。

この様子なら心配ないかとまきをは安心した。

天元が柱に就任した時。

参座が少しの間警邏を変わってくれた。

もちろん一般隊士と分担はしていたが、それでも天元は恩義を感じていた。

そしてここ最近の参座の胡蝶騒動。

天元としても、さっさと派手に拳式を挙げてほしかった。

あんまり長いことカナエを待たせているので、一体全体どういふことかとまきをはをカナエのもとに密偵に行かせた。

これが今回まきをはが天羽邸を訪れた真相だ。

「さて、惚気も聞けたし、アタシは帰ろうかね」

「うん。まきをさん、また来てね」

「次は須磨と雛鶴もつれてくるよ！」

そういつて、まきをは天羽邸を後にした。

「ただいま、カナエ」

そこへ蝶屋敷で休養を終えた無一郎が帰ってきた。

「あらー無一郎くん！おかえりなさい」

「柱になることになったみたい。それで、この家を出ていくことになっただんだ」

「…そう。さみしくなるなあ」

「で、荷物をまとめに来た」

カナエは息子が旅発つというのは、こういうことかとしんみりしていた。

果たして、自分は無一郎に何かしてやれただろうか。

家に帰ってきたら、ただいま。

ご飯を食べるときは、いただきます。

朝起きたら、おはよう。

そんなことから関心がなくなった無一郎に、それをまた教え込んだのはカナエだった。

無一郎は、そそくさと荷物をまとめる。

カナエは無一郎の荷造りを手伝う。

そして荷造りを終えた無一郎は、玄関口に立つ。

カナエは寂しさでむねが張り裂けそうだった。

短い期間だったが、本当の家族のように過ごした。

手のかかる子だったが、それはそれで楽しかった。

無一郎が、戸に手をかける。

私は君の心を暖めてあげることができたのだろうか。

そんな不安ばかりが、胸をざわつかせる。

「…カナエ。ありがとう、いつか思い出したら伝えに来るよ」  
覚えていてくれた。

あの日の約束を。

良かった。

少しでも、この想いは無一郎に届いていたのだ。

「いってきます」

「うん、身体に気を付けてね…いつでも帰ってきていいからね…」

カナエは、雲の羽織が見えなくなるまで、玄関口に立っていた。

――

「カナエー。今帰ったぞー」

夕刻。

任務で少しばかり遠出していた参座が帰ってきた。

「参座くーん!!おかえりなさい!!!」

「おっと。これ、カナエ。そう駆けてきてはきては危なからう」

カナエは、無一郎がいなくなった寂しさを埋めるため、参座の胸に飛び込んだ。

参座がカナエを抱き留めると、カナエは無一郎のことを話した。

「ふむ。発ったか。あれはあれで、もう一端の漢じやて。心配いらぬ、

カナエの想いはしっかり持って行っておるだろう」

「うん。またいつか三人で食卓を囲めることを願いましょう」

「そうだの。きつと大丈夫だろうて」

それから二人で夕餉を食べた。

そのあと縁側で茶を飲み、無一郎の話をした。

一般隊士を逃がし、その命を救ったことが誇らしいだとか。

下弦の参相手にひるまず刀を構えたことに心が震えただとか。

助けを断り、自らの力で鬼を滅したとか。

これらは、無一郎を蝶屋敷に送った日。

すぐにカナエに話した事だった。

参座はそれをわかって、もう一度話した。

カナエは一度聞いた話だが、初めて聞いた時と同様自分のことのように喜んで聞いている。

「あの子は大丈夫だろうて。このワシが鍛え上げた男だからの」

しかし、絶対はない。

もう自分の目の届かないところにいる弟子のことを思うと、やはり参座は心配だった。

「大丈夫よね。きつとみんなが助けてくれる。そう信じましょう」  
カナエも同じ思いだ。

二人とも、お互いを安心させるための言葉を紡ぐが、心配が消えないのは同じ。

それでも、無一郎の無事を祈り、今日も笑うのだった。  
ことあるごとに、参座は隠に問いかけた。

無一郎の話は聞いておるか？と。

それはそれは強く、多くの鬼を屠ると聞いた。

しかし、人間関係があまりよくないとも聞いた。

やれやれと参座は心配するも、何より無一郎の無事が心底嬉しかった。

――

時は回る。

ついに、この鬼殺隊の。

ひいては、平安より千年続く運命の歯車が。

動き出そうとしていた。

藤襲山、最終選別。

竈門 炭治郎、我妻 善逸、不死川 玄弥、嘴平 伊之助。

この四人が、今まさに七日間の試練を乗り越えんとしていた。

炭治郎は異形の鬼を破り。

善逸は気を失い。

玄弥は鬼食いをして。

伊之助はとにかく山を駆け回った。

そうして、この七日間を生き延びたものが、日輪刀になる玉鋼を選  
ぶ。

その日輪刀を待つ間。



これより死地に赴く前の最後の休息の時。

参座のもとには、鱗滝の元より鴉が訪れた。

中には、炭治郎が最終選別より帰ってきた事。

それと禰豆子の目が覚めたことが書いてあった。

では一度、禰豆子の様子を見に行こうと、参座は狭霧山へ行くことを決意した。

「では、カナエ。遠方へと向かう。なればしばし家を空けることになる。少しの間、蝶屋敷で待っていてくれの」

この頃にはもうカナエは参座の家に定住していた。

そんな中、参座の元には遠方の地で鬼が出たとお達しがあった。

本来であれば、おそらく鬼舞辻 無惨の行動範囲であろう場所に出ない鬼。

それが、人の肉と安全な狩場を求めて遠方に出た。

鬼殺隊の中で、最も早く着き、最も早く鬼を狩り、最も早く帰ってこられる参座に白羽の矢が立った。

「うん、気を付けていつてらっしゃい。必ず帰ってきてね」

「うむ。…さて、ではいくかの」

この男が死ぬところを想像できない。

それでもカナエの心配がやむことはない。

参座の足でも五日。

それから鬼を探して狩る。

十日以上、この警邏地区を開けることとなった。

他の隊士、柱たちが警邏は任せると背中を押してくれた。

なれば一刻も早く帰ってくるのが良かろうて。

さあいざ行かんと戸を開けたところで、後ろから体重がかかる。

「参座くん、絶対に帰ってきてね」

「なに、すぐ帰る。ではカナエ、行つてきます」

「…うん、行つてらっしゃい」

少しの名残惜しさを感じた参座だが、足を進める。

まずは鬼を狩り、その足で炭治郎の元へ向かう。

その間、参座によって影響を受けた小芭内の今を語ろう。

その日、小芭内は甘露寺と街へ出るつもりだった。  
参座の家で夕餉をごちそうになってから、考えに考えて練った予定。

名付けて、甘露寺満腹計画。

人は満腹の時、幸福感が増す。

なればその時こそ贈り物をすれば、受け取ってもらえる可能性が増すのではないか。

完璧だ。

胡蝶姉にも意見を聞いておいて本当に良かった。

小芭内はにやりと笑い、甘露寺に文を出した。

返事は快諾。

今日の警邏を休むために、不眠不休で鬼を狩った。

準備はできた。

あと数分で、甘露寺との待ち合わせ場所につく。

もう、見える

そこには天女がいた。

街の中心、時計台の前。

人々が行きかうその真ん中に。

己が想い人を見た。

今日も可憐だ。

「待たせたな、甘露寺」

小芭内は努めて冷静に声をかける。

そして甘露寺はこちらに視線を向ける。

「伊黒さん！私も今来たところよ！」

ああ、死ぬなら、今だろう。

小芭内は、その太陽のような笑顔を見て、天に召される居心地だった。

「それは良かった。さて、甘露寺は揚げ物が好きだったろう。この先に、揚げ物のうまいそば処がある。早速行こうか」

小芭内は、甘露寺と文通している。

好きな食べ物もそれとなく探りを入れていて、完璧だった。

「あら、いらつしやい！奥の席へどうぞー！」

軽快なおばちゃんに席へ案内される二人。

「俺はかつ丼で。甘露寺は？」

小芭内は、品書きを甘露寺に渡す。

それを受け取ると、考え込む。

おそらく、自分が大食いであることに気を揉んでいるのだろう。

この日のために用意した言葉を、小芭内はかけてやる。

「甘露寺、参座から君の体質については聞いています。俺の前でたとえばどれほどの量の飯を食っても、俺は全く気にしない」

参座には、身体が透けて見える。

なれば、甘露寺の筋肉量も見えていた。

あの日の夕餉の時、参座は甘露寺の体質について、小芭内に助言していた。

「伊黒さん……ありがとう！」

甘露寺は、心底感動していた。

小芭内は文通でもとてもやさしかったし、面と向かって話してもそうだった。

だから、この体質についても、食べる飯の量も、きつと理解してくれると思っていた。

それでも、これを好奇の目で見られていた甘露寺は、心配だった。だからこそ、こうして向こうから理解しているという意を示してくれるのは、本当に気が楽になった。

「すいませーん！注文いいですかー！」

甘露寺が声を張っておばちゃんを呼ぶ。

はいはいと言って、伝票をもってくる。

「ヒレカツ丼と、かつ丼と、それと唐揚げに、天井！そばは冷で三人前！あと豚丼もくださいー！」

おばちゃんはさすがに思考が停止した。

そして、冷やかしかと訝しんだ。

「お嬢ちゃん、もしかしてそれ、一人で食べるのかい？本当に？」

「この子は特殊な体質なんだ。食える。なにも冷やかしに来たわけではない。すまないが、出してくれないか？」

「…そういうことなら、わかったよ。こっちは金を払ってくれれば文句はないしね。で、あんちゃんは何にするんだい？」

「俺はかつ井で」

小芭内は、甘露寺に文句をつけるおばちゃんに文句の一つでも行つてやろうかと思つたが、それは目の前の甘露寺が一番望まないと、こらえた。

「伊黒さん、本当にありがとう…」

「気にするな。飯くらい楽しくくいたいだろう？」

それから厨房の旦那が素っ頓狂な声を上げて、少し時間をくれと頼んできた。

甘露寺はにこにこしながら、旦那にいいですよという。

「私ね、伊黒さん。こんな風に優しくされたことあんまりなくて…みんな、私が女だから、優しくしてくれただけど、男の方よりも力があつて沢山食べるって知られると、みんな途端に冷たくなったの。だから、ありのままの私に優しくしてくれる伊黒さんの気遣い、とってもうれしいな…」

やはり、俺は今日死ぬ。

小芭内はそう確信した。

それから、たまにカナエが遊びに来るだとか。

蝶屋敷のしのぶと仲がいいとか。

杏寿郎が自分のことを本当に誇らしく思ってくれているとか。

甘露寺は終始ニコニコしながら話した。

「はい！まずはかつ井二つ、お待ち！」

…ここでさらに甘露寺の表情が明るくなる。

「わあ！おいしそう！ね、伊黒さんっいただきましょっ？」

「ああ、うまそうだな。食べようか」

「そういつて、小芭内は口の包帯を取った。しまった。」

完全に油断していた。

寝ずの鬼殺で、完全に忘れていた。

腹も減っていたし、昼餉は外で済まそうと思ってしまったのが間違  
いだった。

口を：見られた。

小芭内の表情は固まる。

まき直さねば。

しかし、身体が動いてくれない。

すると、頬に体温を感じた。

「私はね、伊黒さん。そんなことで、伊黒さんのこと嫌いになつたりしないよ？」

どれだけ救われたことか。

その言葉で、どれだけ生きる活力が湧いたことか。

この日を、小芭内は一生涯忘れることはないだろう。

「さ！食べましょ！二人でおいしいものを食べたら、もつとおいしくなると思うの！」

「ありがとう、甘露寺。いただきこうか」

人生で一番うまい飯だった。

想い人と食う飯は、こんなにもうまいのか。

これをほぼ毎日食ってる参座を思うと、羨ましくなった。

「はい！ヒレカツ丼と、そば！お待ち！」

どしどしと料理が来た。

それを、うまいうまいと甘露寺が平らげる。

一面が料理で埋め尽くされた。

「あーん、しあわせ」

甘露寺の頬はだらしなく緩みつぱなしだった。

小芭内は、それを今生忘れまいと記憶に焼き付けていく。

全てを平らげるまで、さほど時間はかからなかった。

「いやあ、参ったよお嬢ちゃん！最初は冷やかしかと思つたけど、ほん

「おいしい食べっぷりだったね！」

「ほんとおいしかったです！また来てもいいですか！」

「そりゃよかった！いつでもおいで！たあんと食わしてやるからね！」

甘露寺の表情ははち切れんばかりの笑顔だった。

小芭内は、気のいいおばちゃんと、俺あれほどの料理を大至急作った旦那に感謝していた。

「ここは俺が出す。おばちゃん、お勘定」

「はいよ！太っ腹だね、あんちゃん！」

「え、いやそれは悪いわよ伊黒さん…！ほとんど私が食べたのに…」

「何言ってるんだい嬢ちゃん、男がかっこつけるって言うてるんだから、黙ってたててあげな！」

「そういうことだ。なにも気にするな。俺が好きでしてることだからな」

甘露寺は申し訳なく思いながらも、うれしかった。

うぬぼれかもしれないが、自分だからここまでしてくれるのではないかと。

他でもない、甘露寺 蜜璃という人間のためにここまでしてくれているのではないかと。

そう思うと、心臓が強く脈打った。

ご馳走様といい、店を後にした二人。

甘露寺は夜の警邏があるため、ここで解散という流れ。

ここで、小芭内が自らが持つてきた巾着を開ける。

中から出てきたのは、長い緑の縞々靴下。

「甘露寺。君に似合うと思って。受け取ってくれるか？」

こんなうれしい贈り物は初めてだった。

「…いいの？こんなにたくさんいろんなものをもらってもいいの？」

「俺が、送りたいんだ。受け取ってくれ」

甘露寺は、その贈り物を両手で受け取った。

「ありがとう、伊黒さん…」

「それじゃあ、俺は行く。甘露寺、気を付けるんだぞ」

小芭内としては、一刻も早くこの場を離れないと叫びだしてしま  
そうだった。

「ねえ、伊黒さん…もう少し…話していかない？」

想い人にそういわれては、断るわけにはいかなかった。

そうして、街を少しばかり歩いた。

自分は今、甘露寺と並んで歩いている。

もしかすると、この先。

ずっと甘露寺と一緒にいられるのではないか。

己の過去は、参座が斬った。

なれば、ここにるのは。

ただの伊黒 小芭内と、ただの甘露寺 蜜璃なのだ。

それから次はどんなものを食べたいとか。

どこの景色を見てみたいとか。

次について二人で語らった。

小芭内は次があることに嬉しさを覚えた。

それは、甘露寺とて同じだった。

小芭内と、蜜璃。

二人のこの先は、また別の機会に。

ワシは斬るから斬られる覚悟もあるでの。

参座が遠方で鬼を斬った頃。

悲鳴嶼行冥は、鬼食いの少年が見つかったことを匡近へ告げに向かっていた。

鬼食いの少年の名は、不死川 玄弥。

実弥の生き別れの弟なのだという。

鬼を食ってでも鬼殺をし、兄の助けになりたいという悲しき生き方。

はじめは行冥も斬ってやろうかと思った。

しかし、もしや参座なら、彼の身体に起きていることを正しく見極められるのではないかと、文を鴉に託した。

返事には、匡近に紹介しろとのことだった。

ということ、行冥は匡近のところに来ていた。

「お前が、実弥の友人か。私は悲鳴嶼行冥。岩柱だ」

「い、岩柱様？ わざわざこのようなところに、何用ですか？」

匡近は、玄弥を探して、各地を転々としていた。

「参座に手紙を出した。不死川の弟が鬼殺隊に入ったと。すると、お前に紹介しろと返事が来た」

「…!!天羽様が。ありがたい…本当に…。それで、このこと実弥は？」

行冥は涙を流した。

己が友のために、その身体が軋むことなど構わず尽力する。

その友情に、泣かずにはいられなかった。

「まだ知らぬ。文には、不死川にはまだ言うなど書いてあった」

「かたじけない…それで、玄弥は？」

「ふむ、この先を東へ。一日かからん」

「…私が行きます。岩柱様はどうぞお戻りください」

その身体で、大丈夫なのか？

行冥が聞くと、匡近は何も問題ないといった。

心配はあったが、男の意地だ。

きかぬわけにはいかなかった。



「詳細はここに記されている。十分に気を付けるのだ」

そう言つて、玄弥の事が書かれた書を渡す。

「お心遣い、痛み入ります。そしてもし、天羽様に会うことがあれば、この桑野匡近。いずれ必ずやお力になりますと、お伝え願えますか？」

「うむ、承知した。必ず伝えよう」

そうして行冥はその場を後にする。

その帰り道。

寺子屋帰りなのであろう子供たちが、外で駒を遊んでいるのを見て。

はて、沙代は元気に生きているかと気に病んだ。

子供とは、純粹無垢が故、悪にも染まる。

あの時、なぜ沙代は私が殺したと言ったのか。

その混乱や恐怖を理解できないわけではないが、ただ一言。ねぎらつてほしかった。

それだけが、心残りだった。

――

鬼は、僧侶に化けていた。

少しずつ。

身寄りのない子供たちを食らっていた。

神隠しだと宣い、子供を食っていた。

参座は、何と哀しいかと。

その心を痛めていた。

「行冥殿には、ここでの話はできまいて…」

そうつぶやいた時。

世話係の一人の少女が、器を落とした。

「あの、今…なんて？」

「ん？ああ、行冥殿…と。ワシの友の名だ」

その名前を聞いた途端、少女は駆け寄ってきて参座の羽織を掴んだ。

「あのーその人はっーその人は今どこで何をしてるんですか!？」

急に血相を変えて叫びだすものだから、参座は何事かと身構えた。まずは落ち着かせて、よくよく話を聞くと行冥を知っているらしい。

「ふむ。なるほど、事情は察した。行冥殿が鬼殺隊に入る前の寺の子か。話に聞いたことがある」

「はい、恥ずかしながら…。行冥さんを罪人に仕立て上げた、沙代でございます」

「これーそのように言うでない。…もう自分を傷つけるのはやめい」

参座は叱った。

「よいか？行冥殿は、ヌシにそのようなことを言わせるために、あの日己の拳を握ったのではない。ヌシが、飯を食い、笑い、そして恋をして過ごせるようにと拳を握ったのだ。まだ子供ではあるが、その程度のことわからぬヌシではあるまいて」

「…はい」

はて、困った。

そのように哀しい顔をされては、まるで自分が弱者いじめをしているようではないか。

「して、沙代といったか。ヌシはどうしたいのだ」

「…私は、行冥さんの前に現れる権利なんてないんです。でも、でも！何か、あの人の役に立ちたいんです…！」

全てを裏切った。

命を懸けて、自分を救ってくれた人を。

だから、顔を見せることも許されない。

でも、もし叶うなら。

何か、あの人のために、この命を使いたい。

あの日、震える手を握り。

拳に力を入れてくれたことに、報いたい。

「ワシは、頼られるのが好きじゃ。感謝されるのものう。だがそれよ

り、友の幸せそうな顔が好きでの。なれば、ワシに任せい。沙代よ、ワシについて来い」

急について来いと言われても、沙代は何のことやら。

「行冥殿に会いに行く！ほれ、支度せい！」

「い、いえ！私は、行けません！そのようなこと許されるはずがないのです！」

「なにをいうか。ヌシはもう十分己を罰した。一目会うてみい。ワシが許す！」

それからは早かった。

どれだけ沙代が断つても、参座は聞かなかつた。

とにかく沙代の支度をまくしたて、終わるや否や肩に乗せる。

「…ヌシは軽いのう。これでは、行冥殿が泣きだすのう」

「と、ところでお名前は？」

「おお、忘れておつたのう。ワシは天羽 参座じゃ。行冥殿とは長い付き合いだの」

さて、和彫りの白髪男とおかっぱ少女の珍道中。

待ち受けるは、感動の再会か、罵詈雑言の決裂か。

どちらになるのかは、想像に容易い。

しかし、参座が順調に走って五日の道。

この少女を肩に担いでいくとなると、数日伸びるやもしれない。

参座は鴉に、カナエに謝っておいてもらえるように言う。

――

珍道中が繰り広げられている間。

蝶屋敷では義勇がしのぶの元を訪れていた

「あら富岡さん。どうされました？」

「器を返しに来た」

「どうやら先日作った鮭大根の器を返しに来たらしい。

「それはわざわざありがとうございます」

「…うまかった。また頼む」

「ええ、いつでもいらしてください」

無口で、陰気。

それが最初の義勇に対する印象だった。

しのぶは参座がよく気にかけているという理由で、義勇に興味があった。

若くして柱になったこともあり、しつかりした人なんだと思っていたのに、すべてを覆された。

とにかく話さない。

必要最低限のことも口に出さない。

たまに口を開いたと思ったら、論点がずれている。

しのぶは義勇が蝶屋敷に来ると、癩癩を起しそうになっていた。

それで、ある日参座に懇願した。

もう少し何とかならないか、義勇に言ってくれないかと。

すると参座は悲しそうな顔で口を開いた。

近いものを失って、心が折れそうになっているのだとか。

それを忘れるように、刀を振るっているとか。

自分の身体に鞭うって、無理を超えた鍛錬を己に強いているとか。

まあそれにしては意思疎通が下手すぎると笑った参座。

しのぶは考えた。

もし、自分が参座に刃を渡せなかったら。

もし、カナエが上弦の式に食われていたら。

もし、独りになってしまったら。

自分が、寄り添ってあげるべきなんじゃないか？

幸せを、分けてあげるべきなんじゃないか？

参座や、姉、妹。

そして蝶屋敷からもらったやさしさを。

義勇にも、かけてあげられないか？

そう思ってから、とにかく義勇を気にかけた。

根気強く、会話を試みた。

少しずつ。

少しずつ、心を開いてくれた。  
そして、鮭大根が好物だと語ってくれた。

しのぶは、義勇のためにと自らが厨房に立って料理をした。  
アオイが横で見えてくれたのだが、初めて自分で、誰かのために料理をした。

義勇に鴉を送ると、蝶屋敷へ来た。

そして、うまい。と。

たった一言。

嬉しかった。

帰り際、義勇はぼそりと感謝を言葉にして帰っていった。

それからほどなくして、任務から帰ってきたであろう義勇が蝶屋敷に現れた。

手には何やら荷物を抱えている。

それは、自分への贈り物だった。

藤の花を模した、簪。

手料理のお礼だといって、渡してくれた。

藤の花は、鬼を遠ざける。

義勇は、しのぶを鬼から護りたいという意を込めて贈ってくれたのが、なんとなくわかった。

実は、とてもやさしい人なんだと気が付いた。

そして、何が一番うれしかったかというと、自分がしていたことに對して、義勇が恩義を感じていたこと。

全く見返りもなく、自分がしてもらってきた優しさを、義勇にもかけてあげていただけなのに。

こうして、お礼を言われることがうれしかった。

また作ってくれるか？

その問いかけに、しのぶは二つ返事で返した。

そして今。

藤の簪が、しゃらんと鳴る。

「あらっ・あらあらあらっ・しのぶっ・」

物思いにふけっていると、後ろからカナエの声がする。

参座が遠方へ赴いている間、蝶屋敷にはカナエがいるのを、すっかり忘れていた。

「あら？何かしら姉さん」

努めて、冷静に。

大丈夫、やり過ぎせる。

「んふ。女の顔になってたわよく？」

「その笑い方、気持ち悪いからもう二度としないでね姉さん」

しのぶは笑顔でバツサリと斬りすてる。

…沈黙。

「あら。いうようになつたわね。そのくらいの強気で、富岡君に迫ってみたらどう？」

カナエは癪に障つたのか、口撃を開始した。

「姉さん、参座さんがいなくて寂しいからって、カナヲを連れて私の部屋で寝るのよしてくれない？」

「それはしのぶが、富岡君と寝られなくて寂しいかな。って姉なりに気を使ってるんだけどな」

「昨日、街で買い出しの時に甘味処の店員さんに声かけられて満更でもなさそうだったの参座さんに言うから」

「ぐっ…。で、でもしのぶったら富岡さんを慕ってることは否定しないのね！」

「ぐぐっ！ね、姉さんったら最近太ったんじゃない？そのままぐぐぐく太って、参座さんに愛想尽かされちゃうかもね！」

最強の姉妹、衝突。

お互い、我慢の限界に達したのか、押し黙ってにらみ合う。

「…ふん！姉さん（しのぶ）なんてもう知らない！」

姉妹喧嘩が勃発した。

夕餉の時も、口を利かず。

それは翌日の朝餉の時も終わることはなかった。

両者とも、アオイやカナヲ達には全く普通なのに、お互いに対しては一言も口を利かない。

アオイはこの年で子供みたいな喧嘩をする二人に、ほとほと呆れて

いた。

そして、とにかく早く参座が帰ってくることを祈ったのだった。

――

珍道中組は、あれからようやく行冥の警邏地区についた。

沙代の心臓は今にも爆発しそうだった。

「長い間、<sup>ぐ</sup>苦勞だったの」

「い、いえ。私はほとんど肩の上でしたので…」

沙代は参座が人間だとは信じられなかった。

人知を超えた速さで走るのに、まったく疲れている気配がない。

恐ろしく早いと口を開けば、まだまだ早く走れると言った。

この男、まさか鬼なんじゃ…そう頭をよぎったのも仕方のないこと。

この数日間、参座はいろいろなことを話してくれた。

鬼殺隊のこと。

行冥のこと。

お館様のこと。

カナエのこと。

蝶屋敷のこと。

小芭内のこと。

無一郎のこと。

どれも本当に楽しそうに話すので、沙代も退屈することがなかった。

そしてついに。

岩柱、悲鳴嶼行冥の住まう屋敷へと訪れた。

時間は昼。

鴉で連絡も入れているし、まず間違いなくいるだろう。

「御免！行冥殿はおられるか！」

参座が声を張る。

沙代は焦った。

心の準備ができていないこともあるが、何よりまだ参座の肩の上にいることに。

「あ、天羽様！お、下ろしてくださいー！」

「おお、そうなの。あんまり軽いから忘れておったわい」

今まさに肩から降ろそうとしたとき、戸が開いた。

「家で待てと連絡が来たが参座よ、何用だ」

筋骨隆々、盲目の男。

涙腺の緩さは鬼殺隊一。

悲鳴嶼行冥が、その姿を現した。

「おお、行冥殿。ヌシの置き土産を拾い上げたのでな。届けに参った

次第よ」

「置き土産…とは、なんだ。その肩に乗せた子供のことか？」

「ご名答。行冥殿、ヌシが護った子供。沙代じゃ」

行冥の動きが止まった。

肩から降ろされた沙代は、なんて声を掛けたいのかわからなかった。

「ほれ、抱擁の一つでもしてやらぬか。ヌシと別れてから、片時も離れたことはないと言った口ぶりだったぞこの少女」

「…本当に、沙代なのか？」

「…はい、沙代です。行冥さん、沙代です！声も聞きたくはないかもしれませんが…でも、でもこれだけは！…これだけはお伝えしたかったんです！ちゃんと護ってくれたのに、裏切ってしまったってごめんなさい！！ちゃんとありがとうって言えなくてごめんなさい！ぎょうめい…ぎんの、むぎいを…いえなくで…ごべんなぎあいつー！」

沙代は泣き崩れて、その場にうずくまってしまった。

鬼を滅すために鍛えたその身体を見て。

あのころとは変わってしまった身体を見て。

ああ、この人はどれだけ大変な思いをしてきたのだろうと。

どれだけ私を憎んでいるだろうと。

とにかく怖かった。



でも、たとえこの場で殺されようとも。

今言った言葉だけは、伝えなくてならない。

それだけは。

せつかく会うことができたのだから。

「ああ…私が護つたものは確かに生きていたのだな…。沙代、生きていてくれてありがとう…」

その大きな身体で、行冥は沙代を抱きしめた。

沙代は声を上げて泣き、行冥は静かに涙を流す。

「さて、ワシは行くかの。これまでのことを、二人で話し合うがよいて」

「…待て参座。匡近より、伝言を受けている。いつか必ず力になると言っていた。…それと沙代を連れてきてくれたこと、心から感謝する…」

「なに、ワシと行冥殿の仲じやろう。なにも気にすることはなかろうて」

匡近の伝言を受け取った参座は、狭霧山へと向かうためにその場を後にした。

「…あの日のこと、聞いてくれる？行冥さん」

「お前の話すこと、すべて聞こう。ゆつくりと話せ」

少し落ち着いた沙代は、あの日起こったことをゆつくり話し始めた。

寺の金を獺岳が盗んだと疑いがかかり、行冥に黙って追い出してしまったこと。

目の見えない行冥のために、みんなが力を合わせなければと語り合っていたこと。

そして、あの時みんなが動いたのはきつと行冥を護りたかったからだ。

自分のあずかり知らぬところでそんなことになっていたとは。

これまで、いろいろなものに疑心暗鬼になっていた行冥は、少し…いや。

大きく世界が明るくなった。

「お前たちを、疑っていた。私は目が見えぬから、言うことを聞かなかったのだと。鬼を、素手で殴りつける私を見て、お前は化け物だと思っただのだと」

「そんなことない！行冥さんは、私の大好きな行冥さんは！ばげものなんがじゃないよう！」

ああ、その言葉をどれほど待ち望んだか。

あの日以来、どれほどその言葉を考えたか。

参座が、連れてきてくれた。

待ち望んでいたものを、運んできてくれた。

何と感謝をしたらいいか。

行冥は、あの男には本当に敵わないなど、沙代をまた強く抱きしめるのだった。

――

あの二人は、ちゃんと仲直りできただろうか。

まあ、行冥だからと参座はあまり心配していなかった。

さて、これから狭霧山となると到着は夕刻。

蝶屋敷にはいつ帰れるやら。

カナエが恋しくなった参座は、その足を急いだ。

それからひたすらには走り続ける参座は、何とか日没の前に鱗滝のところについた。

「御免。鱗滝殿はおられるか？」

「…参座殿。久方ぶりでございます」

相も変わらず天狗の面をした男がそのこの居た。

「あれ、あなたは…」

「おお、炭治郎。此度の最終選別、誠に苦勞だった。うむ、しっかり鍛えておるようだの」

「ありがとうございます！…参座さん、でしたよね」

「うむ、そうじゃ。して、ヌシが妹の禰豆子か」

「むー」

「っはっはっは。元気のいい子じやのう！ふむ、ふむ。人を食う代わりに、眠っておったのか。その身体の血の流れ、作り。人の肉に頼らぬように作り替わってきておるな」

炭治郎は驚いた。

そんなことまでわかるのかと。

「だが、まだたりぬの。ゆつくりでいい、強く生きる禰豆子よ」

そういつて禰豆子の頭を撫でる参座。

禰豆子は心地よさそうに目を瞑る。

「して、炭治郎。ワシは、柱じゃ。その意味が分かるかの？」

「…鬼殺隊で、一番上の階級ってことですよね」

「炭治郎。それだけではない。こちらにおられる方は、おそらく歴代の隊士の中でも最強。お館様の次に影響力のあるお方だ」

鱗滝が補足を入れる。

炭治郎は、そんな人がなぜ自分と話しているかわからなかった。

「うむ。それが意味することとは、ワシの一挙一動がこの鬼殺隊の秩序に関わる。ワシは、ヌシら兄妹の後ろ盾となつてもいいと思うとる。それがお館様のご意志であり、ワシの意志でもある。ヌシの妹、禰豆子は確かにほかの鬼とは違う。それが良いほうに転ぶか、悪いほうへ転ぶか。それはわからぬが、ワシはそれでもここまで鍛え上げたヌシの努力に応えたいと思うた」

「あ、ありがとうございます…」

鱗滝から先ほどのようなことを聞かされて、炭治郎は委縮してしまつた。

「ワシは、ヌシの妹が人を食ったとき。腹を斬らねばならぬ」

「えっ!？」

「鬼を斬らぬということは、己が斬られるということよ。今は、ヌシの妹は人だの。だが、一口でも人の肉を食らうたとき…：奴は鬼よ。鬼だったということじゃろうて。なれば、ワシは鬼を斬らなんだということになる」

炭治郎は、鬼を斬らないということは…：という理由を、その身で理

解した。

参座は彌豆子を、鬼だとは見ていない。

だが、人だと信じた彌豆子が鬼だった時。

斬られるのは自分だということ。

「それは、鬼殺隊ではない。夢見ごとをいう、ただの餓鬼だの。人の命を危ぶむということはいかなものかをその心に刻むのだ。よいな？」

炭治郎が見た参座は、今まで見たどんなものより恐ろしかった。

これが、鬼殺隊全ての、この歴史で積もってきた鬼に対する憎しみだといわんばかりの圧迫感。

息ができなかった。

まだまだ、自分の覚悟は甘い。

炭治郎は痛感した。

そして、言葉が出なくなってしまう。

その時、参座の手が炭治郎の頭に置かれる。

「炭治郎。困ったときはワシを頼れ。ワシは必ず応える」

すると打って変わって参座からするにおいがかわった。

だから炭治郎は言った。

「…お辛いですよね。僕なんかに分かるはずないですけど、それでも普通の人じゃ耐えられない哀しみのにおいがします」

参座は目を細くして笑いかけた。

「ヌシは本当に優しい子だの。安心せい、その哀しみに勝る幸せが、ワシを支えておるのだ。してその中には、炭治郎。ヌシより受けた優しさも入っておる」

炭治郎はくすぐったかった。

この人に応えられるように、なりたい。

そう決意した。

「さて、ワシは行こうかの。鱗滝殿、邪魔したのう。彌豆子もまたの」

そういって、鱗滝の家を発つ参座。

その時、炭治郎はまた新たなにおいを嗅いだ。

「すごく、嬉しい匂いがする」

参座は蝶屋敷へと走る。

ワシは斬ったものの想いも持ってゆくでの。

ようやく。

ようやく蝶屋敷へたどり着いた。

時刻は丑三つ時。

参座は、カナエの顔を早く見たかった。

それは、背中の重みが抜けた、あの玄関口から。

振り向いて、一緒に来ないか？と言い出したかった。

それでも、こうして自分の足を前へと進めるのは。

しのぶや、みんなからもらい受けた刃を背負っていたからだ。

そうして、がむしやらに走って。

沙代を肩に担いでも、寝ずに見張りをし。

限界ぎりぎりでも、走り続けた。

鬼殺隊最強、人知を超えた能力の参座といえど、さすがに疲れが溜まる。

玄関の錠を開けるために持った鍵も、心なしか重く感じる。

「…おおい、帰った。誰かおらぬかー…」

蝶屋敷玄関で疲れ果てた声で小さく呼ぶと、屋敷の廊下は真っ暗。

人の気配はない。

「まあ、それもそうかの…」

今日帰るという連絡もしていなかったし、仕方ないかと観念した参座。

そのまま、とぼとぼ歩いて居間に向かう。

するとどういことだろう。

襖の間から、光が漏れているではないか。

さては、しのぶかアオイが仕事したまま寝落ちてしまったのかと襖を開けた。

しかし、そこにいたのはカナエだった。

食卓机に突っ伏して眠っていた。

カナヲがその横でカナエを背もたれにして眠っている。

ああ、何と愛しいか。

なんと心が休まるか。

参座はそのままの勢いで抱き着いてしまいそうだった。

「…風邪をひいてしまうの」

参座は客間から毛布を二枚持つてきて、二人にかけた。

それから、一人で風呂を焚き、数日分の疲れを癒す。

一つだけ灯籠を持ち出し、上の窓枠に置く。

薄暗い中、湯船につかって天井を見ると、沙代と行冥が笑っている顔が浮かんだ。

「おお…さすがに疲れたでな。しみるのう…」

さて、身体の汚れを落とそうかと湯船から上がり、風呂椅子に座ったとき。

「お背中、お流し致しましょうか？」

後ろから声がした。

…カナエだ。

ここ数日、一瞬たりとも忘れなかった声が、今後ろから聞こえた。

「…頼もうかの」

「…参座くんの墨。身体のは初めて見たかな」

「そうだのう。ワシのはひけらかすものではないからのう、人に見せようとはあまり思うておらぬ」

参座の背中には特大の雛菊が、煌びやかに咲いていた。

「花言葉は、純潔と美人、それと…平和、希望。だったかな？」

「カナエは博識だのう」

参座が背負うものは…。

そして、鏡で参座の正面が見える。

「それと、胸。阿吽がいるのね」

「左様。阿吽とは、万物の始まりと終わりを示す」

カナエは参座の後ろから胸に手をまわし、その阿吽に手を乗せる。

「右腕の龍と、左腕の涙を流した鬼は？」

「…神よりの使い、龍で首を取り。左の鬼で、斬られた者の罪を引き受けるという願掛けであった」

「この身体一つに…たくさん背負ってるんだね…」

カナエは参座の背に頬をつけ、身を預ける。

「嫁を鬼にされた、彫師より賜った。そして、この心の臓の真上。この梵字は、バンという。大日如来の梵字であり、それが意味する言葉とは…大いなる日輪」

様々な意味が、参座の身体に刻まれている。

この大きな背中で咲き誇る雛菊は。

何よりも強いその龍は。

涙を流す優しいその鬼は。

始まりと終わりを望む阿吽は。

参座を動かす心臓は。

大いなる日輪により、照らされている。

「あつたかいなあ…参座くん」

「この心で燃える炎は、ワシの愛する者たちによつて薪をくべてもらっておるのだ。そして、カナエ。ヌシが送ってくれる風は、この炎をより大きくしてくれるでな」

その時、カナエの顔が参座の肩に乗せられる。

二人は、頬をくつつけ目を瞑った。

「カナエ…ワシと出会うてくれて…ありがとう」

「参座くん、生きていてくれて、ありがとう」

そして、カナエが身を少し乗り出して。

その唇が、重なると思えたその時。

かこんつと、脱衣所から音がした。

二人は恐ろしい速さでそちらに目をやった。

なんとそこには。

カナヲがいた。

「あ、あらー！お、起きちゃったのねカナヲ！」

「さ、さあてー！ワシはか、身体でもあらおうかのう！」

カナヲはただ黙って二人を見つめる。

だがその背中に、龍を見た。

カナヲは着々と上の姉妹が持つ女の迫力を身に着けているのだな…と、参座は戦慄した。



そんなカナヲをカナエが抱きかかえて行った。  
しん、とした風呂場で。

参座は己の身体を一人寂しく洗った。  
水滴のせいか、左腕の鬼がいつもより泣いている気がした。

その頃、カナヲを攫ったカナエは蝶屋敷の自室に敷いてある布団に入り、カナヲを呼んでいた。

「か、カナヲ？さ、いつもみたいと一緒に寝ましょ？ほら！お、おいで？」

布団をめくり、カナヲを呼ぶ。

しかし、依然カナヲはものすごい瞳でコチラを見続ける。

そして、何も言わずに部屋を出た。

すぐ隣の部屋の襖が開く音がしたので、しのぶの部屋へ行ったのであろう。

「もっもう！カナヲまで！もうしらないもん！ふーんだ！みんな知らない！そうやって私を悪者にするんでしょ！いいもん！」

カナエは心労で幼児退行した。

そこへ風呂を上がった参座が客間から拝借した布団をもって部屋に来た。

「…そういじけるでないカナエ。あれはワシらが悪かろうて。明日、一緒にあやまるでな」

「…わかった」

時々、大変子供っぽくなると参座は苦笑いしながら布団を敷こうとしました。

「え？何してるの参座くん」

「…なにつて。寝床を作っておるのだが？」

「おいで？」

カナエはカナヲにするように自分の布団をめくった。

「いや、しかし…」

「お・い・で？」

「圧がすごい。」

「今日だけだからの…」

観念した参座は、初めて一つの布団でカナエと眠った。心臓が自分のものではないようだった。

カナエが後ろから腰に手をまわしてくるものだから、なおのこと強く脈打つ。

「…ねえ…なにもしないの？」

疲れているというのに、まったくどうしたのか。

眠気など当に宇宙の彼方。

「やめい…心臓に悪くて敵わん…」

「もう、意気地なし…」

カナエは、参座が手を出してくるとは思えなかったが、あんまりいい雰囲気なのに手を出してこないのので小さな文句を投げた。

すると参座がぐるりとこちらを向く。

そして、今度こそ。

カナエに唇を重ねた。

「おやすみ、カナエ」

そういうが早いか、参座すつと向こうに身体を翻した。

呆氣にとられたカナエだったが、参座の背中を強く強く抱きしめた。

愛しいもののおいに包まれ、カナエはそれはそれは心地よくまどろみに落ちた。

しかし参座は、カナエの胸の感触を背中に感じ、まったく眠れなかった。

――

産屋敷より、任務終了後の翌日は非番にしてもいいといわれていたのもあり、参座は太陽が真上に上がるまで、カナエの布団で眠りこけていた。

その心臓を落ち着かせるのに、アオイとしのぶが仕事の為に起きた足音が聞こえたところまでは記憶があった。

そして、正午の日光がとうとうその眠りを妨げた。

「…全く寝た気がせんの…」

半目で天井を見上げる。

隣にカナエの姿はなかった。

しかし。

何やら膨らみがある。

子供一人分くらいなの。

「カナヲ…ヌシ、なにをしとるでな…」

カナヲだった。

参座の着流しの背を硬く握っていた。

「…カナエ姉さんが…独り占めするから…」

「そうカナエを邪険にするでない…。ああ見えてワシもかなり苦勞を掛けているでな…ワシからの願いじゃ。優しくしてやってくれぬかの？」

カナヲは黙って考えた。

「…参座さんの…頼みなら…。不本意だけど…」

「不本意とは…。しかしカナヲ、ヌシはとんと姉に似てきたのお」

「姉妹…だから…」

堪らず参座の口は弧を描く。

「そうだのう。優しい姉達だの」

参座は起き上がり、布団を畳む。

しかし、その間もカナヲは参座の着流しから手を離さなかった。

下の階から、昼餉のいい匂いがした。

もうそんな時間かと、参座は下へ降りる。

そして居間へ向かうと、空気が凍っていた。

「…アオイ、これはどういうことなの？」

「いま、子供達が三日ほど前から喧嘩中でして…」

朝。

カナエが起きぬけに、参座が帰ってきたから昼餉は多めに作ってくれとアオイは頼まれた。

参座が無事帰ってきたのは大変喜ばしかった。

それに、これでやっとカナエの機嫌が最高潮を迎え、しのぶとも仲

直りしてくれると高をくくっていた。

しかし、現実是非情かな。

全くそうはならなかった。

「…察するでな、アオイ」

「参座さん、鶴の一声…お願いします」

アオイの気苦勞を察した参座は、まさか起きて一番最初が喧嘩の仲裁だなんて思ってもいなかった。

「…なにがあつたか知らんがの。二人ともいい大人じやろうて。いい加減、氣を持ち直さぬか。カナエ、ヌシは姉じやろうて。妹の粗相など多めにみてやれい。しのぶ、ヌシももうこの蝶屋敷を預かる身。そう癩癩を起しては、皆困ってしまうでの」

「…だって、しのぶ（姉さん）が…」

「ええい、だってもへちまもないわい。ほれ、手を貸せい」

お互いを指さして、不満そうに参座を見る二人。

その手を、参座が無理やり掴む。

そして二人の身体を近くまで引つ張つて。

「よいか、こうして…。ほれ、お互い手を握れ。うむ、そうじやそれだよ。ヌシら姉妹は時々目も当てられぬほど素直じやない時があるの。なれば、本当は何が言いたいのか。ここで伝えればよいて」

こうまでされて、さすがに観念したのか、カナエが口を開く。

「…私は、今とっても幸せなの。参座くんが生きているから。だから姉さんは、しのぶにも幸せになってほしいの…。でも意地悪しちやつたわ、しのぶがあんまり可愛いんだもの…。大人げないこととして、ごめんなさい」

「…私は、大丈夫だから。姉さんは、姉さんの幸せを追いかけてほしい。鬼殺隊でいつ死ぬかもわからないのに、ずっと私のことばかり気にかけてくれてきたんだもの。もう、私は大丈夫よ…カナエ姉さん…」

やっと当たり前の日々を手に入れた二人だから。

親を亡くしてから、ずっとお互いのことを思いやってきた二人だから。

本当に、よく似ている。  
ぎゆうと。

参座の着流しを握るカナヲの手に力が入る。

「…ヌシの姉は本当に優しいの。カナヲもそう思うの?」

そして、カナヲは参座の着流しから手を放し、カナエとしのぶの元へ寄る。

小さな両の手を伸ばし、二人の着物を掴んだ。

「カナヲ…」

三姉妹は、しゃがんみこんで、抱き合った。

参座は尊いものを見て、笑顔になる。

アオイは、最初から素直に言えばいいのにと文句を言っていたが、その表情からは喜びがひしひしと伝わる。

「オイ、誰もいねエのかよ…って、なんだア?なんかの儀式かア?」

玄関で呼んでもだれも来ないからずかずかと上がってきた実弥が、たまたまその光景を見て、つい口に出した。

参座は実弥と談笑している。

だが、三姉妹は固く、硬く。

しばらくの間、抱き合っていた。

ワシを斬れ。

参座は警邏を終え、朝日が昇るころ、  
帰路についていた。

最近では、匡近からよく文が届く。  
玄弥が鬼食いをやめてくれたとか。

そろそろ実弥に引き合わせる頃合いだろうか？だとか。  
自分が救ったものが、また誰かを救った。

その事実がうれしかった。  
きつと玄弥を止めることができるのは、匡近だけだとも思っていた

し本当に喜ばしかった。  
さて、実弥の弟とはどんな男か。

彼に似て、優しい男だろう。  
一度だけ夢に見たことがあるが、玄弥を見たことがないからかその

顔にもやががかかっていた。  
それでも、目つきはよく似ていた気がする。

さて、かえってカナエの飯でも食おうと考えていた時。  
今日は柱合会議かと思いだした。

「おおい、カナエ。今帰った」  
「おかえりなさい参座くん」

あれからもうすっかりカナエとは同じ布団で眠るようになってい  
た。

しかし、身体を重ねることはまだしていない。  
それは参座が、その身の刃を捨てる時と決めていたし、カナエも理

解していた。  
「アマバア〜サンザア〜！急ギ〜柱合会議へ〜迎エ〜」

さて飯だと気を抜いた参座のもとに、焦りを隠さない鴉が声を荒げ  
る。

参座の鴉は基本的に大声を出さない。  
だが、今はどうか？

珍しくその喉を枯らさんとばかりに声を上げていた。

「竈門く兄弟く！鬼殺隊ニヨリく身柄ヲく抑エラレタく！コレヨリく裁判ガく行ワレルく予定く！」

「カナエ、ワシは行く」

そういうや否や、参座はカナエの腕を引いた。

そして、口づけをした。

カナエは一瞬の出来事で驚いたが、あの日以来なかった口付けをされ、嬉しさを上回る一抹の不安がよぎった。

「参座く…ん…」

言い終わる前に、参座の姿は消えていた。

――

善逸は、蝶屋敷で目を覚ました。

確か最後の記憶は…。

「どうええええええ！て、手があああ！あ、足もおおお!!？」

那田蜘蛛山より救出された善逸は、己の手足が短くなっていることに恐怖した。

「静かにしてください！…ここは病室なんですよ！」

発狂する善逸をアオイが制する。

すると後ろからしのぶがやってくる。

「どうやら、鬼の血を抜く薬の効果が出ているみたいですね…うまくできていて本当に良かった…」

しのぶが研究していた鬼の血を抜く薬。

正直効果があるかわからなかったが、何も無いよりはと隠に持たせていたのが吉と出た。

「…美しい…」

善逸はしのぶの姿を見ると、急に静かになった。

それでなくても惚れやすいのに。

その優しい表情のしのぶを見るのはよくなかった。

「なに言ってるんですか！隣の方といい、あなたといい！重症なんですよ！安静にしていってもらいますからね！」

アオイが声を荒げる。

隣の人といわれ、善逸は隣を見る。

そこには、伊之助が。

その横には、炭治郎が…いなかった。

「た…炭治郎は？」

「炭治郎？」

しのぶが、善逸に問いかけた。

「ほ、ほら、俺と同期の！額に痣があつて！それで、木箱に女の子を入れてる！」

「…アオイ」

「そんな人、運ばれては来てませんね…」

善逸は、泣き出しそうだった。

つい昨日まで、隣で戦っていた友人がいない。

まさか、鬼にやられてしまったのか…？

信じたくなかった。

「ああ、その子なら柱の方たちに保護されていたぞ」

「おや、あなたは？」

善逸の叫び声に、様子を見に来たのか。

軽傷だったであろう隊士が来た。

何やら兄妹の拘束命令が出て、柱に拘束され隠に連れていかれたと。

「ふむ…なにかあったのかもしれないね。今日は柱合会議ですし、参座さんに鴉を飛ばしてみましよう」

しのぶはなにか胸騒ぎがした。

――

柱が勢ぞろいだった。

そして話題は、竈門兄妹について。

杏寿郎は、即刻兄妹もろとも斬り捨てると。

天元はならば己が斬ると。



蜜璃は殺してしまうのは可哀そうだと。

行冥は、鬼となつてしまつたのなら、斬つてやるのが救いだと。

小芭内は富岡の隊律違反に頭痛がすると。

そして無一郎は、参座が来るのを待ち望んでいた。

蜜璃が、産屋敷が来てからでも裁判は遅くないと皆に言い聞かせる  
と、柱達は黙る。

「妹は俺と一緒に戦えます！鬼殺隊として、人を守るために戦えるんです！」

炭治郎が痛む喉に構わず、声を張る。

「オイオイ、なんだか面白いことになつてるなア」  
するとそこへ。

実弥が、禰豆子の入つた木箱を片手に、柱の面々の前に姿を現す。

隠がおやめくださいと声を荒げるが、それを聞く実弥ではない。

「鬼がなんだつて坊主ウ。鬼殺隊として、人を守るために戦えるウ？」

そんなことはなア：ありえねエんだよ馬鹿がア!!」

「やめろ！俺の妹に手を出す奴は、たとえ柱だろうと許さない！」

炭治郎が言うも実弥は全く気にも留めず、日輪刀を木箱に突き刺した。

しかし、その日輪刀が木箱に届くことはなかった。

「実弥、ヌシは優しいの。炭治郎の先を想い、ここで禰豆子を斬つて自分が悪となり汚れ役を買つてやろうというのだな」

参座がその箱を手に、義勇の隣に立つていた。

「義勇、ヌシもヌシじゃ。この箱を奪い返すのは、ヌシでもよかつたでの」

参座が義勇に声をかけると、すみませんと小さい声で呟き頭を下げた。

すると堪らず実弥は口を開く。

「参座さん：たとえアンタでもダメだ、譲れねエ。それは鬼だ、頼むから渡してくれ」

小芭内も口を挟んだ。

「参座、友として言う。それはダメだ。それはお前を信用できなくな

る、頼むやめてくれ」

杏寿郎も同じ気持ちだった。

「参座殿！俺も同じだ！参座殿がそれをしてはダメでしょう！」

口々に言う柱達。

そこで、炭治郎はこの参座という男がどれほど柱達に慕われているのかが、痛いほど伝わった。

「彌豆子は善良な鬼なんだ！どうしてそれがわからない！！善良な鬼と悪い鬼の区別もつかないのなら、柱なんてやめてしまえ!!」

またも炭治郎が声を荒げる。

しかし、柱には届いていない。

柱達は、参座のこの理解を超えた行動で頭がいつぱいだった。

自分たちが尊敬し、本当の意味で気を許し。

そして、感謝で頭が上がらないこの男に。

それだけはしてほしくなかった。

参座はおもむろに羽織を脱いだ。

隊服にも手をかけ、振り払った。

そしてその上半身を晒した。

柱達は息を呑んだ。

その身体に彫られた墨が、恐ろしいほどの威圧を放っていた。

そして参座は、一言。

その声色は、ずっしりと重く。

「ワシを、斬れ」

ただ、それだけ言った。

言ったあと、ゆつくりと腰に携えた日輪刀を地面に置き、腕を組んだ。

「参座さん！彌豆子は人を食ってない！俺を助けてくれたんだ！まだ食ってないんです！だからやめてください！参座さんには何も責任はないんです！」

これから何が起こるのか不安で仕方ない炭治郎は、自分を斬れと  
いった参座にとにかく声をかけた。

「心配するでない炭治郎」

尚も参座は優しく炭治郎に声をかける。

しかし、参座の気に当てられた柱達は、各々が日輪刀に手をかける。義勇、蜜璃、無一郎は刀に手をかけることはしないが、冷や汗を流した。

すると急に、参座が大口を開け、叫びだした。

「鬼に組するものだ!!ワシを斬らぬか!!どうした、日輪刀を抜け!己が仇を討たぬか!!」

参座は生まれて初めて声を荒げた。

その気迫やたるや。

時が止まったかのような錯覚。

しかし、大気はばちばちと震える。

その場にいる誰もが共通で理解したことがあった。

動いたら、死ぬ。

確実に、斬られる。

呼吸をすることを忘れていた。

この災いが、一刻もはやく去つてくれることを祈るしかない。

そう思わせるほどに、参座の激情は恐ろしかった。

丸腰の男が、歴戦のもの達を恐怖させた。

「すまぬ、友たちよ。お館様が…そして炭治郎が。ワシを頼ったのだ。なれば、それに應えるのが天羽 参座という生き方よ。これをせぬくらいならば、ワシは腹を斬って死んでおるのだ」

本当に。

本当に申し訳なさそうに、顔を伏せながら。

参座は声をひねり出した。

「あれから変わらず、見事な入れ墨なんだろう?参座」

誰も動けない中、参座の後ろから声がした。

「やあ、私の可愛い剣士たち。皆には、嫌な思いをさせてしまって申し訳ないね。特に参座…辛いことを請け負ってくれて本当にありがとう」

産屋敷 輝哉が、娘達に手を引かれ、その姿を現した。

柱の皆は、膝をついた。

参座も産屋敷に向き直り、膝をつく。

「お見苦しい姿を晒しましたこと、お詫びいたしまする」

「そんなことはないよ、参座。君のその入れ墨…できればもう一度目に焼き付けたかったよ」

「…ありがたきお言葉にございます。して、竈門兄妹のこと、お館様におかれましては、いかかがお考えでございませうか」

「炭治郎と禰豆子のことは他でもない、私が容認していた。そして、参座にも目をかけてもらっていた。そして、皆にも認めてほしいと思っている」

柱の面々は信じがたかった。

それでも、参座がその命を…生き様をかけたのだから、だれも口を開けなかった。

「では、手紙を」

そして、産屋敷の声掛けで娘が鱗滝から宛てられた手紙を読み始めた。

そこには、禰豆子が二年以上人を食わずに過ごしていること。

参座の眼には、普通の鬼の身体ではなく映っていること。

鱗滝と義勇が命をかけたこと。

そしてどうか、参座だけは恨まないでほしいと。

それらが記されていた。

柱達は、いまだに口を開けずにいた。

「禰豆子が人を食っていない事実がある。それを否定するためには、参座を否定しなければならぬ。それはきつと、私をもつてしても不可能だ」

皆がそれを理解していたからこそ、だれも何も言わなかった。

「それに、炭治郎は鬼舞辻と遭遇している」

それを言葉に乗せた途端、参座を覗いた柱達が一斉に口を開く。がやがやと一気に騒がしくなる。

すつと。

産屋敷が、その人差し指を口の前に持ってくる。

それだけで、柱が口を閉じた。

「鬼舞辻はね、炭治郎に向けて追っ手を放っているんだよ。その理由は、単なる口封じかもしれないが。私は初めて鬼舞辻が見せた尻尾を、掴んで離したくない。そして恐らく禰豆子にも、鬼舞辻にとって予想外の何かが起きているんだと思う。それは、参座が見ている…。わかつてくれるかな？」

ぎり…と。

実弥の歯を食いしぼる音がする。

「てめエが勝手にかけた命はなア…どれだけの重みがあるか…わかつてんのかア坊主ウ」

炭治郎に向けて放った実弥の言葉は、それはそれは怒気をはらんでいた。

「これ、実弥。ワシの命は、どうあがいても皆と変わらぬ。それだけは変わらぬのだ。それがわからぬヌシではなからうて」

可愛い弟を叱るような優しい口調で参座が言うものだから、実弥は何も言えなくなつた。

「俺の友を死なせたら…分かつてるな貴様。ただで死ぬると思うなよ」

小芭内が炭治郎を指さしながら憎々しげに口を出す。

「小芭内よ。あまり若いのをいじめるものではないて」

お前は優しすぎるとぶつくさ文句を言うが、小芭内も黙つた。

「お館様。まず、竈門兄妹においては蝶屋敷の胡蝶しのぶに任せるのがよいかと。しのぶであれば、禰豆子の身体に起きていることの解明にも尽力することでしょう」

「そうだね、参座。それじゃあしのぶのところをお願いしようか」

「おおい、誰か。連れて行ってやってくれの」

参座がそう声をかけると、隠が大慌てで炭治郎の回収に走つてきた。

そして肩に担ぎ、一目散に駆け出す。

「では、柱合会議を始め…」

「ちよつと待ってください!!」

隠の背中を飛び出した炭治郎が、産屋敷と参座の間に滑り込んでく

る。

「俺と彌豆子が！鬼舞辻無惨を倒して見せます！悲しみの連鎖を、断ち切る刃を振るう！」

「今の炭治郎にはできないから、まずは十二鬼月を一人倒そうね」

産屋敷がにこやかに言うと、凶星をつかれた炭治郎は顔を真っ赤にする。

数人の柱達が、その様を見て笑いをこらえていた。

「鬼殺隊の柱たちは、当然抜きんでた才能がある。血を吐くような鍛錬で自らを叩き上げて死線をくぐり、十二鬼月をも倒している。さらには鬼殺隊最強と謳われる参座は、百年打ち取られなかった上弦の鬼でさえ葬っている。だから、参座の言うことには誰も異を唱えないんだよ。それに参座は柱の皆を友と呼んで、とても大切にしている。炭治郎も口の利き方には気を付けるように」

「は、はい…」

ついに観念した炭治郎が今度こそ隠に連行される。

その去り際、珠代によくと言葉を投げられ、またも炭治郎は隠を振り払おうとしたが、今度は顔を殴られた。

「では、柱合会議を始めようか」

その後、那田蜘蛛山の件について仔細を柱合会議で話した村田曰く。

柱たちの機嫌がすこぶる悪く、冗談抜きで漏らすかと思つたと語る。

ワシは斬ること以外は間違うてばかりだの。

炭治郎は蝶屋敷に運ばれる間、隠による猛攻を受けていた。

「あんた!!絶対許さないから!あんなに怒った人柱様なんて、見たことないわよ!!」

「柱の前っただけで恐ろしいのに、あんなに空気がひりついたのなんてきつと鬼殺隊の歴史でも無えわ!!」

謝れ謝れと連呼された炭治郎は、その気迫に押され流石に一言謝った。

それから走って少し。

炭治郎を背負った隠は、蝶屋敷についていた。

「ごめんくださいませー」

「全然誰もでてこねえわ…」

玄関口で声を上げてても、だれも出てこなかったので仕方なく隠達は庭へ回ることとした。

すると、カナヲの姿が見える。

「あ、人いる」

「あれは、ええと…」

「カナヲ様だ。胡蝶様の妹の」

隠の者たちがカナヲに屋敷に入っただけか問うと、カナヲは何も言わずに屋敷の中に入っていった。

「ええ…どうしたら…」

皆が呆気に取られていると、屋敷から一人の少女が出てきた。

「隠の方ですね。けが人はこちらへ運んでいただけますか?しのぶ様もすぐお見えになられるので」

どうやらカナヲがアオイを呼びに行っていたようだった。

それから炭治郎は薬を飲むのをごねている善逸と、喉のつぶれた伊之助に再会し安心することができた。

その間、アオイは善逸を静かにしろと叱ること二回。

しのぶが病室に来て、アオイをなだめるまでは声を荒げていた。

「それで、炭治郎くん…でしたっけ?鴉から少しだけ話は聞きました

が、柱合会議はどうでした？」

「はい…参座さんが、俺と禰豆子をかばってくれて。俺は本当に無力です…参座さんがいなければ、きつと俺も禰豆子もあの場で斬り捨てられていたかもしれせん」

まあ、産屋敷としては炭治郎と禰豆子を柱に容認させる手立てがあつたのだろうが、参座が丸く収めたということか。

しのぶがそう解釈すると、炭治郎はとんでもないことを口にする。「参座さんが、俺たちの為に禰豆子を斬るなら自分を斬れって怒って、柱にひるまず丸腰で立ちはだかつてくれて…。俺は、こんなすごい人に命をかけて守られたんだなって思うと、情けないです…」

この少年、今なんといった？

参座が柱と衝突したと言ったか？

しのぶは耳を疑った。

あの温厚で、柱をきょうだいのように慕い、慕われ。

どんな時でもその感情を激動させることのない男が。

「炭治郎くん、私には姉がいます。名前は胡蝶カナエ。いいですか？今日の柱合会議の話は、絶対に姉にしないでくださいね？」

炭治郎は察した。

その匂いなど嗅ぐこともなく、察した。

この人怒ってる…と。

――

それから炭治郎たちかまぼこ隊のメンバーは、蝶屋敷で療養に入った。

その間、見舞いが数人来た。

まずは村田。

柱合会議で参考人として召喚された村田は、それはそれは恐ろしい思いをしたという。

そして、参座がやってきた。

「炭治郎、傷の具合はどうなの？」



「はい！もうだいぶ良くなりました！」

「うむ、それはよきかな」

「あの…柱合会議の時は、本当にありがとうございました…。俺、参座さんの前に言っていた、柱つてというのがどういう意味なのかって…全然わかってませんでした」

あの日感じた、己の無力。

それを思い出し、今生きているのは目の前の男のおかげだと思った炭治郎は、深く頭を下げた。

「ヌシは、本当に優しい子よのう。なに、気にすることないで。あれはワシが、ワシであるために必要であつたのだ。それに炭治郎、ヌシがその心でワシを頼つたのだ。なれば応えぬわけにはいかんであろう？」

あつたときに嗅いだ、優しいにおいが。

炭治郎の鼻孔をくすぐった。

「ヌシは、鬼舞辻無惨を斬ると豪語した。その言葉の誠意、このワシに示してくれること、楽しみにしておる」  
ではの。

といい、参座はその場を後にした。

炭治郎は、身体が全快したら必ずこの足でお礼しに行こうと心に決めた。

それから数日。

身体が順調に回復した炭治郎たちは、しのぶに機能回復訓練を告げられる。

「善逸君はまだ手脚が治っていないので、まずは炭治郎君と伊之助君ですね。道場でアオイと特別講師の方がいますので、向かってください」

炭治郎と伊之助は、道場へ向かうため立ち上がる。

すると、しのぶがそうそうと何かを思い出したように炭治郎を呼び止める。

「特別講師の方は、水の呼吸の剣士ですのできつと炭治郎君の助けになりますよ」

それはありがたい。

炭治郎は気をよくして道場へと向かうが、隣の伊之助はまだ気弱になっただけだった。

そして道場の前で襖に手をかけたとき、炭治郎は懐かしいにおいが鼻に入る。

どこかで、嗅いだことのあるにおい。

記憶をたどれば、すぐに思いついた。

鱗滝だ。

鱗滝に少し似通ったにおいがする。

しかし、もっと若々しくて：おそらくは女性。

一体誰だろうと思ひ、襖を開ける。

その先には、アオイと蝶屋敷三人娘。

そして。

優しい目をした、黒髪が外には向き腰に厄除の仮面を携えた女性隊士。

「あ、君が炭治郎？ 私は真菰。話は鱗滝さんから聞いてるよ。早速始めよつか」

名を真菰と、名乗った。

――

「カナエー。帰ったぞー」

炭治郎が機能回復訓練をしている間。

参座はいつも通り警邏を終えて帰宅していた。

しかし。

今日の自宅は、極寒だった。

冬：というわけではない。

なのに、白い息が出るのではないかというほどに冷え切っていた。

「カ：カナエ？ど：どうした？」

冷気の発生源はカナエだった。

「参座くん、そこに座りなさい」  
ぴしゃりと。

参座はその言葉に、本能でしたがった。

「私は今、怒っています。なんでかわかりますか？」

…心当たりがなかった。

「まきをさんから全部聞きました。先日、柱合会議…ひと悶着あったらしいですね？」

全てを悟った。

それと同時に、おのれ天元め嫁にしゃべったなど恨んだ。

「参座くん、私は悲しいです。参座くんの生き方は知っているし、もうそれはしかたないんだなって思っています」

「な、なれば仕方な「黙りなさい」…はい」

今日のカナエは、下手に触れば爆発する。

「私が、一番何が哀しくて、何に怒っているか。わかりますか？」

参座はとにかく頭をひねって考える。

これは、選択を誤れば血が流れる。

そう思わせるほどのカナエの怒気に、参座は冷静でいられなかった。

「…死を受け入れてもやむなしと思ったことかの」

「違います」

「えっ」

参座の頭には、まずいと言う言葉がよぎった。

「何がまずいんですか？」

その考えを悟られ、さらにまずいと思う。

「何がまずいか。言ってみてください」

「…どうかお慈悲を…」

鬼の大将かと思った。

カナエは一つ大きなため息を吐き、口を開く。

「いいですか、参座くん。今回のことは、仕方ないです。私も鬼と仲良くできればいいと、いつの日か参座くんと語り合った日があります。その私の想いに応えようとしてくれたのかなとも思います。…

それでも」

そこでカナエは、正座で座り込む参座の胸にすつと入ってくる。「柱のみんなと、喧嘩したんでしょ…痛いじゃない。苦しいじゃない…。どうして、私に言ってくれないの？あなたの哀しみや苦しみを、どうして今回は吐き出してくれないの？」

「…すまぬ」

「私は、たとえば参座くんが背負った刃たちを何もかも捨てたって、決して嫌いになつたりなんかしない。だからお願い、あなたが苦しいと思つたり哀しいと泣き出しそうなときは、一緒に心を痛めましょう。一緒に枯れるまで泣きましよう？」

「…あの日。口づけを交わした時より。ワシは、カナエを決して悲しませまいと誓つた。しかし、それは間違いだったのだな…」

「間違ひなんかじゃない。でも、正しくもないわ…。口づけには、その数だけ誓いと意味があると思うの。私の口づけは、あなたの哀しみと苦しみを共に背負い、それでも一緒に笑うことなの」

「ああ…カナエ、ヌシは本当…ワシにはもつたない程の、できた女よのう…」

参座は涙を流し、そういつて。

カナエの唇に新たな誓いを重ねた。

――

それから、機能回復訓練には善逸も参加し女性にドン引きされながらも勝ち星を挙げたころ。

炭治郎は自分が遅れを取っていることに焦りを感じていた。

しかし、善逸と伊之助がどれだけ速く身体を動かしても、真菰にはかなわない。

真菰が階級乙の隊士であるからといっても、確実に手加減している。

この訓練の間、真菰は一度も速さを変えたりはしていない。そこにたどり着こうにも、全くたどり着けない。

本来であれば、アオイに勝った時点で合格。

しかし、真菰が無理言って同門の炭治郎に助力したいと名乗り出た。

そこで、産屋敷は禰豆子を守るということもありこれを承諾。

機能回復訓練とは名ばかりの、強化合宿だった。

そうして、善逸が諦めて現実逃避。

伊之助が負け続けたことにへそを曲げる。

道場へは炭治郎しか来なくなった。

「あなただけ!? 信じられないあの人たち!!」

「あらー…ちよつとやりすぎたかな?」

アオイは怒髪天を衝く勢いで怒る。

真菰は少し難易度を上げすぎたかと反省した。

「あ、明日は連れてきますから…」

「いいえ! あの二人にはもう構う必要ありません! 真菰さんも忙しい中せっかく協力してくれているというのに。あなたも来たくなければ来なくていいですからね。真菰さんには任務に戻ってもらいますので」

しかしさすが炭治郎。

己がこの訓練に打ち勝って、あの二人に効力法を教えればいいと己を奮い立たせた。

十日が経過した。

未だ真菰から一本も取れない炭治郎。

流石に気の毒に思った真菰だったが、さすが鱗滝の弟子。

何も言わない。

己で気が付き、ここまでくると信じて疑わなかった。

それに、自分に負けてほしくなかった。

そして、炭治郎がとぼとぼと廊下を歩いていると。

袖をしたから引つ張られた。

どうやら手拭いを渡しに来てくれたらしい。

「ありがとう! 助かるよ、優しいね」

その言葉に気をよくした三人娘。

炭治郎は、全集中・常中のことを聞く。

それからは走り込み、そして呼吸を長く止める自己訓練。

少しずつでも、真菰や義勇…そして参座に近づかんと邁進する。

そして瓢箪を割るためにまた走りこみ、夜は全集中・常中をしながら瞑想。

ある日。

夜に蝶屋敷の屋根で瞑想していた炭治郎は、後ろから声をかけられて振り向く。

「炭治郎とは一度ゆっくり話してみたかったんだよね」

「真菰さん…でしたよね。鬼殺の任務で忙しいのに、いつもありがとうございます」

「ねえ、鱗滝さんは元気だった?」

「はい!とつても元気でしたよ!…:会ってないんですか?」

「私はね、出来損ないなんだ。最終選別で、異形の鬼の首を斬れなかったの。だから、鱗滝さんに会う資格はないんだ」

自分は、藤襲山の最終選別で。

異形の鬼の首を斬れなかった。

鱗滝の弟子を好んで食うあの鬼を。

自分がその連鎖を斬ることはできなかった。

文はよく来る。

それに返事もする。

だが、顔を見せることはない。

それは何より、自分が許せないから。

「…錆兎が、真菰さんのことを話してました。あいつがいれば、もつと呼吸を鍛えられるけれど、それができないから、身体に刻めって言われてボコスカ殴られました」

錆兎。

義勇と共に最終選別へ行った兄弟子。

帰ってこなかったはず。

ならば、おそらく。

魂だけになっても、鱗滝を助けたいと現れた。

「つよいなあ、錆兎は。私はダメだね。ダメダメだよ」

「そんなことありません。真菰さんからは鱗滝さんみたいな、優しくて強いにおいがあります。それに、鱗滝さんは時々手紙が来ると、とても寂しそうなにおいがしてました。きつと真菰さんに会いたいですよ」

「やさしいからね、鱗滝さん。私は会えないよ、柱でもないし。義勇だつて会いに行つてないのに、私がこのこいけないよ」

炭治郎は、この女性人をなんとか救つてあげられないかと心を痛めた。

しかし、自分がかけてあげられる言葉がなく、またも無力を痛感した。

参座なら、もつとなにか言つてあげられるのではないか。

「でも、炭治郎があゝの鬼を斬つてくれたんでしょ…：ありがとうございます。みんなきつとお礼を言つてるよ」

そういつて、頭を撫でられた炭治郎。

どうしてこんなに優しい人が、苦しんでいるんだろう。

とても悲しかった。

「全集中・常中はどう？うまくできそう？」

「少しずつではありますけど、できるようになってきました！」

「そつか！炭治郎は筋がいいよ！私はもつともつとかかったもの！私も呼吸だけはよくカナエ様に褒められたよ」

「しのぶさんのお姉さんですか？」

「そうだよ。私は一時期カナエ様の継子として修業を受けたことがあるの。花の呼吸は水の派生だから。でも十二鬼月の首は硬くて斬れなかったの。だから継子はやめさせてもらったんだ」

そんな。

こんなに強い人でも、斬れないのか。

柱とは、どれほど強いのか。

改めて再確認した。

「それでも、刀を握るんですね…。真菰さん、あなたは強い人だ」「ありがとう、炭治郎。さ！コツを教えるから、がんばろつか！」

それから真菰による呼吸の指導が始まった。  
その教え上手さに、炭治郎は度肝を抜かれるのだった。

――

そしてついに。

炭治郎は大きな瓢箪を割り、真菰とのかけっこに勝った。

これに焦った善逸と伊之助。

ここで真菰の教え上手とその可憐さが光った。

できるできると励まされ、的確な教えを受けた伊之助は、そのままの勢いでうまく真菰に乗せられた。

善逸はというと、この訓練をうまくできたらデートすると約束して奮起させた。

それから数日して、炭治郎と伊之助の日輪刀が打ちあがった。

鋼鐵塚および鉄穴森と日輪刀についてひと悶着あったがそこは割愛。

全快した三人は次なる指令を受ける。

何やら、列車の乗客が次々消える事件が勃発していた。

大正にて開業した蒸気機関車。

炎柱、煉獄杏寿郎とかまぼこ隊が原因究明に向かう。

物語はいよいよ無限列車編へと向かう。



ワシはワシを斬らねばなるまい。

「うまいーうまいー！」

列車の乗客室で弁当を平らげるのは。

炎柱、煉獄杏寿郎。

四十を超える人々が行方不明。

そして数えぬ名の隊士が消息を絶った列車。

「杏寿郎…もつとゆつくり食わぬか」

「む！しかしだ参座殿！この駅弁なる物！実にうまい！」

参座はひじ掛けに肘を置き、頬杖をしながら杏寿郎の食べっぷりにこやかにみる。

そして水筒の茶を渡す。

「うむ！すまぬ参座殿！」

「あれ！参座さんじゃないですか！」

そこへ現れたのは、炭治郎たちかまぼこ隊の面々だった。

「うぬ？炭次郎ではないか。こんなところへ何用だ？」

炭治郎はどうやら杏寿郎に、日の呼吸について聞きに来たようだった。

しかし、杏寿郎は全く知らぬと早々に話を切り上げる。

そして鬼が出ると聞くや否や、善逸が叫びだす。

そして車掌が切符を切りに来た。

――

カナエがいた。

しのぶがいて、カナヲがいて、アオイと三人娘がいた。

蝶屋敷が、診療所として機能している。

「参座さん！薬持ってきてください！」

しのぶに診察室より声を出されて、薬を持っていく。

「ああ、ありがとうしのぶちゃん。いつも助かるのう。それに、参座もほんとありがたいのう」

「いいえおばちゃん、恩人の祖母ですもの。当然のことですよ」

「さあ婆様。ワシらはまだまだまだ仕事が残っておるでな。カナエのところにも先に帰っておつてくれの」

「うんむ。では、ワシは失礼するかのお」

そういつて、参座の祖母は蝶屋敷を出ていった。

それから、患者が続々ときた。

皆口々に、ありがとうとか。

助かるよ、とか。

刀を握らなくなつてから、本当に感謝の言葉をよく聞く。

「しのぶよ。ワシはこの仕事が好きくて仕方ない」

「…そうですね。参座さん、いつか言つてましたものね、人を救う仕事がかしたいつて」

「願つたりかなつたりだの。いつか夢に見たことが、そのままかなつたようだの」

「姉さんは寺子屋に慣れました?」

「うむ。最近はカナエ先生と呼ばれるのがうれしくて仕方ないらしい。試しにワシが呼んだら、だらしなく口を緩めておつた」

それは別に先生と呼ばれるというより、参座に呼ばれたからなんじゃ…と、しのぶは惚気を苦笑いで聞いていた。

「平和だのう。食い倒れておるワシを、カナエが拾つてからというものの。まるで夢のようだの」

「正直カナヲの時より驚きましたけどね…。私と同じくらいの歳の子を、姉さんが連れてくるんですもの」

「はっはっは!あの頃は本当に悪ガキじゃった!婆様に癩癩を起して家を飛び出すなんて、あとにも先にもあの時だけだの」

はて。

なぜ自分は、家を出たのか。

昔の記憶だった気がする。

思い出せないが、こうして今はこうして幸せなのだから良しとしよ

う。

参座は無理やり思考を切り替えた。

「おい参座よ。この街一番の大食い娘の噂を知っているか？」

気が付くと、参座は小芭内に肩を組まれていた。

人目を忍ぶ声量で、小芭内は参座に問う。

「おお、知っておる。あの派手な髪のおなごじやろうて」

「そうだ。俺は一目見たときから少し気になってな。貴様、話しかけてっい」

「…自分でゆけ。良いか小芭内、恋とは己でつかみ取る物での」

「胡蝶から婚約を言い渡された腑抜けが俺に説教か？」

「ぬう…痛いところを」

「この辺のそば処によく来るといふ。ほら、行くぞ」

小芭内はそういつて参座の腕を引く

「ねえ、永遠の愛を…。誓ってくださいますか？」

次に気が付くと、カナエが白無垢に身を包んでいた。

なんて美しいか。

この姿をどれほど待ち望んだか。

「…誓おう。このワシの命尽きる、その時まで」

ぱあと。

花が咲く。

そうして、夫婦となった。

その神前式を見守るのは、参座の祖母。

そして、カナエの姉妹。

二人の友人はもちろんのこと、下の姉妹たちの友人もカナエの白無垢を見んと駆け付けた。

さらには、蝶屋敷に世話になっている患者たちもちらほらと見える。

多くの人の喜びと祝いの声。

参座はこの上なく、幸せだった。

これが夢でもいい。

覚めないでほしいと思った。

そう。  
覚めないでくれと、願った。

――

眠り鬼、魘夢。

下弦が解体され、唯一生き残った鬼。

その鬼に、幸せな夢を見せてもらうがために、不遇な人間たちがその夢に潜る。

そして、参座の夢に潜ったのは、一人の少年。

鬼によつて家族を殺され、それを忘れるがために鬼に組した。

何と哀しいか。

参座であればそういつて、抱きしめただろう。

しかし今、参座は己の現実を忘れるほどの幸せの中にいた。

完全に警戒されていない。

安心した少年は、参座の無意識領域へと進む。

「…わああああ!!」

そこに踏み出した途端、少年は叫びだした。

「許してくれ! 違うんだ! 俺じゃないっ! お前らを斬ったのは俺じゃない!」

地獄のような空間だった。

皮膚を溶かすほどの劫火。

亀裂の入った地面。

その亀裂より、幾千の骸骨がその身に劫火を纏いながら、少年を見る。

「やめてくれ! 俺じゃない! 俺じゃないんだ! あいつだ! あの鬼狩りだ!!」

なおも少年は叫ぶ。

少しでも声を出して、この頭に響く声をかき消さないと、手に持つこの千枚通しを己の心臓に突き立ててしまいたいそうだった。

核を探して破壊し、一刻も早くここからでなくては。

そう決心して、核を探すためにあたりを見回すと。

その骸骨がうんと密集しているのが見える。

そして、その骸骨たちはなんと。

その核を破壊せんとばかりに、朽ち果てた刀や槍を投げていた。

なんとということか。

ありえない。

自らの核を破壊するなど、正気の沙汰ではない。

例え無意識といえど、そこには自分を動かすすべてがある。

それを自分で壊そうなど、自ら死のうとしてしていることと同意義で

あった。

もう訳が分からなかった。

これは現実じゃない。

そう自分に言い聞かせて、核を破壊するために足をすすする。

呼吸は乱れ、ものすごく暑くて寒い。

とにかく、これを壊さなくては、自分が鬼に殺される。

そう思い、涙をこらえ進む。

いよいよ核が見えてくる。

そこには、一人の女性がいた。

その女性は、その核を優しく抱きかかえていた。

目を瞑り、己よりも大切なものだといわんばかりに、その身体で包

んでいる。

ただそれだけで、幾千という猛攻をまるで受け付けていない。

その周りだけ、とても暖かい。

先ほどまでのあべこべな不快感はなく。

ただただ、心から力が込み上げてきた。

少年は、なぜ自分は鬼に従っているのだろうと自分を叱咤した。

「俺はきつと、立ち向かわなければ駄目だったんだ……！」

拳に力が入る。

この女性の近くにいると、何かを護りたいという気持ちが無性に湧いてくる。

そして、今の自分ならどんなことでもできると思えた。

「俺は、あなたたちの為に…戦いたい！戦わせてくれ！」

そういうと、少年の意識は参座の中から弾き飛ばされた。

その時。

優しい顔をした女性が、ほほ笑んだ気がした。

――

少年は、目が覚めると自分が結んだ縄が焼き切れていることに気が付く。

「幸せな夢の中にいたいよね。わかるよ。俺も夢の中にいたかった…」

そういつて、騒ぐ少年少女を炭治郎が気絶させているところだった。

しかし、二人の少年は入った者の心に共鳴し、その心を穏やかにしていた。

「…大丈夫ですか？」

炭治郎が二人に問いかける。

「…ありがとう。気を付けて」

「俺も、もう大丈夫だ。君たちに心配はもうかけないよ。この子たちは俺たちに任せて、君は君のするべきことだけに集中してくれ」

炭治郎はその言葉に安心すると、禰豆子に皆を起こすことを指示し、自分は鬼の首を取るために屋根上へと上がる。

進むとそこには、下弦の一。

炭治郎に、死んだ父親の夢を見せてやろうかと挑発をする。

そしてさらに口を開く。

「それに、あの白髪の男…。ただの夢だということに薄々感づいているのに、目を覚ますことから無意識に逃げている。本当に脆弱で愚かだ」

炭治郎は憤慨した。

「お前に参座さんの何がわかる！人の為に、自分のすべてをにかけてくれる人が、脆弱で愚かなんてことは、決してない!!俺はお前を許さない!!」

日輪刀を抜く。

—水の呼吸 拾ノ型 生生流転—

—血気術 強制昏倒催眠の囁き—

魘夢は、炭治郎に催眠をかける。

だが、炭治郎の拾ノ型は止まらない。

自分を救ってくれた人を馬鹿にしたこの男を。

自分の家族を侮辱したこの鬼を。

斬る。

その刃は首に届いた。

炭治郎は驚愕した。

首だけとなった鬼が、話し始めたのだ。

この列車と融合したと。

そして、ここにいる二百人余りが人質だと。

「参座さん！煉獄さん！善逸！伊之助！寝てる場合じゃない!!起きてくれ頼む!!」

そして禰豆子に乗客を守るようにいうと、伊之助が応えた。

「猪突猛進！伊之助様のお通りじゃアアア!!」

炭治郎は、叫ぶ。

この列車にはもう安全なところがないと。

まずは、眠っている人の安全が最優先だと。

それに呼応して、伊之助が型を放つ。

—獣の呼吸 伍ノ牙 狂い裂き—

身をひねった伊之助の二本の太刀は、列車から生えてくる鬼の肉を切り刻んだ。

しかし、禰豆子が乗客を守るために捕まり、引きちぎられそうになる

—雷の呼吸 壺ノ型 霹靂一闪 六連—

雷が落ちたかのような轟音が、六つ。

彌豆子を守るべくと轟いた。

そして、どおんと。

列車を揺らす衝撃が、炭治郎まで届く。

「竈門少年！」

杏寿郎が、目を覚ました。

「煉獄さん！」

後方五両は請け負う。

残りの三両は善逸と彌豆子が。

杏寿郎は手短に炭治郎に指示する。

「参座殿の目が覚めん！致し方ないが、我々だけですべての人を守り、鬼の首を取る！気張れよ竈門少年！」

そうして、杏寿郎は後方車両へと向かう。

その磨き上げられた身のこなしに、炭治郎は関心するが、すぐに気を入れ替え伊之助と首さ探しに行く。

――

「ねえ参座くん。行かなくていいの？」

その頃、参座はまだ幸せな夢の中でカナエと夕餉を楽しんでいた。

「行くとは…どこへだの？カナエ」

「みんなを助けによ」

「…ワシにそんな力はないのだが？ワシは勉強しかできぬひよろなのだが？」

「ねえ、その身体をよく見て？」

「…？」

はて。

自分の身体はこんなにも鍛えられていたのだろうか？  
しのぶのところでは男手が足りないということもあり、重いものなどは持っていた。

それでも、こんなに筋肉が発達していただろうか？

これではまるで…。



「まるで、何かと戦っていたような…?」

「…ごめんなさい!何でもないわ!最近参座くんだったらしのぶにこき使われて、男らしい身体つきに磨きがかかってきたわね!」

「ふむ…そうだのう。そんな気がするのう」

参座は、あまりにも心地いい夢なものだからこそ。

夢だと気が付こうとした自分を、捻じ曲げた。

そして、食器をもって台所にて洗い物をするカナエを、後ろから抱きしめた。

――

―ヒノカミ神楽 碧羅の天―

ついに、炭治郎が魘夢の首を斬った。

父が、家族が。

炭治郎に力を与えた。

大きな首の骨を断ったのだ。

列車は横転する。

炭治郎は車掌に刺されたが、それでも死ねないと歯を食いしばる。

足を挟まれた男を助けてくれと伊之助に懇願し、文句を言いながらも助けに向かってくれる伊之助に安堵する。

「全集中の呼吸ができるようだな!感心感心!!」

夜空を仰ぐ炭治郎の視界に、杏寿郎が入る。

呼吸の精度を上げ、炭治郎に血管の止血を促す。

全ての人を守ることができた。

杏寿郎は、炭治郎たちを誇らしく思いながら伝える。

そして、奴が来た。

上弦の、参。

罪人の証である墨を入れた鬼が、轟音と共に降り立ったかと思いきや、炭治郎の頭をつぶそうとその拳を振り下ろした。

―炎の呼吸 弍ノ型 昇り炎天―

驚異の反応。

炭治郎の頭は、間一髪守られた。

「いい刀だ」

杏寿郎は、その再生速度と鬼気に圧倒される。

それでも、決して負けないと己を奮い立たせる。

上弦の参は余裕を崩さず、意味のない押し問答をする。

そして、炭治郎を弱いと吐き捨てた。

杏寿郎は、その問答に付き合うことはないとわかりながら、言葉を交わす。

「お前も鬼にならないか？」

「ならない」

即答。

これは己が死ぬとしても、決して譲ることはない。

上弦の参は、杏寿郎の強さがなぜ至高の領域へ至れないのは、人は老いて死ぬからといった。

「それは違うぞ、上弦の参。至高の領域など超え、境地へと至ったものを俺はこの目で見た。それはだれよりも優しく、だれよりも強い。この俺が刀を持つ意味などないといわしめるほどにな！」

「…ほう？」

「だが！それでも、俺が刀をもたなくていい理由にはならん！彼もまた人、いつか老いる。そして、傷を受ければ、死ぬ。だからこそ、強い。だからこそ、儂く尊い」

「戯言を」

「…強さというのは、肉体にのみ使う言葉ではない。この少年は、弱くない。俺の尊敬する男も、同じことを言う。何度でも言おう、君と俺では価値基準が違う。俺はいかなる理由があろうと、鬼にならない」「そうか…鬼にならないのなら、殺す」

―術式展開 破壊殺・羅針―

―炎の呼吸 壺ノ型 不知火―

炭治郎の目では、届かなかった。

伊之助も、追えなかった。

彌豆子と善逸はとうに気を失っている。

「君、大丈夫か!？」

先ほど、参座の夢に潜っていた少年が、炭治郎の元へ駆け寄ってくる。

「お、俺は大丈夫!ここは危ない、君は早く逃げて!」

「君も連れていく!」

「ダメだ!俺が加勢しないと…!」

「動くな!!傷が開いたら、致命傷になるぞ!!待機命令!!」

炭治郎は、身を固めた。

その鬼気迫る迫力に、気圧された。

「弱者に構うな杏寿郎!全力を出せ!俺に集中しろ!」

—破壊殺・乱式—

—伍ノ型 炎虎—

「死ぬな、杏寿郎」

もう立っているのもやっとだった。

片目はつぶれ、肋骨は砕け。

内臓は傷ついている。

それでも、杏寿郎は刀を離さない。

「俺は俺の責務を全うする!ここにいる者はだれも死なせない!!」

その背中の大きさ。

纏う気迫の壮絶さ。

そして、その胸に秘めたる覚悟。

どれをとつてもまごうことなき漢。

—奥義 玖ノ型 煉獄—

—破壊殺・滅式—

その時、杏寿郎は。

その攻撃をこの身に受けてでも必ずこの鬼の首を取ると決めていた。

そして、上弦の参は確実に拳がその身体を貫いたと思った。

「…なぜ!」

「なぜ邪魔をしたア!!弱きものよ!」

炭治郎の隣にいた、少年が。

参座の夢に入った少年が、二人の間に入り。  
その胸を貫かれていた。

参座の核の前で。

少年は共鳴した。

そして、参座の記憶：その身体をどうやって動かしているのかを、  
その頭に見た。

呼吸の仕方、体の動かし方。

およそ、人間にできる技ではなかった。

しかしそれでも。

この心に宿った、優しい男なれば。

ここで、その命を燃やす勢いで無理をして。

誰かを助けねばと思い、動くだろう。

少年の足の筋肉は当に切れ。

目は酷使したため充血し失明していた。

そして無理やりポンプのように動かした肺は、横隔膜が裂け肺胞の  
ほとんどが爆発していた。

なにも話すことができないまま、その息を引き取った。

しかし、この少年が生んだ、一秒にも満たない時間。

全てを変えるには十分だった。

――

参座は、カナエが眠る布団に入ろうとしていた。

こうして眠るのは、蝶屋敷から始まったのだな、と。

「ねえ、いつまでここにいるの？」

「…どうしたカナエ？ワシは、いつまでもここにおるでな」

「私はね、どんなことがあっても、参座くんを嫌いにならない。でも、

私は…優しい参座くんが好き。誰かの為に、つつい無理しちゃう…

そんな参座くんが好き」

「…嬉しいのう」

「ねえ…早く迎えに来て？本物の、私を」

そういつてカナエは、参座と唇を重ねる。

「本…物…？」

何を言い出すかと思えば。

まるで目の前のカナエが偽物であるような言いぶり。

そんなことはあるはずがない。

こんな幸せな世界が、偽物のはずはない。

しかし、この口づけは。

とても大切なことを誓った。

そして、それを忘れるとき。

自分は、天羽 参座でなくなることの意味する。

さつきで布団にいた参座は、気が付くと地獄にいた。

燃え盛る劫火。

亀裂から手を伸ばす骸骨。

お前が殺したと囁く。

「そうだ。ワシが斬ったのだ」

参座は思い出した。

己が斬った鬼たちの声を。

己がもらい受けた、刃の重みを。

腰に携えているのは、悪鬼滅殺を誓った日輪刀。

絶対の信頼を持つその身体には、己の想いを綴った墨が彫られてい

た。

そして、眼前には。

己のすべてといえるであろう白い大きな珠があり。

そこには愛する女性が、その小さな身体一つで全てから護ってくれ

ていた。

「オオオオオオオオ!!」

参座は雄叫びを上げた。

そして腰から鞘ごと日輪刀を抜き、己の正面で抜刀する。

悪鬼滅殺。

それを誓ったこの命は。

この女性に護られていた。

なんと情けないことか。

なんとみつともないか。

その不甲斐なさと、己への怒りで、涙が出る。

どれだけ己の力が強くても。

どれだけその刀で鬼を斬ろうとも。

一人では何もできぬのだ。

しかし、目を覚まさねばなるまいて。

「皆が、ワシを頼ってくれておるのだ。応えぬわけなからうて」  
そういつて、参座は己の首を落とした。

ワシは斬り合なれば決して負けぬが…。

「その勇敢な名も、聞けぬのか…」

上弦の参、猗窩座は戦慄した。

突然現れた、白髪の隊士に腕を切り落とされていたのだ。全く知覚できなかった。

「せめて安らかに眠れ。ワシがその刃を貰い受ける」

炭治郎も、なにも匂いを感じ取ることが出来なかった。

参座に、感情を感じ取ることができなかった。

「杏寿郎…すまぬ。寝すぎた」

「参座殿…俺は…俺は…！」

「ワシのせいだの。杏寿郎、集中」

至って冷淡に言う参座。

しかし、その声で少年にかばわれた杏寿郎の消えそうな心の炎は再度燃え上がる。

己が打ち倒すべき敵の姿を見る。

参座が斬った腕はもう再生していた。

しかし、もうそんなことはどうでもよい。

「立ち上がった勇敢な少年の為にも!!ここで貴様を倒す!」

「さて、杏寿郎。斬るぞ」

―術式展開 終式 青銀乱残光―

猗窩座は本能で察した。

この白髪の男に動かれてはならないと。

最高最広最速の、全力。

柱でも受けきれないその攻撃。

杏寿郎の日輪刀は、その究極奥義を受け、折れた。

しかし、その脅威が杏寿郎を襲うことはなかった。

「のう。ヌシは上弦の参か?どうだ、力ない少年が己に刃を向けた姿は」

腕が消し飛んでいる。

まずい。

距離を取らねば。

再生を急げ。

「何も…感じぬのか？心が…震えぬのか？」

しかし、どれだけ足を急いでも。

どれだけ速く動いても。

その男は正面から外れない。

不快だ。

だから、猗窩座は言葉を投げつける。

「貴様こそ！よくそんな無感情でいられるな！俺にはわかるぞ！お前に感情はない！その身体に闘気を感じない！！」

猗窩座は自分で言っただけで初めてその違和感に気がついた。

闘気のない人間など、見たことない。

赤子ですらその身に闘気を宿しているのに。

「ふむ。ヌシにはそう、見えておるのか。なれば、鬼になろうと此処にはたどり着けまいて」

闘気に反応する血気術、術式の羅針。

しかし、その針は振れない。

違和感が恐怖となり、猗窩座をひるませる。

「ヌシ程度の羅針で測れると思うなよ。ワシの背には、数多の刃がヌシにその切っ先を向けておる」

「そんな…バカな…」

参座の闘気とは。

この場をまるっと包み込んで余りあるほどだった。

羅針はその針を止める。

「斬る」

この鬼の首を斬らんとしたとき。

新たな影が現れた。

―月の呼吸 陸ノ型 常夜弧月・無間―

その無数の斬撃は、参座と杏寿郎を切り刻もうとしていた。

しかし、参座はそのすべての斬撃を弾き飛ばす。

「ふむ…その眼。ヌシが上弦の壺か。名は？」



「…私は、黒死牟」

上弦の壺、黒死牟は目の前にいるその白髪の男に。

己の弟を幻視していた。

「お前は…不快だな。縁壺を見ているようだ」

「その縁壺なるものは知らぬが。そうか、又シが黒死牟か」

言うが早いのか、その場にいるものたちの目から参座が消えた。

刀を抜き、黒死牟に斬りかかった。

多くの目が蠢く、黒死牟の刀は切断された。

刀を交えた参座は、察した。

この鬼の殺気が己に向いていないことに。

「猗窩座、帰るぞ。もう夜が明ける」

黒死牟は猗窩座に声をかける。

憎々し気に舌打ちするも、猗窩座は黒死牟の後ろを追いかける。

「待て！逃がさん！！」

「杏寿郎！！判断を違えるな！」

参座はそのあとを追いかけようとした杏寿郎を止める。

「ワシが黒死牟と刀を交えれば、猗窩座によってここにおるものたち

は皆殺しだ」

「しかし…！」

「ワシらは敗北したのだ。これ以上、みじめな姿を晒せまいで。それ

はあの少年への侮辱にもなる。今は耐えよ」

「……………はい」

そうして、朝日が顔を出す。

大いなる日輪。

それは、敗北したものたちを照らす。

「杏寿郎、又シの心は、いかように折れる？」

「…折れません！たとえ四肢が引きちぎれようとも！たとえ目の前で何を失おうとも！この命ある限り、人々を護るという誓いは、決して折れません！」

杏寿郎は、涙を流しながらもあの時誓った言葉を叫ぶ。

「又シは強い。ワシは、本当に間に合わなんだ。いつもいつも、いつ

も。間に合わなんだ…」

「素晴らしいながら、参座は命を捨てて皆を護ってくれた少年の元へ向かう。」

「せめて…その名を。強き少年の、名を聞きたかったでの…。ワシは、又シを尊敬する。そして、決してその姿忘れぬと誓う」

惨たらしい姿となった少年の頭を。

参座は優しく、優しくなでる。

「すみません、煉獄さん…参座さん…！俺が！俺が弱かったから。俺が刀を握れなかったから!!」

「…こつちへおいで、炭治郎」

炭治郎は、泣きながら参座の元へ寄る。

「ワシが、遅すぎたのだ。又シが気に病むことはない。忘れるな、炭治郎。どんなに打ちのめされようと、どれだけみじめに這いつくばろうとも。ワシらは誰かを護るために戦っておる。だが、人なのだ…出来ぬ事はある。ワシはそれを教えてもらったのだ。だから炭治郎、その足を止めるな。悔しいと思うのなら、次があれば…必ず護って見せよ」

そういって、炭治郎を抱きしめる。

やっと、参座からおいがした。

ひどい哀しみのおいだ。

この場にいる誰よりも濃い。

「こぼしすぎておるのだ、ワシは。その救いの手を。斬ることは簡単にできる。だが、護ることは本当に難しいのう」

強く強く炭治郎を抱きしめる。

参座もこの時、己の無力さを感じていた。

斬ることと、護ることは全くの別。

自分が簡単にできることは、斬ること。

それをよく知っているからこそ、参座は足を止めない。

斬ることをやめたとき、己は誰かを護れるかもしれない可能性を捨ててしまうと理解しているから。

「伊之助も、おいで。又シも悲しくて哀しくて仕方ないのだろうか？今

は良い。こつちへ来るのだ」

伊之助は、何も言わず参座の元へ近寄る。

杏寿郎は、日輪刀を納刀し、少年の亡骸に手を合わせる。

この日、鬼殺隊は敗北した。

だが、一人の名もなき少年の行動が。

鬼殺隊の宝たちを護った。

――

「カナエ。帰った」

唯一無傷の参座は、自宅へ帰宅した。

「参座くん、お帰りなさい！お昼ご飯の支度する…わ…」

何も言わず、参座はカナエに抱き着いた。

そこにはいつものような、包んでくれる優しさはなかった。

カナエは、ただただ体重を預けてくる参座に、今回はただ事ではないと察する。

「護れなかった」

一言。

カナエは、参座を抱き留めながら居間へ連れていく。

「力もない、刀も握ったことのない少年に。背負わせてしまった。ワシが護らねばならぬものを」

いつもの優しさも、強さも。

その顔からは伺えなかった。

カナエですら、何も言えなかった。

それほどに、衰弱していた。

「ワシは弱い。強いと豪語してきたが。弱い」

そんなことない、と声をかけてやれなかった。

カナエもまた、己の不甲斐なさを呪う。

「だが。それでも、ワシは前を向かねばならぬ。刀を握らねばならぬ。カナエ…力を貸してくれ」

「当然です。あなたのすべてを、私も背負います」

そのあと参座は泣いた。

枯れるまで泣いた。

昼餉をすつ飛ばして、眠るまでカナエの胸で泣いた。

疲れ果て眠る参座を、その視界からなるべく離さぬようカナエは夕

餉を支度した。

そして、夕餉を食いながら。

また参座は涙を流した。

なんて旨いのだろう。

なれど、あの少年はもう飯を食うこともできない。

愛しいと思うものと出会うこともできない。

心が、初めて軋む。

護れないことは今までたくさんあった。

間に合わないこともあった。

だが。

護るべきものに、護られたことはなかった。

己は何のために刀を握っている？

どうして人より強く生まれた？

今日、この日のためだったのではないか？

自分を斬つてやりたかった。

その心の地獄が、燃え盛る。

その劫火が、心を焼き尽くそうとする。

それでも。

その心には、一人の女性がいる。

その女性が、参座の心が壊れぬように護っている。

そして。

目の前には、本物がいる。

息をしている、声を発している、触れてくれる。

なればこの心。

折れるわけにはいかぬ。

そうして、床に就く。

「参座くん、彼にたくさんありがとうを言いましたよ？？」ごめんなさい  
じゃなくて、感謝を言うの」

「…そうなの。名も知らぬ少年よ…ありがとう」

参座はカナエの胸で眠った。

その夜は、夢を見た。

自分の心、白い珠。

それを優しく包んでくれる、女性。

そしてそこに。

強く優しい、男の子の手が添えられた。

――

杏寿郎の傷がある程度回復した。

片目は使い物にならなかったが、それでも両腕があるならば刀を握るときはなかった。

全快してはいないが、刀を振らねば身体がなまるとしのぶに無理  
言って退院を申し出る。

しのぶたちは止めたが、参座の好きにさせてやれという言葉で皆が  
折れた。

そして、杏寿郎が退院して数日。

参座は傷の痛みをやせ我慢する炭治郎を連れ、煉獄邸を訪れた。

「御免！杏寿郎はおるか！」

炭治郎は、煉獄邸の大きさに驚いた。

「あ、参座さん！兄でしたら、道場のほう「貴様何をしに来た！」…父  
上！」

「貴様ほどの剣技を持ちながら！死人を出すとは何事だ!!お前は強い  
んじゃないかったのか!!杏寿郎だってそうだ！柱になったからといっ  
て何になる！何を護れた？何を救えた!？」

槇寿郎が、怒鳴る。

柱の引退の原因でもあった参座が、一般人の死人を出した。それでは、このみじめになった心をさらにみじめにするではないか。

これほどの男でも、誰かを護れないことがある。

ならば、己の刀はどれほど弱いか。

それを叩きつけられた。

「父上！ 兄上をお守りくださった皆さんにそのようなこと」

「うるさい！ 刀を握れぬお前がいうな千寿郎！」

千寿郎がぶたれた。

それをみた炭治郎は、怒り狂う。

「俺の命を救ってくれた人を悪く言うな！ あんた何がしたいんだ！ 命をかけた息子を罵って！ 殴って！」

「お前たち、俺たちのことをばかにしているんだろう…。その耳飾り、日の呼吸の使い手の証！ 貴様らは特別力をもって生まれた！ なのになぜ…なぜ…!!」

そして、そこから罵詈雑言が浴びせられる。

楨寿郎は、そうしなければ己の弱さを誤魔化せなかった。

自分は弱い。

日の呼吸の使い手は、それは強かった。

だが、その派生の呼吸はどうだ？

真似事でしかない。

そして、この参座という男。

己にしか使えぬ呼吸。

型を持たぬ、完成された剣技。

どれをとっても完璧ではないか。

なぜだ。

なぜ自分はあるのようになれぬ。

なぜ、杏寿郎はあそこを目指す。

至ることはできないのだ、誰も。

「日の呼吸の使い手だからといって!! 特別な力をもっているからといって、調子に乗るな！」

「乗れるわけないだろうが！今俺がどれだけ自分の弱さに打ちのめされていると思ってるんだ！この、糞爺！！煉獄さんと参座さんを悪く言うな！！」

そういつて、炭治郎が槇寿郎へ向かっていく。

千寿郎が声を荒げて炭治郎を止めようとするが、止まらない。

参座は、槇寿郎の言葉がその頭をぐるぐると回っていた。

そして炭治郎のこおくすくりゆう頭突きが、槇寿郎にひつとした。

ごちんと、盛大な音がする。

そこで、参座の意識は戻ってきた。

気絶した槇寿郎を、皆で布団へ運んだ。

その騒ぎを聞きつけたのか、杏寿郎も来た。

「うむ！父上が見苦しいところを見せてしまい、申し訳ない！」

「い、いえ…。俺の方こそ、お父さんに頭突きしてしまつてごめんない…」

「なに、気にすることはない。すぐ目をさました。いまは参座殿と対談している！」

それから、日の呼吸について聞くと、千寿郎が槇寿郎の保管している歴代炎柱の書を持つてくる。

しかし、その中身はズタズタにされていた。

槇寿郎が己の無力さに耐えきれず、破いてしまったらしい。

「なに！心配いらない！竈門少年、俺の継子になると良い！俺が、君のことを鍛えてやろう！何よりもまずはその身体を全力で治すのだ！」

「はい！ありがとうございます！！」

「竈門少年、これをやろう。俺の日輪刀には、新しい鍔をこしらえる。

新たに誓うことがたくさんできた！俺は新たな想いで、日輪刀を握る！…そして君の妹！俺は信じる！血を流しながら、人々の為に戦うその姿は、鬼殺隊の一員といつても問題ない！胸を張つて生きろ！」

そういつて杏寿郎は、己の折れた日輪刀の鍔を炭治郎に渡す。

「…ありがとうございます。俺は、絶対煉獄さんを助けられるくらい強くなります！」

「楽しみにしている！俺もまずは、この片目での戦いに慣れなくては

ならん！あの少年の為にも、俺たちはこの刀を置くわけにはいかん！」

「はいー」

元氣よく返事をする炭治郎に、杏寿郎は自然と笑顔がこぼれる。

その頃、参座は槇寿郎のもとで話をしていた。

「…天羽、お前でも上弦はてこずるのか？」

冷静さを取り戻した槇寿郎は参座に問う。

「いえ。そのようなことはございませぬ。上弦の壱：奴は少し手ごわいやもしれませぬが、首を斬ることはそう難しくないかと踏んでおります」

「ならばなぜ、今回のようなことになった？」

杏寿郎にも聞かなかつたことを、訪ねる。

「恥ずかしながら血鬼術に長く落ちていた故、のちに聞きますと下弦の壱。それが今回の列車において人を多く食っていた黒幕であり、この天羽 参座が死の一步手前まで見た鬼でござりまする」

まさか。

最強の男がてこずったのは、たかが下弦の鬼だという。

槇寿郎は信じられなかった。

「もし今回、小生一人にて原因の究明および鬼殺に赴いておれば、まず間違いなく食われていたでしょう。それほどまでに、小生の心は脆く、弱いのです。なれど、杏寿郎がいた。炭治郎が、伊之助が善逸が。そして、彌豆子がいてくれました故、こうして生きております」

どれだけ強くても。

その心は、精神は。

まだ若いのだと。

槇寿郎は痛感した。

「醜態をさらした、この小生の汚点を…。皆が拭ってくれたのです。感謝で頭が上がらませぬ。どうか、杏寿郎に一言ねぎらってやってくれませぬか？その意志は、この天羽 参座など到底追いつかぬほどの高みにある故。どれだけ寂しくとも、どれだけ打ちひしがれても、己の足で立ち上がれるのです。小生は、それが叶いませんでした。愛し



きものが、この心を、刀を支えてくれておるのです。杏寿郎もその一人。なれど、あの男は、己のみで立ち上がるのです。なんと強いか、何と立派か」

参座の言葉に。

榎寿郎は、己の息子が少し誇らしくなった。

誰よりも強い男の先に、杏寿郎は至っているというのだ。

刀を捨てた己が育てた男が。

そして何より、己が愛した妻が育てた息子が。

その境地に届いているというのだ。

「どうか、杏寿郎を誇ってください。これからの鬼殺隊に…人の世に。彼は必要不可欠にございます」

「…頭を上げてくれ、天羽。そこまで誠意を見せられては、こう腐つてもおれぬ」

そういつて、榎寿郎は立ち上がり、部屋を出る。

向かった先は、杏寿郎と千寿郎、それに炭治郎がいる部屋。

襖を開けて、声をかけた。

「…杏寿郎、ご苦労だった。俺はお前を誇りに思う。千寿郎、お前は前で励めよ」

それだけ言つて、榎寿郎は部屋を後にする。

しかし、その一言で兄弟には十分だった。

二人は視線を合わせると、笑う。

「はっはっは！父上らしい！参座殿になにか言われたら嬉しいな!!それに、竈門少年の頭突きも相当効いているのだろうな！あっはっはっはっは！！」

「ぶっ！そうですね、兄上！あはははは！」

炭治郎は、その時のおいを忘れないだろう。

無邪気な子供のようなおい。

そこに、溢れんばかりの嬉しさのおい。

幸せが、溢れていた。

杏寿郎は、ここまで握ってきた刀が報われる思いだった。

そして、こんな気持ちになれたことを。

いつか来るその日。  
あの少年に、心からお礼を言おう。  
そう、誓ったのだった。

ワシはそう毎日斬るわけではない。

「…それで？なにか言い残すことはありませんか？」

「参座さん…助けてください！」

「炭治郎…ワシは強いが、勝てぬ者がおつてな…今、目の前におる」

煉獄邸から蝶屋敷へ帰ってきた炭治郎達を待つものとは。

鬼のような恐ろしさ、刃のような鋭さ！

ひとたびその顔に青筋を浮かべれば、どんな男も敵わない！

鬼だとしても、すべてをかなぐり捨てて逃げ惑う！

大正の世に、阿鼻叫喚を巻き起こす女医！

その名も！胡蝶し「言いすぎですよ？死にますか？」…すみません。

蝶屋敷に帰ってきた二人は、それはそれは叱られた。

参座はいいとして、炭治郎は重体。

安静にしなければ、入院が伸びてしまうと。

それでも炭治郎は杏寿郎に会っておきたかった。

会って、感謝を伝えたかった。

その意を汲んだ参座によって、炭治郎は蝶屋敷を抜け出した。

しかし想定外だった。

まさかここまでのぶが怒るとは…。

参座は炭治郎に悪いことをしたなと思うと、しのぶにずいぶん余裕だたとさらにまくしたててくる。

当然その後で二人揃って、アオイにも叱られた。

そうしてようやくと説教から解放された炭治郎は、外の空気を吸うために蝶屋敷を出た。

「鋼鐵塚さん!？」

おどろおどろしい形相の鋼鐵塚が、マキリを手に炭治郎に迫る。

「刀を失くすとはどういう料簡だ貴様アアア！」

その鬼ごっこは夜明け近くまで続いたという。

そして、その翌日。

騒がしかった周りが、それぞれの仕事に戻っていった。

炭治郎は絶対安静ということで暇を持て余していたので、庭へ出て

鯉に餌をやっていた。

「煉獄さんはすごいな…まだ柱を続けるつもりみたいだし。きつとすぐに片目での戦い方を掴むんだろうな」

それに引き換え自分は。

何も護れなかった。

守られる側だった。

彌豆子の時も、守られていた。

「…泣いてるの？」

気が付くと、カナヲが立っていた。

「君は…カナヲ、だっけ？泣いてないけれど…？」

「哀しい顔…」

炭治郎の頭には、あの少年の最期が鮮明に焼き付いていた。

「…そうだね、哀しい。俺は、本当に無力だ。いつも護られてばかりなんだ…。彌豆子の為に刀を握ったけど、護れたことなんて無いんだ…」

カナヲは、その姿を参座と重ねた。

実弥が柱になる時。

カナエが上弦の弍に襲われた時。

そして、皆で夕餉を共にしたあの日。

その時の参座と似通った炭治郎の姿を見て、カナヲは何とかしてあげたいと思えた。

「辛い…よね。どうしても良かったら…いいのに。でも…どうしてもいいことなんて…ない…と思えた」

カナヲは、ずっと。

ずうっと、蝶屋敷の皆を見てきた。

どうでもいいと思っていたことも、後になるとそこがきっかけだったりする。

参座が涙を流してくれたこと。

その時は、どうでも良かった。

泣いてもいいと言われて、何故か泣けた。

その理由は、どうでも良かった。

だが、思い出すとやはりあの時だった。  
あの時泣けたから、今の自分がいる。

哀しみすら感じられなかった己の心が、少しずつ溶け始めたのはあの時からだ。

「できないと…思ってたことが。できるようになる…と思うの…。だから、炭治郎も…負けないで」

「…カナヲ」

カナヲと言葉を交わすのは、初めての事だった。

少し変わった子だと思っていたが、とても強い子だ。

それに、優しい匂いがする。

参座や、しのぶと同じ匂いがする。

「私は…とつても救われた…から。…私も、救えるようになりたい」

そう言つて、カナヲは炭治郎を抱きしめた。

自分がいつもさされてるように、頭を優しく撫でた。

「優しい人ほど…傷つく…。だから…私が治してあげたい…」

「カナヲは…とつてもいい匂いがするね。なんだか落ち着くよ」

炭治郎はずっと頑張った。

無力の状態から、ずつとだ。

手の皮が擦り切れるまで、刀を振り。

適わなくとも、鬼に立ち向かった。

それに柱にだって啖呵をきった。

妹のため。

家族のため。

苦しむ人々と、哀しき鬼のため。

その心をすり減らしてきた。

「休憩…しよう？頑張ったよね…炭治郎」

優しい声色に、炭治郎の目尻には涙が溜まる。

「…俺…おれっ！禰豆子のためにっ！みんなのために！頑張ったけど!!足りないんだ！何かをできるようになったら、またすぐ出来ない

ことが見えて…！何度も、何度も心が折れたんだっ！」

「…うん」

「でも皆が！俺よりも頑張ってるからっ！俺は……もつとがんばらなくちゃって!!」

「…疲れ…ちやうよね。…少しだけ、休も?」

「うっ…うわあああつ」

張り詰めた糸が、緩んだ。

炭治郎は、カナヲの腕の中で声を上げて泣き崩れた。

カナヲは、カナエの妹だ。

人のために、心を痛めることの出来る人間だ。

だから、炭治郎の心が張り裂けそうなのを、見ていられなかった。

力になりたいと思った。

心のままに、炭治郎を想い動いた。

「炭治郎は、すごいね…。強いね…優しいね」

長男で、下の子の面倒を今まで見てきた炭治郎は、人に甘えるという経験があまり無かった。

自分に姉がいたら、きつとこんな感じなんだな。

そう思つて、カナヲの腕の中で少しの休息を味わった。

「…あらあら」

その姿を横目に見たしのぶは、とても晴れやかな気持ちになる。

ついでにアオイまでその姿を見ると、後でどんな心境なのか根掘り葉掘り聞こうと決めた。

――

「うん、かなり良くなつたね炭治郎。この調子で頑張るんだよ?」

「はい…忙しい中ありがとうございませす真菰さん!」

それから炭治郎たちかまぼこ隊の面々は、蝶屋敷を拠点として任務に励んでいた。

杏寿郎の時間があるときは、煉獄邸で指導を受け。

真菰の時間があるときは、蝶屋敷で鍛錬に励んだ。

自分たちより格上の隊士との鍛錬は、本当に為になった。

真菰による呼吸の指南。

そして、杏寿郎との打ち込み稽古。

これは確実に実力として蓄積されて行った。

それは四か月の間続いた。

そして片目での戦闘でも以前のように戦えるようになった杏寿郎が、炎柱へと復帰した。

そして、ある日。

天元が、蝶屋敷を騒がせていた。

「放してください！私はず！カナヲはず！！」

小脇にカナヲを抱え、肩にはアオイを抱える天元の姿があった。

その時は運悪く、しのぶが買い出しに出かけていた。

なほ達三人娘が、離してくれと泣きながら天元を呼び止める。

「うるせえな黙っとけ」

天元は焦っていた。

嫁からの定期連絡が途絶え、その身が危険にさらされている。

だから、アオイはともかくカナヲまで隊士だと勘違いしていた。

「女の子に何してるんだ！手を放せ！」

炭治郎は、天元に頭突きを振りかぶる。

「俺は元忍の宇随天元様だぞ。その界限では派手に名を馳せた男」

そんな頭突きを食らうかと吐き捨てる。

しかしそんな天元にひるむことなく騒ぎ立てる。

「てめーらコラ！誰に向かって口利いてんだコラ！！俺は上官！柱だぞこの野郎！！」

血圧が上がるほど叫び倒す天元。

炭治郎が、柱とは認めないと断言し、カナヲは隊士ではないという

と、天元はカナヲを投げる。

蝶屋敷の門のうえから投げられたカナヲは、ゾツとした。

自分は訓練なんか受けていない。

なほ達は小さいので、受け止められない。

落ちる。

恐怖した。

このまま、その硬い地面に自分は叩きつけられてしまう。しかし、そうはならなかった。

重力に従ったその身体が、もう一度ふわりと持ち上がる。

「大丈夫か？カナヲ。怖かったよね…遅れてごめんよ」

炭治郎が受け止めた。

そして、優しい顔でカナヲに声をかけた。

「おい！カナヲにひどいことしたら、俺が許さないぞ！」

「…そりゃあ悪いことをした。だがそれとこれとは話が別だ!!もう一人の方は隊員だろうが！使えそうもねえが、連れてくぞ！」

「ア、アオイは…ここが戦う場所だから…やめてください…」

カナヲも天元に異を唱える。

まさかカナヲがこんな風に自分の意見を目上に向かって言えるようになっていたことに、アオイは驚いた。

「人には人の事情があるんだから、無神経に色々つきまわさないで

いただきたい!!アオイさんを返せ！」

炭治郎もカナヲを助けるべく声を荒げた。

すると、天元の表情が少し変わる。

「ぬるい。ぬるいねえ。このようなザマで地味にぐだぐだしているから鬼殺隊は弱くなってゆくんだろうな」

「アオイさんの代わりに、俺たちが行く!!」

炭治郎は負けじと叫ぶ。

それに呼応するように、善逸と伊之助が天元を挟む。

二人も口上は違うが同じ気持ちだった。

それに対し、天元は威圧を放った。

本来であれば、女性の隊員が欲しかった天元だが、彼らの心意気に何か思うところがあつたのだろう。

この気迫に問題なく耐えられるのであれば、あるいは…。

そう思つたのだろう。

三人は、しっかりと腰を据えた。

「…あつそオ。じゃあ一緒に来ていただこうかね。ただし、絶対俺にさからうなよ、お前ら」

「…あつそオ。じゃあ一緒に来ていただこうかね。ただし、絶対俺にさからうなよ、お前ら」

「…あつそオ。じゃあ一緒に来ていただこうかね。ただし、絶対俺にさからうなよ、お前ら」

「…あつそオ。じゃあ一緒に来ていただこうかね。ただし、絶対俺にさからうなよ、お前ら」



伊之助が何処へ行くのか尋ねる。  
そして、天元は行き先を告げる。

「日本一、色と欲に塗れたド派手な場所」

三人には見当もつかなかった。

天元は、にやり…と笑う。

「鬼の棲む…遊郭だよ」

そうして、天元はかまぼこ隊を率いて、吉原遊郭へと向かうのであった。

――

ここは遊郭。

煌びやかな和装に身を包む、女の世界。

花魁になれば、すべてをものにできうる場所。

さて、今宵。

天元の三人の嫁が連絡を絶った。

そこに待つのは、鬼。

花魁に扮した、誰よりも美しい鬼。

鬼になっても忘れぬ、兄妹の絆。

これは、優しい兄の物語なのでもあろう。

しかし。

斬らねばならぬ。

斬ってやらねば、浮かばれぬ。

斬ってやらねば、救われぬ。

その手に掲げるは、日輪刀。

大いなる日輪の意志。

次回、遊郭の美しき鬼。

ワシは、今を斬るのだ。

吉原・遊郭。

そこは言わずと知れた、色欲の街。

しかし、そこで暮らす女たちは、希望を胸に働く。

身売りされ、それでもなお己を磨く。

美貌に教養、そして芸事。

それらすべてを兼ね備えられたものは、花魁となり皆の羨望を独り占めできる。

傾城、太夫、花魁。

そうして呼び名が変わってきたが、その至るところは変わらず。

花街で育つたならば、一度はそこからの景色を見たいと思う。

花魁道中でその三枚歯の黒い高下駄をみれば。

その八文字で歩くさまを見れば。

一度はそこを自分で歩きたいと思えた。

「きれい…」

荻本屋で振袖新造として働く凧は、ときと屋の鯉夏花魁の姿に見とれていた。

凧はまだ15歳の少女。

禿から荻本屋で働いてきた。

様々な花魁を見て、その姿に羨望の眼差しを隠し切れない。

「まきをさんもとつてもきれいだったな…体調は大丈夫かしら…」

ここ最近荻本屋に入ったまきをを花魁も、それはそれは素敵な女性だった。

気の強い女性だったが、とても面倒見がよくて姉御肌。

しかし、ここ数日間は体調が芳しくなく、部屋にだれも入らないように言いつけられている。

「お凧！新入りが入ったから、ちよいと手伝っておくれよ」

「はいー！」

女将に呼ばれた凧は、二階の部屋から恋夏花魁を見るのをやめ下へと降りた。

そして女将の所へ行くと、白粉と頬紅を塗りたくられた少女の姿が。

「お、女将さん…？この子は…？」

「信じられないくらい粗末な化粧をされてるけど、あたしの目には分かる。この子はなかなかの上玉だよー！」

凜がさすがに聞き出すと、なにやら化粧をし直すとの事だった。

女将は綺麗に少女の化粧を落とすと、驚くことに見事な美形だった。

手慣れた手つきで女将はせっせと化粧を直す。

「お凜、あんたはこの子に屋敷の案内をしてやっておくれ」

「は、はいわかりましたー！」

化粧の終わった伊之助を連れて凜は屋敷を歩いた。

立ち止まったのは、まきを花魁の部屋の前。

「まきを花魁は最近体調が優れないみたいで、部屋から出てきて無いの。心配なんだけど、流行病だといけないからって部屋に入るの禁止されてるの…」

ここで天元の嫁の名前を聞いた伊之助は、声を出しそうになる。

しかし、天元より声を出すなど言いつけられたことを思い出し、声を押し殺す。

「…あなた、話せないの？」

凜が心配そうに尋ねるが、伊之助は返答ができずに固まる。

「…そうよね、急に売り飛ばされてびっくりしてるよね」

その時、伊之助はまきをの部屋の襖を勢いよく開けた。

「ちよ、あなた何を…何この部屋？！」

「おいコラー！バレてんぞー！」

部屋はいくつもの大きな傷がついていて、そこにまきをの姿はなかった。

伊之助は走り出す。

そして通りすがりの客を殴り倒した。

ぱたぱたと追いかけてくる凜は、伊之助の野太い声に驚愕していた。

「はあつはあつ！き、君…おつ男の子!?それに、さつきの音は!?!」  
「おい女！いいか、俺のこととあの部屋のことは誰にも言うなよ！いな！」

急にそんなことを言われた凧は、もう何が何だかといった様子だった。

さらには女将に大目玉を食らった凧は、ぐったりと疲れていた。

その夜。

凧は伊之助の部屋を訪れていた。

「伊之ちゃん、起きてる？ちよつと話が…」

禿と雑用の子供たちが雑魚寝している部屋に、凧は伊之助を呼びに来ていた。

「…」

「ひゃあ!?!」

凧が気配を感じて振り向くと、そこには伊之助が立っていた。

「えつと…聞きたいことが…」

「…ついて来い」

そうして、中庭の岩に腰掛ける二人。

「伊之ちゃん…まきを花魁について、何か知ってるの?」

「知ってる。だが、お前には関係ねえ。死にたくなきや変に嗅ぎまわるんじゃねえ」

凧が顔を少し伏せる。

「なんだか、とつても嫌な感じがするの。私の両親が殺されたときみたい…」

「…お前、親がいないのか」

「そうなの…。それで、気が付いたら身売りされて。でも、荻本屋の皆は大好きなの。まきを花魁も、とつてもいい人で…優しくて…」

だんだんと尻すぼみになっていくその声に、伊之助は怒気を孕ませていた。

「ねえ…伊之ちゃん。まきをさん…無事なのかなあ?不自然な足抜けの人たちつて…みんな…食べられちゃったのかなあ?」

凧の大粒の涙は、月明りに照らされて光る。

「私、やだよ……。大好きな人たちが、いなくなっちゃうなんて……。私、本当は見たの：お父さんとお母さんが食べられるところ：」

鬼がいなければ。

この少女は、こんなにも恐ろしい思いをしなくてもよかったのではないか。

伊之助はそう思わずにはいられなかった。

「俺が倒す！なぜなら俺は鬼よりも強いからだ！山の神として、弱え奴らは護らないといけねえんだ！だから安心しろ！」

凜は、あの時走り出した伊之助を見たときから、常人ではないと気が付いていたが、自分と歳がそう変わらない子があんなに恐ろしいものと戦うのだと思うと、いたたまれない気持ちになった。

「伊之ちゃん：絶対、死なないでね……」

「当たり前だ！俺は死なねえ！」

凜は少しだけ安心できた。

――

翌日、炭治郎と伊之助は鬼についての現状報告をしていた。

声を荒げる伊之助を、炭治郎がなだめていると急に天元が現れた。

「善逸は来ない」

告げられたことに、炭治郎は聞き返す。

そして、今回の標的が上弦だと告げると二人には吉原を出るよう言い放ち、音もなく天元は立ち去る。

それでも炭治郎は、みんながまだ無事であるということを感じて動くことを伊之助に告げる。

「お前が言ったことは全部な」

にやりと笑みを浮かべる伊之助。

「今俺が全部言おうとしたことだぜ！」

炭治郎は、鯉夏の元へ。

伊之助は萩本屋へ。

それぞれが決意を胸に行動を起こす。

そして、夕暮れ時。

「遅いぜ！もう日が暮れるのに来やしねえぜ！惣一郎の馬鹿野郎が！俺は動き出す！猪突猛進をこの胸に！」

叫ぶ伊之助。

そして跳躍。

頭は天井を突き破った。

「ねずみ共！刀だ！」

そういうと、屋根裏の奥から天元のねずみ達が刀を携えて歩いてくる。

二足歩行で。

伊之助はいつもの上裸になり、頭には猪の頭を被る。

「行くぜ鬼退治！猪突猛進！」

そこへ、凜がやってくる。

「伊之ちゃん…いくのね」

「おう！俺が鬼を倒すからもう安心しろ！」

「うん…伊之ちゃん、無事を祈ってるわ…」

心配を隠し切れない凜の視線を背に、伊之助は飛び出した。

そして、炭治郎はというと。

「鬼狩りの子？来たのね、そう。何人いるの？」

上弦の陸、堕姫。

その姿は実に美しく。

しかし、まとう雰囲気は冷酷。

帯の中に入れられている恋夏花魁を見た炭治郎は、離せと叫ぶ。だが次の瞬間には吹き飛ばされ、向かいの建物の瓦屋根にいた。

跳ねる心臓、乱れる呼吸。

突然の攻撃に身体が驚いた。

木箱をその場に置き、禰豆子に出てくるなど言いつけた炭治郎は、次の攻撃に備える。

迫る帯の連撃。

それをうまくいなしながら、鯉夏花魁の見える場所を的確に切り離す。

「可愛いね、不細工だけど。なんだか愛着が湧くな。お前は死にかける鼠のようだ」

そこで墮姫は、どこかで爆発音がしたことに気が付く。

何人で来たのか炭治郎に尋ねると、口を閉ざされ、刃こぼれから刀鍛冶を馬鹿にする。

炭治郎は、己の身体が水の呼吸に適していないと考えを巡らせ、そして。

心を燃やす。

―ヒノカミ神楽 烈日紅鏡―

すさまじい呼吸音と、変わる太刀筋。

竈門家に伝えられてきたヒノカミ神楽を、炭治郎は振るう。

そして見えた隙の糸。

―ヒノカミ神楽 火車―

「遅いわね。欠伸が出るわ」

墮姫が吐き捨てると、糸はぷつりと音を立てて切れた。

呼吸の切り替えて、炭治郎の身体の筋肉は強張る。

それでも何とか身をひるがえすと、寸のところで帯を躲す。

二度と、哀しい思いを誰にもさせない。

歯を食いしばり、息を大きく吸って。

炭治郎は立ちほだかる。

その時、どこからともなく帯が墮姫の身体をめがけて集まってくる。

それを吸って、墮姫の身体には模様が浮かび、その頭髮は白く染まる。

「やっぱり柱が来てたのね。良かった。あの方に喜んで戴けるわ……」

禍々しい姿と気配を感じた炭次郎だったが、伊之助のもとに天元がいることを察すると安心する。

「おい、何をしているんだお前たち！」

炭治郎の気が緩んだ瞬間、騒ぎを聞きつけた男がそこに現れた。

「うるさいわね」

炭治郎が叫ぶも、すでに墮姫の攻撃は始まっていた。

紙切れのように斬れる建屋。

そして血を流す人々。

その炭治郎も、胸に大きな傷を受けていた。

後ろの男に気をしつかり持つように声をかけていると、満足げな堕姫は立ち去ろうとする。

「待て。許さ…ないぞ。こんなことをしておいて」

堕姫は何か言った。

ものすごく酷いことを、平気な顔で言い放った。

泣き叫ぶ住人。

息をしなくなった亡骸。

そこで、炭治郎の堪忍袋の緒が音を立てて千切れた。

いうが早いのか、炭治郎は堕姫の足を掴んでいた。

「失われた命は回帰しない。二度と戻らない」

堕姫の中にある、無惨の細胞が縁壺の幻影を見た。

炭治郎の頭は冴えわたっていた。

堕姫の帯はその眼に容易に捉えることができた。

迫る刃。

肉薄。

ついに堕姫の首に炭治郎の刃が届いた。

が、堕姫の首はしなやかに伸び、あと一步のところまで斬ることができない。

それでも炭治郎の表情は変わらない。

淡々と、冷静に。

堕姫はとにかく猛攻を繰り返すが、それでも炭治郎の日輪刀は首に迫る。

斬った。

炭治郎がそう確信したところで、頭の中に片時も忘れたことはない妹の姿が。

「お兄ちゃん息をしてーお願いー」

妹の花子が、炭治郎に息をするように叫ぶ。

そこでやっと炭治郎は正気に戻った。



命の限界に片足を突っ込んでいたせいで、炭治郎はもう視界がぼやけていた。

次にやってくるのは筋肉の疲労。

呼吸さえもままならない。

しかし堕姫は待つてくれない。

死が迫る。

それを救ったのは、禰豆子の蹴り。

堕姫の顔面は吹き飛んだが、全く健在だった。

そして、禰豆子の胴体は両断される。

だがすでにこの時、禰豆子の再生速度は上弦の鬼に匹敵していた。

そうして禰豆子は、鬼へと近づいた。

「炭治郎：炭治郎や。起きぬか」

遠い意識の中、炭治郎の頭に聞き覚えのある声が響く。

「命を賭して守ると誓ったのだらうて。起きぬか、竈門炭治郎！」

「はあっ!!」

「目を覚ましたか。禰豆子のことは任せたぞ、ワシは鬼を斬る」

堕姫は背筋が凍り付いた。

禰豆子に角が生えたと思ったら知らない男が目の前に立っていたのだから。

「又シ、上弦の陸か。その身体にもう一体隠れておるのか。どうやら恥ずかしがり屋のようだの」

この男、なぜわかる。

堕姫は疑問を覚える。

そして思い出した。

上弦の式を打ち取った男のことを。

「お前まさか：童磨を斬った鬼狩り!」

「童磨とな？上弦の式の事かの？なれば左様。ワシが斬った。そして又シの首もだ」

堕姫の視界は反転した。

首が落ちた。

そしてその首を堕姫は受け止める。

「…え？」

「げっ！もう来たのかよ天羽！」

そこへ天元が現れた。

「天元か。ご苦労だった、嫁は無事かの？」

「何とか。だが、住人が何人か殺されちまった…もつと早く応援の文を出してりや…」

意気消沈する二人。

すると、どんつと何かが壁にぶつかる音が響く。

彌豆子を抑える炭治郎だった。

「おい竈門炭治郎！ぐずりだす馬鹿ガキは戦いの場にはいらねえ。地味に子守唄でも歌ってやれ」

「これ天元。後輩にひどいことを言うもんじゃないぞ」

炭治郎は子守唄といわれ、昔母に歌ってもらった子守唄を彌豆子に歌って聞かせる。

ようやくと彌豆子が泣きだして落ち着いたころ、後ろの墮姫も泣き出した。

「なんだ此奴！ギャン泣きじゃねえか！ってかなんで消えねえんだ！」

「お兄ちゃああああん！」

「構えろ天元。来るぞ」

参座がそう言った瞬間、剣戟が響き渡る。

「…お前はまずいなあ。強すぎるなあ。妬ましいなあ」

もう一人の上弦の陸、妓夫太郎の鎌と参座の日輪刀が鏝迫り合いをしていた。

「天元よ、あの鬼とこの鬼の首、同時に斬る必要があるそうだの。こっちはワシが斬る」

「了解だあ。俺は待ってやらねえぞ」

天元は音もなくその場を立ち去り、墮姫の首を取りに行く。

「お前はいいなあ。生まれてこのかた、取り立てられたことがねえんだらう。俺は奪われてばかりだあよ。ああ妬ましいなあ。すべてが思い通りに進むんだらうなあ」

参座の眉がぴくりと動く。

「ワシは生まれてこのかた、失ってばかりじゃ。とにかく間に合わないのだ。今回もそうだの、戦いに全く関係ない者の命が失われておる。これ以上はワシの命にかけて、させるわけにはいかんのだ」

「全部守れるだけの力を持つてるんだろうなあ。俺は妹さえも守れなかったんだあ。目の前で焼けこげる妹を見たんだあ、お前にこの気持ちで理解できるかあ？」

妓夫太郎は、目の前で生きたまま焼かれる妹を見た。

何も与えられなかった自分たちが、自分が。

最後の大切なものである妹までも取り立てられた。

何よりも大切だった。

自分を投げ捨ててでも救いたかった。

それでも、平気と奪っていく。

奪われていく。

そんな世界。

「…ワシにしてやれることは、斬ることのみ。その大切な妹を輪廻転生させるためにも、此処で斬ってやろうの」

次の瞬間には、もう妓夫太郎の首は繋がってなかった。

知覚できない斬撃。

全く気を抜いていなかったにも関わらず、首が斬れた。

「せめて、最期くらいは妹のところへ連れて行ってやろうの」

妓夫太郎は、皮肉の一つでも投げつけてやろうと口を開こうとした。

しかし、あんまり参座が優しく頭を抱き上げるものだから、毒気を抜かれてしまった。

「…俺は何度生まれ変わっても、鬼になる。幸せそうなやつを、俺は許さねえ」

「なに、次はヌシもその幸せそうなやつになるのだ。ワシが保証しよう」

そうして、堕姫の首を斬った天元の元へ着いた。

「おい天羽、お前何して…」

「お兄ちゃん！なんで鬼狩りなんか首を斬られちゃってるの！なんで勝てないの！私たちは上弦の陸なのに！」

堕姫は首だけになったその口で、まくしたてる。

「ねえ！これからもっともつと強くなつて、あのお方に褒められる予定だったのに！お兄ちゃんの役立たず！」

「うるせえ！てめえがこの化け物が来る前に雑魚を片付けられねえからだろうが！」

「強いだけしか取り柄がないのに！負けたら何の価値もないわ！この出来損ない！なんて醜いの！」

売り言葉に買い言葉。

参座も天元も、いたたまれない気持ちになる。

そこへ、禰豆子を連れた炭治郎が歩いてきた。

そして、参座に抱えられている妓夫太郎の口を手のひらで塞いだ。

「君たちのしたことは、絶対に許してもらえない。味方してくれる人なんていない。だからせめて二人だけは、お互いを罵りあつたらだめだ」

堕姫は炭治郎にうるさい、黙れと声を荒げる。

参座は何も言わず、妓夫太郎の頭を堕姫の向い側にそっと置く。

「妹がぐずつたら子守唄を謳ってやるものだ」

妓夫太郎は一瞬面くらつた顔をするが、堕姫の顔を見るなり兄の顔になり、子守唄を口ずさむ。

二人の顔は、さらさらと崩れ始めていた。

そして、先に堕姫の顔が消えそうになると。

「…お兄ちゃん」

そう言い残して、堕姫の顔は消える。

「…うめ…梅っ」

涙を流しながら、妓夫太郎の顔も消えていった。

「哀しき生き物よのう、鬼というのは」

「はい。だからこそ、俺達で終わらせましょう、参座さん」

「ひよつこがデカイ口叩くようになったもんだぜ竈門炭治郎」

「さて、ワシは街の様子を見てくるので」

参座は倒壊した街を歩いていて、  
そこで、泣き崩れる人々を見て、心を軋める。  
もっと早く来ていれば。

自分の足が、もっともっと速ければ。

そう思うが、それでも起きてしまったことは覆すことができない。  
ふと見上げると、まきをが誰かと話していた。

「まきををさあん！ご無事で、よかつ…た！」

「お凧、心配かけてごめんなさいね。心配してくれてありがとう」

どうやら宇髓嫁たちが、それぞれ世話になった店に挨拶をしている  
ようだった。

「もう、そんなに泣いてたらきれいな顔が台無しじゃないか」

「ぐす…。そ、そういえば伊之ちゃんは!?無事なんですか？」

「伊之助のことかい？ぴんぴんしてるよ」

「よかった…本当に、よかったあ」

心底安心した凧の姿を見て、まきををは頭を撫でた。

「これから吉原は大変だと思うけど、きつと大丈夫。あんたもしつか  
りするんだよ、お凧」

「はい…がんばります！」

こうして、吉原の夜は明けた。

数名ばかりの犠牲者を出したが、この街はたくましく再興すると誰  
もが信じて疑わない。

強かに生きる女たちは伊達ではないのだ。

鬼の脅威がなくなったこの街が賑わうその日は、そう遠くない。

ワシが斬るのは未来を繋ぐためでの。

上弦の陸を倒して、少し。

あの後すぐに失血で昏倒した炭治郎を隠が急いで蝶屋敷に運んだ。炭治郎はやはり胸の傷が深く、一か月程度眠ったままだった。

今回、上弦の陸を参座が早急に倒したこともあり、吉原の住人を除けば重傷者は炭治郎一人だった。

そして、伊之助は宇随嫁を救うために尽力。

だが、善逸に関してはすぐに堕姫に捕まってしまうという失態から、自責の念に駆られていた。

目が覚めない炭治郎を見て、自分がもっと強ければと。

しかし、自分にはそんな力がない。

どんなに努力してもだれも助けることなんかできない。

そう思うと、毎日心がすりつぶれそうになる。

「少年、悩んでいるのかい？」

その日、蝶屋敷には一人の隊士が通院していた。

年齢は自分より五つか六つ上といったところ。

身体つきはがっちりしていて、飄々とした雰囲気纏っていた。

そしてこの男からは哀しいような、暖かいような。

そんな音がする。

「…あなたは？」

「俺は与一ってんだ。どうした、そんな今にも死にそうな顔をして」

与一と名乗った男は、善逸に話を聞いてくる。

「俺、友達が命張って戦ってるときに、何もできないんだ。だから鍛錬しようと思っても、こんな俺が強くなれるわけないから…どうしたらいいのかなって」

ふむつと与一は考える素振りをして、口を開く。

「わからんー！」

「いやいやいやいやー！ここは的確なアドバイスをくれるところなんじゃないの!?!」

わっはっはっはと豪快に笑う与一は、善逸の頭に手をポンと置く。

「少年、もうわかってんだろ？言い訳しているだけなんだろう？なあに心配いらんよ、君は強くなる。誰かの為に痛められる強い心を持つてるんだ。俺が少しの間、面倒を見てやろう」

「でも痛いのは嫌だし、つらいとすぐ逃げ出したくなるんだ…」

「少年、本当の痛みを、知っているか？」

与一が飄々とした雰囲気から一転、真顔になる。

「本当の痛みってのは、死ねないってことなんだ。来る日も来る日も、後悔に身を苛まれてそれでも尚、自分は生き恥をさらして歩き続ける。そしてその痛みを和らげてくれるのは、生きている人間なんだ。だから俺たちは誰かの為に戦うし、仲間の為に危険を顧みない。少年、君はどうだ？死なれたら生きていけないほど大切な仲間がいないか？」

善逸は炭治郎と伊之助、それから禰豆子のことを思い浮かべる。

彼らが死んで、そして自分が生き残って。

一体自分に何が残るだろうか。

炭治郎はきつと、自分が生きていてよかったと言ってくれらるだろう。

それでも、そんな世界は認めたくなかった。

「どうやら腹は決まったみたいだな。さ、そうと決まれば鍛錬だ！」

「で、でも与一さんは任務とかどうするんですか？」

「なに、俺の任務についてくればいい！俺は少年より階級が上だから、大変な任務も多いが、歯あ食いしばってついて来いよ！」

こうして、少しの間善逸は与一と行動を共にすることとなった。

――

善逸が与一について行ってからの二週間。

その間、カナヲは毎日炭治郎の見舞いをして、身体を拭いてあげた。

天元に投げられたときに、受け止めてくれた炭治郎の顔を思い出すたびに、少し体温が上がるので、何かの病気がとしのぶに尋ねると、何も異常はないといわれた。

それを面白がったのがカナエと参座。

やれ、恋の病だとかなんだとか。

いつもと同じように、炭治郎は怪我をして帰ってくることを覚悟していたカナヲだったが、さすがに肩から腰までバツサリと斬られてぐったりしている炭治郎を見てカナヲは意識が飛びそうだった。

「ねえ…そろそろ…声を聞かせて?…炭治郎」

椅子に座って、炭治郎に声をかけるカナヲ。

返事はない。

昨日も、その前も、運ばれた日からずっと。

頭には、満面の笑みで自分のことを呼んでくれる炭治郎の姿がいつももあるのに、目の前の本物は何も言ってくれない。

心をうつろにしたまま、カナヲは花瓶の水を替えに病室を後にしようとしたとき。

「…カナヲ…?」

炭治郎の目が覚めた。

そのことに驚いたカナヲは、持っていた花瓶を落とし、炭治郎に駆け寄る。

「炭…治郎?」

「心配…かけてごめんよ。ほかのみんなは…無事…っ!」

言いかけたところで、炭治郎の身体に重みがかかる。

「目を覚まさなかったらどうしようって…怖くて…! 本当によかった…」

「…ごめんね、カナヲ。それと、ありがとう」

カナヲは、炭治郎の胸でしんと静かに涙を流した。

「あらあら、炭治郎くん目が覚めたのね〜! よかったわねカナヲ」

「カナエ姉さん」

たまたまカナエが病室に顔を出した。

カナヲを病室に残し、自分はしのぶに炭治郎の目が覚めたことを伝えに言った。

「しのぶ〜。炭治郎くんの目が覚めたわ〜」

「本当!…よかった。ここ最近のカナヲったら、見ていられないくら



い痛々しかったもの、本当に良かった。まったく、カナエ姉さんに似たのかしら」

「しのぶだったら！私は別にそこまでへこんだりなんか！」

「参座さんの遠距離任務の時に死にそうな顔してた人が何言ってるのかしら」

「もう！しのぶ!!」

こうして、蝶屋敷はいつもの平穏を取り戻すのだった。

炭治郎の目覚めはカナエを経由して参座の耳に入った。

一つ、気がかりなことが参座にはあった。

そして数日後。

参座は炭治郎の元を訪れた。

「参座さん！来てくれたんですね！危ないところを助けていただき、本当にありがとうございます！」

「なに、気にすることではなからうて。して、炭治郎よ。ヌシ、命の限界に足を踏み入れたな？」

命の限界と聞いて、心当たりがあった。

堕姫との戦い。

恐らくはあの時だろう。

「はい…。上弦の攻撃がゆっくりに見えて…勝てるって思ったんですけど、ダメでした」

「よいか、あのような無茶は二度とするな。あれはいわば寿命の前借だの。もし戦いを生き延びたとて、あれを連発しておったら三十を迎える前に寿命で死ぬ。それが、戦いのさなかに突然心臓がとまるの」

「寿命の…前借」

「そうだ。ちゃんと自分のできる範囲で動かねば、かえって危険になるというものよ。一人なればよいが、仲間がいたときに死んでみる。すべてが奪われる」

「…肝に銘じておきます」

そこで、参座の真面目な雰囲気は離散した。

からっとした顔でにつこり笑う参座を見て、一体どうしたのだろう

と炭治郎は面食らう。

「なに、よく生きて帰った。妹も守った。ようやった、又シは全力で頑張っておるでの」

くしゃくしゃと頭を撫でられた。

吉原で犠牲者を出してしまっただが、これであの街はこれ以上鬼の被害にあわずに済む。

ほんの少しだけ、誇らしかった。

「で、炭治郎。又シ、カナヲとはどうなんなの？」

「ど、どうって？」

「なに、心配するでない。漢と漢の秘密じゃ。カナヲに抱き着いて眠ったこともあるらしいではないか。胡蝶家は炭治郎のような子であればいつでも婿入りを許すぞ」

急に素っ頓狂な話をしだす参座に、炭治郎は驚いた。

「むっ！婿っ！そ、そんな俺は……！」

「なんじゃ嫁に入りたいか？意外と男だのう炭治郎」

「違っ！参座さん!!俺はまだそーゆーことには！」

「まだということはいつかカナヲを娶るといふことかの」

顔を真っ赤にした炭治郎は、あたふたするが参座は面白がってまくしたてる。

結局この話は、顔を真っ赤にしたカナヲが参座のみぞおちに拳を入れて終わった。

――

「ひいひいひいひいひい！」

「少年！逃げてばかりでは攻撃は当たらんぞ〜」

炭治郎が目を覚ましてからも、善逸は与一と共にいた。

任務をこなし、時間が空いては与一と撃ち合っていた。

場所は藤の紋の屋敷。

与一は家を持たず、放浪しながら鬼を狩っているらしかった。

庭を借りての稽古はそれなりの迫力があり、屋敷の住人も感嘆の息

を漏らす。

「んなこと言っただってこれ当たったら死ぬでしょ！絶対死ぬ！木刀からすごい音してるもん！」

「そりゃあ木刀だし本気で振ってるからなあ」

腐つても格上の隊士。

善逸ではよけるのが精いっぱい、の攻撃を繰り出してくる。

「全く、雷の呼吸なだけあって足腰はいいんだけどなあ。度胸が足りんぞ度胸が〜」

そしてついに与一の木刀が善逸の顔面にヒットする。

「ぎゃああああ死んだあああああ！」

「死んだら死んだとか言わないだろう。面白いな少年。さあ休憩にするか」

そういつて与一と善逸は縁側に腰掛ける。

与一はよく休憩をする。

それは善逸の為であった。

善逸に足りない物。

それは自信だ。

だから与一は善逸に無理をさせない。

折って、直して、折って強くする。

ぶちのめした後、必ず与一は善逸をほめた。

直すところより、いいところを多く指摘した。

そうすると、少しずつ善逸も心を開き、今では師弟というより仲のいい兄弟といったように見えた。

「やつぱり筋がいいぞ少年。足腰については俺が太鼓判を押してやろう。本当に、いい育手に恵まれたな」

「じいちゃんは元鳴柱だったんだ。俺なんか門下生で、じいちゃんがつかりしてるだろうな…まだ何も手柄を立ててないし…」

「元というは桑島殿かあ。道理でいい隊士なわけだ。いいか少年、手柄なんてものは、クソだ。馬にでも食わせておけ。そんなもんはお前が生きてきた道にあとから転がってるもんだ。とにかく生きて、生かすことを考えろ」

「生きて、生かす…」

「そうだ。俺は生かされたんだ。ある男に」

「…その人は、どんな人なの？」

「ん〜。お前が俺から一本取れたら教えてやろう」

「いやムリでしょ」

軽快に笑う与一に、善逸は落胆した。

そもそも息一つ切らせていないこの男から一本取ることなんて、考えられなかった。

「俺みたいなのは、壱ノ型しか使えない出来損ないが、アンタから一本取れるわけがないだろ…」

「少年、君の尊敬する桑島殿はそれに関して何か言わなかったか？」

一つしかできないのなら、一つを極めればいい。

そう、言われたときの顔と声が、今でも鮮明に思い出せる。

それほど心に刺さった言葉だった。

「極めればいいって…」

「そうだな。さて、俺から一本取る気はないか？」

「…どういう意味？」

与一はすつと立ち上がり向こうへ歩きながら善逸に言葉を投げかける。

「お前の全力と、俺の全力。一瞬にすべてかけてみないか？」

「だから勝てないって言ってんでしょーが」

「居合の真剣勝負だ。これに勝てないと、お前の大切な人が死ぬ」

急に真剣な表情になった与一を見て、善逸は唾を呑む。

「ま、木刀だがな。構えろ、少年」

仕方なしに、善逸も木刀を構えた。

壱ノ型の構えを取る。

「おい、少年。俺をなめているのか？」

「えっ」

この時、初めて善逸は叱られたような気分になった。

「俺は真剣勝負だといった。そんな生半可な気持ちで俺と戦うのか？」

「…わかった」

善逸も覚悟を決めた。

大怪我をするかもしれない。

しかし、漢の真剣勝負だ。

あとのことはどうでもいい。

それに、きつと期待されている。

そんな気がする。

今まで、与一には世話になった。

死ぬほど木刀で打たれて、たくさん褒められて、驚くほど笑いかけ  
てくれた。

兄がいたら、こんな感じだと思った。

「…もし一本取ったら、さっきの話ともう一ついい？」

「いいぞ、言ってみろ」

「…名前で呼んでくれ」

認めてほしかった。

桑島以外で、初めて自分のことをちゃんと見てくれた。

投げ出さず、真摯に向き合ってくれた。

だから、答えたかった。

「いいだろう、少年。かかってこい」

時間は止まる。

この世界には二人しかない。

音が変わる。

与一の優しい音が、恐ろしい嵐のような音になる。

何処からともなく、木の葉が舞う。

これが落ちたら、動く。

長い時間、そうしていたのかもしれない。

瞬きにも満たない時間だったかもしれない。

木の葉が、地に着く。

善逸の木刀はその軌道を与一の顎までまっすぐに伸ばした。

全力の振り。

対する与一は、首をめがけて神速の斬り上げ。

両者肉薄。

その一瞬は、ゆっくりと動いた。

先に届いたのは。

善逸の刃だった。

音を置き去りにして、与一の脳は揺れた。

そして、倒れた。

「…うそ。勝っちゃった…」

完全に伸びていた与一を屋敷の住人と布団へと運ぶ。

まさか自分が勝つなんて、思ってもいなかった。

きつと自分が意識をうしなつて、目が覚めたらまたほめてもらえるんだと思っていた。

しかし、善逸の刃は与一を超えた。

十分ほどして、与一は目が覚めた。

「…やっぱ負けたか」

「お、俺…！」

「やるじゃねえか、善逸。お前は立派だ」

「うっ…うわああああああん！かつちやつたあああああ！」

嬉しさからか、善逸は大号泣。

鼻水もまき散らして泣いていた。

「確かに、正面切つての速度勝負なら善逸に分があると思つてたが、まさか失神させられるなんてなあ」

「ぐええええええええ！やつたあああああああああ」

「俺の予想をはるかに超えてたな。いやあ感心感心」

「わあああああああ！やつたあああああああああ」

「ふんっ」

「ぐえっ」

ずつと叫んでいた善逸の腹を与一が殴ると、静かになった。

「しかし、大したもんだ。俺はこう見えても、甲の隊士なんだが…。一撃食らうことは頭にあったが失神までは想定してなかった。完敗だ」

善逸の成長速度は与一としても、目を見張るものがあった。

特に居合。

初撃の速さが凄まじかった。

だからこそこの勝負。

全力で挑んで勝ち目のないこの一撃で、善逸に自信を持たせたかった。

「胸を張れ、善逸。お前の刀は大切な人を守るだけの力がある。俺とお前は対等だ。階級に違いはあれど、俺はお前を認める」

「…与一が居てくれたから、俺はここまでできたんだ。俺はずっと泣き虫で、弱虫で、ヘタレだった。みんなが命をかけて戦えるのが、おかしいと思ってたし、ずるいと思ってた。俺にもそんな力があつたらつてずつと思ってたんだ」

「…そうだな。死ぬかもしれないとわかってても、恐ろしいものに立ち向かうなんて、普通の人間にはできない事だ。お前は何も間違っちゃいない」

「やめようって言っても、炭治郎も伊之助も聞かないんだ。今までは止めようとする事しかできなかったけど、これからは隣でアイツらを守ることができるかなあ」

「心配すんな！やるんだよ、善逸。生きて、生かすんだ。お前ならできる」

涙と鼻水で顔面をくしゃくしゃにした善逸が、与一に笑いかける。

与一も笑顔で返すと、その手を頭において、わしゃわしゃと撫でた。「ずつと思ってたんだけど、兄貴みたいだ。兄弟がいたことないから分からないけど」

「兄貴って呼んでもいいんだぜ？」

「やなことだ…それで、聞かせてよ。与一を救って、俺に出会わせてくれた人の話」

「そうだな、あれは…」

約束の通り、与一は善逸に過去の話をした。

こうして、2人は絆を深める。

本当の兄弟のように笑い合い、お互いを高めあつた。

善逸は、獺岳に貶された事や、桑島の期待に応えられなかったこと、炭治郎の助けになれなかった事などを、今この瞬間から少しづつ乗り

越えて行こうと心に決めた。

出来ないんじゃない、やらなかったんだ。

そう、与一が教えてくれた。

もつともつと強くなつて、色んな人を助けたい。

そんな決意が、芽生えた。

その翌日の朝。

与一の元に、鴉から司令が届く。

ここから少し南西に鬼が出たとの事。

「善逸、お前に教えることはもう無い。自分に自信を持って生きろ。お前は立派だ」

「…与一？」

「今日この時を持って、お前を一人前と見なし、俺は師を辞める。お前は一度蝶屋敷に戻り、炭治郎くんに元気な顔を見せてやれ、きつと心配してる」

与一は善逸と別れることを決意した。

もう教えることは無いし、一人でも立派にやれると確認できたからだ。

「…分かった。絶対また生きて会おうな。絶対だからな」

「当たり前だ。じゃあ達者でな、善逸」

ぽろぽろと、善逸の瞳からは涙が零れる。

「ありがとう…本当にありがとう。俺の事、ちゃんと見ててくれて、ありがとう！」

「つたく。最後まで手のかかる弟だぜ」

そう言つて、また頭を撫でられる。

もしかしたら、もう会えないかもしれない。

明日は我が身。

この任務だつて、もしかしたら恐ろしい鬼がいるかもしれない。

それでも、涙を呑んで見送る。

与一の姿が、見えなくなる頃。

善逸は小さく呟いた。

「またな、兄貴」



鬼殺隊の魂ともいえる日輪刀を育て、鍛える。

炭切り三年というように、来る日も来る日も木炭を均等大きさに切り、刀匠に許しを経ていよいよ刀を打つ。

気が遠くなるほどに鋼と向き合い、師の技を目に焼き付け、槌で叩く鋼の火花を見分け、音を聞き分けられれば鋼の声が聞こえるという。

悪鬼滅殺。

その想いを一身に鋼に込めてできたのが、鬼殺隊に関わるものたちの魂である日輪刀である。

そしてここは、隊士たちが命を預ける日輪刀を打つ、誇り高き刀匠たちが住まう里。

ここには温泉があり、刀匠に挨拶がてら身体を癒しに来る隊士もいる。

その、刀鍛冶の里にて。

「あれ、恋柱様じゃないですか」

温泉から上がったであろう蜜璃とすれ違う隊士。

「こんにちは！あなたは？」

「あ、失礼申し遅れました。俺は階級 甲、三國 与一と申します。恋柱様はご休暇で？」

「私は日輪刀を研いでもらっているの！私の日輪刀って特殊だから鉄珍様しか手入れできなくて。あなたは？」

「ああ、恋柱様の日輪刀ってぐにやぐにや曲がりますもんね。俺は前の任務で日輪刀が刃こぼれしちまったんです」

「あら、そうだったの。でも怪我がなくてよかったわ！それじゃあ私は晩御飯にいくわね！またね」

ぶんぶんと手を振って歩き出す蜜璃。

その時、胸がぐわんぐわんと揺れて、目のやりどころに困る与一だった。

「とんでもねえ破壊力だったぜ」

柱に失礼は出来ないと言いつつ直ぐに視線を逸らしたものの、やはり気になつてしまうのが男の性。

「善逸が見たら卒倒しそうだったな」

1週間ほど前に別れた元弟子の事を思い出す。

立派にやっているだろうか。

死ぬとか無理とか駄々は捏ねているだろうが、やる時はやる男だ、心配要らないと己に言い聞かせる。

そして、本当に必要なのは自分の心配なのだと、この時の与一はまだ気がついていなかった。

恐ろしい鬼の影は、すぐそこまで来ていたのだった。

ワシの為になぞ斬らなくてよいのだ。

お前にやる刀はない。

上弦の陸、墮姫との戦いで刃こぼれしてしまった炭治郎の日輪刀。刀鍛冶である鋼鐵塚は、己が誠心誠意鍛えた日輪刀がこうも簡単にダメになってしまうことが認められずにいた。

炭治郎としては、己の使い方が悪いせいで鋼鐵塚の誇りを傷つけてしまうことが心苦しかった。

それは鋼鐵塚からの文でも痛いほど伝わった。

そこで、鋼鐵塚の住む刀鍛冶の里へとむずからが赴き、もう一度日輪刀を打ってもらおうと出立の準備をしているところだった。

「たくんじろ〜！」

「善逸！無事だったんだな！本当に良かった！」

「炭治郎こそ、目が覚めてホント良かったよ〜！何もしてやれなくてごめんなあ〜」

それから善逸は、今まで与一と特訓していたことを炭治郎に嬉々として話す。

兄のようだったと。

自信をくれたと。

ちゃんと自分を認めてくれたと。

「だから炭治郎、次は俺も役に立てるように頑張るよ！」

「ありがとう善逸！でも、善逸はいつも頼りにしているよ。列車でも、禰豆子のこと守ってくれたんだろ？それに、京極屋でも女の子の為に前に出たって聞いたし！善逸はちゃんと立派だよ！」

炭治郎と出会ってよかった。

初めて一步踏み出して、与一に特訓をつけてもらって本当に良かった。

この友人の為に、嫌だと思っていたことも克服しようとした自分が誇ることができる。

「…ありがとう炭治郎」

「俺の方こそ、たくさん危ないところを助けてくれてありがとう！そ

れじゃあ俺は刀鍛冶の里へ行つてくるよ！」

そうして、善逸は隠に背負われる炭治郎を見送った。

目隠し、耳栓、鼻栓。

見る人が見れば、異常な光景。

しかし炭治郎はわくわくしながら道順を楽しんでいる。

刀鍛冶の里は、それは巧妙に隠されている。

道案内の隠も、多数の道に配置。

鴉も頻繁に入れ替わる。

だから、この隠にまた出会う確率はそう多くない。

それでも炭治郎は、隠が変わるたびに感謝を。

そして新たな隠にはよろしくという旨を毎度しつかり伝えた。

それにより、隠達は炭治郎の一挙手一投足に心をほころばせた。

長い道のりの中で。

炭治郎は、カナヲの顔を思い浮かべていた。

――

炭治郎が諸々の栓を外すと。

金属を打ち付ける音、そして鉄の焼けるにおいに混ざって、温泉のにおいがする。

「近くに温泉があるようだ！」

「ありますよ。あちらを左へ曲がった先が、長の家です。一番に挨拶を。私はこれで失礼します」

女性の隠にお礼をいい、炭治郎は長の鉄珍の元へと向かう。

大きな屋敷で、敷居をまたぐとどこか懐かしい匂いが鼻に入る。

案内人に声をかけると、鉄珍は部屋にいますということ、炭治郎はそのあとに続いた。

思った通り、里の人間は皆ひよつとこの仮面をしていた。

「鉄珍様、鬼殺の隊士様がご挨拶にと」

「うむ、はいったってや」

襖を開けると、小さな爺と両脇に屈強な男が二人。

炭治郎は正座で向き合う。

「どうもコンニチワ。ワシ、この里の長の鉄地河原 鉄珍。よろぴく」  
里で一番偉いから、畳におでこをつけろという冗談にも、炭治郎は疑うことなくおでこをつけて挨拶する。

鉄珍は痛く気に入り、鋼鐵塚の現状について話す。

「すぐ癩癩起こしてどっか行きよる。すまんの」

「いえいえそんな！俺が刀を折ったり、すぐに刃毀れをさせたりするからで…」

「いや、違う」

突然、その小さな身体からは信じられないほどの威圧を感じる。

炭治郎の皮膚は、ひりつくような錯覚に陥る。

鉄珍が口を開く。

「折れるような鈍を作ったあの子が悪いのや」

ずしつと腹に来るような声でハッキリといった。

お付きの者が、見つけ次第取り押さえるという。

それでも見つからなければ、別の刀鍛冶をこさえるから、温泉に入ってゆつくりしろと言われる。

癩全としないもの、これが誇りある刀鍛冶の事情であるのなら、自分に口出しはできまいと観念した炭治郎は、温泉へと案内される。

「あー！炭治郎君だ！炭治郎くーん！」

温泉への階段を上がっていると、蜜璃と出会う。

「あっ！気を付けてください！乳房が零れでそうです!!」

その豊満な乳房が、こぼれ出そうになっていた。

「元気だった？こんなところで会うなんて奇遇ね！」

「はい、甘露寺さんはお元気でしたか？」

「ええとつても元気よ！少し入院していたんでしょ？体は大丈夫？」

「はい！もうすつかり！これから温泉に入るところです！それともうすぐ晩御飯ができるみたいですよ！松茸ご飯だそうです」

「えー！ホント!？」

そういってご機嫌で坂を下っていく蜜璃を見送り、温泉へと向かう。

脱衣所などなく、岩で仕切られた湯船に、炭治郎は服を脱ぎ捨てて飛び込む。

「おお、元気がいいな少年」

そこに、一人の隊士が浸かっていた。

「あ、すみません！誰もいなど思ってたといはしやいでしまつて…」

「なに、気にするな。元気な子供は好きだしな。俺は与一ってんだ。少年は？」

「俺は竈門 炭治郎です！初めまして与一さん！もしかして、善逸の師匠さんですか？」

与一は、ほう…少年がかと微笑み、肯定する。

「善逸は、元気だったか？」

「はい！とても与一さんに感謝してました。兄貴ができたみたいで嬉しかったと！」

「それはうれしいねえ。本当に手のかかる奴だった。俺が言うのなんだが、あいつのこと頼むな」

「はい！もちろんです！」

それから二人は裸の付き合いということで、背中を流しあつたりして語らった。

善逸の面白い話だとか、これまで出会った手ごわい鬼だったり。

そこで、禰豆子も湯船に入ってきたので、与一はたいそう驚いたが、善逸から話は聞いていたのですんなりと受け入れることができた。

「俺、参座さんみたいな立派な鬼殺隊になりたいです」

炭治郎がそういうと、与一が食いついた。

「ああ、人柱様か。昔、手に負えない鬼がいて、応援に来てくれたことがあつたけどほんとに強かつたな、あの人は。人望も厚いし、くせ者揃いといわれている柱の方たちに慕われるのも納得がいく」

「本当に、いろんな方に慕われていますよね」

「人柱様を知らない鬼殺隊は、おそらくいないだろうな。それに奥方のカナエ様も美人だし」

「カナエさんって奥さんだったんですか!？」

「いや、婚姻はしてないらしい。だがまあ、もうみんなカナエ様は人柱

様の奥様だと言っているよ」

それで、胡蝶家は喜んで云々といっていたのかと腑に落ちた。自分も、いつかカナヲとそんな関係になるのかとほんの少し考えてしまう年頃。

「少年、恋の悩みか？」

顔を真っ赤にした炭治郎に、与一は面白がって問う。

「い、いえーそんなことはー！」

「はっはっは。若い世代からそういった話が出るのはいいことだ。俺たちはいつ死ぬかわからないから、早いうちに身を固めておくことをお勧めする。…長いこと鬼殺をしていると、そういうことから無意識に避けてしまうしな」

少し、哀しい顔をする与一に、炭治郎はこの人も何か哀しい過去があるんだと察した。

「俺達で、終わらせましょう。この悲しみの連鎖を。そうしたら、あとはみんなで幸せになるだけですよ！」

「…そうだな。さて、そろそろ上がって飯でも食おうか」

二人は温泉を後にして、食堂へと向かう。

与一は、炭治郎と話して、善逸が炭治郎を大切に思う理由を理解した。

本当に優しい子で、みんなの為に頑張れる素敵な子だと思った。

二人で連なって食堂へ着くと、蜜璃はまだ松茸ご飯を食していた。党になっているどんぶりを見て、二人そろって笑顔になる。

「恋柱様は本当に食べるのがお好きなんですね」

与一がそういうと、蜜璃は顔を赤くして口を開く。

「伊黒さんが、たくさん食べる女性が好きだっていうものだからつい…。それにほら、このご飯本当においしいんだもの！」

それはきつとたくさん食べる女性じゃなくて、たくさん食べるあなたですよと言おうか迷ったが、やめておいた。

食べ終わると、気分がいいのか蜜璃は縁側で歌い始めた。

与一は少し酒をひっかけてその様を見る。

心が安らぐ。

こんな日が、続けばいいのに。  
誰もがそう思った。

「甘露寺さんは、なぜ鬼殺隊に入ったんですか？」

炭治郎がそう問いかけると、恥ずかしそうにしながら問いに答え  
た。

「添い遂げる殿方を探すための!!」

そんなこんなで気が付いたら柱まで。

そんなトンデモ理論を投げられ、炭治郎は困惑した。

もちろん与一も驚いた。

そこへ、隠が訪れて蜜璃に工房へと来るように促す。

炭治郎は見送るといったが、深夜発つだろうからその必要はないと  
いわれる。

「炭治郎くん。今度また生きてあえるかわからないけど、頑張りま  
しょうね」

上弦と出会って生きていることは、貴重な体験だといわれ。

彌豆子にも優しくしてくれた蜜璃が、兄妹を応援しているといつて  
くれて、炭治郎は胸が暖かくなった。

だからこそ、自分は煉獄や天元、それに参座に生かされて今日まで  
いるのだと。

これからまだまだ精進して、彼らを今度は護りたいと真摯な思いを  
口にした。

それを聞いた蜜璃は、えらく炭治郎を気に入り、強くなるための秘  
密の武器があるということを告げ、笑顔でその場を去る。

その時の蜜璃があんまり魅力的だったから、炭治郎は鼻血を噴出し  
た。

「少年には刺激が強いよなあ」

与一は笑いながら炭治郎を呼び掛けた。

「さて少年、刀が出来上がるまで稽古でもつけてやろうか？」

「本当ですか？ぜひお願いしますー！」

ヒノカミ神樂の有用性、そして水の呼吸との合わせ技を考えている  
ことを話すと、与一は驚くほどの確な助言をした。



「呼吸を合わせるのはいいところに目を付けたな少年。俺は元は風の呼吸を使う育手の元で修業を積んだが、それから水の呼吸を間近で見で、取り入れたいと思つてな。できたのが嵐の呼吸だ。これは風の呼吸の広範囲の攻撃と、水の呼吸の流れを併せ持つ」

「嵐の呼吸…」

「ま、言つちまえばどちらも極められなかったからいいとことりしたつて感じだな。広範囲を射程に、流れるように攻撃の位置を変えて翻弄するのが強みだ」

「なるほど…」

「呼吸は風の使い方、身体の動きは水の呼吸に寄っている。少年は切り替えているようだが、少しずつ両方を並行で使えるようになってくるよ」

それから、ヒノカミ神楽と水の呼吸を見せると、ある程度の勝手がわかったのか与一は呼吸の切り替えの瞬間を的確に指示した。

本来、呼吸は流派によつてその形を変える。

二つの呼吸を使うなど、ほとんどの人間にはできたものではない。蜜璃の使う恋の呼吸は、炎の呼吸を改良したものだが、その側面は炎の呼吸とは似て非なるものだ。

だからこそ、炭治郎は水の呼吸からヒノカミ神楽に切り替えるとしてもでもない負担がかかる。

そんな中、呼吸を合わせるといふ与一に出会つたのは運命的であった。

「いいか、水の呼吸で足りない分の火力をヒノカミ神楽で補おうとするな。ヒノカミ神楽で出すぎる身体の負担を水の呼吸で抑え込むんだ。主体はヒノカミ神楽で考えろ」

「はい…」

日が暮れるまで指導されたが、炭治郎としては本当に良い経験になった。

与一が休憩にしようとするが炭治郎はまだできるといい、善逸とは違うやり方で与一は見守つた。

そして、少しずつ炭治郎は呼吸の併用をものにしてきた。

「よし、今日はここまでだ。これ以上はただの疲労になる」  
「はい！ありがとうございます！善逸の言った通り、とてもわかりやすいご指導でした！」

「それはうれしいね。やっぱり修羅場をくぐってきただけあるな。少年たちは筋がいい」

与一は炭治郎と善逸の成長速度に本当に驚いていた。

一度言えば二割覚え、数回重ねるとすぐにものにする。

教え甲斐があるし、彼らの嬉しそうな顔が本当に好きだった。

それから汗を流すため、二人はもう一度温泉に入り、その日は就寝した。

――

霞柱、時透 無一郎は焦っていた。

己の記憶が戻らないこともそうだが、おそらく好意を持っているはずの、天羽 参座および胡蝶 カナエに、まだ何も言い報告をできていないからだ。

柱合会議で恐ろしい参座を見て、どこか遠くへ行ってしまうような気がした。

まだ何も恩返しをしていない。

自分は鬼を斬ることにしか興味はなかったが、あの時参座が声を上げた瞬間に、無一郎はなぜか焦りを感じた。

その焦りは、どれほど鬼を斬っても消えず鬼に食われた死体を見るたびに、強くなっていく。

そこで、刀鍛冶の里には強くなるための秘密の武器があるといわれ、その場を訪れていた。

これで強くなって、鬼舞辻 無惨を討つ。

そうすれば、参座やカナエが安心して暮らせるのではないか。

自分にしては柄にもないと思いつつ、身体は勝手に動く。

そうして、その武器とは絡繰りだということに行きつき、ついに小鉄の元を訪れた。

しかし小鉄が、もう次にでも絡繰りは壊れるし、これを修理するところが叶わないので嫌だという。

無一郎は思った。

そんな絡繰りなど、壊れたところでどうでもいいと。

人が死ぬわけでもあるまい。

鬼を狩ることに少しでも役に立つなら、いいから使わせろと思った。

鍵は渡さないし、使い方も教えない。

その言葉が、自分可愛さから出たのだと思ってしまった無一郎は、ついに手を出してしまおう。

「やめろー！何してるんだ！手を放せ!!」

耳に障る声が響く。

何処かで見たとような気がする顔がいたが、思い出せない。

手を握りしめられたので、腹を小突くとすぐにうずくまった。

「すごく弱いね。よく鬼殺隊に入れたな…。君みたいなのがいるから、師匠の手が空かないんだよ」

目の前にうずくまる少年の背負う箱から、何か変な違和感を覚えて触ろうとすると、手を叩き落される。

その隙に、右手につるし上げていた小鉄を奪われる。

「は、はなせよ！」

「目が回っているだろう？危ないよ…」

「あっち行け！だっ誰にも鍵は渡さない！拷問されたって絶対に！あれはもう次で壊れる！」

啖呵を切った小鉄に、無一郎はますます気が立つ。

拷問に耐えられるわけがないし、この時間で一体どれだけの人が死ぬかと思っっているのかと。

淡々と無一郎は言葉にする。

「柱の時間と君たちの時間は全く価値が違う。師匠だってそうだ。師匠ほどの力がありながら、やることは弱い隊士の応援ばかり。無惨を討つことができるはずの力を持っていながらだよ。君たちが無駄なことに時間を費やしていると、師匠の心がすり減っていくんだ。どう

してそんなこともわからないだ？」

もう一度、鍵を渡すように催促する。

すると、その手はばちんと叩かれる。

「こう…何かこう…すごく嫌！なんだろうっ。配慮かなあ!? 配慮がすごく欠けていて残酷です!!」

炭治郎は、無一郎のいうことが間違っていないという。

その師匠が誰かはわからないが、みんな無駄な時間は過ごしていないし、彼ら刀鍛冶たちは自分たちの為に尽力してくれているという。

「悪いけど、くだらない話に付き合ってる暇ないんだよね」

感情論はたくさんだった。

そんなことで救える命なんてない。

記憶はないが、そう思えた。

だから、炭治郎に一撃を与え、その意識を奪った。

「早く鍵渡して」

その一撃を見た小鉄は、さすがに渡さないと殺されると思い、泣く泣く鍵を渡した。

無一郎はその鍵を絡繰りに差し込み、起動した。

すると、絡繰りは新たに四本の腕を現し、六刀流の剣士へと姿を変えらる。

「まあまあ強いね」

無一郎は事もなげにそうつぶやく。

その間も、恐ろしい速度で絡繰りの斬撃は襲い来る。

しかし、師である参座のほうがつと鋭い斬撃をするなどと考える余裕があった。

それでも、多数の腕から繰り出される攻撃を受け流すことはそう容易ではない。

そこそこの充実感を得ながら、絡繰りと撃ち合う無一郎。そうこうしているうちに、森の隅から炭治郎と小鉄がその姿を見ていた。

構わず対峙する無一郎と絡繰り。

無一郎の斬撃が絡繰りの鎧を打ち壊す。

そこで小鉄が走り出すが、無一郎は構わずに絡繰りに刀を振り切る。

まず顔に一撃。

ひび割れていたところはさらに広がり、耳まで欠ける。

次に首。

もう次に攻撃を食らえば壊れてしまいそうだった。

絡繰りからくる斬撃に合わせて、無一郎も日輪刀をぶつける。

その時、無一郎の刀が折れる。

半分ほど長さを失ったが、それでも冷静に攻撃を続ける無一郎。

「まさか刀を折られるとはね」

やることは変わらない。

参座の動きを思い出し、あの高みへと至るために。

無一郎は、重さも長さも変わってしまった日輪刀を振るう。

「こんなところで足踏みなんかしてられない」

一本腕を斬り離れた。

そして、完全に間合いに入り胴体に一撃。

絡繰りの動きは止まった。

物言わぬがらくたになってしまった人形を見て、無一郎は自分の実力の足りなさを実感した。

刀を折られてしまった。

こんな絡繰り相手に。

「僕もまだまだだね…」

そうして、斬り離れた腕ごと日輪刀を持ち上げてその場を去る。

炭治郎と小鉄とすれ違っていると、もう終わったのかと驚かれるが折れた日輪刀を処分するように言ってその場を後にした。

「少年、炭治郎という額に痣のある少年を見なかったか？」

里に戻ると、飄々した雰囲気の青年に炭治郎の居場所を尋ねられる。

額に痣のある少年。

「ああ、向こうにいますと思うけど。それじゃ」

「すまん、少年。俺は与一ってんだ。何か困ったことがあったら

言ってくれな」

「…？別に何も困ったりしないけど」

「はっはっはっ。まあ、そういうな。俺はお節介が好きだからな。腕にも多少心得があるし、きつと助けになる。覚えておいてくれよな」  
「僕は柱だし、そんなものは必要ないかな。もう行つて良い？」

与一は戦慄した。

まさかこんな年端も行かぬ少年が柱だったとは。

そんな少年に、力を貸すなんてうぬぼれたものだと思った。

ここ最近、善逸や炭治郎とかかわつたせいで、少しばかり先輩風を吹かせすぎたと反省した。

「これは大変失礼しましたー」

そういつて与一は逃げるようにその場を後にする。

そして、本来の目標であった炭治郎を探して森を歩いた。

ごちんつともものすごい音がする。

そちらの方へ足を急ぐと、絡繰りと撃ち合う炭治郎の姿が。

見知らぬ少年がそばにいて、ことの発端を問いただした。

「まあ、確かに坊主の気持ちはわからないでもないが、これじゃあ質が悪すぎる。がむしやらの修練は、ただの走り込みと変わらない」

小鉄の熱い気持ちを理解したうえで、与一は改善を強く推した。

このままでは、せつかくのいい修業が台無しだと。

「いいか、この絡繰りと打ち合うことは確かにいい修業だ。だが、要点を抑えて打ち合わなければ、何の意味もない。要所をまとめれば、二日で真剣をもって戦える力が少年にはある」

そういつて、小鉄と与一指導による絡繰りの鍛錬が始まった。

初日は、延々と攻撃をかわす練習。

自分からの攻撃はせず、敵の攻撃を見切り紙一重でかわしていった。

目が慣れて、躲せるようになると今度は絡繰りの型を変えてもう一度。

全ての型を見切ったら今度はすべてを混ぜてとにかく敵の攻撃を見切る練習。

二日目は、日輪刀を構えた状態で、また躲す練習。刀を持った状態では、躲すのもまた複雑になった。躲し切っても刀を構えるのに時間がかかる。

その切り替えの練習をとにかく与一はさせた。

慣れてくると、与一は炭治郎の片目を隠して打ち合わせた。

これがまた難易度が高く、炭治郎は距離感を掴むのがやっとだった。

しかし、打ち合ってくるにつれ、次にどこから攻撃かくるのかを、においで判別できるようになる。

三日目。

ついに体幹の取り方と敵の攻撃を見切るだけの動体視力が付いた炭治郎は、真剣を持った状態の絡繰りと打ち合う。

二日間の質の良い鍛錬と、己の鼻の良さでもうある程度は絡繰りに対応して打ち合うことができていた。

それでも決定的な攻撃を与えられてはいなかった。

そして迎えた四日目。

ついに炭治郎は絡繰りの頭を落とした。

躊躇したものの、鍛えられた体幹で見事頭を落とした。

「なんか出た!? (ニッコ) 小鉄君！なんか出た！」

絡繰りの身体から、刀と思しき物体が現れた。

何が何やら。

三百年以上前からあると思われるその刀に、二人は大興奮してよくわからないポーズと繰り出す。

「ずいぶん奇怪な体勢だな少年。坊主も。面白いな」

けらけらと与一が笑い、炭治郎と小鉄は今だ興奮冷めやらずといった感じでいまだに刀について語らっていた。

いよいよ刀を抜いてみると、刀身は錆びていて使えるようなものはなかった。

「話は聞かせてもらった…後は…任せろ…」

突然鋼鐵塚が現れて驚愕する一同だが、刀をよこせと無理やりを持つていこうとする。

炭治郎と小鉄が抵抗するも、ものすごい力で引かれるものだからついに振り払われてしまう。

与一はその様をみてげらげらと笑っていた。

そこへ鉄穴森が現れ、鋼鐵塚の想いを聞いた炭治郎は刀を鋼鐵塚に預けた。

その夜。

炭治郎は夕餉をたらふく食べて、炭治郎は眠っていた。

そこへ無一郎が現れて、鼻をつまんで起こした。

「鉄穴森っていう刀鍛冶知らない？」

炭治郎は驚いて飛び起きた。

何やら無一郎の新しい刀鍛冶が鉄穴森になったので、日輪刀を受け取りたいとのことだった。

「一緒に探そうか？」

無一郎には理解ができなかった。

「師匠といい、君といい。どうしてそんなに人に構うの？ほかにやるべきことがあるんじゃないの？」

「そういえば、時透君の師匠ってどんな人なの？」

炭治郎は、前の会話から気になっていたので尋ねた。

「僕の師匠は、人柱の天羽 参座だよ。剣術はすべて彼から教わった」

「わあ、そうなんだ！道理で強いわけだ！」

「師匠は強い。僕もあんならなきゃ」

「…とっても慕っているんだね、参座さんのこと」

「当然だよ。兄のような人だった…？いま僕はなんて？」

兄のような人。

どうしてそんな言葉が出たのか、自分でも理解できなかった。

「そうなんだ！参座さん、優しいもんね！家族みたいってことはとっても仲がいいんだね」

家族。

自分にもいた気がする。

父と母、それから。

「それから…？誰だっけ？」



「時透君は、兄妹いる？俺は、長男でさ。六人の一番上で、いろいろ大変だったけどやっぱり家族つてとても大切なものだよね。だから、時透君が参座さんの為に強くなることを焦ってしまうのはすごくよくわかるよ」

兄弟。

大切な人。

兄？

無一郎の頭の中には、どこか懐かしいような記憶が流れる。

誰なのかわからないが、おそらく忘れていることなんだとはわかる。

もう少しで思い出せそうといったところで、襖があいた。

その姿は、鬼だった。

ワシが斬っているものはなんなのか。

「玄弥、すまないが力を貸してくれー」

桑野 匡近は、実弥の弟である不死川 玄弥と行動を共にしていた。

今では自分で仕事を見つけ、寺子屋で教鞭を振るっている。

その間に、実弥とも連絡を取りながら、玄弥に対するほとぼりが冷めたころをめぐめて二人を引き合わせようとしていた。

「なんだ匡近さん、またとんでもない量をもたらってきたな」

玄弥が外に出ると、両手に風呂敷を携えた匡近が立っていた。

「ああ、子供達の親御さんがいろいろくれたんだ。そろそろ身体が痛くてな。すまんが手伝ってくれるか？」

気性の荒い玄弥だが、兄の恩人である匡近にはよく懐いていた。

実弥と会うのはまだ時期が早いということで見送られているが、今まで面倒を見てくれた匡近が言うのだからと自制していた。

匡近は、怪我の後遺症で継続して身体に力をかけていると肺や胸筋が痛む身体になっていた。

それでも玄弥を探して四六時中歩き続けて、出会ったときにはひどい顔をしていたことを玄弥はよく覚えている。

「あんまりムリすんなよな」

ぶつきらぼうに言うが、匡近は心配してくれているんだと理解した。

そんなところが、本当に兄に似ているな、と思わざるを得なかった。

最初こそ、早く柱になって兄に会いたいと躍起になっていたが、それもやっとなりを潜めた。

「そういえば、見慣れない子が街にいたよ。えらい別嬪だが、たぶん玄弥と同じくらいの年頃だろうな。さて、薪を買って帰ろうとしてたんだが、両手がふさがっててな。悪いんだが、買ってきてくれないか？」  
「わかった」

玄弥は任務があるときは家にはいない。

だから、家にいる間はできるだけ匡近の力になりたいと、態度には

出さないが二つ返事で出かけた。

思い出すのは鬼を食ってでも成り上がって、実弥に会うと思つていたあの頃。

兄に、謝りたかった。

自分を守ってくれたのに、ひどい言葉を投げつけてしまったから。母を殺してでも、守り通してくれた。

そんな兄の為に、少しでも役に立ちたい。

そう思つてあの日まで無茶をしてきた。

しかし、匡近と出会つてすべてが変わつた。

兄をよく知る者だといった匡近は、身体に鞭を打って探しに来ていた。

匡近が初めて会つたときに自分に言つた言葉をよく覚えている。

「俺はお前の兄に生きる意味をもらつた。だから、今度はお前の兄の生きる意味を護りたいんだ」

兄貴がそんな風に言うわけない。

最初は全く信じられなかつたが、匡近の話を聞くにつれて、涙がこぼれてきた。

鬼殺隊をやめるように言われたが、それでもこれはやめることができない。

罪滅ぼしでもある鬼殺。

あの日、護つてくれた兄の背中を追いたい。

それが玄弥の譲れない想いだつた。

匡近はしぶしぶそれを承諾して、稽古をつけてくれた。

自分は身体を激しく動かせないが、それでも何か教えてやりたいと申し出てくれた。

呼吸を使うことに全く才能がなかつた玄弥だが、それでも匡近はあきらめず付き合つてくれた。

しかしやはり呼吸は習得できなかつた。

それでも体格に恵まれた玄弥は、何とか自力で鬼を狩っている。

殺されてしまいそうな時もあつたが、周りの隊士となんとか連携を取つて命を繋いでいた。

「おばちゃん、薪売ってくれ」

「あら、玄弥くんじゃない。お久しぶりね」

そう長く住んでいたわけではないが、それでも街の住人は匡近の身内であると知ると顔と名前を憶えてくれた。

そう小さな街ではないが、それでも風の噂でいろいろな情報が入る。

それにできた先生だと、匡近は割と有名だったこともあるし、もともと根が優しい玄弥は、街で困っている人たちに力を貸したこともあった。

自分は体格がよく、鍛えているし重い物なんかも軽々持てるからだ。

「おまけしとくね。玄弥くん、力持ちだから余裕でしょ？ 匡近先生によろしくね」

「ありがとうおばちゃん」

そういって大量の薪を軽々背負い、玄弥は帰路に就いた。

そこで、目の前の茶屋の前で座り込んでいる少女を見かけた。

年端は自分と同じくらい。

恐らくは匡近が言っていた少女なんだろう。

見た目がとても整っているし。

どこかから嫁いででも来たのだろうか。

まあ自分には関係ないと思い、素通りしようと思ったとき。

ぐうう。

と、腹の虫が鳴く音が耳に入る。

少女は顔を真っ赤にしてうつむいた。

腹が減ったなら、茶屋で団子でも頼んだらいいのに。

そう思ったが、目の前で座り込んでいるということは、金がないのだろう。

仕方なく、玄弥は声をかけた。

「おい、なにしてんだお前」

びくつと肩を震わせて、少女は口を開いた。

傷だらけの目つきの悪い男に急に声をかけられたのだから、驚いた

んだらうと玄弥は思った。

「じつは、お財布をすられてしまつて…」

「家に帰つたらいいじゃんか」

「うっ。…仕事を探してこの街に来たので、家には帰れず…」

なにやら困りごとのようで。

放つておいてもよかつたが、あのお人よしの匡近に知られるとどうなるか考えた玄弥は、提案をした。

「とりあえずウチくるか？飯くらいなら出るぞ」

「い、いいんですか!？」

よほど腹が減つていたのか、少女は玄弥の後ろをついてきた。

街から匡近の家までは、およそ十分ほどで、ほんの少しだけ街の外れに住んでいた。

その間、少女は謝罪と感謝を繰り返し述べる。

玄弥としては、飯を食えない辛さや、外で過ごす寂しさを知っているし、女の子ということもあり放つておけないというのが本音だった。

家について、玄関を開けて玄弥は匡近に聞こえるように大きな声を出す。

「匡近さーん、悪いんだけどもう一人分飯作つてくれー」

台所から、匡近が廊下に顔を出す。

「なんだ？今日はいつもより腹が減つて…!?げ、玄弥！一体どうしたんだその子！」

まさか誘拐…？

驚く匡近。

玄弥は、何をそんなに驚いているのか全く理解ができなかった。

しかし、すかさず後ろの少女が声を出した。

「あ、あの！家主様でしょうか？私、この街は初めてでして…！財布をすられて途方に暮れていたところ、この殿方にお声かけ戴きまして…！」

あの玄弥が？

そう思う匡近だったが、そんな風に他人の心配ができる心境にある

ことが喜ばしかった。

「それは災難だったね…。うちでよければ、何日でもいてくれても構わないよ」

「お恥ずかしい話なのですが…ここにきてどこにも頼れるお方がおりませんで、困り果てていたところです。本当に、何と感謝したらよいか…」

「はっはっは。困ったときはお互い様だよ。感謝ならその玄弥に言ってあげてくれ。それじゃ、俺は夕餉の支度を続けるよ。玄弥、お嬢さんを居間にご案内してから、薪をくれ」

「わかった。ついてきな」

居間に少女を案内して、自分は釜戸に薪をくべる。

「玄弥…お前は兄貴にそっくりだよ」

「えっ。なんだよ急に」

「なんだかんだ困ってるやつは放っておけないんだよな、お前ら兄弟は」

腑に落ちないが、褒められたことに素直にうれしいと思う玄弥だった。

匡近に茶を淹れてやれと言われたので、玄弥は茶を沸かして湯飲みを居間に運ぶ。

「茶だ」

「お気遣い痛み入ります…」

「そんなかしこまるなよな。こっちまで気い使うだろ」

「えと、玄弥様…でよろしいでしょうか？」

「様なんかつけんなよ。玄弥でいい」

「では玄弥くん？」

年頃の女の子と会話なんかしたことのない玄弥としては、この少女との会話が続くとは思えず、さっさと逃げ出したかった。

「どうして、声をかけてくれたの？」

「…困ってたら声かけるだろ。俺は家を空けることが多いから、匡近さんの話に付き合ってやってくれ。あとは勝手にしたらいい」

誰か助けてくれ。

いつもそうだった。

粗暴な父が母を殴っている時も。

誰か兄を助けてくれ。

そう思わない日はない。

今だってそう思う。

この少女もきつと、誰か助けてくれと思っていたに違いない。

「本当に…本当にありがとうございます。このご恩はいずれ必ず…」

玄弥は少し気恥ずかしくなり、そそくさと台所へ逃げた。

それから二人で夕餉を作り、食卓に並べた。

「今日は腕を振るって作ったぞ。さあ、食べようか」

食卓には、豪華なすき焼き。

寺子屋の保護者からもらった風呂敷には、牛肉とたくさんの野菜が入っていたので、たまには贅沢しようと思えば張り切っていたようだ。

「いただきます」

玄弥も心なしか気分が上がっていた。

そして、少女はというと。

「…ぐすつ…」

泣いていた。

さて、女心なんて考えたこともない二人。

しばらくは空気が凍った。

「…申し訳ございません。こんな見ず知らずの女に、ここまでしていただけるなんて…。なんとお礼をしたらよいか…」

「…俺達は、割と苦労してきたと思うし。同じような境遇の人間は、助け合ったっていいだろ。だから気にすんなよ」

「よく言った玄弥。そういうえば、君の名前は？」

「…凜です。私は、ただの凜です。玄弥くんに、匡近様。このご恩は生涯忘れまいとお誓いします…」

「様なんてつけなくてもいいよ。さて、冷めてしまう前に食べようか」  
うつむいていた凜も、すき焼きを一口食べるとその味に頬をほころばせる。

玄弥も育ちざかりな年頃で、うまいうまいとたくさん食べた。

「匡近さんは、何をされているのでしょうっ。」

「俺は、寺子屋で先生をしているよ」

「素敵ですね！玄弥くんは？」

「俺は…」

「先ほど、部屋の隅に刀がございました。もしかして…鬼殺隊ではございませんか？」

男二人は目を見開いた。

それをどこで？とどちらともなく尋ねると、凜は口を開いた。

「私は吉原よりきた、元振袖新造でございます。何やらとても強い鬼が現れて、死傷者が出てしまいました。それにより、足抜けが頻発し、再興する力がない遊女屋は次々と畳んでいったのです。私がお世話になっていた店もその一つ。私より下の禿たちは面倒を見てくれるところがありました。が、女将さんがこの機に外を見てきなさいと、旅をしながら仕事を見つけようと放浪していたところでございました」

上弦の陸のことは匡近も聞いていた。

本来であれば鬼殺隊が被害を補完するのだが、遊郭ということもあり手が出せなかったのだろうか。

なににせよ、鬼の被害は多い。

このように街単位の大被害になると、手が回りきらないのも悔しいが納得できた。

「ならなおさらここにいなさい。玄弥は現役だし俺も元は鬼殺隊だ、鬼の被害にあった人たちを助ける義務がある」

「…匡近さん、ありがとうございます」

「まあ同じ境遇ってのは間違ってたな。もって砕けた感じでいいだろ」

「…うん、玄弥くんも本当にありがとうございます…」

凜は泣きはらした目で、はにかんだ。

そして、二人もほほ笑む。

すき焼きを平らげてから、三人で茶を飲んだ。

凜の旅はそれなりに波乱万丈で、愉快痛快。



笑い話をたくさん聞いて、みんなで笑った。

玄弥が風呂を沸かして、まず一番に凧が入った。

一番風呂を居候が入るのは心苦しいといったが、今更気にするなといわれ、観念して入る。

その間にもともと荷物の少なかつた玄弥の部屋を、凧の部屋として開けた。

風呂から上がった凧は、まさか自分が一人部屋をもらえるなんて思ってもおらず、またも泣きながら頭を下げる。

玄弥はあまり家にいないから居間で寝るから気にするなといった。そして夜。

皆が寝静まった頃。

玄弥はこの家に住人が増えたことにあまり現実味が持てず、眠れずにいた。

縁側に座り込んで、空を見上げていると、上の階の窓が開いた音がした。

凧は下で玄弥が起きていることに気が付く。

「…そっちへ行っても?」

「いいけど」

凧が下に降りてきた。

気が付くと、すつと玄弥の隣に腰掛けていた。

「…もう、なんてお礼を言ったらいいか…」

「まだ言ってるのかよ。もういいって」

「…あのね、私ね。両親は鬼に食べられたの。それで、間一髪のところまで鬼殺隊の隊士様に救われて、親戚のところへ引き取られたんだけど、あまり裕福でなくて…」

どうやら、それで遊女屋へ身売りされたらしい。

「当時は十歳を超えたくらいでね。女将さんが怖くて怖くて…。でも年月が経つと、女将さんも少しずつ認めてくれて、仕事が楽しくなったの。道行く花魁さんは、本当にきれいだったし、芸事も楽しかった」

「…残念だったな。本当に」

玄弥はいたたまれない気持ちになった。

せかつく鬼から救われたのに、また鬼によってその人生を狂わされてしまった。

凜が気の毒で仕方なかった。

「吉原に鬼殺隊の隊士様が来た時も、私は泣いてすぐることしかできなかつた。無事を祈ることしかできなくて、本当にみじめだつた。だつて、素敵な花魁さんだと思つてた人が、隊士様の奥様だつたんですもの。立派で、かつこよくて。私なんかとは違つて、強くてたくましい方だつた」

「普通に生きてれば、鬼になんて立ち向かわなくていい。俺たちはそうしないと気が済まないからやつてるだけだ」

「それでも…ね。私に玄弥くんみたいな強さがあれば、刀を握れたんじゃないかつて。決して簡単なことだとは思つてないんだけど、どうして私にはその強さが無いのかなつて…」

「強くなかないよ俺は。強くなりたいと思つてるだけだ」

「そんなことないわ。とつても強いとおもう。今日だつて、私に声をかけてくれた」

そんなこと言つて、笑いかけてくるものだから、玄弥の顔は真っ赤になる。

「俺には、兄ちゃんがいるんだ。世界一やさしくて、かつこいいんだ。でも、俺はひどいことを言つちやつたんだ。だから、もつともつと強くなつて、謝つて、今度は俺が護つてあげたいんだ」

「…本当に、玄弥くんは優しく強くて。素敵ね」

月灯りに照らされた凜の笑顔はとても素敵で。

玄弥は気恥ずかしさでもういっぱいいっぱいだつた。

さてどうしたものかと耐えがたい心情になっていると、凜が口元を手で押さえる。

欠伸をしているらしい。

「今日はいろいろ疲れたろ？もう寝ないと体に障るぞ」

「…そうね。玄弥くんも早めにおやすみしてね。それじゃあ」

そういつて凜は上の自室へ上がつていった。

家族を失う辛さは、痛いほどよくわかる。

自分はまだ兄が生きているが、凜はもう肉親が誰もいない。  
今自分が鬼殺を続けることで、凜のような人を少しでも減らすこと  
ができるなら。

そう思わずにはいられなかった。

「強く、なりたい」

そうつぶやく玄弥の頭には、実弥の姿があった。

――

炭治郎が刀鍛冶の里にいる間、参座はというと。

「ここが、万世極楽教の本拠地かの」

「はい、私の掴んだ情報によりますと」

「…哀しきものよの。鬼にすぎり、人が食われてもまるで無関心。そ  
れでいて、何もしたくなくなれば死を選ぶか」

隠と共に上弦の弐、童磨が教祖として崇められていた万世極楽教の  
本殿へと足を運んでいた。

というのも、前々からかなりの頻度で人がいなくなる宗教があり、  
その周辺を探ってはいたのだが、確たる証拠がなく踏み入れなかった  
が、ここにきて鬼の姿を見たという情報が入った。

「しかし、なぜ今までは情報がなかったのかのう。何百年と続く宗教  
なのであろう？」

「はい。ですが最近、教祖が変わり人を救う行為の頻度があまりにも  
早く、手に負えないということとで内部からの裏切りがあったよう  
です」

「…度し難いの。ヌシはここで待っておれ。ワシのみで行く」

「御意」

童磨が万世極楽教の教祖だったとは知らない鬼殺隊が、なぜここに  
来たのか。

つまり、童磨の時は人を食う回数が多くはなかったが、新たについ  
た教祖は早く強くなるうととにかく生贄を強要した。

それについていけなくなった幹部たちから、教祖を斬り離すべく鬼

殺隊に通報があったということだろう。

「何も知らずに、宗教にすぎるものは致し方ない。人間とは、強くも弱い生き物だしの。しかし、それを食い物にする人間は許すことはできません。：しかし、ワシが言っても仕方ないのであろうな」

空気がひりつく。

珍しく参座は機嫌が悪い。

大きな屋敷だった。

そこには白い着物の信者が多数いて、それぞれが怠惰な生活を送っていた。

「御免。ワシは鬼殺隊じゃ。鬼が出たと聞いてきた」

「ああ、これは鬼殺隊の隊士様！教祖様が変わられてから、何と人を食らうているのが目撃されました！皆恐ろしくて夜も眠れないのでございませう！」

屋敷の玄関口で、隊服を見た幹部と思しき初老の男は、すぎるような声で参座に助けを求めた。

「：案内せい。鬼は斬る」

よくもまあ思ってもないことを言える。

参座は怒りを押し込めて、教祖の元へと案内させる。

中は豪華絢爛で、節々に高級品と思われる壺やら額やらが飾られていた。

ついに参座は怒りを通り越して呆れになった。

様々な信者が、金も何もかもを万世極楽教につき込んで、与えられた救いというものにすがってきた証なのだろう。

そうして、一層豪華な部屋の前。

その襖を開けると、美しい女の鬼がいた。

「教祖様、直々に救いを求める信者が謁見を望んでいます。通してもよろしいでしょうか？」

「よい。通せ」

「さて、お初にお目にかかる。ワシは天羽 参座。教祖様の首を頂戴しに参った」

参座の腰の日輪刀を見ると、鬼は血相を変えた。

「貴様、鬼狩り！おのれ、謀ったな！」

言い終わるとき、鬼の首は斬れていた。

「ああ、鬼狩り様！あなた様のおかげで、万世極楽教にはまた平和が訪れます！本当に感謝の意が絶えません！」

「さて、ヌシにとつて信者とはなんだ？聞かせてくれるかの？」

男はそう聞かれて、用意していたであろう言葉を吐き出す。

「信者とは救うもの。我々の信ずる万世極楽教を信仰する信者たちとは、現世の苦行からの解放を求めているのです！鬼狩り様もご興味がありませんか？」

「無い。…が、貴様の悪行には興味があるでの」

「悪行とはいいいがかりでございます。確かに宗教というのは理解されがたいものです。それでも信者の皆は喜んで信仰していることは確かでございます」

何とも齒痒かった。

この男、斬り捨てようかとも思ったが、己が持つのは鬼殺のための刀だと言い聞かせ、ぐつと抑える。

「ワシは頼られねば答えぬ。信者にはそれがない。しかし覚えておけよ。もし信者がワシのことを頼ったとき、万世極楽教は終いじや。肝に銘じておけ」

気温がぐつと下がったその部屋で。

男は身動きを取れず、冷や汗を流した。

そして、舌打ちを一つして参座に早く帰るように吐き捨てた。

どうも機嫌の直らない参座は、足早に屋敷から出る。

「…人柱様。嫌な役回りで本当に申し訳ございません」

堪らず隠が参座に頭を下げる。

「なぜヌシが謝る。悪いのは人を食い物にしておる存在の方だの」

「…同じ種の恥さらしですね」

「何を言う。奴らは人間などではない。鬼じや。鬼殺を頼まればワシは迷わず斬るでな。今回は教祖が鬼だという話だったから奴しか斬らなかつただけだの」

隠は思った。

生まれる時代と、環境が違えば。

修羅に身を落として、鬼と呼ばれたのは、人柱の方なのだ。

「ワシが、怖いか？」

急にそんなことを問いかけられたものだから、隠は言葉に詰まった。

「意地が悪かったでな。すまんのお」

「い、いえー！そのようなことは…」

「ワシも、己がこわい。ワシはよう斬れるからの…」

そういつてとぼとぼ帰路に就く参座の背中を見た隠は、何も言えなかった。

参座は自問自答していた。

鬼とはなんなのか。

人とは、いったい何なのか。

その答えは、ついに出不かった。

ワシが斬る以外で護れるもの。

鬼が、姿を見せた。

目で確認するまで、炭治郎も無一郎も反応できないほどの気配の惚け方。

しかし、それでも分かっていたから早かった。

二人は直ぐに臨戦態勢を取る。

日輪刀を抜刀。

無一郎は首を切り落とそうと振り切った。

鬼の顔面を縦に斬りつけるが、首は落とせない。

炭治郎の技が当たり、禰豆子の蹴りを食らっても反撃してこない鬼に訝しむが、すかさず無一郎が首を落とす。

「時透君、油断しないで！」

炭治郎が叫ぶと、たちまち鬼は分裂する。

間髪入れずに無一郎が斬りこむと、扇のようなものを振りかざす鬼。

突風。

無一郎は壁を突き破り、遠くへ飛ばされる。

炭治郎は、禰豆子に間一髪のところを掴まれる。

「時透君!!」

「カカツ。楽しいのう。豆粒が遠くまでよく飛んだ、なあ積怒」

「何も楽しくはない。儂はただひたすら腹立たしい。可楽…お前と混ぜたこと」

分裂した鬼の目には、上弦の肆。

積怒と呼ばれた鬼が一度錫杖で地面を叩くと、強力な電流がその場を駆け巡る。

意識が飛びそうな炭治郎。

そこへ、新たな影が飛び出してくる。

—嵐の呼吸 参ノ型 あおち風—

一撃のもとに、二体の首は落ちた。

「与一さん、油断しちゃだめだ！この鬼の弱点は首じゃない！」

「わざと斬らせてるってことかい…。厄介だねえ」

一瞬のうちに分裂した、翼のある鬼によって炭治郎は上空へと持ち上げられてしまう。

―嵐の呼吸 陸ノ型 晴嵐―

上空の鬼に向かって与一が繰り出した斬撃が、足を斬り落とした。

「おいおい、あんまおいたしちやだめだぜ。うちの若手なんだ、返してもらうよ」

「人間風情が生意気な！」

「少年、合わせられるか？」

「はい！」

それからは早かった。

与一は的確に鬼の首を狙い、炭治郎はそれに合わせて手足をさらに斬って動きを封じる。

それでもあつという間に上弦の肆は再生。

急所がわからず手をこまねいていた。

「与一さん、四体同時に斬りましょう！俺が二体斬ります！」

「それじゃあ頼もうか。行くぞ」

―嵐の呼吸 漆ノ型 洗車雨―

―ヒノカミ神楽 日暈の籠 頭舞い―

狂いなく同時に首を落としたが、それでも消える気配はなかった。

その時炭治郎は、五体目のにおいを察知した。

「与一さん、五体目です！おそらく五体目がどこかにいます！」

「五体目か…少年！上だ！」

しかし遅かった。

気が付くと上で扇を振り切った鬼。

すかさず与一は炭治郎と禰豆子に覆いかぶさる。

「与一さん！」

「ぐぬう…！」

めきめきと嫌な音が響く。

意識を飛ばしてもおかしくないほどの重圧が、与一の背中にかか



悲痛な顔をする与一を見ることしかできない炭治郎。

扇の圧力から解放された与一は、炭治郎に声をかける。

「…無事か、少年」

「すみません俺たちの為に…！」

「どうってことはない。俺が四体を相手にするから、少年は五体目を探してくれ」

「いくら何でも四体を一人は無茶ですよ！」

「行け、少年。気配の隠し方が巧妙すぎて俺では早く見つけられない。この四体は絶対に通さない。ほら、急げ」

炭治郎は走り出した。

急げ。

与一がつぶれてしまう前に。

「禰豆子！与一さんを護つてくれ！」

「さて、両腕の感覚が怪しいが。やろうか」

四体から繰り出される猛攻。

扇による吹き飛ばしを警戒しながら、雷を潜り抜け、槍を躲す。

追い打ちは上空からの音波攻撃。

決して通すわけにはいかない。

禰豆子も応戦するが、それでも一体相手にするのがやっつこのようだ。

少しずつ押され気味になり、ついに槍が与一のわき腹を切り裂く。

「力もないのに、立ち向かうなど…。哀しくなるな」

「男にはかっこつけなきゃならん時があるんだよ」

減らず口を叩く与一だが、正直いっばいっばいだ。

それぞれの攻撃が強力すぎる。

禰豆子に負担をかけるわけにもいかず。

そんな中、四体それぞれを均等に相手にしなければ、炭治郎のもとに行かれてしまう。

死ぬかもしれない。

それでも、自分より若い人間が死ぬところなんて見たくなかった。「それ、動きが遅くなってきたぞ！」

しまった。

そう思ったときには遅かった。

雷が足から身体に突き抜ける。

意識を持つていかれそうになるが、歯を食いしばり錫杖の鬼の首を落とす。

「少女、上を頼む！」

空を飛ぶ鬼に、禰豆子は飛びつく。

血気術で燃やすも、離れられない。

「カカツ！本当にしぶとい男じゃのう！」

扇による風圧を正面から受けるが、足がはち切れんばかりに踏みとどまる。

「んぐっ！」

前方に注意を引かれすぎて、後ろから迫る槍を見逃す。

背中を刺される。

そう思ったが、禰豆子が鬼の頭を蹴り飛ばす。

「こりゃあ頼もしいぜ」

正直刺されたと思ったが、自分は無事。

禰豆子のことを護らねばと思っていたが、あながち戦えるんだと安心した。

「…急げ、少年！」

山の中、足元。

野ねずみほどの大きさ。

ついに、五体目を見つける炭治郎。

「見つけたっ！」

炭治郎の日輪刀はまっすぐに首へ向かう。

切っ先が少し首に食い込む。

あと少しだ。

そう思ったとき。

「ギャアアアアアアア！」

突然、叫びだす鬼。

そして進むのをやめる日輪刀。

斬れない首。

そして真後ろに恐ろしい気配を感じる。

どんっ。

小太鼓の音が響く。

すると木のようなものがすさまじい速度で炭治郎に向けて生える。

その先端は龍の頭のように、炭治郎は食われる寸前だった。

「彌豆子ー！」

間一髪。

彌豆子が炭治郎を抱える。

左足はなくなっている。

「少年！無事か！」

与一が追い付く。

「なんとかか！でも彌豆子が！」

「少女の無事を確認してから加勢しろ！一旦こいつは引き受ける！」

引き受けるとは言ったものの。

この子供くらいの鬼…。

背筋が凍るほどの威圧感。

間違いなく四体より強い。

「不快、不愉快。極まれり。極悪人どもめが」

気が付くと五体目は厚い樹でおおわれている。

炭治郎が声を上げると、何か不満があるのかと威圧してくる。

「どうして…俺たちが悪人なんだ…」

「弱き者をいたぶるからよ」

小さな弱き者を斬ろうとしたから。

しかしこの鬼、食った人の数は百や二百は優に超えている。

そのことに激昂する炭治郎。

「少年、落ち着け。こいつらは俺達では理解できん。斬るのみだ」

「彌豆子は無事です。俺も加勢します。絶対斬りましょう、この悪鬼を」

構える二人。

何処からともなく現れる樹の頭。

そして繰り出される喜怒哀楽の攻撃。どれをとつても攻撃が強化されている。

本体を隠していると思しき場所までたどり着くことも容易ではなかった。

「少年、龍の頭は五本だ！それ以上は出ない！」

「はい！伸びる範囲はおそらく66尺です！」

猛攻をよけながらなんとか攻略の糸口を探る二人。

禰豆子も応戦するが、やはり分が悪い。

そこで、炭治郎が音波攻撃を受けてしまい、地に落ちる。

「少女！少年を！」

すかさず禰豆子を炭治郎の元へやる。

恐らく鼓膜が破れている。

一度炭治郎の体制を立て直さなければ。

「少女！少年の調子が戻るまでなんとか持ちこたえろ！」

防戦一方になるこの状況。

さらに炭治郎がやられ、いままともに戦えるのは自分ひとり。

連戦に背中の軋みと体力は限界に近い。

そこで禰豆子と炭治郎が樹に絡めとられてしまった。

—嵐の呼吸 肆ノ型 積乱豪雨—

下段からの斬り上げに、高速の斬り下げ。

いつもは問題なく使える技も、少しづつ身体への負担になる。

何とか炭治郎たちを逃がすことに成功するが、扇の時の重圧に捕まる。

「くっそ……！」

とつさに右腕をかばうが、左肩の骨が折れる音がする。

威力が先ほどとは段違いだ。

「与一さん！」

炭治郎が戦闘に復帰。

ここで与一、賭けに出る。

「少年！本体だけを狙え！俺があの小僧を叩く！」

与一は飛び出した。

襲い来る術をよけ、時にはその身に受けて。

―血鬼術 無間業樹―

与一の視界は樹の龍で埋めつくされる。

この時、与一は命の限界に踏み入る。

元より、左肩から下は使えない。

限界まで突き詰めたその動きは、龍をかいくぐる。

左腕がいよいよ食われて無くなったとき、ついに上弦の肆の眼前に迫る。

「さすがに首切れれば隙ができるだろ」

「捨て身か。だが弱い」

―嵐の呼吸 捌ノ型 浚いの風―

―狂圧鳴波―

口からでる超高压の衝撃波。

それを紙一重で躲そうとするも、左肩から鎖骨ほどまで吹き飛ぶ。

だが、捌ノ型は首に届いた。

それと同時に、禰豆子の血鬼術が、本体の樹を焼いている。

与一と再生に割かれる時間で、炭治郎は殻を斬った。

中は空。

「貴様アアア！逃げるなアア！責任から逃げるなアア！」

炭治郎はにおいをたどり、本体を追いかけてようとした。

しかし、行く手を龍に阻まれる。

まさか。

「与一さん！」

振り返ると、右腕と左足を失くして倒れ伏す与一の姿が。

今まさに、頭をつぶされようとしていた。

「禰豆子！誰でもいい！誰か、与一さんを……！」

助けてくれ。

「あなた大丈夫?!」

間一髪。

間に合ったのは、恋柱の甘露寺 蜜璃だった。

「…あれは本体じゃないです。今…炭治郎が、本体の首を…。恋…柱

様はこいつを…」

「もうしゃべらないで！こいつを足止めすればいいのね！」

蜜璃は、与一を隅に座らせると、すぐに振り返る。

「絶対許さない。私の仲間をこんな風にして…！」

流石柱の一人。

あれほど二人がてこずっていた鬼も、たった一人で互角以上に戦う。

勝てる。

炭治郎は希望を抱く。

「炭治郎くん、行って！ここは私が何とかするから！」

走る。

逃げ。

与一が、蜜璃が繋いでくれた。

己が、終わらせるのだ。

「貴様の首は、俺が必ず斬る！」

本体は気が付くと、はるか遠く。

そこで、善逸の言葉を思い出す。

筋肉の繊維一本一本、血管の一筋一筋まで力を巡らせ。

足だけに力を溜め、爆発させる。

行け、追い付く。

首を、斬る。

日輪刀は届く。

「貴様はアア！儂がアア！可哀想だとは思わんのかアアアア！」

巨大化する上弦の肆。

捕まれる炭治郎。

負けじと禰豆子が焼く。

全員が崖から落ちる。

「逃がさないぞ…。地獄の果てまで逃げても追いかけて…頸を…斬るからな…」

枝に引っかかった炭治郎は言った。

その怒気と表情に、さすがの上弦の肆もひるんだ。

しかし、その先に刀匠たちが見える。

目の前の鬼は人を食って、力を補給しようとしている。

追いかけては。

もう一度だ。

もう一度、今度こそ、あの首にまだ食い込んでいる日輪刀で、斬り

落とさなくては。

刹那、風切り音。

目の前に、抜き身の刀が降ってきた。

「使え！炭治郎、それを使え！」

ボロボロになった無一郎が、炭治郎に鋼鐵塚の研いでいる日輪刀を投げたのだった。

どんっ。

一閃。

ついに、首を斬り落とした。

夜が、明ける。

禰豆子が向かってくる。

日の光で死んでしまうと叫びたいが、声が出ない。

依然、禰豆子は指をさしている。

そちらへ視線を伸ばすと、首なしの鬼が人を襲おうとしている。

「しくじった！」

しかし、日の光が、禰豆子を焼く。

炭治郎がかばうが、禰豆子は炭治郎を放り投げる。

心臓だ。

心臓の中に、いる。

「命をもって、罪を償え！」

今度こそ、上弦の肆の首は斬れた。

だが、禰豆子は。

焼けてしまった。

護ると誓った妹。

判断できなかった。

自分には、決められなかった。

人の命が危ういというときに、迷ってしまった。  
参座の覚悟に、泥を塗ってしまった気がした。  
でもそれでも…。  
妹を護りたかった。

「竈門殿…竈門殿！」

うずくまって泣いていると、刀鍛冶に声をかけられる。

言われるがまま、後ろを振り向くと、そこには禰豆子が立っていた。

「お、お、おはよう」

太陽の下を歩く、我が妹がいた。

炭治郎は、何かを言った。

何を言ったのかは覚えていない。

とにかく、禰豆子が生きているのがうれしくて。

抱擁して、妹の存在を確かめた。

「よかった…！よかったああ！禰豆子無事でよかったああ！」

「よかったねえ」

刀鍛冶たちももらい泣きするが、そこで炭治郎は与一のことを思い出す。

「そうだ、与一さん！」

駆ける。

限界を迎えた身体に鞭うって、駆ける。

その視界に、死に体の与一が入る。

「与一さん！」

目は開いていなかった。

ゆっくりと口を開く。

「しょう…ねん…か」

見て分かった。

もう長くない。

「おに…は…？」

「倒しました！倒したんです！だからもう安心してください…！」

「そう…か。しょう…じよ…は？」

「禰豆子も無事です！みんな無事です！」



「ぜん…いつ…には。いわないで…くれ…な。あいつ…なくだろう…から」

死ぬ寸前も、誰かのことを思うのか。

優しい人だ。

炭治郎は、己の無力を呪った。

「ああ…しぬん…だな。おれは…。ふしぎと…こわくない…」

「すみません…俺が、弱かったから！俺の力が足りなかったから！」

「…やさ…しいな。しようねん…。なにも…きにする…な」

かすかに、ほほ笑む。

開かないその目からは、大粒の涙が流れる。

もう命の灯は消えそうだ。

最期の方で、与一は言葉を紡ぐ。

「さび…と…そつちへ、いくよ…。おれも…だれかを…たすけたよ…」

ついに、その息を引き取った。

炭治郎は涙を流しながら、与一の亡骸の上で意識を失った。

ぼろぼろの蜜璃も、目の前の鬼が崩れ落ちて一安心。

無一郎は見事上弦の伍を倒し、記憶を取り戻した。

数々の犠牲を出したこの戦いも、夜が明けてついに終わりを迎える。

――

「与一が…」

上弦二体の出現を、最小限の被害で退けたという知らせを受け、悲しみに暮れているのは、水柱の富岡 義勇だった。

与一と義勇は同期。

最終選別で錆兎に命を救われた者同士だった。

同期がまた一人、死んだ。

あの日、錆兎が繋いだ命は、少しずつ失われていく。

哀しみが、その心を押しつぶそうとしている。

その日はなかなか寝付けなかった。  
それから少しして。

無一郎と蜜璃が意識を取り戻した頃。

「義勇か、久しいな。息災かの？」

「…お久しぶりです」

柱合会議の集合がかり、義勇と任務地が近かった参座は、義勇の様子を見に来ていた。

「…顔見知りか死んだか？」

至って無表情な義勇なのだが、その哀しみが参座には目で見えるようだった。

「同期が、一人」

「そうか…。本当にこれは慣れたくないものなの」

世間話、という雰囲気にもならず。

二人は無言で柱合会議へ向かう。

その日の柱合会議では、産屋敷は姿を現さなかった。  
病状が悪化し、人前に立てる状態ではないらしい。

それでも柱たちの総意は変わらず。

産屋敷あまねが代わりに取り仕切っても、意を唱える者はおらず。  
そこで、痣の出現の話になる。

今回の戦いで、無一郎と蜜璃が痣を発現させた。

その条件を聞き出すと、無一郎が事細かに詳細を話す。

そして、痣が発言したものは例外なく二十五を待たずに死ぬという。

しかし、それでも柱たちは今更といった気概で。

たとえ死のうとも、無惨を打ち取る可能性が上がるのであれば構わないといったところだった。

行冥は、自分の年齢をかんがみて、自分が痣を発現したらどうなるのかとつぶやく。

「おそらく、行冥殿に至っては使ったら日をまたがずに死ぬであろうな」

参座は容赦なく口に出す。

「しかし、痣を抑えることもできるということ。よいか無一郎、甘露寺殿。少なくとも、この先は痣はだしてならぬ。禰豆子が太陽を克服しおったそうだから、無惨がなにか動きを見せるであろうし、上弦も残すところ参とうのみのみ。この二体はワシが斬る」

「んなこと言ったってよお参座さん、俺達は今更自分たちの命なんざ惜しくもねえぜ」

「ワシは惜しい。わがままだとはわかっておるがの。きいてはくれぬか？」

そんな風に言われた柱は、その言葉にありがたさはあるがそれでも納得はできなかった。

「…あまね殿も退室されたので、俺はこれで失礼する」

そういつてその場を後にしようとする義勇につつかかった実弥と小芭内だが、行冥に一括されて押し黙る。

「座れ…話を進める…。一つ提案がある…」

そうして、行冥からは柱稽古の提案が持ち出される。

それにえらく賛同したのは、ほかでもない炎柱の煉獄 杏寿郎だった。

「それは実に有意義だな！早速日程を調整しよう！」  
便乗するように天元も声を出す。

「今の隊士は地味だからな。ここで派手に戦力を補強するのは名案だな」

そんなこんなで柱稽古、始動。

義勇は稽古などつけないと頑なに拒絶した。

解散する直前。

参座は無一郎に袖を掴まれた。

「…どうしたんだの？」

「…思い出したんだ。それで、カナエさんにもお礼を言いたくて」

少し頬を染めて、気恥ずかしそうに言う無一郎に、参座は本当にうれしくなった。

「そうか。それじゃ行こうかの」

参座は無一郎を肩車する。

無一郎は恥ずかしがって降りるといふが、参座は降ろさなかつた。帰り道。

肩に乗つた無一郎は、炭治郎が思い出すきつかけをくれて、上弦の伍と戦つてるときに、勇気を出してくれた小鉄の話をした。

うんうんと参座はにこやかにその話を聞く。

しばらく走ると、参座の家に着く。

日は傾いて、夜の警邏は他の隊士に任せて泊つていけという参座。

鬼の出現もぱたりと止まつたので大丈夫だろうということ、文を出すを決める。

玄関前に立ち、懐かしい家を見て少し緊張する無一郎。

「おーいカナエ。帰つたぞー」

「はいおかえりなさ…無一郎くん！久しぶりね〜！元気だったかしら？」

「うん。カナエさんこそ、元気だった？」

にこやかに言う無一郎に、カナエは一瞬面食らつた。

驚くほど表情豊かな無一郎。

ああ、その心に何かいいことがあつたんだなと理解した。

「上弦の鬼を単身で倒した立派なおとこじゃ。今日は無一郎の為にうまいものを作つてくれぬかの」

「まあ！すごいわ無一郎くん！腕によりをかけて支度するわ！」

相変わらず、元気な人だ。

無一郎は嬉しさを隠せなかつた。

この人たちに拾われて、本当に良かった。

心からそう思える。

家の中を歩き回つて、懐かしい記憶に浸っていると、参座と木刀で打ち合つた中庭が見える。

そこに立ちすくんでいると、参座が頭に手のひらを乗せてきた。

「ようがんばつた。本当に、自慢の弟子だのうヌシは」

「…兄のようだと思つてたんだ。無意識のうちに。そのおかげで、本当の兄を思い出せたよ。本当に参座さんには感謝してもしきれないよ」

くしゃやくしゃと撫でられる頭に心地よさを覚える。

そして参座の巻き割りを手伝っていると、カナエが夕餉を作り終えた。

「いただきます」

カナエが音頭を取って、三人で仲良く夕餉を食べた。

カナエの手料理は本当においしくて、自然と笑顔があふれる。

「お礼を言いたかったんだ。カナエさんにとってもお世話になったから…」

「全然いいのよ。こうしてまた三人仲良くご飯を食べるだけで私は嬉しいわ」

そんなこと言われるものだから、つつい無一郎は視線を下に向けて赤面する。

それをみた二人は、顔を見合わせて笑う。

それから風呂に入って、布団に川の字で横になる。

「…僕には家族がいてね。思い出したんだ、全部」

ぽつぽつと家族の話の口にする無一郎。

楽しかったことも、苦しかったことも。

兄が、自分を守ってくれていたことも。

話し疲れて眠る無一郎をカナエに任せ、参座は警邏に出た。

「参座くんの教えた技が、この子を護ってくれてたのね」

カナエが眠った無一郎の頭を撫でると、笑顔になる。

願わくば。

こんな平和が、ずっと続きますように。

そう思うカナエであった。

ワシは斬ることで護るのだ。

「炭治郎?」

七日ほど眠りこけていた炭治郎は、目が覚めると蝶屋敷の病室にいた。

傍らにはカナヲがいて、目が覚めた炭治郎に安堵している。

「…心配かけてごめんね」

開口一番に、謝罪を述べられて動揺するも、想い人の意識が覚めたので笑顔がこぼれる。

「おかえりなさい、炭治郎」

「ただいま、カナヲ」

そこへ、隠の後藤が顔を出す。

無一郎と蜜璃が全快して退院したことと、禰豆子が日の光を克服したことなどをまくしたてて問い詰める。

そんなことを話していると、下から善逸の叫び声がつんざく。禰豆子の様子に感動しているらしかった。

思い出すのは、与一の言葉。

自分が死んだことは、善逸に言わないでくれと。

炭治郎は迷っていた。

本当に、言わなくていいのだろうか。

兄のような人が、この世を去ってしまったことを、知らないままでもいいのだろうか。

「炭治郎…どうしたの? 苦しそうな顔をして」

カナヲがその異変に気が付く。

「…カナヲは、もしもしのぶさんやカナエさんが死んでしまったとしたら…その事実を知りたいと思う?」

酷い質問だと思った。

まるで不安をあおるような言い方に、自分が嫌になった。

「…私は、知りたい。そして、忘れない。その想いを大切にしたいと思う」

「ありがとう、カナヲ。俺も決心がついたよ」

想いを繋いでいく。

そうやって、この鬼殺隊は今日まで来た。

善逸も立派な隊士だ。

あの与一が認めるくらいなの、漢なのだ。

「ごめんなさい、与一さん…。約束破ります」

空から見守ってくれているであろう男に小さく謝罪した炭治郎。

禰豆子に伊之助と間違えられてご立腹の善逸が、炭治郎の元へ文句を言いに来ていた。

病室に来た善逸は、口を開こうとするが炭治郎の表情に勢いをそがれる。

「善逸、心して聞いてくれ」

「なんだよ炭治郎、そんな険しい顔しちやってさ。禰豆子ちゃんが太陽を克服したんだろ？もつと嬉しそうな顔しろよな」

善逸は聞きたくなかった。

いたずらに不安をあおるような炭治郎ではないし、そんな彼がまじめな顔で口を開こうとしているのだ。

なにか、哀しいことを言うつもりなのだろう。

隠の後藤は、空気を呼んで退室した。

「刀鍛冶の里で、与一さんに会ったんだ」

「ホントか？強かっただろー与一は！で、なんか言ってた？」

「…死んだんだ。与一さん」

「炭治郎…」

「俺が弱かったから…与一さんに無理させてしまつて！俺が…！」

「炭治郎！そんなこと言うなよ！俺なんて兄貴の死に際に、傍にすらいてやれなかったんだぞ！お前が、そんなこと言うなよ！」

「善逸…」

「短い間だったけどずっと言ってたよ、兄貴。若い世代が、俺の分まで生きてくれればいいって。最終選別の時に救ってくれた彼みたいに、俺もみんなを護りたいって。だから、胸を張れよ炭治郎…！お前は兄貴が護った命なんだよ…！」

今は亡き男に。

あなたの弟子は、もう立派な男になりましたと。  
心の中で告げた。

「俺は大丈夫だからさ。兄貴の分も生きるんだ。そんでき、今度は兄貴の分も誰かを護る。ほかでもない、兄貴にそう教わったから。炭治郎も、頑張ろうぜ」

善逸から、初めて強がりのおいがした。

今までなら、やっぱり無理だとか。

自分は何もできないとか。

そんなことを言っていたのに、いまの善逸は炭治郎を励まそうとしていた。

一度だけ、笑顔を見せた善逸は病室を後にした。

「炭治郎、頑張ったね…」

カナヲが、炭治郎の手に手のひらを重ねた。

その手があんまり暖かいものだから、炭治郎は涙を止められなかった。

善逸は屋敷の陰でうずくまっていた。

強がりと言えるようになった自分に驚いたが、それでも与一の死は堪えた。

「兄貴…」

落ちる涙は止まらない。

声を押して泣く。

それでもさんと太陽は輝く。

「お前は立派な男だよ」

与一の言葉が頭をよぎる。

「やっぱり駄目だよ、兄貴…。俺、生きて行けそうにないよ…!」

今だけは、泣き言を言ってもいいだろうか。

強く生きると誓ったが、それでも。

初めて家族のように慕った人間の死には、耐えられそうもなかった。

天涯孤独。

捨て子で、家族を知らない。



育手の桑島が家族を教えしてくれた。  
そして与一が兄弟を教えしてくれた。

それも、いなくなってしまうた。

「なんで死んじゃうんだよ兄貴…。強いんじやなかったのかよ…！」

その時、誰かがそばに来るのが分かった。

誰だろうと頭を上げると、禰豆子だった。

「だ、だ、だいじょうぶ、ぶ？」

「こんなかつこ悪いところ、見ないでくれよ禰豆子ちゃん…」

本当にダメな奴だ。

好きなこの前で、こんなみつともない姿を見せて。

兄貴に知れたら、笑われるんだろうな。

そんなことを思っていると、身体にぬくもりが重なる。

「がんばった、ねえ。だい、じょうぶ。だいじょうぶ」

誰かに抱きしめられることなんてなかったから。

ついに我慢できなくなつて、声を出して泣き出してしまった。

「禰豆子ちゃん！俺、おれツ！今度はちゃんとやるから！禰豆子ちゃん  
んは護つて見せるから！」

枯れるまで泣いた。

ふと、頭に誰かの手が乗った気がした。

雑に撫でまわされた気がして。

ああ、これは兄貴だろう。

そう思わせるには十分だった。

――

柱稽古。

それぞれの柱が、隊士たちの能力向上を目的として、鍛錬をつける。

天元の鬼の走り込み。

それに始まり、蜜璃の地獄の柔軟。

無一郎の高速移動の訓練。

小芭内による太刀筋矯正。

杏寿郎が打ち込みと型の補強。

実弥はとにかく打ち込みの稽古。

行冥のところでは筋肉強化訓練。

そして、参座の元で一对一の真剣勝負。

柱の痣の発現を目的としてもいたが、参座はこれだけにはあまり乗り気ではなかった。

それでも一人だけ、義勇は稽古をつけることはなかった。

稽古場で一人、義勇が座り込んでいると玄関口から誰かが呼んでいた。

「義勇さーん。俺ですー。竈門 炭治郎ですー。こんにちはー。じゃあ入りますー」

聞き間違いかと思った。

しかしすたすたと炭治郎は屋敷に入ってくる。

それから柱稽古のこととか、水柱にならなかったことを怒っているとか。

そんなことを話すと、追い返される炭治郎。

だが、そんなことで折れる炭次郎ではなかった。

四日間昼夜問わず付きまとった。

それでも義勇はなかなか折れない。

与一のこともあり、今生きている自分が許せないようだった。

四日目の夜。

蝶屋敷で最後の検診を受け、明日は退院といったとき。

炭治郎のもとに、真菰が現れた。

「こんにちは、炭治郎」

「真菰さん！お久しぶりです！」

「久しぶりだね。炭治郎は柱稽古、いつから出れるの？」

「俺は明日からです！でもその前に、義勇さんのことを気にかけてくれてお館様から文が届いて。今は義勇さんのところに通い詰めていますー！」

「…そっか。炭治郎はすごいね」

すこし、影が差した。

この人も、義勇さんも。

自分が死ねばよかったと思っっているのだろうか。

哀しい。

そんなこと、誰も思っていないのに。

みんな、あなたに生きていてほしいんです。

「真菰さんは、何がそんなに自分を許せないんでしょうか？」

真菰の目は見開いた。

「…そうだね、許せないんだと思う。鱗滝さんの子供達を食った、あの異形の鬼を斬れなかった私を。みじめに生き延びたんだ、私は。あの時、名前も知らない男の子に助けてもらって、七日を過ぎてみてみたらその子は食われて、いなかった」

「そんなことが…」

「俺は柱になるんだって。子供みたいな柱が華麗に助けてくれたから、あんなふうになるんだって言ってたっけな、彼。当時の柱で子供ってことは、参座さんのことなんだと思う。私も、あんなふうになれたらどうか。錆兎が今も生きてたらなって思うんだ」

真菰の心の傷は深い。

仇を取れず、みじめに生き永らえ。

今も十二鬼月の首は斬れず。

錆兎が生きていれば。

炭治郎は、錆兎が今生きていないことを初めて知った。

「義勇はすごいよ。柱になったんだもん。私とは違う。だから炭治郎…義勇を助けてあげてね」

「明日、一緒に行きましょう！真菰さんも義勇さんに稽古つけてもらいたくないですか!？」

驚いた。

話を聞いてなかったんだろうか。

自分は、義勇に会う資格がない。

「俺たちは生きてるんですーそして、生きていくんですーだから、真菰さん。義勇さんに会いに行きましょう！せっかく生かしてもらったんですから！錆兎も、その少年も、きつとみんな仲良くしてくれるの

を願っていますよ!」

そうだ。

錆兎なら…。

義勇を立ち直らせるはずだ。

錆兎はいない。

でも、私がいる。

私が、やらなきゃ。

「うん、じゃあ明日は私も一緒に行こうかな」

「はい!義勇さんもきつと喜ぶと思います!」

それじゃあ明日と真菰は帰っていく。

その夜。

カナヲは、明日で退院する炭治郎の元を訪れていた。

「カナヲ?」

「ここ数日、どこへ行ってたの?」

小首をかしげるカナヲ。

「ああ、水柱の義勇さんのところへね。とても思い詰めている感じで、何とか元気付けてあげられないかなって」

また他人の心配をしている。

カナヲは、炭治郎の心が心配だった。

口を開けば、ほかの人の心配。

優しい人だとはわかってはいるが、それでも少し怖かった。

いつか、自分の心の限界に気が付かないのではないか。

そう考えると、やはり気が気ではなかった。

「私は、炭治郎が心配だよ」

出会った頃より格段に表情を変えるカナヲ。

凍った心は、たくさんの人に温めてもらった。

今度は、自分の番だ。

「俺は大丈夫!カナヲがいてくれるしね!」

どくんと。

カナヲの心臓は跳ねる。

私は彼の心の拠り所になれるのか。

そう思うと、自然と嬉しくなった。

「それに、彌豆子や善逸、伊之助もいてくれるし！しのぶさんや、アオイちゃんに、なほちゃんすみちゃんきよちゃんだっているから！俺は、心配いらないよ」

なぜだろう。

心がかもやつとした。

「…そうなんだ。じゃあ、大丈夫なんだね」

大人げないとわかっていながらも、カナヲは部屋を後にした。

そんなことしたくなかったのに、心が言うことを聞いてくれない。

炭治郎は、突然嫉妬のにおいがしたカナヲを不思議に思いながら、その日は眠りについた。

翌日。

カナヲはカナエの元を訪れていた。

朝早くから荷馬車に乗せてもらい、参座の警邏地区につく頃には昼を回っていた。

「これは驚いたのう、カナヲ。一人で来よったのか？ようきたのう、つかれたろう」

たまたま、稽古の準備をしていた参座に外で出会った。

カナエに話があると伝えると、家にいるから上がりなさいと言われる。

玄関の戸を開ける。

参座の家に来たのは初めてだった。

だが、前にカナエが参座の家について事細かに話していたことを覚えていたカナヲは、すんなり来ることができた。

街の外れにあるが、それでも獣道などはなく迷うことはなかった。

「あらーカナヲじゃない！よく来たわねー！さ、上がった？」

姉の顔を見ると、安心できた。

ここ最近しのぶは、新たな協力者と忙しそうにしているし、自分の悩みで手を煩わせなくなった。

それでも、自分の心に整理をつけられなくて、どうしようかと悩んでいたところ、炭治郎の一件。

正直どうにかなってしまいそうだった。だから、カナヲは走った。

廊下を駆け抜けて、カナエの胸に飛び込んだ。

「あらあら、まあまあ。ずいぶん甘えんぼさんになったのね、カナヲ」  
笑顔で受け止めてくれる姉。

とにかく心地よくて。

全て吐き出してしまいそうだった。

「カナエ姉さん…わからないの。こんなの、初めてで！」

目に涙をためたカナヲの瞳は、ビー玉みたいにきらきら光る。

その様子に、思春期の訪れを感じたカナエ。

「あら、なあに？姉さんに聞かせて？」

カナヲを抱きしめたまま、居間に連れていく。

外では、参座が木刀で隊士と打ち合う音がこだまする。

「炭治郎のことなんだけど…」

それから、カナヲはぽつぽつと心情を吐露する。

傷ついて帰ってくるのが哀しいだとか。

自分を必要としてくれているとか。

でも大勢の中の一人でしかないことに嫉妬しているとか。

何より、そんな自分が許せないとか。

「ま〜可愛いわね、カナヲ！大丈夫よ、カナヲは可愛いもの！姉さんを見てみなさい、参座くんをちゃんと落とすたのよ！きつとうまくいくわ。カナヲは私の妹なんだから」

「本当？」

「ええ、本当よ。私の妹で、しのぶの妹なんだから。姉さんたちが、絶対カナヲを助けるわ。だから安心しなさい？」

「でも、炭治郎が…遠くに行っちゃいそうよ」

「それなら、参座くんをお願いしてみたら？きつと守ってくれるわ」

「そうだ、参座なら。」

刀を持ってない自分の代わりに、炭治郎を護ってくれるかもしれない。

無理なお願いだとはわかってても、言わざるを得なかった。

「参座さん！」

稽古中の参座は、カナヲに呼ばれて振り返る。

「あいてっ」

「す、すみません人柱様！」

隊士の一人の木刀が、参座の頭に当たる。

おびえる隊士は謝るが、参座は頭を撫でて気にするなといった。

「よし、休憩にするかの。ワシの可愛い妹が呼んでおる」

参座は縁側にたたずむカナヲのもとに歩み寄る。

「ごめんなさい、稽古中なのに…」

「なに、気にするでない。して、どうした？」

「炭治郎を、護ってください…。身勝手なのはわかっています。それでもどうか、お願いします…。どうか…！」

いつもと変わらない、にこやかな表情で参座は応える。

「ほかでもない、カナヲの頼みとあらば。この命に代えても護ろう。

どんな鬼でも斬ろう。だから、そのような顔をするな。よいな？」

「ありがとうございます…！」

「ほれ、カナエのところに戻りなさい。ここは危ないからの」

ぱたぱたとかけていくカナヲ。

参座はその姿を見て、今一度自分が護るべきものを再確認した。

思えば、物言わぬ少女だった。

それがいつの間にか、人の痛みを分かち合える優しい少女に。

妹のようにかわいがり、時に甘えられ。

気が付くと小さな背中が、いつの間にか手元を離れていく。

寂しさもあり、喜びもあり。

何より、誇らしかった。

「親の気持ちとは、こんな感じなのであろうか…」

今日の前にいる隊士たちも、そう思い思われる人間なのだ。

護ってやらねば。

一人、心を熱く燃え上がらせる。

――

カナヲが朝早くからいないと聞いた炭治郎。

一体どうしたのだろうかと心配になっていると、真菰が迎えに来た。

そこで、アオイを見つけたので話を聞くと、何やらカナエのところに行っているらしい。

ならひとまず安心かと二人は義勇の元へ急ぐ。

相変わらず、義勇は家で一人たたずんでいた。

しかし、真菰の姿を見ると、目を見開いた。

哀しそうな表情。

それでも、この人に元気になってほしい。

そう思った炭治郎は、口を開こうとするが、急に真菰が前に出る。

すつと義勇に近寄ったと思っただらば。

ばちゃん。

と、頬を平手打ちした。

「男に生まれてきたのなら、進め！進む以外の道などない！」

一喝する真菰。

驚く義勇と炭治郎。

だがまるで。

錆兎に叱られたようだった。

「私は、女だけど。でも、やっぱり進むしかないんだよ…。どんなに苦しくても、錆兎が、みんなが作ってくれた道を…進まなきゃダメなんだよ」

自分が死ねばよかった。

そういった自分を、錆兎は叱った。

己を顧みず、救ってくれた姉や、錆兎。

それは、ほかでもない自分に生きていてほしかったからなのだ。

ようやく、思い出した。

「与一さんは、錆兎から繋いでもらったものを立派に、俺につないでくれました。義勇さんも、一緒につないでいてくれませんか？」

ごめん錆兎、葛子姉さん。



一言、亡き友と姉に謝る。  
一体今まで何をしてきた。

だが、これから。  
まだ遅くはない。

何かを決意した義勇だったが、長いこと何も言わない義勇に、何かまずいことをしてしまったのではないかと内心焦る炭治郎。

義勇の心変わりを肌で感じた真菰は、炭治郎の様子がおかしくて、黙ってみていた。

「炭治郎、遅れてしまったが俺も稽古に…」

「義勇さん、ざるそば早食い勝負しませんか？」

なんで？

そう思った義勇だが、真菰はなにが面白いのかにこにこしながら義勇の背中を押していった。

気が付くとそば処。

勢いよくそばをすすする二人を、笑いながら見る真菰の姿があった。

「ねえ義勇、そのうち、鱗滝さんのところに二人で顔を見せに行こう？」

「…そうだな」

「錆兎にも、顔を見せてあげないとね」

「…ああ」

こうして、水柱も柱稽古に参戦。

義勇のところでは、周りの隊士と連携を取る稽古がされた。

と、いうのも。

義勇に指導する能力がなく、とにかく打ち込みの稽古をしていたのだが、一般の隊士では歯が立たず、協力して義勇にかかっていくため、隊士同士で自然と連携を取るようになった。

その結果、周りの隊士たちはそういうものだととして稽古に来るからいつの間にかそうなっていただけだった。

ワシは、悪い虫であれば斬る。

「つたく、弱えなおい」

柱稽古。

風柱、不死川 実弥。

昨今、隊士の著しい質の悪さに嘆いていた。

稽古をつけてもらっている隊士たちは、それはもう震えあがっていた。

もはやどちらが鬼なのか…。

見た目も言動も粗暴も恐ろしい実弥に、ほとほと困り果てていた。

日が落ちて、その日の稽古は終了といった時。

「精がでるなあ」

不死川邸へと足を運んだのは、匡近だった。

後ろには、何やら少年を連れている。

「匡近、後ろのガキは何だ」

不機嫌になったのが、匡近にはわかった。

「お前の弟だ。訳あって、俺が面倒見ていたがな。頃合いかと思って連れてきたんだ」

匡近の後ろにいた玄弥は、恐る恐る声を出す。

「兄貴…俺。謝りたいんだ」

「俺に弟はいねえ」

「まあまあ、落ち着けよ実弥。最後の肉親なんだ、ゆっくり話でもしてやれよ」

尚も機嫌の悪さは変わらない実弥だったが、匡近の言うことを無下にはできなかった。

「お前は鬼殺隊やめろお。そんで今すぐに荷物まとめて消えろ」

「わかってるんだ。俺には才能はないし、呼吸も使えない。でも、どうしても…。兄貴の力になりたいんだ」

「うぬぼれんじゃねえぞ。てめえなんか肉の壁にもなりやしねえ。さっさと失せろ」

「そこまでだ。茶を淹れよう」

匡近が間に入って、一度居間に座り込む二人。

「なあ、わかってるんだろ。いま、何か起きてる。この先、大きな戦いがあるかもしれない。だから、最後の肉親と仲直りしたいっていう玄弥の意を汲んでやれよ実弥。お前は兄貴なんだから」

茶を持ってきた匡近がなだめるように言う。

眉間にしわを寄せた実弥。

「仲直りも何も、別に怒っちゃいねえよ」

「…本当か、兄貴」

「チツ。なんで鬼殺隊なんかに入ったんだよおめえは。何のために俺があの日お前を助けたと思ってるやがる。この馬鹿が」

「やっぱり、兄ちゃんは世界一やさしくて。」

強くて、かつこいいんだ。

玄弥は、涙があふれた。

「俺…ホントダメな弟で。それでも、兄ちゃんの為に強くなりたくてさ。あの日、お礼も言えなかったし、ずっと謝りたくて。だからいつか、兄ちゃんを助けられるくらい強くなったら謝ろうって…」

「馬鹿言え。兄貴が弟を助けるなんざ、当然のことだ。お前は気にしないですごい強くて幸せに暮らしてりやよかったですよ」

「ずっと、気にしてたもんな実弥。今日、二人を会わせることができよかったですよ」

それから、三人はこれまでのことを話した。

匡近が、今は亡き弟の姿を実弥に重ねていたとか。

人柱に救われてよかったとか。

凜が家に転がり込んできたとか。

久しぶりに会う兄弟は、時間を取り戻すように話す。

「稽古つけてもらってる人たち、相当おびえてたけど兄ちゃんやりすぎなんじゃないのか？」

「うるせえお前は黙ってるお。そもそもあいつらが弱すぎんだよ」

「顔も怖いんだから、もう少し何とかしたほうが…」

「玄弥てめえ！」

玄弥が実弥をあおるようなことを言うと、すぐに憤慨して取っ組み

合いを始めるので、それを見て匡近はげらげらと爆笑した。

ああ、兄弟というのは本当にいいな。

匡近はそう思う。

実弥も、あまり表情には出さないが、本当にうれしそうで。

玄弥なんかはずっと頬が緩みっぱなしだった。

風呂を上がった実弥は、玄弥を呼びつける。

「お前は、鬼殺隊やめろ」

覚悟はしていた。

自分には力がない。

鬼食いも、匡近たつての願いでやめた。

だから、本当に自分は弱い。

それでも。

「それだけはできない」

そういうと、目の前の兄は掴みかかってきそうだった。

「待て、実弥」

肩を掴んで、実弥を止める匡近。

そして、玄弥に目配せする。

「俺は、弱い。でも、あの日兄ちゃんが護ってくれたみたいに、誰かを護りたい。俺は、兄ちゃんの弟だから。弟が、兄貴の背中を追っかけるのは当然のことなんだ」

手足をもういでも止めたかった。

自分は、弟に死なれたら生きていけるかわからない。

たった一人の、家族。

何よりも大切な、家族。

「俺から、何言ってもだめだった。実弥、これは観念するしかない。お前の弟はいつの間にか、立派な男になっちまったんだ」

「…ケツ。勝手にしろお」

もし、弟に何かあれば。

何を捨ててでも、護らねば。

俺は、こいつの兄貴だから。

「ありがとう、兄ちゃん」

そうして、何とか収まりを見せた実弥の機嫌。

二人はほつと胸をなでおろす。

明日は、玄弥も打ち込み稽古で叩きのめすといわれ、恐怖で眠れない玄弥だった。

――

「竈門 炭治郎。ヌシに真剣勝負を持ち掛ける」

参座は、炭治郎に真剣で勝負を挑んでいた。

鍛錬をつけてもらっていた、ほかの隊士たちはざわめく。

見事柱稽古を突破していた炭治郎は、岩柱の稽古を抜けた後、ついに人柱との稽古だと胸を躍らせていた。

己の目標に稽古をつけてもらえることがうれしくて、早くたどり着いた。

だが、待ち構えていたのは、般若のような顔をしている参座だった。何かまずいことをしたのだろうか。

心当たりはない。

それでも、何とも言えない威圧感。

「あの…！一体どういうことでしょうか…」

「ふむ。ヌシはカナヲを泣かせた。それは、兄として誠許せることではなからうて。なれば、炭治郎。ヌシがカナヲにふさわしいか、今ここで試させてもらうでの」

なにがなんだか。

だが、一つだけ確かなことは。

目の前に最強が立っているということだった。

「ヌシのすべてをぶつけてこい。ワシは、鬼じゃ」  
どう動いたらいいのか。

切り込めばいいのか、距離を取ればいいのか。  
わからない。

「その程度で、カナヲを護れるのか？炭治郎」  
瞬きはしていない。

そんな余裕はなかった。

それでも、声が後ろから聞こえる。距離を取る。

だが、もうそこに参座はいない。

また後ろを取られた。

もう、自分で攻め込むしかない。

―ヒノカミ神楽 碧羅の天―

「威力は申し分ない。だが、まだ粗削りだのう」

参座の日輪刀の峰が、腹に当たる。

「んぐっ！」

あまりに重い一撃だった。

もしあれを本気で振られていたら。

斬れていたかもしれぬ。

峰で。

「何をそんなに驚いておる。ワシは、よう斬れるぞ」

考えるのをやめろ。

感じる。

次に動く場所を嗅ぎ取れ。

己にそう言い聞かせ、感覚を研ぎ澄ます。

それでも全く知覚できない。

参座がどうやって刀を振っているのかもわからない。

これが、最強。

「炭治郎！」

縁側から、カナヲが出てくる。

こちらを呼んでいるようだった。

「それ、炭治郎。ワシは鬼じゃ。倒さねば、カナヲが死ぬぞ？」

目の前に立っているのは、鬼。

この世に跋扈する、悪鬼。

一体どれだけの人が、食われた。

一体どれだけの仲間が、死んでいった。

一体どれだけ、自分は護られた？

「おおおおおー！」

咆哮。

炭治郎が持てる、最速の一太刀。

―円舞一閃―

勝てる、勝てないではない。

立ち向かうのだ。

「見事」

参座の言葉を聞き取った瞬間、炭治郎の意識は途切れた。

首に一撃。

たったそれだけだった。

カナヲがばたばたと駆け寄る。

気を失っているだけとわかると、カナヲは安堵する。

しかしさすがにやりすぎだとカナヲからお叱りを受ける参座。

「カナエ姉さんに言いつけますから！」

ご立腹のようだ。

「ひ、人柱様？」

あまりにも気を落としている参座に、いたたまれなくなったほかの

隊士が、声をかけた。

「…思春期とは難しいのう」

ため息をつく参座だった。

その姿は、最強の威厳などなく。

娘に、パパ嫌いと言われたときのような姿だった。

その日、稽古が終わり隊士たちが帰っていく中。

炭治郎は呼び止められた。

「炭治郎、ヌシは蝶屋敷に戻るのでしょうか？」

「あ、はい。禰豆子がいるので」

「ふむ、今日は泊ってゆけ。しのぶのところにも文をだした」

「…あの、もう怒ってないですよね？」

気まずそうに言う炭治郎に、参座は可笑しくなって笑いだした。

「はっはっは！そう身構えるでない。何も最初から怒っておらぬ。どれ、炭治郎や。一緒に風呂にでも入ろうかの。背中を流してやろう」

「参座くーん。お風呂沸いてるからね〜」

「おお、すまんなカナエ」

炭治郎をつれて、参座は風呂場へ向かう。

そして、炭治郎の身体を見て、一言。

「痛ましいのう…。ヌシは本当にがんばってきたようだの…」

沢山の傷があった。

深い物から、浅いものまで。

とにかく、叩き上げてきたんだろう。

「参座さんはすごいですね、傷が一つもない…！」

炭治郎は驚愕した。

参座の身体には、傷がなかった。

柱合会議の時にも一瞬見たが、まじまじと見ると、無駄のない身体

つきに声が漏れる。

「それに、入れ墨も立派です！」

「嬉しいことをいつてくれるのう」

わいわいはしやぐ炭治郎。

その様子に、参座は笑みをこぼす。

「して、炭治郎。この前、カナヲに頼まれたことがある」

「なんででしょう？」

「炭治郎を、護ってやってくれと」

「俺を…ですか」

「そうだ。カナヲは、ヌシが心配で心配でたまらぬらしくての」

カナヲはいつも、気にかけてくれた。

自分がつぶれてしまいそうなときも、優しくしてくれた。

「でも、俺は護る人間になりたいです！カナヲのことも、護ってやれるくらい強くなりたいです！」

「よく言った。聞けば、義勇の心もヌシが動かしたというしな。炭治郎は本当にすごい子だの」

「そんなことありません。俺は、たくさんの人に助けられてきました。だから、その人たちのためにも俺がしっかりしなきゃダメなんです！」



曇りのない目でそんなことをいうものだから。

参座は感動して、炭治郎の頭を撫でまわした。

「ワシは、心が弱くてな。カナエにこれでもかというほど迷惑をかけた。だが、カナエはそれでいいといってくれたのだ。そしてカナエは、ヌシにもっと頼ってほしいと思っておる」

「カナエが？」

「うむ。ヌシの心は張り詰めておる。一度、カナエに解いてもらうのがよいて」

そんな気は全くなかった。

それでも、目の前の参座言うなら、そうなのかもしれない。

一度、カナエに相談してみるのもいいかもしれない。

そうして、二人は風呂から出て、カナエとカナエの支度した夕餉にありつく。

「美味しい！カナエさん、とってもおいしいです！」

「あらよよかったわ。今日のはカナエもたくさん手伝ってくれたのよ」

「そうなのか！カナエはいいお嫁さんになれるな！」

意識せずそんなことを言う炭治郎だから、カナエはきゅつと胸が締め付けられた。

そして顔を真っ赤にしてうつむいてしまう。

「ふふつ。よかったわねカナエ？」

「嫁入りの準備は出来ておるのか…寂しいの」

何も言えないカナエを、二人はにこやかな顔で見る。

しかし、炭治郎は一体どうしたのかときよとんとする。

しかし、カナエが嫁入りか。

優しい人の所に嫁げればいい。

そう思うと、炭治郎の胸はちくりと傷んだ。

「…？」

言葉にならない違和感を覚えながら、夕餉を平らげていく。

参座の家はそこまで大きくはない。

基本的に多くのものを必要としない参座は、部屋を持っていなかった

た。

カナエの部屋と、二人の寝室のみ。

風呂はでかいが、居間はそこまで大きくない。

そんな家で、ひっそりと暮らしている二人。

参座は夜の警邏へ行くために家を出た。

カナエは自室で眠るから二人は寝室で寝なさいと言い、部屋に入っていく。

布団を並べ、さあ寝ようとする可カナヲの心臓が高鳴る。

眠れない。

「…炭治郎、眠った？」

「起きてるよ。でも、眠れないから少し話そうか」

カナヲにとつては、なんとも幸せな時間だった。

今、自分は炭治郎を独り占めしている。

夜が開けなければいいのに。

そう願った。

炭治郎は、風柱と蛇柱の稽古がとにかく怖かったとか。

天元が、久しぶりだと言ってくれたこととか。

義勇が褒めてくれたとか。

様々な柱の話をした。

そして、与一の話をした。

「今日は、驚いたよ。参座さんが、恐ろしい形相で日輪刀を構えてたからね…。カナヲを泣かせるなって怒られちゃったよ」

「私、怒ってはないのだけれど…」

「でも、カナヲを心配させて泣かせてしまったんだから、俺はまだまだだよ」

「無事に帰ってきてくれればそれでいいんだよ？」

「いいや、俺はもつとみんなを護れるくらいに強くならなきゃダメなんだ」

こんなにボロボロになって。

打ちひしがれて、心が折れて。

目の前で家族を失い、仲間を失い。

それでもまだ自分を叩き上げるのか。

カナヲは哀しくなった。

それと同時に、なぜか怒りがこみ上げる。

「炭治郎は、どうしてそんなに自分を蔑ろにするの？」

「…カナヲ？もしかして怒ってる？」

「怒ってるよ。口を開けばもつと強くなるとか、護らなきやとか。まるで参座さんみたいだよ」

「でも、俺はあなりたいし、なれるように努力しなくきや」

「それは、しかたなかったで済ませていいことじゃないのはわかるよ。でも、あまりにも炭治郎は自分を顧みないと思う」

「弱い俺は、もつともつと頑張らなきやダメなんだ。もう、あんな哀しいことは起こしちやだめなんだ」

「炭治郎は、参座さんじゃない。自分のできることには、限界があるよ」

「だからその限界を超えようとしてるんじゃないか！」

他でもない、カナヲに。

お前は弱いから、身の丈に合ったことをしていると言われてるよ。うで。

つい炭治郎は声を荒げてしまう。

「でもそれで死んじやったら意味ないでしょ！」

きつと、しのぶに似たのだろう。

カナヲも負けじと声を大きくする。

「しようがないじゃないか！俺は決断できなかつたんだ！彌豆子か、里の人かを！だから、もつと強くなって両方救える参座さんみたいにならなきやダメなんだ！」

ただの口論だった。

大きな声を出して、己の意見が正しいとたたきつける。

「それでも私は炭治郎に死んでほしくなんかない！そんな風に張り詰めてたら、いつか心が燃え尽きちゃうよ！」

「まだ足りない！もつともつと燃やさなきや、追い付けないんだ！」

布団から勢いよく起き上がったカナヲは、炭治郎の布団をまくり上

げた。

恐らく、カナヲは人生で初めてここまで激怒した。

「あなたにはできないことがあるの！私にもできないことは山ほどある！だからって全部やる必要はない！」

「じゃあカナヲは俺に何もできずに死ねっというのか！」

ぱちん。

その細腕から、張り手が繰り出された。

威力もなく、炭治郎は全く頬に痛みを感じなかった。

でも、心が痛がった。

茫然と、その痛みを感じていると、カナヲが飛び込んできた。

「…あなたは、竈門 炭治郎。禰豆子のお兄ちゃん。誰かのためじゃない、妹の為に生きなきゃダメ」

そして、もし許されるのであれば…私の為にも。

流星にその言葉は口から出なかった。

炭治郎がカナヲの両腕に収まっているのだと気が付いた時には、涙が流れていた。

「私はカナエ姉さんが襲われたって聞いた時、この世が終わってしまおうと思った。禰豆子ちゃんも一緒だよ。お兄ちゃんの居ない世界なんて、耐えられない。だから参座さんも、煉獄さんも、与一さんも。命をかけてくれたんだよ」

禰豆子。

俺は鬼殺隊で、みんなの仲間で…それで。

兄なのだ。

最後の妹を、家族から託された、兄なのだ。

「…ごめん、カナヲ。ありがとう」

「できないことは、私が手伝うよ。参座さんもカナエ姉さんも、しのぶ姉さんも。だからお願い、せめて私の前では強がらないで？」

「…カナヲっ！カナヲお！ごめんなさい…俺っ！弱くて！」

幼子のように泣き出す炭治郎を、腕の中に抱いたカナヲ。

とうとう我慢ができなくなつて、自分も泣いてしまった。

炭治郎は、ずっと謝っていた。

あの日、間に合わなかった家族。

那田蜘蛛山で救えなかった隊士たち。

列車でみんなを救ってくれた男の子。

吉原で不運にも巻き込まれてしまった人たち。

そして、命をかけて守ってくれた与一。

「…がんばったね。一回休もう？」

それからずっと泣きわめく炭治郎を、カナヲは黙って抱きしめる。

ついに疲れ果てて眠る二人は、抱き合ったまま横になって眠った。

それを戸の隙間から覗いていたカナエは、尊さを感じ心をぽかぽか

させながらその場を後にした。

その日の夢で。

炭治郎は、家族に会った。

みんな笑っていて、炭治郎に感謝を告げる。

兄妹たちに、お兄ちゃん弟で、妹でよかったといわれた。

「俺の方こそ、生まれてきてくれてありがとう」

そういうと、変わらずに笑顔の家族の姿が少しずつかすんでいく。

そして、母が去り際に言った。

「あなたは自慢の息子よ。禰豆子のこと、お願いね」

任せてよ、母さん。

それを聞いた母は、満足そうに消えていく。

俺は、竈門 炭治郎。

竈門家の長男で、禰豆子の兄。

これからも、生きていく。

ワシは何のために斬れるのだ。

「とてもつらいことをお願いしてしまつてすまないね…参座」

柱稽古の最中。

参座は産屋敷より呼び出しを受けていた。

「…それが、お館様の。ひいてはこの鬼殺隊におけるご意志とあれば、この天羽 参座。どんな私情も呑み込んでお受けいたしましょう」

隣に座る行冥は、ぽろぽろと涙を流す。

「小生、お館様に拾われたことこそ、この人生の宝でございませう」

「君にそんな風に言われるなんて、うれしいよ。私の方こそ、ありがとう。いつもいつも、つらい役回りをさせてごめんね」

死にゆくその覚悟。

立派という以外に、常軌を逸している。

「どうか、謝らないでください。お館様は、この小生に仲間を…友を授けてくれました。どれほどつらい時でも、お館様から賜った友たちが支えてくれた故、今こうして生きておるのです」

「私は何もあげていないよ。それらは全て君が自分で掴み取ったものだからね。参座には胸を張っていきしてほしいね」

「お館様…」

体調がすこぶる悪化した産屋敷の前に長居できないと、行冥と参座は用が済むと足早にその場をあとにする。

「この長く苦しい因縁の終止符は、お前の双肩にかかっていると云つても過言ではない。辛いと思うが、耐えろ参座」

「行冥殿、ワシは心配いらぬ。そんなことよりも、ワシはヌシが痣を発現させないかが心配だの…」

間違はなく死ぬ。

それを危惧した参座は、行冥に痣は使うなど釘を刺す。

「だが行冥ならば時が来れば使つてしまつと、参座は心の準備をし始めていた。」

「5日以内…か。お前に限つては心配ないと思うが、心残りのないようになつておけ」

参座にはカナエがいる。

もしその身に何かあった時、何もせずにいなくなってしまうのは酷いものだろう。

そういう想いから、行冥は参座にもしもの事を考えておけと忠告した。

「…御意」

その最悪を必ず阻止せんとする固い意志を、参座は持っていた。願わくば、産屋敷にも時代の夜明けを見てほしかった。

しかし、それは叶わない。

そうして、夜明けが来る前に二人は産屋敷邸を後にした。

自宅に帰宅した参座は、朝が近いというのにカナエが居間で待っていたことに驚く。

「ひどい顔ね…何か辛いことでもあった？」

参座に気が付くなりそんなことをいう。

「…あった。とてもつらいことでの。約束を違えぬため、口にすることはできぬ…。だが…とにかくつらいのだ。崩れ落ちそうなほどに…」

思い出すのは、祖母の刀を振り回していたあの時。

斬っても斬っても、救われなかったあの日々。

救えず、救われなかった己。

そんな芯のない、ただの刃に鬼殺隊の中身をくれた恩人の顔が消えてしまう。

欲しい言葉をくれた。

みじめでどうしようもない自分に、心の拠り所をくれた。

沢山の大切な友をくれた。

そして、生涯愛すると誓える人をくれた。

「なにも…何もできぬのだ。まだ、なにも返しておらぬのだ…！」

一体自分は何をしてやれた。

鬼舞辻 無惨を刺し違えてでも倒し、新しい時代の夜明けを見せようとしたのではなかったのか。

刀を持ってぬ産屋敷の為に、己の腕を振ると誓ったのではないのか。

ましてや、産屋敷を犠牲に鬼舞辻を討つなどと。

私情を呑み込むなどといったが、到底我慢できることではなかった。

「どうして零れ落ちる！ 決して失わんと決めたものが、どうしてこの手から零れ落ちていくのだ！ どうしてワシには力がない！ すべてを救うことはできぬとしても、これだけは護りたかったのだ！ 何故っ……！」

三度目。

声を張り上げたのは、これが三度目。  
たったの三度。

己の生き方を貫き通したいと思った時。

カナエを手放したくないと望んだ時。

だがそれ以上に、心が軋んだ。

譲れないと思い、心を荒げるほどに救いたかった。

カナエは、これほどまでに怒気と悲壮感を含んだ参座の声を聞いたことはなかった。

どうしようもないことはあるし、自分では力不足のことは多々あっただろう。

それを二度とないように、心も体も酷使してきただろう。

だが今の参座は、それをすべて否定されたような顔をしている。

その哀しい顔を見るうち、カナエの瞳には涙が浮かぶ。

「何故……ワシを頼ってくれぬのだ……。あれほど……言っただけでおつたのに……」

カナエはたまらず参座を抱きしめた。

言葉は出ない。

当然、参座は理解していた。

産屋敷はもう寿命だということ。

最後に、鬼殺隊の党首として鬼舞辻に一矢報いたい意志も。

これが、鬼殺隊の士気を上げるための計算だということも。

だがそれでも。

「救いたかったのだ……」



その時は唐突にやってくる。

産屋敷邸は、爆炎に包まれる。

妻娘もろとも、塵になる。

そして、珠代が己ごと無惨に吸収される間。

参座は行冥と、産屋敷が死ぬのを待っていた。

「参座さん、悲鳴嶼さん！お願いします！」

行冥は首をめがけて鎖を振るう。

参座は無惨の手足を両断して達磨にする。

「おぞましい身体だの」

参座は行冥のもとに戻ると、そうつぶやいた。

「どういうことだ？」

「心臓が七つ、脳が五つあった。そのどれもが体の中を移動しておる」

行冥は戦慄した。

首を飛ばしたが、それでもこの化け物が再生するのもうなずける。

「参座、お前に斬れるのか？」

「はっ、愚問だの。どれほどてこずろうとも斬って見せよう。ワシは

よう斬れるからの」

そこへ、柱達が集結する。

皆が全く怒気を隠さずに、己の仇をめがけて全力で日輪刀を振りか

ざす。

「奴は首を切っても死なない！それどころか急所が複数あり移動して

いるー！」

行冥が柱たちに警告する。

一斉に攻撃を仕掛けるが、足元にはおびたらしい襖。

落ちる。

皆がばらばらになり、無限城へと落ちていく。

「これで私を追い詰めたつもりか？貴様らがこれから行くのは地獄だ

!!目障りな鬼狩り共!今宵皆殺しにしてやろう!

そう吐き捨てる無惨。

それに反応して声を荒げる炭治郎。

「皆!決して死ぬな!ワシが無惨を討つまで!」

参座も声を張り上げた。

落ちていく。

深く、深く。

参座は特に深くまで落とされた。

恐らく警戒されていたのだろう。

広く深い穴をただただ落ちる。

そしてようやく見つけた降りれそうな所へ、日輪刀を突き刺して己

の落下を止めた。

壁一面の戸を開け、天井をぶち破れそうであれば上がる。

やっと灯籠を見つけ明るくなってきたと安堵していると、その先に

大量の鬼が待っていた。

「救ってやろう!」

醜い姿にされ、人を食らう化け物にされてしまった人たちを、参座

は斬る。

急げ。

皆が待っている。

己という刀を待っている。

――

参座が上へ上へと急いでいる間、行冥とはぐれた無一郎は上弦の壺  
黒死牟と対峙していた。

満身創痍。

左腕が欠けている。

―霞の呼吸 肆ノ型 移流斬り―

目にも止まらぬ速さで、日輪刀を返され磔にされる。

「我が末裔よ、あの方にお前を鬼として使って戴こう」

黒死牟は無惨が負けるとは思っていなかった。  
そして、無一郎を上弦として迎え入れるという。

「それを聞き入れることはできん！」

一閃。

炎が舞う。

黒死牟は距離を取る。

「煉獄さん！」

無一郎の窮地を救ったのは、炎柱の煉獄 杏寿郎だった。

「よもやよもや。まさか時透少年が赤子のようにひねられるとは！」

「不甲斐なくてすみません……」

「今は一刻を争う。君には酷だが、俺一人ではこの鬼に勝てん！時間を稼ぐ、応急手当！」

「はい！」

杏寿郎は黒死牟に斬りかかる。

―炎の呼吸 壺ノ型 不知火―

最速の一太刀は、黒死牟の刀を切断する。

「この刀を……斬ったのは……貴様が二人目だ……。片目で……よく戦う……」

「それはいいことを聞いた！つまりは着実に参座殿に近づいているということ！」

煉獄は歓喜した。

あの日、少年に護られてから。

参座に止められてから。

ひたすらに鍛錬を重ねた。

来る日も来る日も。

どれほど時間がなくとも。

この心の炎を、熱く燃え上がらせた。

人質があつたとはいえ、あの時参座では刀しか斬れなかったこの鬼を。

今日、斬ることができのかもしれない。

「いざ、参る！」

しかし、鬼の中で最強。

どうあがいても一人では勝てないと悟っていた。

無一郎は手負い。

どこまでやれるか。

不安を隠し切れない杏寿郎の後ろから、一陣の風が吹く。

―風の呼吸 肆ノ型 昇上砂塵嵐―

「けつ。辛気臭え面してんじやねえよ煉獄」

「これは心強い！」

追い風が背中を押す。

「風の柱か……」

距離を取った黒死牟が実弥を見るなりつぶやいた。

それを聞き取ったかと思うや否や、二人は斬りかかった。

肉薄。

二人は柱稽古の甲斐もあつてか、連携は完ぺきだった。

片方が正面で請け負うと、もう片方は死角から切り込む。

「加勢します！」

そこへ、応急処置を終えた無一郎が加勢に入る。

ここで、無一郎が失血および片手の欠損からか、連携にガタが出る。

「俺のことは捨てていいです！お二人で何とか！」

無一郎は自分をかばいながら戦かう二人に、切り捨てるように言う。

せっかく上弦の壺を無傷の柱二人で相手できるこの好機。

決して無駄にはできない。

「それはできん！俺はだれも犠牲になどしない！そう誓った！」

「こんな雑魚相手に人数減らして堪るかよお！」

断固拒否。

杏寿郎は、あの日少年に誓った。

参座は、無一郎を弟のように可愛がっている。

恩を返すなら、今しかないと実弥は奮起した。

―炎の呼吸 伍ノ型 炎虎―

―風の呼吸 漆ノ型 勁風・天狗風―

―霞の呼吸 参ノ型 霞散の飛沫―

重なる型。

そのどれもが、お互いを生かす。

杏寿郎の大振りを、実弥が道を作る。

迫りくる刃を、無一郎が弾く。

「散!!」

杏寿郎の日輪刀が、首に届くかといったところで。

新しい声が聞こえた。

三人は、それが聞き覚えのある声だと気が付くと、一気に黒死牟から距離を取る。

次の瞬間、黒死牟の身体からは無数の枝分かれした刃が生えていた。

「助かったぜ悲鳴嶼さん」

実弥が駆け付けた行冥に感謝の意を述べる。

「時透。生きて戻れ。参座が悲しむ」

「…っ！」

行冥は短く無一郎に言う。

それだけで、無一郎は胸がいつぱいになった。

「そうだと時透少年！誰も欠けてはならん！」

杏寿郎も同意した。

ここにいる全員が、生きてこの鬼を倒すことを考えている。

柱が四人。

参座の次に強い行冥もいる。

やれる。

「来い…鬼狩り…」

対して、黒死牟。

握る刀は、先ほどよりも倍以上長く枝分かれしている。

足や腕からも刃を生やしている。

斬撃の数、間合いも各段に伸びている。

まず飛び出したのは実弥。

誰よりも早い斬撃を、多数繰り出す。

それを狙う攻撃は、無一郎が請け負う。

行冥の鎖を縫って杏寿郎が大振りで強力な一太刀を叩きつける。胸をばつさりと斬ると、行冥は手斧を投擲。

瞬く間に、黒死牟の耳が斬り離される。

誰がどう見ても優勢。

そうとれる戦況だが、どうも致命的な一撃を与えられない。

持久戦になってしまえば、こちらが不利。

この戦況もひっくり返される。

そこで、その時が来てしまう。

無一郎が失血で倒れそうになる。

そこを的確に黒死牟はつつく。

命を刈り取る一撃。

胴体を両断されて絶命。

そう思ったが、切り裂かれたのは実弥の腹。

「不死川さんっ！」

「もう無理ならすっこんでろ時透お」

皆が無一郎の限界を痛感していた。

むしろその小さな身体でよくここまで耐えたものだ。

「大した傷じゃあねえ」

自分が、盾にならなくては。

焦る無一郎。

尚も戦闘は続く。

そこに加わりたいが、失血で焦点が定まらない。

吐き気がする。

どうして、自分は師匠のように。

参座のようになれない。

立ち上がる。

行かなくては。

すごいだろって師匠に言っつて。

よくやったって、褒めてもらって。

カナエの作るご飯をまた三人で食べるんだ。

しかし、身体は限界を告げた。

ぐらりと白目をむいて倒れてしまう。

三人は安堵した。

もしここで意識を失わなければ、死ぬまで戦闘に参加しただろう。ここで、実弥の血に酩酊した黒死牟の足元がふらつく。

「煉獄う！合わせろお！」

「心得た！」

実弥の攻撃に合わせて杏寿郎が刀を振るう。

それを見透かしたかのような黒死牟の迎撃。

行冥は神通力か何かを疑ったが、参座を思い出す。

透き通って見える。

もしやこの鬼もその世界にいるのでは。

柱四人を相手にできるということは参座に近い戦闘力ということ。

そうなれば、おそらく同じ世界が見えているということ。

筋肉や血流の動きから、こちらの攻撃を読んでいる。

そう読んだ行冥は、意図的に体の動きを変える。

鉄球を投げる瞬間、その手をめがけて数珠を投げる。

これが功を奏した。

虚をつかれた黒死牟は困惑した。

―炎の呼吸奥義 玖ノ型 煉獄―

ここしかない。

杏寿郎は悟った。

全力の一撃。

この一撃は必ず届く。

その確信が形となる。

首に届いた。

「ぐうアアアアアアア！ぬアアアアアアアアアア!!」

声を上げる黒死牟。

杏寿郎の奥義でも、首半ばまでしか刃が進まない。

「貴様はここで斬る！」

腕がちぎれても。

この一太刀で終わらせる。

無一郎は意識を失い、実弥もああいつているが重症。このままでは、行冥が痣を発現しかねなかった。ここ以外にもうない。

「だらあああああー！」

杏寿郎の日輪刀に、すかさず実弥が刃を重ねる。

じりっと火花が散り、刀身が赫く染まる。

それでもまだ落ちない。

行冥が逆側から手斧を叩きつける。

そして鉄球を二人の日輪刀に的確に打ち付けた。

「アアアアアア！」

杏寿郎と実弥が声をそろえて渾身の力を籠めると。

ついに、首が落ちた。

三人が安堵から脱力しようとする、急に首の出血が止まる。

「首の弱点を克服しようとしている！一度下がれ！」

行冥が声を出すと、二人はその場を離れる。

そして、もう一度黒死牟を見ると、そこには。

見るに堪えない化け物がいた。

「グウアアアアアアア！」

叫んでいる。

怒っているのか、びりびりと緊張が走る。

背中からは触手のようなものが伸び、身体は硬い外殻でおおわれる。

「首を狙え！何度でもだ！必ずここで倒す！」

杏寿郎が大声で鼓舞する。

そして、とびかかる。

「待て煉獄！」

行冥がそれを止めようとするが、遅い。

恐ろしい速さで化け物が動いたかと思ったら、杏寿郎の腕を食いちぎっていた。

「ぐっ……！」

堪らず膝をつく杏寿郎。



実弥が助太刀しようとするも、失血でうずくまってしまう。

「くそっ……こんな時にい！」

行冥は思考した。

先ほどよりも強力になってしまった化け物。

それにどう対抗するか。

無惨まで温存しておきたかったが、使うしかない。

今日死ぬとしても。

沙代に会った。

感謝を述べられた。

これ以上心満たされることがあるか？

否。

なれば、その沙代の明日を護るために命を落とすなど。

迷うこともない。

そうして、痣を発動しようとしたとき。

「すまぬ、遅れたの。行冥殿」

ついにあの男が来た。

「参座……」

「あとはワシが斬る。行冥殿は皆の手当てを」

黒死牟は気に食わなかった。

この男はまるで、縁壺の生まれ変わりのような身体をしていた。

だが、それでも全く血縁などではない。

己の血族ではない一般人の癖に。

まるで縁壺のような特別な存在に生まれてきたこの男が。

憎い。

「グウアアア!!」

「言葉も発せぬのか。堕ちたものなのだ」

意識のある三人は、覚えのある感覚を味わう。

柱合会議のあの時。

参座が声を張り上げたときに感じたあの緊張感。

時が止まる。

「そうしても、届かぬところがある。身に刻め、ワシらの怒りを」

誰の目にも止まらなかった。

瞬きしたのかと疑うような速さで、参座は黒死牟の後ろに立つ。

黒死牟の身体は、バラバラに斬り刻まれていた。

再生が追いつかず、はらはらと塵になっていく。

「皆、生きておるかの？」

参座が三人に問いかける。

「はっ。正直参座さんの威圧感のほうが生きた気がしなかったぜ」

「軽口を叩けるくらいには元気なようだの実弥」

実弥は傷がひどいが命に別状はないらしい。

「参座殿！我々で首を落とせず不甲斐ない！しかしまたも救われませんでした！」

「何を言う杏寿郎。鬼の首はヌシらで落とした。あれは、なれの果て。鬼ではない」

杏寿郎もさっさと止血を済ませていた。

「時透も意識はないが命にはかわらなそうだ」

「そうか…。実弥と杏寿郎は無一郎を運んでくれの。行冥殿はワシと無惨の元へ行こうかの」

そうして、足早に各自が行動に移す。

参座は本当にうれしかった。

誰が死んでもおかしくない。

そんな戦いだっただ。

それでも、皆生きている。

そして、今まきに行冥が痣を使おうとしたとき、自分は間に合った。

長い長い廊下を、行冥と駆け抜ける。

「また、お前に救われたな」

「…違うのだ。いつもいつも、皆がワシを救ってくれる。皆が無一郎を護ってくれたから、ワシは救われた。皆が何とか生きていてくれたから、ワシは救われた」

「…ふっ。お前は変わらないな」

行冥にも笑みが浮かぶ。

先ほどの戦い。

柱四人でも勝てないと思われた相手が、なおも強力になったとして  
も一撃で斬り伏せた。

この男なら、本当に。

無惨を斬れる。

そんな希望を、行冥は抱いていた。

ワシが斬って護ってきたもの。

炭治郎と義勇は、着々と鬼を倒しながら無惨の元へと向かっていった。

「義勇ー！」

「真菰さん！」

二人を見つけた真菰は、手を振りながら駆け寄ってくる。

「よかった。一人で心細かったんだあ」

「ご無事でよかったです！」

炭治郎が真菰の無事を安堵していると、突如天井から轟音が響く。その嗅ぎ覚えのあるおいに、炭治郎はすぐさま臨戦態勢を取る。

「久しいなあ。良く生きていたものだ、お前のような弱者が！竈門

炭治郎!!」

「猗窩座アアアア！」

けたたましい轟音と共に、猗窩座が攻撃を仕掛ける。

―ヒノカミ神楽 火車―

跳躍した炭治郎は、猗窩座の腕を斬る。

戦え。

負けられない。

自分を鼓舞する炭治郎は、執念でその斬撃を当てた。

そうして、すぐさま再生した猗窩座の攻撃をまたもヒノカミ神楽を駆使して今度は顔を斬りつけた。

義勇は素直に驚いた。

練り上げられた炭治郎の技。

それは、柱に届くを言っても過言ではなかった。

「すごい……」

真菰も同様で、感嘆の声を漏らした。

満足げな表情で炭治郎と向き合う猗窩座は、術式を展開して向き直る。

―水の呼吸 参ノ型 流流舞い―

「水の柱か……これは良い、遭遇したのは五十年ぶりだ！お前、名は?」

すかさず加勢するべく義勇も戦闘に参加する。

「鬼に名乗る名前は持ち合わせていない」

―破壊殺・乱式―

―水の呼吸 拾壺ノ型 凧―

見たことない型に、猗窩座は興奮する。

それに食らいつくように加勢する炭治郎。

負けじと真菰も攻撃を仕掛ける。

すつと、猗窩座の表情が覚めていく。

「おい、お前たちはその弱い女をこの崇高な戦いに混ぜるつもりなのか？」

「真菰さんは弱くない！」

炭治郎が反論する。

「弱い。女はいつも弱い。わんわんと泣き喚き、自分の身も護ることのできない弱者だ」

そういうや否や、真菰に肉薄する。

炭治郎は驚いた。

猗窩座の攻撃からは殺意の匂いがしなかった。

「真菰！」

義勇が叫んだが、真菰は間一髪攻撃をかわす。

「猗窩座…お前は…」

真菰さんを殺そうとしていないのか？

そう言おうとしたとき、すでに猗窩座は炭治郎の眼前に迫っていた。

間一髪のところ、義勇は炭治郎を持ち上げて攻撃をかわす。

「私を馬鹿にするな！死ぬ覚悟なんかできてる！」

突如叫んだ真菰。

弱き者といわれ、殺意のない攻撃を仕掛けられ。

無惨を倒すという目標の中、毎日毎日死ぬ気で鍛錬してきたことを否定された。

許せなかった。

だが、それ以上に情けなかった。

女に生まれてしまったから。  
力が弱く生まれてしまったから。  
義勇を救うことも、彼を救うこともできなかった。  
いつもいつも救われてばかりで。  
生きている意味を実感できなかった。

「…ならば死ね、弱き者よ」

殺意を込めた一撃が、真菰に迫る。

知覚できない攻撃だった。

私はやつぱり弱い。

この攻撃を防ぐことも、躲すこともできない。

どう頑張っても、この鬼の首を斬ることはできない。

死んじやえ。

もう疲れたよ。

私はずっと弱いまま。

そうやって死んでいく。

—ヒノカミ神楽 烈日紅鏡—

—水の呼吸 式ノ型 水車—

交差する影。

重なった斬撃は、真菰を救った。

「猗窩座…お前はそれでいいのか…?」

炭治郎が猗窩座に問う。

憎々し気な表情で、猗窩座が炭治郎を睨みつける。

「真菰。これが終わったら鱗滝さんのところへ行く。死ぬな」

「…私弱いから無理だよ」

「お前を死なせたら、錆兎に合わせる顔がない」

錆兎。

今も義勇の中で生きている。

錆兎は…義勇は強い。

「真菰さん、戦いましょう!みんながあなたの命を繋いでくれたんです。それを無駄にしちゃだめだ!」

そうはいつでも。

絶対的な強者を前にして、足が震える。  
どんなに頑張っても自分では役に立たない。  
その鬼の首は硬くて斬れない。  
自分では、傷をつけることで精一杯だ。

「…わかったよ。頑張る」

覚悟を決めたつもりだった。

口だけならなんとでも言える。

目の前で激化する戦闘を、真菰は眺めている。

足がすくんで。

刀を持つ手が震える。

何故戦える？

何故立ち向かえる？

義勇も炭治郎も戦うだけの力を持っている。

自分にはない物を持っている。

羨ましい。

「水柱様！加勢します！」

突如、隊士が現れた。

見るからに、一般的な隊士。

力があるようには見えない。

「行つてはダメ！死んじゃうよ！」

真菰は止めた。

きつと、戦いについていけない。

そして、限界が来れば足手まといになる。

そう思い止めると、隊士は口を開いた。

「敵う敵わないの問題じゃない！俺はまだ刀を握れる！鬼にも、自分にだって負けられない！」

戦禍に飛び込んでいく隊士。

「水柱様！俺が隙を作つて見せます！」

「っ!？」

急に先頭に入ってきた隊士に、義勇は動揺する。

しかしこの隊士、どうしてなかなか。

想像以上に戦えている。

己が斬り込んで行けば、義勇が攻撃をしやすいように動く。

炭治郎に危機が迫ると、それを援護しに柔軟に動ける。

願ってもない戦力だった。

その柔軟性と、侮れない攻撃力に猗窩座の気分も高揚した。

「ふん、貴様なかなか見どころがあるな！名はなんという！」

猗窩座が攻撃をやめ、向き合った隊士に名を問う。

「俺は獅童 雪虎だ。貴様はまさか、素流の門下生か」

今なんといった？

この男、素流といつたか？

「その動き、間違いなく素流が組み込み込である。俺は当時の門下生の子孫だ。一族に代々継がれている、開祖である慶蔵様の素流…鬼が使っているなんて想像もしなかった」

貴様に何がわかる。

「その罪人の入れ墨。伯治という男が、仇討に六十七人を素手で殺したというのは本当だったのか。素流の確執は、此処で俺が払ってみせる！」

その名で呼ぶな。

—雪の呼吸 壱ノ型 初雪—

ふわりとした足取りで、猗窩座に近寄る雪虎。

すかさず拳を振るうと、その姿が消える。

しかし、猗窩座の羅針は雪虎の闘気をしつかりと捉えていた。

体勢を変えた雪虎は、次の型を繰り出した。

—雪の呼吸 陸ノ型 粗目雪—

腕の真ん中を、肘まで斬り裂く。

二股になった腕を、瞬時に再生する猗窩座。

—水の呼吸 肆ノ型 打ち潮—

間髪入れずに義勇も参戦。

炭治郎も遅れをとるまいと日輪刀を握りしめて飛び出す。

猗窩座はとにかく不快だった。

素流を知る雪虎もそうだが、伯治という名前を思い出してしまっ



た。

弱かった自分。

誰も護れなかった自分。

消してしまいたい過去。

—雪の呼吸 捌ノ型 友待つ雪—

一度かがんで猗窩座の攻撃をかわすと、そのままの位置から斬り上げの一太刀。

しかし、猗窩座は羅針の超反応から手首を返すと、そのまま日輪刀を側面から叩き折る。

「!?」

刀を折られた雪虎は、一度距離を取る。

—ヒノカミ神楽 斜陽転身—

炭治郎は宙を翻ると、猗窩座の首をめがけて日輪刀を薙ぐ。

事もなげにかわされ、腹に重い一撃をもらう。

「ぐっ!」

壁にめり込む炭治郎。

意識を朦朧とさせてしまう。

「炭治郎!」

堪らず声を上げる義勇。

その頃、真菰の頭では雪虎の言葉がこだましていた。

敵う、敵わないの問題ではない。

私にも、できるだろうか?

「そのあなた! 刀を借りませんか!? 俺のは折れてしまつて!」

全く心が折れていなかった。

臆することなく立ち向かおうとしている。

「…あなたは どうして そんなに強い の?」

疑問を投げかけていた。

「護りたいんです…! あなたも、彼も、水柱様も! あの時、俺を救ってくれた霞柱様みたいに! 素流の開祖のように!」

「怖く…ないの?」

「怖い です! でも、水柱様や、霞柱様はもつと怖かつたはず です! 俺が

こんなところで怖気づいてられない！」

義勇も、炭治郎も。

今も怖いはずだ。

ずつと怖かったはずだ。

どうしてそんなことも気付いてあげられなかったのだろう。

「私が注意を引く。あなたは必ず首を斬って」

真菰は日輪刀を渡すと、猗窩座へと飛び出す。

困惑するも、この機を逃せまいと切り替える雪虎。

折れた日輪刀を拾い上げた真菰は、猗窩座の攻撃をかわしながら体に切り傷を刻んでいく。

「ちよこまかと、女！」

義勇との戦いを邪魔されて気が立った猗窩座は目標を真菰へと定めて攻撃を繰り出す。

「おおおっ！」

—雪の呼吸 参ノ型 衾雪—

雪虎の横薙ぎの一閃は、すさまじい速さだった。

にもかかわらず、羅針の針へと捉えられてしまう。

その指で、刀の刃を掴む。

折られる。

そう危惧したものの、義勇の斬撃により腕ごと斬られ事なきを得る。

決定打がない。

どれほど隙をついたところで、攻撃を防がれてしまう。

恐るべき反応速度。

これが、武に陶醉した拳鬼。

上弦の参 猗窩座。

「きやあっ！」

ついに真菰が躲しきれずに肩に掌底をもろに受ける。

「真菰っ！」

義勇がすかさず真菰の前にかばうように出た。

「女…。邪魔をするな」

義勇の背中を見て、真菰は申し訳なさそうに口を開く。

「御免ね…義勇。私、うまくできなくて…」

青紫になった肩を押さえる真菰を見るなり、義勇の表情には怒りが浮かぶ。

「十分だ、真菰」

殺す。

何としてもこいつを殺す。

誰一人、失って堪るか。

そう意気込んだ義勇は、今まさに痣が発現しそうだった。

しかし、その後ろに。

炭治郎が迫っていた。

「猗窩座！今からお前の首を斬る！」

驚くことに、猗窩座の肩が跳ねた。

本当に気が付いていなかったらしい。

どういうことだ？

その後も、炭治郎は猗窩座に攻撃を仕掛けている。

そのどれもが、致命傷ではないが届いていた。

—雪の呼吸 式ノ型 牡丹雪—

しかし、炭治郎より間違いなく速い雪虎の一撃は防がれる。

義勇は思考する。

何故、炭治郎の攻撃は防がれない？

視覚に頼っていない？

磁石のように吸い寄せられる腕が、炭治郎の攻撃には吸い付いていない。

羅針。

針。

反応。

まさか。

「獅童！俺達で注意を引くんだ！」

「はー！」

二人の攻撃に、羅針は反応。

猊窩座もさすがに二人の猛攻を防ぐばかりで、炭治郎の攻撃に意識を割けない。

—終式・青銀乱残光—

杏寿郎との戦いで見せた、あの広範囲の全力攻撃。

「水柱様！」

凧では受けきれないと悟った雪虎が、義勇の前に割って入る。身体に無数の穴が開く。

「獅童！」

ぐつたりと倒れこむ雪虎。

義勇は無傷だ。

「雪虎くん！しっかりして！」

真菰も駆け寄ってきた。

義勇は真菰に雪虎を託して、炭治郎の加勢に行く。

「…足を…やられました…」

「もういいから！もうやめて、死んじゃうよ！」

穴だらけになった身体で、尚も戦おうとする雪虎。

しかし、右足を深くえぐられ、その場に倒れそうになるところを、真菰に受け止められる。

「見た目ほど…ひどくありません…。行かないや…」

それでも立ち上がろうとする雪虎を、真菰は押さえつける。

「炭治郎と義勇が、絶対倒してくるから！もう休んで！」

「真菰さんも、もう戦えない…。俺が、何とかしなきゃ…！」

手負いとは思えないような力で立ち上がる雪虎。

もう、真菰は雪虎を抑えることができなかった。

どこか遠くに行ってしまう。

そんな不安を感じながら、止められない。

刀を杖代わりに、雪虎は猊窩座の元へ向かう。

「狛治いいい！」

声を張り上げる雪虎。

それに意識を取られた猊窩座。

—ヒノカミ神楽 円舞—

猗窩座の首が飛ぶ。

「なっ！」

驚きを隠せない猗窩座。

まさか炭治郎に首を斬られるとは思ってもみなかった。

強く。

強くならねば。

そんな思いが、猗窩座を支配する。

そう思うや否や、自分の首を掴み切断面へと再結合する。

そこへ義勇が日輪刀を投げて何とか首を落とす。

それでも、断面は凝固し体の崩壊は止まる。

焦る炭治郎。

体力は限界。

迫る手刀。

寸のところで、真菰が炭治郎を抱えて飛ぶ。

すかさず義勇が猗窩座を抑える為に攻撃を仕掛ける。

—水の呼吸 参ノ型 打ち潮—

首を失くしたとしても、恐ろしい速さで再生する猗窩座。

中段の蹴りをまともに受けた義勇は、吐血しその場にうずくまる。

殺さなくては。

竈門 炭治郎を。

炭治郎へと向き直る、首なしの猗窩座。

真菰が前に出る。

「炭治郎は殺させない！」

がたがたと震え、涙を流す真菰。

炭治郎は痙攣が止まらない身体に、動け動けと命令する。

しかし、手負いの二人に抗う術はない。

その時、羅針が逆を指す。

そこには、満身創痍で指一本で倒れてしまいそうな雪虎がいた。

それでも、恐ろしい程の威圧を放っている。

隙があればこちらを殺そうという意思が、肌を刺激する。

「お前は負けたんだ…狛治。受け…入れて…生まれ変われ」

「師範みたいなことを言うな。

…師範？

誰だ。

お前は雪虎だ。

雪…？

恋雪…。

「狛治さん、もうやめて…」

護ると誓った、最愛の人。

恋雪。

俺は。

何のために？

真菰を見る。

炭治郎をかばって、前に出ている。

なんて強いのだろう。

強さとは。

肉体のみに使う言葉ではない。

誰の言葉だったか。

それでも、強くなければ持って帰れない。

強くなければ、護ってやれない。

「猗窩座。お前は強くなりたかつたのではないか？お前はこれで終わりなのか？」

「狛治さん、ありがとう。もう充分です」

かき乱される頭の中。

どっちなんだ。

俺は、どっちでいたいんだ。

その時、猗窩座の身体に重みがかかる。

「俺は知っているんだ。開祖とその娘様が、毒を盛られたことも。俺の先祖は、お前がどれほど辛いであろうかを、書き記していた…。もういい、狛治…いいんだ…」

泣いている。

雪虎が、泣いている。

俺の為に、泣いているのか？

「狛治さん、もういいんです」

恋雪がそういう。

眼前には、恋雪がいて。

もう、無惨の声は聞こえていない。

「ごめん！ごめん！！守れなくてごめん！大事なときに傍にいらなくてごめん！」

子供のように泣きじゃくる狛治。

それを優しい顔で抱きしめる恋雪。

「おかえりなさい、あなた」

二人は泣きながら、歩いてゆく。

そこはきつと同じところではない。

それでも、これでよかったのだ。

猗窩座の身体は、はらはらと塵になる。

上弦の参 猗窩座討伐。

この知らせは、瞬く間に共有される。

ついに力尽きた雪虎は、その場に倒れ伏した。

「雪虎くんっ！」

真菰達が駆け寄る。

真菰はもう泣き出してしまっただった。

「皆さん…無事でしょうか…」

炭治郎と義勇は、軽傷とは言えないがまだ戦える。

幸い、痣の発現もない。

真菰に関しては、肩から下が使い物にならないが命に別状はない。

「獅童、助かった。ありがとう。傷を焼いて止血してやろう」

義勇は雪虎に感謝を述べる。

傷の具合を見ると、重症だが死ぬような怪我ではなかった。

すぐさま火を焚こうとする義勇。

「助かります…」

「よかった…本当に良かった…！」

真菰は寝転ぶ雪虎の胸に顔をうずめて泣き出した。

炭治郎も少し体を休めようとその場に腰掛ける。

「真菰さん…炭治郎をかばった時…とてもかっこよかったです…」

「ううん。雪虎くんが勇気をくれたから…！」

「お二人とも、とても立派でした。俺からもお礼を言わせてください！」

炭治郎も便乗した。

皆が口々にお礼を言うものだから、おかしくなってみんな笑ってしまふ。

戦いはまだ終わっていないが、それでもこの勝利に身を委ねたかった。

そして。

「いくぞ、獅童」

熱々の日輪刀が雪虎に迫る。

「ぐおおおおお！」

炭治郎と真菰は直視できなかつた。

ひいだとかおおあだとか、そんな悲鳴を間近で聞く二人は、心が休まらなかつた。



ワシは、もう斬らぬ。

「これだ！見つけた！無惨だ！」

炭治郎達が猗窩座を倒した頃。

隊士たちは無惨の繭を見つけていた。

待機命令を無視して攻撃を仕掛けようとすると、無惨が現れる。

阿鼻叫喚。

瞬き一つする間に、何十人という隊士が喰い荒らされる。

旨い。

無惨は、飢えているこの瞬間の食事を楽しんでいた。

べべん。

鳴り響く弦の音。

この広い無限域にて。

炭治郎と義勇が気が付くとそこにいたのは、無惨。

鬼の大将。

諸悪の根源。

家族の仇。

数えだすときりが無い。

怒りに震えだす炭治郎。

「落ち着け、炭治郎」

そういう義勇すら、気を抜いた瞬間飛び出していきそうだった。

「よう生きておった、炭治郎に義勇よ」

二人の頭に、ぽんと手のひらが添えられる。

「貴様か。最も目障りな鬼狩りは」

「左様。ワシこそが、貴様の首を取るべく神より造られた者だの」

参座が後ろにいた。

驚く二人。

「…しつこい」

無惨はそう吐き捨てた。

仇だとかなんだとか、そんなものはくだらない。

どうしてそう何年も飽きずに追いかけてくるのか。

理解できない。

「お前たちは生き残ったのだから充分だろう」

何気ない顔で言う無惨。

もう炭治郎と義勇の血管は破裂しそうだ。

「お前何を言っているんだ？」

炭治郎はそう問いかけた。

無惨を全く理解できない。

「私に殺されることは大災害にあつたのと同じだと思え。何も難しく考える必要はない」

災害に仇討しようとするものはいない。

それが、無惨の意見だった。

つつましく暮らして忘れればいい。

そうなのかもしれない。

そうしなければならぬほどに、無惨の力は強大だ。

その実、千年たった今でも無惨はこうして生きている。

災害と同じ規模なのだ。

本来ならば、どうにかできるものではない。

鬼狩りは異常者だ。

そう言つてのける無惨に、参座はほんの少し納得できた。

「そうだの。ヌシは災害と同じだの。人の力では、決して跳ねのけることはできぬ」

「ほう。珍しく意見が合う鬼狩りもいたものだ」

「ワシは、人ではない。今この瞬間、化け物となりうる。もう、ワシは抑えることができぬのだ」

低く。

腹に響く声で。

参座が言った。

その瞬間、時が止まる。

「このどうしようもない怒り。哀しい過去の記憶。無念に散っていったものたちの想い。鬼にされた無辜の民たちの願い」

城が、揺れる。

実際には全く揺れていない。

だが、この男からあふれる怒気が、そう錯覚させている。

「ワシは、救うと誓ったのだ。これより、修羅となりて貴様を斬る」  
構えを取る参座。

「この化け物め！貴様のほうがよっぽど人間ではない！あの男といい！本当に目障りだ！」

その威圧に耐えかねた無惨は、声を荒げる。

「ワシの刀には型がない。だが、最後に…。今日で終わる剣技に名をつけよう」

正面の構え。

ゆっくりと切っ先が下段に降りる。

左半身に寄せた日輪刀。

それが、ゆっくりと。

誰にでも見えるように動く。

その最中、参座の日輪刀は赫く色を変えていく。

—日輪 序章 日の出—

姿が消えた。

腰のあたりまで日輪刀が上がったかと思ったら、参座はその場から消えていたのだ。

無惨でも知覚できない速度の斬撃。

しかし、参座はこれで殺せるとは思っていなかった。

無惨は再生すると、すぐさま無限城の奥へと逃げようとする。

「これはまだ、始まりだの」

落ち着いた声で、参座は言う。

逃げる無惨を追いかけることもなく。

その時、無限城が揺れだす。

「何をしている鳴女!!」

無惨が不審に思い声を上げ、意識をそちらへ向けると。

「何をしているかだつて？操っているんだよこの女の視覚を」

愈史郎は珠代を奪われた怒りから、無惨に啖呵を切った。

無惨はすぐさま鳴女を破壊しようとするが、それでも愈史郎は何と

か無限城から皆を出そうと奮闘する。

そこへいつの間にか後ろにいた参座が、間髪入れずに無惨を斬り刻む。

そうして鳴女の破壊から意識を戻すと、床がせりあがり外へ押し上げられる。

「外の空気を吸いたかったところだの」

轟音と共に、鬼殺隊の面々は外へと押し上げられる。

向かう先は地上。

決戦の地。

――

「カアアアッ！夜明ケマデアト一時間半！」

そこは市街地。

既に住民の非難を済ませていた隠達が、夜明けまでの時間に絶望する。

炭治郎は何とか瓦礫から這い出して、義勇達の姿を探す。

しかし、間髪入れずに瓦礫が宙を舞い中から無惨が現れる。

忌々しげに、配置された隊士たちを見た無惨が言葉を紡いだ。

「ほう。夜明けまで私をこの場に留めるつもりか。…やれるものならやってみろ!!」

―蛇の呼吸 参ノ型―

―恋の呼吸 弐ノ型―

―水の呼吸 捌ノ型―

目にも止まらぬ速さで柱達が攻撃を仕掛ける。

そのどれもが無惨の身体に届く。

…が。

小芭内は驚愕した。

首が斬った傍から再生していたのだ。

「えっ！えっ！？斬ったのに斬れてない!?!」

蜜璃はそのまま言葉にした。

迫る無惨の攻撃。

それらは的確に柱たちを狙う。

しかし、その攻撃が柱達を襲うことは無かった。

「皆下がれ。ワシが死んだときは、頼むでな」

無惨の腕は斬れ、背中の触手も落ちていた。

現れたのは参座。

「さて、閉幕といこうかの？」

最後の戦いの火蓋は切って落とされた。

誰一人として、その戦いには付いていけない。

加勢に来た行冥達ですらその戦いを見ていることしかできなかった。

「なんだありやあ…」

理解を超えた攻防に、実弥は声を漏らした。

全てを躲して、参座は無惨へと斬撃を入れている。

かすり傷一つ負わずに。

「おのれ！貴様のような人間がいて堪るか！化け物は貴様だ！私ではない!!」

憎々し気な表情で叫ぶ無惨。

「何度も同じことを言うでない。ワシに斬られることなど、大災害にあつたと思えばいいでの」

「小癩な!!」

無表情で言う参座。

そして、淡々と攻撃を繰り返す。

「さて、そろそろ効いてきたのではないかの？」

「なんだと…!?!」

参座は待っていた。

無惨が取り込んだ、珠代が摂取していた薬の効果が表れるのを。

「お館様と約束したのだ。無惨、ヌシに薬の効果が表れるまで戦ってはならぬと。そして、お館様の采配は完璧だったの。確実にヌシを殺せる」

参座から漂う覇気に気圧された無惨。

そして、己の中の珠代の記憶を読み取る。

「よそ見しておる暇があるのか？」

すさまじい猛攻。

何とか記憶を読み取った無惨は、自分が老いていることに戦慄した。

「さて、ワシはたったの一時間半では満足できぬ。だがそれでも、その間だけはワシの八つ当たりにつき合ってもらおうでの」

柱たちは、開いた口がふさがらなかつた。

いくら薬で弱体化しているとはいえ。

一方的だった。

あまりに参座が強すぎた。

ほんの少しの隙を狙い、無惨は柱達に攻撃を仕掛けるが、躲すだけならば柱にも簡単にできた。

全員が攻撃をかわすと、人を殺せそうな目つきで無惨をぎらりと睨む参座の姿があった。

「姑息！往生際が悪いぞ鬼舞辻 無惨！貴様はワシが今日ここで殺す！！」

参座は激怒した。

声を荒げ、大気を震わせる。

その声に、柱の面々はあの日とは比べ物にならないほどの緊張感を感じる。

ゆらり…と。

参座の動きが鈍くなる。

誰もが参座から目を離せない。

それは無惨も同様だ。

参座は日輪刀を上段に構え、肩に担ぐような構えを取る。

—日輪 本章 白日—

一刀両断。

兜割の要領で、無惨を縦に真っ二つにした。

赫刀で斬られて再生が著しく遅くなった無惨。

地に伏せたその姿を見て、参座は一度納刀すると無惨の前にしやが

み込む。

「のう…あきらめれい。本当に意地汚いでの。仕方ないではないか、死ぬのだ。貴様が皆にしてきた事だの…。貴様が、皆にそう強いたことだの」

「忌々しい化け物め！貴様が死ぬ！お前のような化け物が生きていていいわけがない！」

叫ぶと、細胞を散り散りにして逃げようとした無惨だったが。

「!?」

分裂しなかった。

ここで悟った。

薬は三種類。

「許されると思うな！貴様がしてきたことは、何一つとして許されることはない！」

荒れる。

参座の心は荒む。

こんな、小物に。

人を殺しておいて。

化け物にしておいて。

こんな、覚悟も何もないただの小物に。

立派な者たちが倒れ伏していった。

なんと度し難いか。

これから日の目を浴びて、人々を先導し導いていけるものがどれだけいただろうか。

このような人斬りの才能しかない己より優れたものたちが、どれほどいただろうか。

痛ましい。

ああ、痛ましい。

「貴様のような小物に！ワシらの宝が壊されたと思うと！虫唾がはしるわい!!」

まるで鬼だ。

その表情は恐ろしく。

その気迫は鋭く。

しかし纏う雰囲気は哀しい。

ようやく再生できた無惨は、四つ目の薬が効き吐血する。

それでもかまわずに走って逃げようとする。

それを、鬼は許さなかった。

―日輪 終章 日没―

鮮血が舞う。

斬って、斬って。

細切れになって、再生する。

そうしたらまた斬って。

また再生。

斬る。

再生。

斬る。

再生。

斬る。

「貴様は救わぬ。殺す。この生涯で、ワシが唯一救わぬものよ」

殺戮。

惨殺。

どんな言葉でも足りないほどに恐ろしい光景だった。

柱達は声も出なかった。

この男がどれほどに苦しんで。

救われないまま誰かを救い続けたのか。

八つ当たりと叫び続けたが、その通りだった。

鬼殺隊最強と言われた、天羽 参座は。

最強という言葉を感じさせない。

そこにあるのは、ただの暴力。

己が持つ力を、弱いものにたたきつけていた。

そうとしか見えない光景が広がっていたのだ。

それから、誰も動けないままに一時間以上斬り続けていた。

ただただ斬っていた。



「ああ…今日が終わる…。終わってしまう…。ワシらは千年苦しんだというのに。貴様は一刻と少しでよいとは…。なんと羨ましいか」

狂っている。

無惨はそうとしか思えなかった。

産屋敷といい、この男といい。

到底までもではない。

返り血で真っ赤になった参座は無表情でまだ斬り続けていた。

…やつと。

その時が来た。

夜が、明けた。

「この…化け物め…お前のような…化け物が…生きていていいものか…」

朝日にさらされた無惨は、捨て台詞を吐いてさらさらと塵になっていく。

あまりにもあっけなかった。

「何故…なぜだ。なぜ貴様は逝けるのだ…」

うつろな目で、参座はまだ刀を振るっていた。

「婆様は…あの少年は…これまで犠牲になっていったものたちは！どうしてくれるのだ!!」

その眼から、涙があふれた。

構えた日輪刀は空を斬る。

「ワシは貴様なんぞどうでも良いのだ！返してくれぬのか！何一つ、返してくれぬのか!!どうしてなのだ！」

皆は、かける言葉が、見つからなかった。

ずっと、誰にも言えなかったのだろう。

カナエにも、産屋敷にも。

鬼殺隊、人柱として。

ずっと誰かに頼ってもらおうことで自分を律していたのだろう。

「参座さん……」

そこへ、炭治郎が現れる。

力の入っていない参座の拳に手を添えて、日輪刀を受け取る。

「もう……振らないくていいんですよ。俺たちは、もう刀を持つ役目を終えました……。だからこれからは手を取り合って生きましよう？」

「炭治郎……」

そう言われた参座は、顔を上げる。

するとそこには、柱達がいた。

「参座よ。失ってしまったものは、回帰しないのだ。前を向いて生きるしかない。お前は本当によく頑張った。鬼殺隊を代表して礼を言う」

行冥が声をかけた。

すると口々に柱の面々がお礼を告げる。

「お前は、我々に多くの幸せをくれた。だから参座よ、次はお前が幸せになる番だ。それを、ここにいる多くの者が望んでいる」

行冥はそう締めくくった。

守ったのだ。

明日を生きる、友を。

その実感だけが、何とか参座の崩れそうな足を支えた。

「お兄ちゃん！」

向こうから駆けてきた禰豆子が、炭治郎に飛びつく。

「禰豆子！お前、元に戻れたんだな……よかった。本当につよかった……！」

禰豆子が人間に戻った嬉しさから泣き出す炭治郎。

わんわん泣き出す兄妹をみて、柱達も暖かい気持ちになる。

今日この日まで、命を懸けてきたのは。

何ひとつとして間違っていないかったと。

そう思うには十分な光景だった。

「参座さん……約束を守ってくれてありがとうございます」

「カナヲ……」

彌豆子に着いてきたカナヲは、参座に丁寧に頭を下げた。

「わがままな妹の願いを叶えてくれて……ありがとうございます……ごいませ……」

カナヲも炭治郎の無事をみると涙を流して喜んだ。

その姿は、また参座の足腰を支えるのだ。

ふと、目線を上げると。

辺りでは隠達が、隊士達が。

歓喜している。

安堵している。

感謝している。

よかった。

参座は、その光景を焼き付ける。

今までずっと心に住み着いた自責の念が。

ほんの少し、和らいで。

心で燃え盛る劫火を抑えていく。

「参座くん！」

愛しい声が耳に届いて。

振り返ると、その姿。

失ったものばかり見ているのは、彼女の姿が霞んでしまう。

ああ、君のために。

君との明日のために。

「カナエっ！」

そして、君と明日を過ごす自分のために。

その自分を許すためにも。

刀を振るって良かったと。

参座は、心からそう思い。

そうして、カナエを抱き留めこう言った。

「カナエ、結婚してくれぬか？」

自分が、誰かに幸せに遇って欲しいと思つた様に。

誰かが、己の幸せを願ってくれている。

刀を捨てた後、自分は。

そんなもの達の為にも、幸せになるのだ。

「…喜んでっ！」

そう言って、参座はもう一度誓いの口付けを上書きするのだった。

ねえ、参座くん。

初めて会ったのは、私が柱に任命されたとき。

「ワシは、人柱の天羽 参座という。胡蝶殿、何か困ったことがあれば、ワシを頼れ。さすれば必ず応えよう」

この人はきつと。

とても強くて、哀しい人だ。

誰かの為に生きて、それが自分の為だと思ふことで立っている。

それが、初めての印象。

「天羽様。私のことは気軽にカナエとお呼びください」

「ふむ、ではワシも参座と気軽に呼んではくれぬかのう？」

「…じゃあ、参座くんでもいい？」

その時の参座くんの顔と言ったら。

忘れられない。

驚きながらも、そんな風に近しく呼ばれたことがなかったのか。

嬉しそうだった。

「よいよい！それでお願いしようかの！」

「胡蝶様、天羽様。少しよろしいでしょうか？」

そこへ、あまね様が現れて蝶屋敷についての話し合いをお館様を交えてさせてもらったんだっただかしら。

「改めてカナエ、まずは柱に就任おめでとう。それで、前に話してもらっていた蝶屋敷のだけれど、私としてはぜひとも設立したいと思っているよ」

お館様が協力的だと聞いて、まず喜んだのは参座くんだったけな。

「それは誠ですか！なればこの天羽 参座、全力で助力させていただきますましよ」

なんていうんだから、驚いたのを覚えているわ。

「うん、よろしく頼むよ参座。しばらくはカナエに代わって忙しくなるとは思ふけど、頼らせてくれると助かるよ」

「はい、それこそが小生の喜びにございます」

「あの、それはいったいどういう…」

「カナエが柱に就任を決定した時、蝶屋敷の設立を申し出てくれただろう？それを行冥と参座と話し合ってたね。参座が助力してくれると言ってきたなかったんだよ」

どうして？ってあとで聞いたら。

「ワシにはしたくてもできないことだからの。カナエ殿の手伝いくらいならばワシにもできる」

そういったのは忘れたこともない。

それから、屋敷の建設は始まっていった。

私はどうしても手が離せない時に参座くんにも文を飛ばして任務を変わってもらったりしてた。

しのぶも任務の合間に、すつごく医学の勉強をしてくれていたし、私は一人じゃないんだって思えた。

急ピッチで蝶屋敷の建設は終わって、完成した蝶屋敷を見に来てくれた参座くんにお礼を言ったら。

「礼を言うのはむしろワシのほうだの。カナエ殿、救ってくれてありがとう」

深々と頭を下げる参座くん。

ああ、敵わないなあって思ったなあ。

「私はね、鬼とも仲良くなれたらいいなって思うの。そうしたら、争いはなくなるでしょ？彼らも最初は人間だったのだから…」

「そうだの。そんな日が来ればよいな…。しかし、わしは斬らねばならぬ。斬ることしかできぬ。なれば、斬ること以外は任せてもよいか？」

私の夢を否定しないでくれたのは、お館様を抜かせば参座くんが初めてだった。

「笑わないんだね」

「…？」

本当に何言ってるんだ？って顔してたから、思わず笑っちゃった。

それから、カナヲを引き取って、しのぶが刀を置いて。

アオイがきて、きよとなほとすみが来て。

隠の方たちがたくさん助けけてくれて。いつぱい思い出があった。

「転がり込んだ参座くんの家に寂しさを覚えて、勝手にものを買いそろえたのはいい思い出。」

「たぶん、最初は可哀そうだったから。」

「どうしても私には我慢できなかったから。」

「恋心なんてなかったと思う。」

「でも。」

「これは、言うてはいけないことなのだが」

「初めて参座くんの家に泊まった時に。」

「なあに？」

「…鬼をかばう、隊士を見た」

「…どう思ったの？」

「ワシは、斬ってやろうと思った。それでも、カナ工殿の言葉を忘れられぬでな。聞けば、人を食ったことがないと言う。それは、鬼でありながら鬼ではないと言っているような気がしてな…。カナ工殿の夢を、少年に託してみたくなった」

「もしそれがみんなにばれたら。」

「今まで築き上げてきたものが、なくなっちゃう。」

「本当に、いいの？参座くん…」

「よいのだ。ワシは、カナ工殿の大切なものを、大切にしたいのだ」

「きつとこの時からだったと思う。」

「遅かれ早かれ、この人と結婚するんだろうとは思っていたけれど。」

「この人じゃなきやダメだって。」

「固くそう誓えたのは、この時だったって思ってるわ。」

「そして今日。」

「それはやつと現実になったのよ。」

「…カナ工、本当にきれいだの」

白無垢に身を包んだ私に、これ以上ないくらい優しい視線を向けてくれる。

愛しの人。

「ありがとう、参座くん」

今日は神前式。

私の一生に一度の晴れ舞台。

袴を着込んだ参座くんは、とつても男前で。

私にはもつたいたいなくて、少しだけ気後れしちゃう。

「…姉さん！」

「あらあらしのぶつたら。どうしたの？まだ控室じゃないの。泣くのは早いわよ？」

「だって、あんまり幸せなんだもの…！おめでどう姉さん！おめでとぅっ！」

やめてよ、私まで泣いちやうでしょ？

「よかったのか、参座。私なんかが親代わりで。私は、お前たちに戦うことを強いてしまったのだが…」

「よいのだ、行冥殿。ワシはこうすると決めておった」

私の親族はしのぶが歩いて、参座くんは身寄りがないから、悲鳴嶼さんに代わりを申し出たの。

当然、悲鳴嶼さんは快諾してくれたけれど、どこか申し訳なさがあるみたい。

「そうよ、悲鳴嶼さん。私たちは、悲鳴嶼さんにたくさん幸せをもらったもの。お願いだから、そう申し訳なさそうな顔をしないで？」

「お前達夫婦には、敵わないな」

やっと笑顔になってくださった悲鳴嶼さんを見て、みんなで笑い合う。

隠の方が呼びに来て、産屋敷かなた様、くいな様が私たちを先導してくださったわ。

笛の音が響いて。

見渡すと、鬼殺隊の面々ばかり。

なほとすみときよは、もう涙をこらえるのも忘れて泣いちやうた



から、少しだけ可笑しくなっちゃう。

カナヲは、炭治郎と一緒にこつちを見ていて、頬をほんのり赤らめてる。

アオイは、伊之助君が暴れないように気が気でないみたい。

無一郎君は、花が咲いたみたいに笑顔で。

伊黒さんはずっと蜜璃ちゃんを見てた。

その蜜璃ちゃんは声は出してないけれど、こつちに大きく手を振ってくれていた。

煉獄さんはお父さんと弟さんと来ていて、満足そうに笑ってる。

宇髄さん夫婦はみんな仲良く座ってて、やっぱり笑ってる。

不死川さんのところは、玄弥くんがなにか余計なことを言ったのか、実弥くんは拳骨を落とされてて吹き出すのをがんばってこらえたわ。

無表情な富岡くんは、隣の真菰ちゃんに何度も何かを尋ねられてうんざりしているみたいだった。

斎主は、輝利哉様にどうしてもしてほしいと参座くんが頭を下げたら、快諾してくれた。

そうして、神前式は滞りなく進んで。

参座くんは誓詞を読む。

「私共は、今日を佳き日と選び、この鬼殺隊本殿、産屋敷邸にて結婚式を挙げました。今後は、信頼と愛情を以って、いついかなる時も助け合い、よい家庭を築いていきたいと存じます。そして、この先を生きることができなかつた人々の為にも、彼らを忘れず、老いて最後の日が来た後に、これまでの幸せな日々を報告できるよう、笑い合ってください。何卒、幾久しく御守りください」

「妻、胡蝶カナエ」

輝利哉様の祝詞をいただき、私たちは指輪をはめる。

こうして、正式に夫婦になった。

式は無事終わり、披露宴。

用意と移動はあわただしいけれど、これも本当に楽しくて。

しのぶはことあるごとに涙を浮かべて抱き着いてきたし、それを見

て私たちは大きな子供をあやしてるみたいで楽しかったな。

披露宴の会場を歩いて、席についた後。

私たちは、両親に宛てた手紙を読む。

「拝啓、亡き父と母。私は、今日この日。己の命よりも大切な人を妻として迎えることができませんでした。生んでくれたあなたたちのおかげです。そして、拝啓婆様。あの日、御守りできなかつたことを、許していただけるでしょうか？ 思えば、私は物言わぬ子供でした。それでも、愛想をつかさずにずっと愛情を注いでくれたこと、生涯忘れも致しません。今日、最愛の人と生きる明日を掴むことができました。それは他でもない、婆様が作ってくれました。：婆様、大好きです。婆様は、婆様が大好きです。もし叶うのならば、婆様に会いたいです…。どうか、どうか天国で、長くお待ちください。それまでに、数えきれないほどの妻との思い出を土産として作っておきます。：天羽 参座」

「拝啓、お父さんお母さん。私たち姉妹の命は、悲鳴嶼さんが救ってくださいました。そして、私たちの明日は、参座くんが護ってくれました。もう、何も心配しなくてもいいからね。私たちはこれから、うんと幸せになって、うんと笑って生きていきます。だから、きつとずつと先。何十年も先、私がそっちに行つたときは、抱きしめてください。そのあとにしのぶが来ると思うから、みんなでまた家族揃つて笑いましようね。そしたら参座くんを紹介して、お父さんはきつと寂しい気持ちになるかもしれないけれど、大丈夫。私は：私たち姉妹は、家族が大好きです。新しい妹もできたので、私がそっちにいつたらカナヲのことも待とうね。大好きだよ、ずつと。：胡蝶カナエ」

そうやって読み上げたけれど、たぶん泣いちゃつてぐずぐずで読み上げたから、みんな聞き取れなかつたかもしれないなあ。

それから、みんなでお酒を飲んでどんちゃん騒ぎをして。

今回驚いたのは、実弥くんが女性を連れていたことかな。

とつてもきれいな人で、あの粗暴な態度が全くと言っていい程なりを潜めているんだから素直に感心した。

カナヲはどきまぎしながら炭治郎くんと禰豆子ちゃんを連れてき

てくれた。

「竈門 炭治郎です！お久しぶりですカナエさん！今日は本当におめでとうございます！」

「初めまして、妹の禰豆子です！兄が大変お世話になりました！本日は本当におめでとうございます！とつても綺麗です！」

元気いっぱい笑顔で、私も自然と笑顔になる。

「カナエ姉さん、本当におめでとう。とつても綺麗だよ」

「みんなく！ありがとうございます」

照れながらそういうカナヲも可愛いわあ！

「…椿だ」

ふと横を向くと、実弥くんがさっきの女性を連れて参座くんとお話をしていたみたい。

その後ろには、玄弥くんとこれまたきれいな女の子がいて、不死川家は女性キラキラなのかなって戦慄した。

「初めまして天羽様。私、二階堂 椿と申します。本日は誠におめでとうございます」

「私、凜と申します！この度はおめでとうございます！」

「えっと…兄貴と匡近さんを助けてくれてありがとうございます。」

不死川 玄弥です。今日は本当におめでとうございます」

「皆、ありがとうございます。これからワシら夫婦をどうかよろしく頼む」

そのまま横移動して、みんな私に挨拶してくれた。

少し話をしたけれど、どうやら女性陣はみんな式について興味津々みたい。

今日日を改めて女子会をすることになって今から楽しみだわ！

「おめでとう師匠！カナエさん！」

とにかくはつらつな無一郎くん。

あの日からは考えられないくらい笑顔で、私たちを祝福してくれた。

「参座殿、カナエ殿、誠におめでとうございます！これからも末永くお幸せに！」

「天羽、あの時は本当に済まないことをした。改めて謝罪させてくれ。

そして、おめでどう。どんなことがあっても、妻を幸せにしてやれよ！  
「参座さん！おめでどうございます！カナエさんもとっても綺麗です  
！」

煉獄さんたちも家族揃ってお祝いの言葉をくれた。

「…二人とも、おめでどう」

「カナエさん！とっても綺麗です！本当におめでどうございます！  
！」

伊黒さんと蜜璃ちゃんも。

「よお天羽夫婦！こりやあ派手にめでたいことだな！俺は嫁が三人い  
てもこの通り円満だ！お前は一人なんだから、泣かせるようなことが  
あったら派手に殴ってやるぜ」

「カナエ、なにかあったら私を頼るんだよ？心配はいらないとは思  
けど、愚痴くらいならいつでも聞くからね？」

相変わらず、まきをさんは姉御肌でたよりになるわね。

須磨さんと雛鶴さんもおめでどうって言うてくれた。

「ひ、人柱様！おめでどうございます！」

真菰ちゃんときた男の子は、獅童 雪虎くんという名前で。

「ワシはもう人柱ではない。ただの天羽 参座だの。久しいの、雪虎。  
あの日、無一郎の為に駆けてくれてありがとうの」

「いえ！俺は本当に足手まといで…」

「そんなことないよ！今回は私のことちゃんと守ってくれたじゃない  
！…師範、私は乗り越えることができました。少しの間でしたけれ  
ど、師範の継子として過ごせてよかったです。今日は本当におめでと  
うございます」

真菰ちゃんのことを護ってくれた立派な男の子だったみたい。

とっても嬉しい気持ちになれたわ。

最後に来たのは、しのぶと富岡くん。

「姉さん、本当におめでどう」

「ありがとう、しのぶ」

「参座さんも、とてもやさしい言葉をありがとうございました」

「なに、ヌシは立派じゃ。ワシは何もしておらぬ」

「…これから、姉のことをよろしくお願いします」  
「任された。しのぶよ、いつでも遊びに来るでの。ワシもカナエも歓迎する」

まるで自分のことみたいに嬉しそうな顔をするんだから、私はそれ以上に嬉しい気持ちよ、しのぶ。

「…炭治郎のことを、救ってくれてありがとうございます。それと、本日はおめでとうございます」

富岡くんは、後ろめたさがあるみたいに言う。

「又シが救われねば、ワシには救えんかった。胸を張れ義勇。ワシは又シに感謝しておる。カナエの夢を託せる兄妹を救ってくれた。ありがとう、義勇」

富岡くん、笑ってた。

憑き物が落ちたみたいに、明るい表情になってくれた。

その後も、隠の方たちとかがお礼と祝福をくれて。

私たちは間違いなく、この世界で一番幸せな夫婦だった。  
これから先。

ずっと続くこの幸せ。

みんながいて、笑い合って。

失った人たちの分も、私たちは幸せを紡いでいく。

「参座くん」

「なんなの、カナエ」

どうしても言いたくて。

参座くんを呼んで、顔を合わせる。

「愛しています」

少し顔を赤らめた参座くんは。

「ワシも、愛しておる。カナエ、幸せになろう」

笑顔で言うから。

「はい。もちろんです」

私たちは、幸せだ。

この先も、ずっと。

ずっと。

## 嗚呼、玄弥様

こんにちわ、お凜です！

行き倒れているところを玄弥様に救っていただいていたからというものの、不死川様の屋敷に住まわせていただいております！

少し前、天羽様の神前式があつて、その伝手でカナエ様とお茶会を設けさせていただくことになりました！

実弥様の奥方様である椿様も交えての女子会に、凜はもう楽しみで楽しみで仕方ありません！

「どうした凜。そんなに嬉しそうにして」

「玄弥様！」

「…なあ、いい加減その様つてつけるのやめないか？一時期はくんつて呼んでたろ？」

「いえ、なりません！私は、玄弥様と呼びたいのです！」

何故私が、玄弥様と再び呼び始めたのかというと。

忘れも致しません、あの夜のこと。

匡近さんが、そろそろ玄弥様を兄上様と引き合わせると仰った日…。

向かう先は、不死川 実弥様の住まわれる、風柱邸。

私たちの足で歩いて数日程。

鬼が出ることを警戒して、昼間に移動をしておりましたが、私たちは襲われてしまいました。

鬼ではなく、野盗に。

本当に恐ろしかった…。

鬼という存在に恐怖していた私たちでしたが、真に恐ろしいのは人間であるとたたきつけられているような気分でした。

――

「おいガキ、後ろの女と金目の物を置いていけば、命だけは助けてやるよ」

「は？渡すわけねえだろ。てめえこそ怪我したくなかつたらさつさと消えろ」

相手は腕つぶしに自信のある男たちが十人。

「玄弥くん、匡近さんもいるし、戦わない方が…」

「凜は隠れてろ。匡近さん、凜を頼む」

さすがの私も、いくら玄弥くんでも勝ち目がないと思ってしまいました。

手負いの匡近様に、どうやっても足手まといの私。

それに私は十分施しを受けました。

もうこれ以上皆様が傷つくのは見たくありません。

遊郭の時の伊之ちゃんもそうでした。

誰かが、いつも命を張ってくれた。

私が命をかけるのは今なんじゃないかと思ったのです。

意を決して、私は前に出ました。

「凜ちゃんっ！」

匡近さんの静止も振り切って、私は野盗の頭に言葉を投げつけます。

「私の命で、この人達に危害を加えないと約束してくれますか？」

「やめろ凜！」

「ごめんなさい、玄弥くん。」

「はっ。聞き分けのいい嬢ちゃんだぜ。さあ、ガキ！金目の物を出しやがれ！」

「きやつ！」

とても強い力で引き寄せられました。

男の人に乱暴されたのはこれが初めてで、普段どれだけ大切に扱われていたかを、私は痛感したのです。

「触んじゃねえ！」

気が付くと、玄弥くんは拳を振りかぶっていました。

瞬き一つする間に、玄弥くんは三人の野盗を気絶させていました。

「逃げろ凜！」

「凜ちゃんっ！こっちへ！」



玄弥くんが声を張るのと同時に、私の身体は匡近さんに引き寄せられました。

それから早かったです。

あつという間に玄弥くんは、野盗達を無力化したのです。

「凜ちゃん、玄弥が普段相手してるのは鬼だぜ。こんな素人の男なんて大したことないさ」

そういわれると、普段玄弥くんがどれほど恐ろしい存在と渡り合っているのか。

私はとても悲しい気持ちになりました。

「おいっ！凜！」

凄い剣幕で玄弥くんが私の名前を呼びます。

「げ、玄弥くん…ごめんなさ…「怪我は!?!」…えっ?」

「怪我無いか!?どこか痛いところとかは?」

怒られるんだと覚悟していましたが、そんなことはなくて。

私が怪我をしていないかどうか、心底心配そうな顔でした。

「大丈夫…です…」

「はあ、よかった。ごめんな、頼りなくて」

「そんなこと!!」

「俺が凜を護るから。もう絶対にあんな無茶しないでくれよ。約束だ」

とてもやさしい顔で。

護るなんて言われたのだから。

私は…。

「玄弥様…!」

「えっ?」

もう決めました。

この殿方と、添い遂げると。

「玄弥様…私は、感動いたしました!一度だけでなく、二度までも命の危機をお救いいただきました!」

「…はあ」

「もう、お凜は玄弥様にこの身を捧げます!どんなことでもお申し付

「けくださいー！」

「えっ！いや、そんな…」

「愛人でも妾でも妻でも！私は構いません！どうかおそばにおいてくださいー！」

「り、凜ちゃん？」

優しい方だとはわかっておりました。

それでも、ここまで優しくされては、惚れるなというのも無理なこと。

命の危険を救われて、生存本能が働いたと言われれば否定はできないかもしれません。

それでも、私は玄弥様のおそばにいたいと心から思ったのです。

「…えらく惚れられたな、玄弥」

「…ちよつとついていけない」

「ご迷惑…でしょうか？」

「そ、そんなことはねえけど」

「でしたら！玄弥様のお隣は、このお凜が！この先ずっと一緒です！」

うん、いい思い出です。

こうして、無事実弥様の屋敷にたどり着いたのですが、一度三人で話すことがあるといわれて、私は宿で過ごしました。

それから、お話はうまく進んだみたいで。

玄弥様の表情はとても明るくて、私もうれしくなりました。

さらに柱稽古の間、風柱邸でお稽古をしている隊士様のお世話をさせていただくことに。

実弥様のお稽古はとても厳しいらしく、皆様げっそりしていました。が、負けじと食らいつく玄弥様のお姿はだれよりもきらきらと輝いておりました。

「玄弥様〜！ご飯ですよ〜！」

その日も最後の一人になっても気合いだけで実弥様に食らいつく玄弥様に、夕餉の支度ができたとお伝えに行きました。

「もうそんな時間か…。行くぞ玄弥」

「うん」

なんて男前なのかしら…!

玄弥様一筋の私ですが、やはり実弥様も玄弥様の兄上…。  
似ていらっしやる!!

ああ、二人が並んでいるだけでお凜は…お凜はっ!

幸せでございます〜!

「り、凜?! 鼻血! 鼻血出てるぞ?! 大丈夫か?」

「…クセの強え女だな」

実弥様は、私の醜態にいつも半ば呆れています。

それでもこの恋心を止めることはできません…!

私は玄弥様に愛を誓った身なのですから!!

「あら、実弥さん。女の子にそんなこと言ってはダメよ?」

「…椿か」

「椿様!」

そこへ、実弥様がとても御懇意にされている二階堂 椿様が。

この柱稽古の間に度々風柱邸に足を運んでおられます。

何でも、料理や家事がてんでめらしく、匡近様の料理を大変お氣

に召してことあるごとに食卓を囲む様になりました。

「そういえば、匡近さんだけ様を付けないけど、なんでなんだ?」

食卓で、私に問いかける玄弥様。

「匡近さんはなんとというか…その。兄のような親しみやすさがありま  
して」

「おお、それは嬉しいね。別に様だろうがさんだろうが、凜ちゃんの呼  
びやすいように呼んだらいいよ。俺たちは何も気にしたりしないか  
ら」

「そういつていただけますと嬉しいです!」

「それにしても玄弥くんったら随分好かれてるわね」

「いや、それを言ったら椿さんも兄ちゃんに対してそうだろ?」

「そうね〜私は実弥さん一筋だもの〜」

「…」

「っはっはっは! 楽しい食卓だな〜」

決戦はすぐそこ。

私たちは、それを覚悟しながら思い残すことがないように精一杯明るく過ごしました。

それからすぐのことです。

人柱、天羽様が鬼舞辻 無惨を討ち取ってくれたのは。

まず最初に結婚式を挙げられたのは、天羽様とカナエ様でした。

その次が、伊黒様と甘露寺様。

そして、富岡様としのぶ様。

その頃には、匡近さんは寺子屋のお仕事の為に単身で家に戻られませんでした。

椿様たつての願いで、玄弥様と私は風柱邸に残ることに。

実弥様は椿様にいったいいつ式を挙げるのかと迫られていました。

「お凜」

とある日。

私は、珍しく実弥様から声をかけられました。

「はい、実弥様。いかがされました？」

「あー…いや」

とつてもバツが悪そうに、実弥様は口を開かれます。

「…椿は、俺にはもつたいなくねえか？」

私は戦慄致しました。

あれほど厳格な兄の姿を見せられていたのに。

想い人と思うと、自分には勿体ないのでは無いかと葛藤し、弱々しくなってしまうそのお姿。

…可愛い！

玄弥様も、この様に葛藤されて弱々しくなる事が度々ございました。

ああ、本当にご兄弟であらせられるのですね…。

そのように面影がありありと映るお姿にお凜は…お凜はっ！

「そんなことございませぬ！実弥様は、立派なお方です！なにより椿様がご自分で選ばれたのです！ほかでもない、実弥様を！」

「…そうは言ってもなあ。あいつは元々いいところのお嬢様だぜ？俺らみたいな下町育ちじゃあ釣り合わねえんじや…」

「身分がなんですか！椿様は、実弥様を愛しておられるのです！実弥様しか答えることが出来ないのです！」

「…よくそんな恥ずかしい台詞でかでかと言えるなあ」

「恥ずかしいのはどっちですか！男ならバシツと俺についてこいからいいいったらどうなんですか！」

ぎよつとした実弥様のお顔は忘れることは無いでしょう。

観念したのか、実弥様はブツブツ言いながらお部屋へ戻っていきました。

実弥様が椿様に求婚したのは、それから数日後のことです。

椿様からはとても感謝していただいたのですが、正直あのままでも根負けして実弥様はご結婚されていたと思います。

それからというもの。

何故か実弥様に苦手意識を持たれてしまったのか、いつも面と向かってお話をする時、実弥様は少し青ざめています。

椿様はいい薬だと言われていますが、どうなのでしょう？

玄弥様と実弥様の喧嘩の時はよく呼ばれます。

実弥様は私を見るなり口を噤んで、お部屋に戻られていくのです。

このままではいけないと、1度実弥様を捕まえてお話をすると。

「お前と椿には口では勝てそうもない」

と仰っておられました。

「凜がいると兄ちゃんが突つかかってこないから楽だ」

これは玄弥様の言葉です。

正直私は、言い争うお二人も愛しく思うのですが…。

仕方ありません。

それから、椿様のすこぶる機嫌の良い日々が続きました。

――

そうして本日。

やっとカナエ様のご都合がついてお茶会をする事となりました。場所はなんと、黒蜜亭です。

伊黒様と蜜璃様は、ご結婚されてからお食事処をご経営されました。

揚げ物主体ですが、甘味もとてもおいしくていわゆる《スイーツ》というものが名物でした。

よく晴れた明朝、私と椿様は準備をして玄関口におりました。

「椿、気を付けて行ってってくるんだぞ」

「はい、実弥さん。ありがとう」

「凜も気を付けてな。椿さんがいるから心配ないと思うけど」

「はい！玄弥様！」

休日ということもあり、お二人はまだ寝ぼけ目で行ってらっしゃいを言ってくれました。

「いい天気ね、お凜」

「はい、椿様！」

乗合場まで歩いて、馬車に乗り込みました。

「ふふっ。私は幸せ者だね。実弥さんみたいな素敵な旦那様と同時に、可愛い弟と妹と一緒にできるんだもの」

「私は、玄弥様に娶っていただけなのでしょうか？」

「…まあっ！お凜ったら意外と鈍いのね。二人を見てればもう夫婦みたいに見えるわよ？何も心配いらないわ。私より料理も家事もできるじゃない」

「うう…！椿様く！！」

ああ、なんて素敵なお姉さまなんでしょう。

お凜は、椿様が大好きです！

それから馬車は順調に走り、街の喧騒が聞こえていました。

時計塔の近くに、黒蜜亭は暖簾を構えています。

「あっ！椿〜！お凜〜！」

「カナエさん（様）」

入口の前にはちょうど、カナエ様としてのぶ様がいらっしやいました。

二人とも紫色が主体の着物に身を包んでおられます。

本当によくお似合いで、道行く男の人は胡蝶様姉妹に視線を吸い寄

せられていますね。

「カナエさん、しのぶさん。お久しぶりです」

「お久しぶりです、椿さん。凜ちゃんも久しぶり」

「カナエ様！しのぶ様！お久しぶりでございます！」

相変わらずカナエ様もしのぶ様もお美しいです…！

それに椿様も相まって、ここにいる三人は絶世の美女たち。

お凜はもう、女の身でありながら鼻血が出そうでございます…！

「あ、みんなもう集まってたんだ。早いですね」

そして極めつけは、この可憐な真菰さん。

私は抱き着きそうな衝動をこらえております。

「真菰ちゃん、久しぶり」

カナエ様は迷わず真菰さんを胸に収めました。

ああ、うらやましい！！

どちらもうらやましい！

その間に入りたいっ！

「皆さんそろったことですし、お店に入りましたよう」

しのぶ様先導のもと、黒蜜亭へと入りました。

今日は私たちのために貸し切りにしてくださったそうで、普段はやがやと繁盛されている店内は、静まり返っております。

奥のほうで伊黒様ご夫婦が和気あいあいと談笑されています。

「…俺は席を外そう。上にいるから何かあったらすぐに呼んでくれ」

「うん、ありがとう小芭内さん」

今日は女子会ということで、伊黒様はお席を外してくださいました。

「みんな久しぶり〜！元気だった？」

蜜璃様に加わり、ついに楽しいお茶会が始まりました！

伊黒様と蜜璃様がご用意してくれましたーっは本当においしくて…！

お凜のほっぺは黒蜜亭に置いてきましたっ！

女子会は滞りなく進み、それぞれが旦那様の惚気話で大盛り上がりで楽しかったです！

どんな会話をしたのかは、乙女の秘密…です！

帰り際、真菰さんが雪虎さまとご結婚されるといふ話をして顔を真っ赤にして足早にお帰りになられたのが何ともほほえましかったですね。

「楽しかったわね〜お凜」

「はい！皆さん本当に美しくって!!お凜は見ているだけで幸せでした！」

「ふふっ。お凜だつて綺麗よ?」

「もつたいないお言葉です…」

椿様はわたくしのことをお褒めくださいます…。

ああ…好き。

さて、屋敷に帰るころにはすでに日は落ちている頃でしょうか？  
私たちは屋敷につくまでさらつといろんな話をしていました。

こんな幸せが続けばいい…そう思っていたのですが、鬼がない  
今、この幸せもきつと続いていくことでしよう！

椿様も実弥様とご結婚され、子宝に恵まれ…!

そうしたら家族がもつともつと増えて、幸せがもつともつと溢れる  
に違いありません!

そして私も、いつか玄弥様と…!

嗚呼、玄弥様…!